平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

籠原裏遺跡

かごはらうらいせき

―熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書―

2004

埼玉県熊谷市教育委員会

平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

籠原裏遺跡

―熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書―

2004

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷には、祖先が営々と築いてきた貴重な文化財が多数あります。なかでも原始・古代の集落跡や中世の館跡等の埋蔵文化財が、熊谷市内に多く分布することが知られています。

こうした埋蔵文化財は、地域の歴史・文化を伝えるばかりでなく、熊谷市の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。ＪＲ高崎線籠原駅前北口に広がる籠原中央第一土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、古代の集落跡や古墳等が確認され、遺跡の重要性を鑑みて、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事に関しては、記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、昭和61年度から実施された計5回にわたる発掘調査の成果のうち、古代の集落跡であった籠原裏遺跡について報告するものでございます。遺跡の主体となるのは、平安時代の集落跡でありますが、その他にも旧石器時代の石器なども発見されました。これは、当地域が古くから人々の生活空間であったことを物語る大変貴重な資料といえます。

本書が埋蔵文化財保護ならびに学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました熊谷都市整備部都市計画課、土地区画整理西部事務所、並びに地元関係者には厚くお礼申しあげます。

平成16年3月

熊谷市教育委員会
教育長　**飯塚誠一郎**

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市大字新堀801番地他に所在する籠原裏遺跡（埼玉県遺跡番号59－096）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、下記のとおりである。

昭和61年度（第１次調査）：昭和61年８月１日～昭和61年10月15日

昭和62年度（第２次調査）：昭和62年11月12日～昭和63年３月７日

昭和63年度（第３次調査）：平成元年２月８日～平成元年３月31日

平成元年度（第４次調査）：平成元年10月９日～平成２年１月29日

平成４年度（第５次調査）：平成４年11月10日～平成５年１月７日

整理・報告書作成期間は、平成15年４月１日から平成16年３月31日までである。

5　発掘調査の担当は、昭和61年度を寺社下博が、昭和62・63年度を金子正之が、平成元年度を金子、吉野　健が、平成４年度を金子、権田宣行（現熊谷市文化創造館さくらめいと）がそれぞれ行った。

本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。

6　発掘調査における写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　出土品の整理及び図版の作成は、天沼由起子、木島芳江、野部真希子、宮井正惠の協力を得て松田が行った。石製品・石器については村松　篤、灰釉陶器については田中広明の両氏から御教示を得た。

8　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

9　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。記して感謝申しあげます。

（敬称略、五十音順）

青木克尚　秋本太郎　奥野麦男　古池晋禄　小林　高　鈴木敏昭　竹野谷俊夫　田中広明

知久裕昭　富田和夫　富田孝彦　鳥羽政之　平田重之　宮本直樹　村松　篤

大里郡市町村文化財担当者会　埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

凡　例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

遺構全測図…１／800　住居跡…１／60　　掘立柱建物跡・柵列跡…１／80

溝跡平面図…１／80　溝跡断面図…１／40　土坑・井戸跡…１／40

埋甕…１／20

2　遺構挿図中のトーンは次のとおりである。

＝ 地　山　　＝ 焼　土　　＝ 炭化物

3　遺構挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器…１／４　土製品・鉄製品・銅製品・古銭…１／２　石製品…１／４・１／２

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・陶器　断面　　白抜き　　土師器　内面黒色処理

須恵器　断面　　黒塗り　　灰釉陶器　断面

灰釉陶器　外面釉

須恵器・灰釉陶器　底部調整　回転糸切り

回転ヘラ削り

回転ヘラナデ

7　遺物拓影図のうち、土器は向って左側に外面、右側に内面を示した。

8　遺物観察表の表記方法は次のとおりである。

法量の単位はcm、ｇである。（　）が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子　B…黒色粒子　C…赤色粒子　D…褐色粒子　E…赤褐色粒子

F…白色針状物質　G…長石　H…石英　I…白雲母　J…黒雲母　K…角閃石

L…片岩　M…砂粒　N…礫

焼成は、以下の3段階に区分した。

A…良好　B…普通　C…不良

8　写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行　1994）を参考にした。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……2
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織…3
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
Ⅲ　遺跡の概要……10
　1　調査の方法……10
　2　検出された遺構と遺物……10
Ⅳ　遺構と遺物……15
　1　竪穴住居跡……15
　2　掘立柱建物跡……50
　3　柵列跡……53
　4　溝　跡……53
　5　土　坑……60
　6　井戸跡……78
　7　埋　甕……81
　8　ピット……81
　9　遺構外出土遺物……85
Ⅴ　調査のまとめ……108

挿図目次

第1図　埼玉県の地形……4
第2図　周辺遺跡分布図……6
第3図　調査地点位置図……11
第4図　籠原裏遺跡全測図……13
第5図　第1号住居跡……15
第6図　第1号住居跡出土遺物……16
第7図　第2号住居跡……17
第8図　第2号住居跡遺物出土状況……18
第9図　第2号住居跡出土遺物(1)……19
第10図　第2号住居跡出土遺物(2)……20
第11図　第2号住居跡出土遺物(3)……21
第12図　第2号住居跡出土遺物(4)……22
第13図　第3号住居跡……24
第14図　第3号住居跡出土遺物(1)……25
第15図　第3号住居跡出土遺物(2)……26
第16図　第3号住居跡出土石器(旧石器時代)27
第17図　第4号住居跡……29
第18図　第4号住居跡出土遺物(1)……30
第19図　第4号住居跡出土遺物(2)……31
第20図　第5号住居跡……33
第21図　第5号住居跡出土遺物……34
第22図　第6号住居跡……36
第23図　第6号住居跡出土遺物(1)……37
第24図　第6号住居跡出土遺物(2)……38
第25図　第7号住居跡……40
第26図　第7号住居跡出土遺物(1)……41
第27図　第7号住居跡出土遺物(2)……42
第28図　第8・9号住居跡……44

第29図　第８号住居跡出土遺物……45
第30図　第９号住居跡出土遺物……45
第31図　第10号住居跡・出土遺物……47
第32図　第11号住居跡……47
第33図　第11号住居跡出土遺物……48
第34図　第１号掘立柱建物跡・第１号柵列跡・出土遺物……50
第35図　第２・３号掘立柱建物跡・第２号柵跡・出土遺物…52
第36図　第１・２号溝跡……54
第37図　第３号溝跡……56
第38図　第４～７号溝跡……57
第39図　溝跡出土遺物……58
第40図　第１～４号土坑……61
第41図　第５～９・11号土坑……62
第42図　第10号土坑・第２号井戸跡……63
第43図　第12～16号土坑……65
第44図　第17～21号土坑……66
第45図　第22～27号土坑……67
第46図　第28～32号土坑……68
第47図　第33～36号土坑……69
第48図　第37・38号土坑……70
第49図　第39～41号土坑……71
第50図　第42～44号土坑……72
第51図　土坑出土遺物（１）……73
第52図　土坑出土遺物（２）……74
第53図　土坑出土遺物（３）……75
第54図　土坑出土遺物（４）……76
第55図　第１号井戸跡……78
第56図　井戸跡出土遺物……79
第57図　第１号埋甕・出土遺物……80
第58図　ピット出土遺物（１）……83
第59図　ピット出土遺物（２）……84
第60図　遺構外出土遺物分布図……85
第61図　遺構外出土遺物（１）……87
第62図　遺構外出土遺物（２）……89
第63図　遺構外出土遺物（３）……90
第64図　遺構外出土遺物（４）……91
第65図　遺構外出土遺物（５）……92
第66図　遺構外出土遺物（６）……93
第67図　遺構外出土遺物（７）……94
第68図　遺構外出土遺物（８）……95
第69図　遺構外出土遺物（９）……96
第70図　遺構外出土遺物(10)……97
第71図　遺構外出土遺物(11)……99
第72図　遺構外出土遺物(12)…… 100
第73図　遺構外出土遺物(13)…… 101
第74図　平安時代及び中・近世遺構配置図…108

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 7
第２表　周辺古墳群一覧表…… 8
第３表　第１号住居跡出土遺物観察表……16
第４表　第２号住居跡出土遺物観察表……22
第５表　第３号住居跡出土遺物観察表……28
第６表　第４号住居跡出土遺物観察表……32
第７表　第５号住居跡出土遺物観察表……35
第８表　第６号住居跡出土遺物観察表……39
第９表　第７号住居跡出土遺物観察表……42
第10表　第８号住居跡出土遺物観察表……46
第11表　第９号住居跡出土遺物観察表……46
第12表　第10号住居跡出土遺物観察表……47
第13表　第11号住居跡出土遺物観察表……49
第14表　第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表50
第15表　第１号柵列跡出土遺物観察表……50
第16表　第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表53
第17表　溝跡出土遺物観察表……59
第18表　土坑一覧表……60

第19表　土坑出土遺物観察表……76
第20表　井戸跡出土遺物観察表……79
第21表　第１号埋甕出土遺物観察表……80
第22表　ピット計測表……81
第23表　ピット出土遺物観察表……84
第24表　遺構外出土遺物観察表…… 101

図版目次

図版１　籠原中央第一区土地画整理地内全景(真上から)
籠原中央第一区土地画整理地内全景(東から)
図版２　第１区(昭和61年度調査Ａ区)全景(南東から)
第３区(昭和62年度調査Ａ区)全景(北東から)
図版３　第３区(昭和62年度調査Ａ区)全景(真上から)
第４区(昭和62年度調査Ｂ区)全景(真上から)
図版４　第１区(昭和63年度調査Ｂ区)全景(真上から)
第１区(昭和63年度年度Ｂ区)全景(北西から)
図版５　第５区(昭和63年度調査Ａ区)全景(真上から)
第５区(昭和63年度調査Ａ区)全景(南西から)
図版６　第１区(平成元年度調査Ｂ区)全景(南西から)
第６区(平成元年度調査Ａ区)全景(西から)
遺　構
図版７　第１号住居跡
第２号住居跡
第２号住居跡カマド
第３号住居跡
第３号住居跡　遺物出土状況
第４号住居跡
第４号住居跡カマド脇　土器出土状況
第４号住居跡　土器出土状況
図版８　第５号住居跡
第５号住居跡　遺物出土状況
第５号住居跡　土器出土状況(１)
第５号住居跡　土器出土状況(２)
第６号住居跡
第６号住居跡カマド２　土器出土状況
第７号住居跡
図版９　第７号住居跡貯蔵穴２　土器出土状況
第７号住居跡　土器出土状況
第８号住居跡　遺物出土状況
第８号住居跡　土器出土状況(１)
第８号住居跡　土器出土状況(２)
第８号住居跡　土器出土状況(３)
第９号住居跡　遺物出土状況
第10号住居跡カマド　土器出土状況
図版10　第11号住居跡
第11号住居跡　遺物出土状況
第11号住居跡　土器出土状況
第11号住居跡　鉄鏃先出土状況
第１号溝跡
第２号溝跡
第３号溝跡
第４号溝跡
図版11　第２・３号土坑
第５号土坑　礫検出状況
第５号土坑
第５号土坑　土器出土状況
第６号土坑　礫検出状況
第６号土坑
第７号土坑　礫検出状況
第７号土坑
図版12　第８号土坑　礫検出状況
第８号土坑
第９号土坑　礫検出状況
第９号土坑
第10号土坑・第2号井戸跡(北東から)
第10号土坑・第2号井戸跡(東から)
第11号土坑
第12号土坑

図版13　第13号土坑
第22・23号土坑
第25号土坑
第26号土坑
第30号土坑
第31号土坑
第32号土坑
第33号土坑
図版14　第34・35・36号土坑
第37号土坑　礫検出状況
第37号土坑　覆土断面
第37号土坑
第38号土坑　礫検出状況
第44号土坑　遺物出土状況
第１号井戸跡
第１号埋甕

遺　物

土師器・須恵器　坏・椀・皿類

図版15　第１号住居跡　第６図４
第２号住居跡　第９図９・11・11墨書・12・13・15・17・18・21墨書
図版16　第２号住居跡　第10図32墨書
第11図50・51
第３号住居跡　第14図４・５・６・８・９・10・12
図版17　第３号住居跡　第14図19・21・31・32
第４号住居跡　第18図３・４・７・８・10墨書・20
図版18　第４号住居跡　第18図27
第５号住居跡　第21図１・７・16・23
第６号住居跡　第23図２・３・４・６・12
図版19　第６号住居跡　第23図13・16・19・32
第７号住居跡　第26図２・３・８・10・11・12
図版20　第７号住居跡　第26図24・26・27
第８号住居跡　第29図１・２・９・10・11・17・18
図版21　第10号住居跡　第31図１
第11号住居跡　第33図１・７
第１号掘立柱建物跡　第34図２
第１号溝跡　第39図１
第２号溝跡　第39図11
第３号土坑　第51図９・10
第30号土坑　第53図57
第38号土坑　第53図72墨書
図版22　P29　第58図12暗文
遺構外　第62図21・23
第63図111
第64図118・119
第65図182
第70図264・276墨書（内外）

土師器・須恵器　甕・瓶類

図版23　第２号住居跡　第10図33・41
第11図55
第12図58・59・63・64・67
第３号住居跡　第15図45
図版24　第３号住居跡　第15図49・53・56・57
第４号住居跡　第18図32
第５号住居跡　第21図24
第６号住居跡　第23図21
第７号住居跡　第26図35
図版25　第７号住居跡　第27図36
第11号住居跡　第33図11・12
第１号柵列跡　第34図５
第２号溝跡　第39図15
第16号土坑　第52図31
第26号土坑　第52図48・48底部
図版26　P16　第58図１
P29　第59図15
遺構外　第66図199・201

第70図266・267・282・286

図版28　第２号住居跡　第10図35・36・37・38・39・40

第11図42・44・46・47・48

図版29　第６号住居跡　第23図24・25

第24図27・28・29・31

P25　第58図４

P29　第58図７・８・９・10・11

かわらけ・陶器類

図版27　第３号土坑　第51図８

第６号土坑　第51図14・15・16・25

第１号埋甕　第57図１

図版30　第６号土坑　第51図17・18・19・20・21・22・23・24

第９号土坑　第52図27

第10号土坑　第52図30

第32号土坑　第53図66

第36号土坑　第53図68

第37号土坑　第53図69

縄文土器

図版31　第38号土坑　第53図76・77・78

遺構外　第61図１・２・３・４・５・６

土製品

図版27　第11号住居跡　第33図15

遺構外　第72図315

図版31　第１号住居跡　第6図13

第３号住居跡　第15図60

第４号住居跡　第19図36・37・38・39・40・41

第５号住居跡　第21図30

第６号住居跡　第24図37

第７号住居跡　第27図42・43

第１号掘立柱建物跡　第34図３・４

第２号掘立柱建物跡　第35図２・３

図版32　第２号溝跡　第39図16

第３号溝跡　第39図22

第４号溝跡　第39図34

第３号土坑　第51図４・５・６

第４号土坑　第51図７

第29号土坑　第52図52・53・54・55

第30号土坑　第53図62・63・64・65

P104　第59図17

遺構外　第71図294・295・296・297・298・299・300・301・302・303・304・305・306・307・308・309・310・311・312・313・314

鉄製品・銅製品・古銭

図版27　第37号土坑　第53図70

図版33　第１号住居跡　第6図14

第３号住居跡　第15図61

第４号住居跡　第19図42

第７号住居跡　第27図44

第11号住居跡　第33図16・17・18・19

第22号土坑　第52図44

遺構外　第72図316・317・318・319・320・321

石製品・石器

図版34　第３号住居跡　第15図62

第16図63

第４号住居跡　第19図43

第８号住居跡　第29図19

第11号住居跡　第33図20

図版35　第８号土坑　第51図26

第９号土坑　第52図29

第32号土坑　第53図67

第２号井戸跡　第56図７・８

遺構外　第61図７・８

図版36　遺構外　第61図９・10・11・12・13・14

第72図322・323・324

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

昭和61年７月８日付けで熊谷市土地区画整理西部事務所長より、籠原中央第一土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在及び試掘に関する依頼書が提出された。熊谷市教育委員会では事業地内には周知の埋蔵文化財が所在する旨を回答し、遺跡の範囲確認調査を実施した。その結果、平安時代から中・近世にかけての集落跡及び古墳時代末期の古墳群が分布することが確認された。この結果を踏まえ、熊谷市教育委員会教育長から土地区画整理西部事務所長あてに次のように通知した。

区画整理事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（籠原裏遺跡、籠原裏古墳群）が所在する。当該地は開発計画予定地から除外し、現状保存することが望ましい。やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第57条の３の規定により文化庁長官へ埋蔵文化財発掘届けを提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。なお、発掘調査を実施する場合には、事前に当教育委員会及び埼玉県教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第57条の３の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、熊谷市長より以下の通り提出された。

昭和61年度　昭和61年７月17日付け熊教社発第628号
昭和62年度　昭和62年９月７日付け熊教社発第748号
昭和63年度　平成元年２月10日付け熊教社発第1291号
平成元年度　平成元年10月７日付け熊教社発第708号
平成４年度　平成４年10月12日付け熊教社発第651号

発掘調査は昭和61・62・63・平成元・４年度の計５回実施された。文化財保護法第98条の２の規定に基づく発掘調査に関わる熊谷市教育委員会からの通知及び文化庁からの通知は以下のとおりである。

昭和61年度（第１次調査）　昭和61年７月17日付け61熊教社発第629号
　　昭和61年10月29日付け61委保記第２－3576号
昭和62年度（第２次調査）　昭和62年９月７日付け62熊教社発第749号
　　昭和63年７月８日付け63委保記第２－906号
昭和63年度（第３次調査）　平成元年２月10日付け63熊教社発第1290号
　　平成元年３月27日付け元教文第３－319号
平成元年度（第４次調査）　平成元年10月７日付け元熊教社発第707号
　　平成２年５月21日付け元委保記第５－5647号
平成４年度（第５次調査）　平成４年10月12日付け４熊教社発第652号
　　平成５年４月16日付け４委保記第５－6900号

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

昭和61年度（第1次調査）

発掘調査は昭和61年8月1日から10月15日まで行った。調査面積はA・B区（第1・2区）あわせて2,694㎡である。8月初旬から重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代から平安時代までの遺構・遺物が検出された。8月中旬から9月中旬にかけて作業員による遺構発掘作業を行い、9月下旬から遺構平面図を作成し、10月中旬に完掘写真の撮影を行った。

昭和62年度（第2次調査）

発掘調査は昭和62年11月12日から昭和63年3月7日まで行った。調査面積はA・B区（第3・4区）あわせて1,100㎡である。11月中旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代から中世までの遺構・遺物が検出された。12月初旬から2月上旬にかけて作業員による遺構発掘作業を行い、2月中旬から遺構平面図を作成し、3月初旬に完掘写真及び航空写真撮影を行った。

昭和63年度（第3次調査）

発掘調査は平成元年2月8日から3月31日まで行った。調査面積はA区（第5区）、B区（第1区）あわせて540㎡である。2月上旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代から中世までの遺構・遺物が検出された。2月中旬から3月上旬にかけて作業員による遺構発掘作業を行い、3月中旬から遺構平面図を作成し、3月下旬に完掘写真及び航空写真撮影を行った。

平成元年度（第4次調査）

発掘調査は平成元年10月9日から平成2年1月29日まで行った。調査面積はA区（第6区）、B区（第1区）あわせて900㎡である。10月上旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代から中世までの遺構・遺物が検出された。10月下旬から12月中旬にかけて作業員による遺構発掘作業を行い、12月下旬から遺構平面図を作成し、1月下旬に完掘写真及び航空写真撮影を行った。

平成4年度（第5次調査）

発掘調査は平成4年11月10日から平成5年1月7日まで行った。調査面積は100㎡である。11月中旬に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行い、古墳時代から中世までの遺構・遺物が検出された。11月下旬から12月中旬にかけて作業員による遺構発掘作業を行い、12月下旬から遺構平面図を作成し、1月初旬に完掘写真撮影を行った。

（2）整理・報告書作成

整理作業は平成15年4月から平成16年3月まで実施した。第一四半期は遺物の洗浄・注記・接合・復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。第二四半期は遺物の実測・トレース、遺構のトレースを開始し、第三四半期には遺構・遺物の版組を作成した。第四四半期に入ると遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け・編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、校正を行い、3月末日に報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

（1）発掘調査

昭和61年度（第１次調査）

教育長	関根　幸夫
教育次長	岡田　　詮
社会教育課長	茂木　　優
社会教育課長補佐	高田　普通
社会教育課振興係長	北　　俊明
主査	山川　　建
主事	寺社下　博
主事	金子　正之
主事	米澤ひろみ

昭和62年度（第２次調査）

教育長	関根　幸夫
教育次長	岡田　　詮
社会教育課長	茂木　　優
社会教育課長補佐	高田　普通
社会教育課振興係長	北　　俊明
主任	森田　博明
主任	平井加余子
主任	米澤ひろみ
主任	金子　正之

昭和63年度（第３次調査）

教育長	関根　幸夫
教育次長	岡田　　詮
社会教育課長	高田　普通
社会教育課長補佐	小林　武夫
社会教育課振興係長	北　　俊明
主査	森田　博明
主任	米澤ひろみ
主任	金子　正之
主事	権田　宣行

平成元年度（第４次調査）

教育長	関根　幸夫
教育次長	島田　和男
社会教育課長	高田　普通
社会教育課長補佐	岡田　伸洋
社会教育課文化財保護係長	金子　正之
主事	権田　宣行
主事	吉野　　健

平成４年度（第５次調査）

教育長	関根　幸夫
教育次長	大久保道夫
社会教育課長	坂巻　　篤
社会教育課長補佐	翠田　晴夫
社会教育課文化財保護係長	金子　正之
主事	権田　宣行
主事	吉野　　健

（2）整理・報告書作成事業

平成15年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	田島　洋利
社会教育課長	平井　　隆
社会教育課担当副参事	田中　英司
社会教育課長補佐	藤原　　清
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	松田　　哲
主事	松村　　聡
発掘調査員	船場　昌子

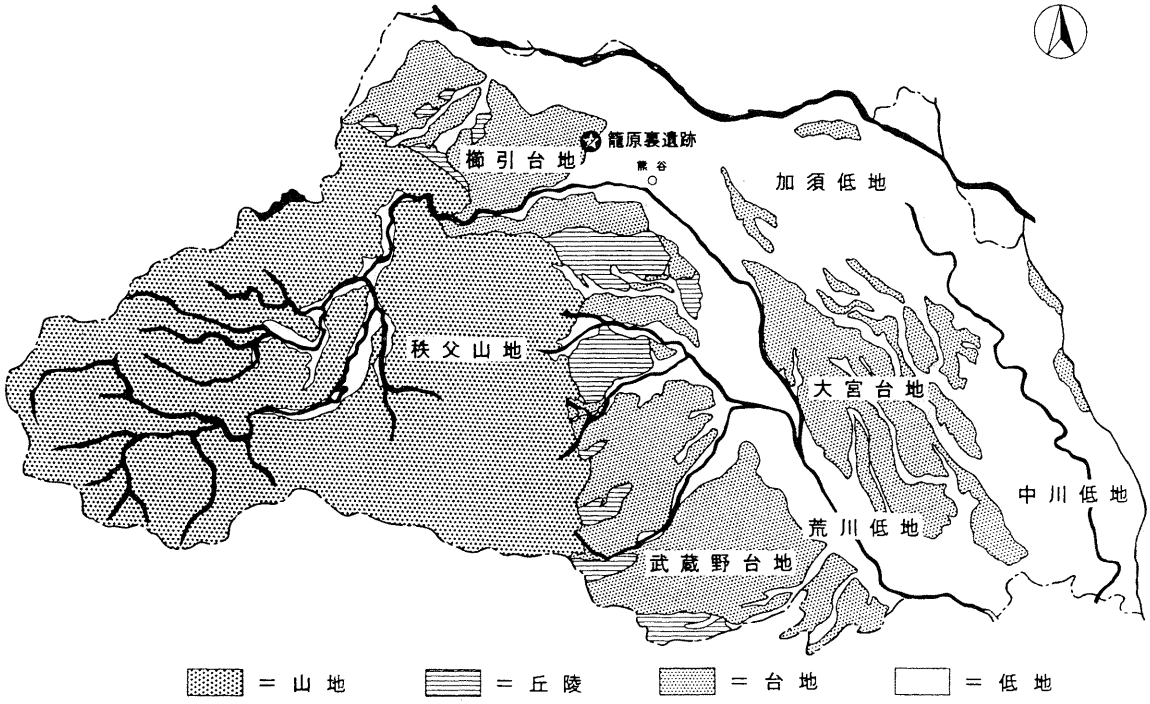
Ⅱ　遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には妻沼町を挟んで利根川がそれぞれ西から南東方向に向って流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛引台地、東側に妻沼低地が広がっているが、市の大半が妻沼低地上にある（第１図）。

櫛引台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54ｍで妻沼低地に向って緩やかに下っていく。また、三ヶ尻や西別府地区では台地裾にかつて湧水地が多数あったという。

櫛引台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する川本町の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛引台地南東端には丘陵地である観音山（標高81ｍ、第３紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25ｍ、沖積地からの比高差は約35ｍを測る。

今回報告する籠原裏遺跡は標高約37ｍの櫛引台地東端縁辺部に立地している。熊谷市西部の新堀地区に所在し、すぐ西側には深谷市が隣接する。遺跡はJR高崎線籠原駅前北側、国道17号線との間約350ｍの間に広がっており、同所には古墳時代終末期の籠原裏古墳群（A）も所在している。この辺り一帯は関東造盆地運動による地盤の沈降及び河川の氾濫等の影響を受け、ローム層までは厚い表土層に覆われており、現地表面から関東ローム層までは深い所で約1.8ｍを測る。そのため籠原裏古墳群中には墳丘までもが覆われて残存するという珍しい状況下にあり、籠原裏遺跡も含めて残存状態は良好であった。なお、籠原裏古墳群については１～９号墳は次年度に報告する予定であり、10号墳は既に報告済みである（籠原裏遺跡調査会　2000）。



第１図　埼玉県の地形

次に籠原裏遺跡周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代は本遺跡から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。その他には荒川右岸の江南台地上に立地する江南町西原遺跡（117）以外にみられない。

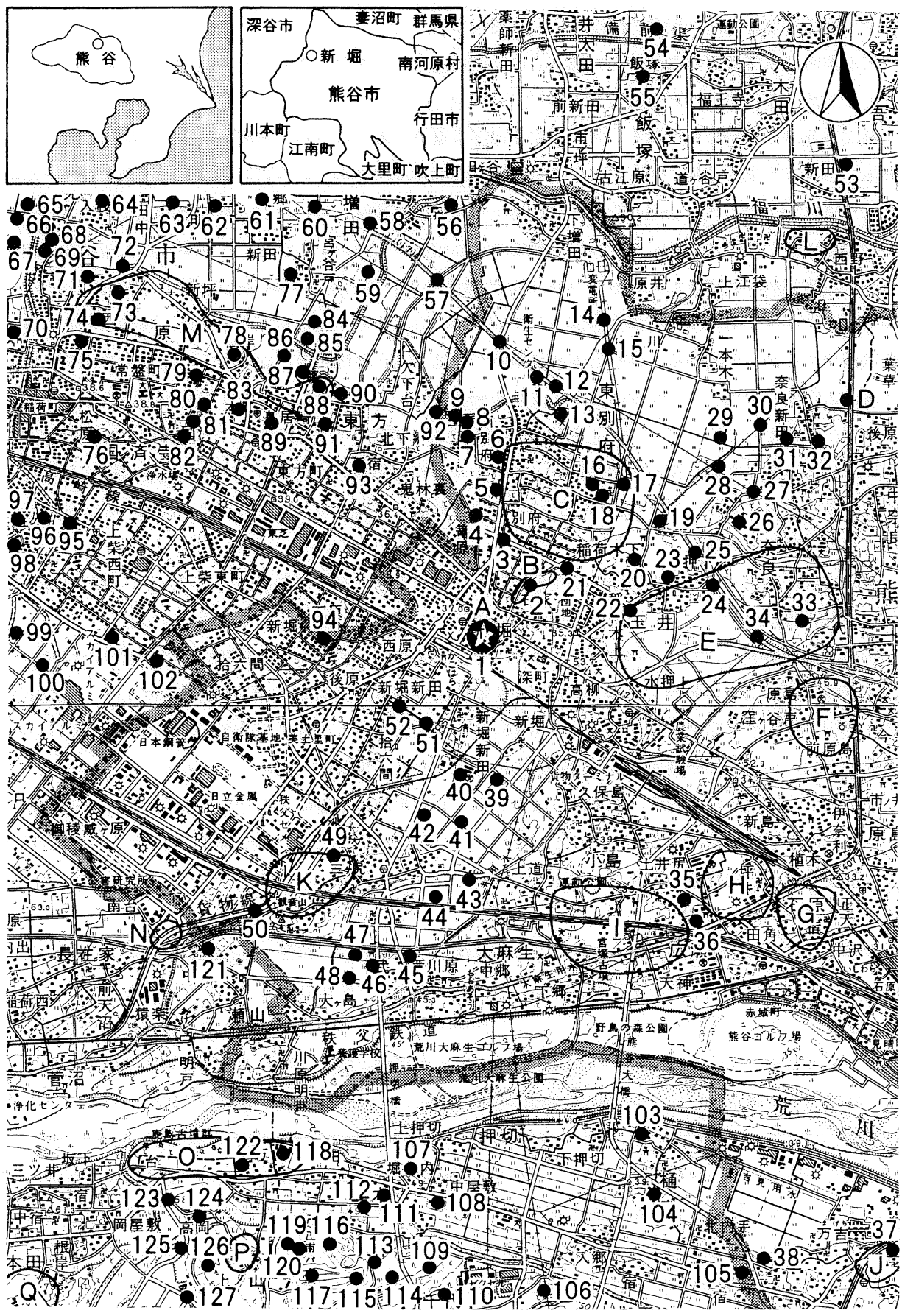
縄文時代は早期段階まで溯る。荒川右岸では多数遺跡がみられるが、本遺跡周辺では櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（90）において早期の尖頭器が検出されているのみである。前期になると遺跡数も次第に増えはじめ、台地のみならず低地上からも寺東遺跡（17）などの集落跡が確認されている。中期は遺跡数が非常に多くなり、特に中期後半、加曽利E式期のものが多い。前期同様、台地及び低地上からも集落跡が確認されているが、特に櫛引台地北東端及び台地下の妻沼低地自然堤防上に集中する。隣接する深谷市でも集落跡が多数確認されているが、自然堤防上にあるものが多い。後期になると遺跡数は減少するが、中期同様、櫛引台地北東端及び台地下の自然堤防上に立地する。深谷市内においても台地縁辺部及び台地下の自然堤防上から遺跡が確認されている。晩期はさらに遺跡数が減少する。地図中には示せなかったが、市内では近年市東部の低地上に立地する諏訪木遺跡で集落跡が確認されたが、その他にはみられない。深谷市では低地上にいくつかの遺跡が認められる。上敷免遺跡（64）では晩期でも終末の浮線文土器片が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代については東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。遺跡は縄文時代中期以降集落が営まれている櫛引台地北東端部及び台地下の自然堤防上に集中している。

特筆すべき事項としては自然堤防上に位置する横間栗遺跡（11）から、前期末～中期前半の再葬墓が13基確認されたことが挙げられる。再葬墓一括資料は1999年３月に埼玉県指定になっている。横間栗遺跡の南東に位置する関下遺跡（12）では弥生時代中期中頃の竪穴住居跡が確認され、南側に隣接する石田遺跡（13）からも同時期の遺構と遺物が検出されており、集落跡が広がっているのかもしれない。また地図中には示せなかったが、市東部では東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡やその墓域とされる行田市小敷田遺跡などがみられる。深谷市では自然堤防上にいくつか遺跡がみられ、上敷免遺跡では横間栗遺跡と同時期の再葬墓が確認されている。また包含層からではあるが、県内では初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期後半以降は市東部では北島遺跡、前中西遺跡などがあるが、西部では遺跡数が少なく、深谷市で明戸東遺跡（60）など後期の遺跡が自然堤防上においていくつか確認されているだけである。

古墳時代になると自然堤防上への進出がより活発化する。前期は本遺跡周辺では確認例がやや少ないが、一本木前遺跡（29）では90数軒という膨大な数の住居跡の他に４基の方形周溝墓等も確認されている。特筆すべき事項として２号方形周溝墓の主体部からヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が検出されたことが挙げられる。なお、住居跡群と周溝墓群には若干の時期差が存在し、集落跡が古く、周溝墓群が新しいことが判明している。一本木前遺跡については今年度末に最後の報告書が刊行される予定である。深谷市では東川端遺跡（59）をはじめとして自然堤防上の集落跡、方形周溝墓等が確認されている。中期は本遺跡周辺では５世紀末の古墳として市の指定史跡になっている横塚山古墳（D）があるのみである。B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。市北東部では北島遺跡、常光院東遺跡、女塚古墳群周辺などで確認例がみられる。後期になると遺跡数が



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　　代	No.	遺　跡　名	時　　代
	熊　谷　市		64	上敷免遺跡	縄文中、弥生中・後、古墳後、奈良・平安
1	籠原裏遺跡	縄文　、古墳後、平安、中・近世	65	No.142遺跡	古墳後、奈良・平安
2	在家遺跡	古墳後、奈良・平安	66	皿沼西遺跡	古墳前、平安
3	No.10遺跡	奈良・平安	67	No.145遺跡	古墳後、奈良・平安
4	No.４遺跡	平安	68	皿沼城跡	中世
5	原遺跡	古墳後、奈良・平安	69	No.180遺跡	弥生中、古墳後、奈良・平安
6	西別府館跡	平安末～中世	70	深谷城跡	古墳前、平安、中・近世
7	西別府廃寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	71	城西遺跡	奈良・平安
8	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	72	八日市遺跡	縄文晩、古墳後、奈良・平安、中・近世
9	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	73	伝幡羅館跡	中世
10	根絡遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	74	No.194遺跡	古墳後
11	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・中、奈良・平安、近世	75	No.195遺跡	古墳後
12	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後	76	No.250遺跡	奈良・平安
13	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	77	宮ヶ谷戸遺跡	縄文中、弥生中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世
14	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	78	根岸遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世
15	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	79	常磐町東遺跡	縄文前・中、古墳後
16	別府城跡	平安、中世	80	No.199遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
17	寺東遺跡	縄文前～後	81	No.198遺跡	平安
18	別府氏館跡	平安末～中世	82	庁鼻和城跡	中世
19	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安	83	No.200遺跡	古墳後
20	玉井陣屋跡	平安末～中世	84	No.249遺跡	奈良・平安
21	五反畑遺跡	中世	85	No.189遺跡	奈良・平安
22	稲荷木上遺跡	古墳後	86	No.190遺跡	古墳後、奈良・平安
23	水押下遺跡	古墳後	87	城下遺跡	縄文中・後、古墳後、平安、中・近世
24	No.53遺跡	奈良・平安	88	杉町遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
25	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	89	No.202遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
26	奈良氏館跡	平安末～中世	90	東方城跡	縄文早・後、中世
27	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	91	No.203遺跡	奈良・平安、中世
28	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	92	幡羅遺跡	古墳後、奈良・平安
29	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世	93	No.204遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
30	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	94	No.205遺跡	古墳前
31	西通遺跡	古墳後	95	No.88遺跡	古墳後、奈良・平安
32	東通遺跡	古墳後	96	No.87遺跡	縄文後
33	本代遺跡	古墳後、近世	97	桜ヶ丘組石遺跡	縄文後
34	下河原下遺跡	近世末	98	No.208遺跡	縄文中、古墳前・後、平安
35	不二ノ腰遺跡	奈良・平安	99	No.93遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
36	高根遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	100	No.94遺跡	縄文中・後
37	村岡館	平安末～中世	101	No.207遺跡	縄文中
38	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世	102	No.206遺跡	縄文中
39	東遺跡	平安、中世		江　南　町	
40	樋ノ上遺跡	縄文前・中、古墳後、奈良・平安、中・近世	103	平山館	中・近世
41	黒沢館跡	中世	104	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
42	若松遺跡	中・近世	105	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
43	庚申塚遺跡	近世	106	上前原遺跡	縄文早～後
44	松原遺跡	中・近世	107	堀ノ内遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
45	臺遺跡	近世	108	中屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
46	社裏遺跡	中世	109	宮下遺跡	縄文早、古墳後、奈良・平安、中・近世
47	社裏北遺跡	中世	110	東原遺跡	縄文早～中、中世
48	社裏南遺跡	中世	111	新屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
49	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	112	大林遺跡	古墳後、奈良・平安
50	森遺跡	古墳後	113	権現坂埴輪窯跡	古墳後
51	堂西遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	114	権現坂遺跡	縄文前・中、古墳中・後
52	拾六間後遺跡	奈良・平安、中・近世	115	北方遺跡	縄文早
	妻　沼　町		116	冨士山遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前、奈良
53	弥藤吾新田遺跡	古墳前・中	117	西原遺跡	旧石器、縄文前～後、奈良・平安
54	飯塚北遺跡	弥生中、古墳後、奈良・平安	118	新田裏遺跡	古墳後、奈良・平安
55	飯塚遺跡	弥生中、古墳後、奈良・平安	119	姥ヶ沢遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前・後
	深　谷　市		120	姥ヶ沢埴輪窯跡	古墳後
56	前遺跡	古墳前、奈良・平安、中世		川　本　町	
57	清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良・平安	121	大門遺跡	奈良・平安
58	原遺跡	縄文後・晩、古墳後	122	鹿島平方裏遺跡	古墳後、奈良・平安
59	東川端遺跡	古墳前・後、奈良・平安	123	山之越遺跡	縄文後
60	明戸東遺跡	縄文中・後、弥生後、古墳後、奈良・平安	124	舟山遺跡	縄文早～後、中世
61	新田裏遺跡	古墳中、弥生後、奈良・平安、中世	125	竹ノ花遺跡	縄文早・前、奈良・平安
62	新屋敷東遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安	126	荷鞍ヶ谷戸遺跡	縄文後
63	本郷前東遺跡	縄文後、古墳後、奈良・平安	127	諦光寺廃寺	奈良・平安

第２表　周辺古墳群一覧表

No.	遺　跡　名	時　　代	No.	遺　跡　名	時　　代
	熊　谷　市		K	三ヶ尻古墳群	古墳後
A	籠原裏古墳群	古墳末		妻　沼　町	
B	在家古墳群	古墳後	L	上江袋古墳群	古墳後
C	別府古墳群	古墳後		深　谷　市	
D	横塚山古墳	古墳中期後～末　奈良古墳群	M	木の本古墳群	古墳後
E	玉井古墳群	古墳後		川　本　町	
F	原島古墳群	古墳後	N	長在家古墳群	古墳末
G	石原古墳群	古墳後	O	鹿島古墳群	古墳後～末
H	坪井古墳群	古墳後	P	清水山古墳群	古墳後
I	広瀬古墳群	古墳末	Q	上大塚古墳群	古墳後
J	村岡古墳群	古墳後			

爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、古墳も群として多数みられるようになる。集落跡は自然堤防上にも多数営まれるようになり、奈良・平安時代へ継続して営まれる遺跡が多い。

古墳群は今回報告する籠原裏遺跡と同所にある籠原裏古墳群（A）の他にも多数の古墳群が台地及び自然堤防上にみられる。荒川右岸の台地上にも埼玉県指定史跡である川本町鹿島古墳群（O）をはじめとして多数の古墳群がみられるようになる。また、江南町権現坂埴輪窯跡（113）、蛯ヶ沢埴輪窯跡（120）など埴輪の窯跡もみられる。

市内の古墳群で特筆すべきことは、籠原裏古墳群からは墳形が八角形を呈する古墳時代終末期の八角墳が検出されたこと、市中央部にある肥塚古墳群では埋葬施設に荒川水系の石材である川原石を使用した古墳と利根川水系の角閃石安山岩を使用した古墳が混在すること、広瀬古墳群（I）中の宮塚古墳は上円下方墳という特異な形態をしていること（昭和38年に国指定史跡）などが挙げられる。

律令体制の始まる奈良・平安時代は本遺跡周辺一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市西部、深谷市東部、妻沼町等を含む一帯が該当すると考えられている。平成13年には熊谷市との境に位置する深谷市幡羅遺跡（92）から郡衙の正倉と推定される大型建物群が確認され、幡羅郡衙推定地として確認調査が開始されている。その結果、これまでに20数棟の大型正倉建物群が確認されている。郡庁や館、厨などの施設は未確認であるが、後述する熊谷市西別府廃寺（７）、西別府祭祀遺跡（９）も含めてこの地域一帯は、当時の中心地だったことが徐々に明らかになってきている。

集落跡は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。また本遺跡周辺の集落跡から出土する須恵器は、武蔵国四大窯跡の１つである寄居町末野窯跡産のものを多く含む傾向にあり、鳩山町南比企窯跡産を主体とする市東部の遺跡とは様相が異なっている。

集落跡以外で注目すべき遺跡としては、前述の西別府廃寺と西別府祭祀遺跡がある。両遺跡は櫛引台地北東端の市北西部の西別府地区に所在する。

西別府廃寺は８世紀初頭に創建された県内でも古い寺院跡であり、平成２・４年に行われた発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、溝跡等が検出されている。出土した瓦には９世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。

西別府祭祀遺跡は西別府廃寺の北西部の台地縁辺部に位置し、湯殿神社裏の湧水堀にある。神社裏の湧水部分からは土師器、須恵器の他に馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板等の滑石製模造品が多数検出され、これらの遺物は水辺での祭祀に用られたものと考えられている。平成４年度におこなわれた発

掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群が多数検出されており、平安時代の終わり頃まで祭祀遺跡として存続していたものと思われる。

両遺跡と深谷市幡羅遺跡は時間的・空間的に密接な関係にあったことは明白であり、今後実施される確認調査によって詳細がさらに判明してくるものと思われる。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団の館跡がみられるようになるが、その実態は不明なものが多い。本遺跡の北東にある別府城跡（16）は、別府氏の居館で現在も土塁と空堀が一部残っている。また市内では南西部の三ヶ尻地区で中世の遺跡や遺構が比較的多く確認されている。中でも黒沢館跡（41）は、発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口跡等が検出され、渡辺崋山が記した文献『訪瑤録（ほうへいろく）』所収の「黒沢屋敷」と発掘調査成果が一致するという大変貴重な例である。また周辺に所在する樋ノ上遺跡（40）、若松遺跡（42）、社裏遺跡（46）、社裏北遺跡（47）、社裏南遺跡（48）からは埋葬跡が多数検出されている。深谷市では皿沼城跡（68）、深谷城跡（70）、庁鼻和城跡（82）、東方城跡など城跡が多数確認されている。

近世については櫛引台地北東縁辺部に立地する西方遺跡（8）から墓地群が確認されている。西方遺跡をはじめとしていくつか例がみられるが、不明な点が多いのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

発掘調査は昭和61年度から昭和63年度、平成元年度、４年度の計５回実施された。すべての調査において、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。そして、各調査区内に一辺５ｍのグリッド方式を用いて全体を網羅できる様にし、調査区北西隅をＡ－１として南へＡ・Ｂ・Ｃ…、東へ１・２・３…とし、Ａラインは西から東へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３…と呼称した。Ｂライン以南もＡラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行っていった。なお、実測作業を行うにあたってはグリッド交点に設定した杭を基準に水糸による１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

2　検出された遺構と遺物

検出された遺構は、全調査区を通して住居跡11軒、掘立柱建物跡３棟、柵列跡２列、溝跡７条、土坑44基、井戸跡２基、埋甕１基、ピット群である。籠原裏遺跡と同所にある古墳時代終末期の籠原裏古墳群は上記の遺構より古い。遺跡の主体となるのは平安時代の集落跡である。

住居跡は第１区から１・２・７・11号住居跡、第２区から３号住居跡、第３区から４～６号住居跡、第６区から８～10号住居跡が検出された。これらは遺跡範囲内の東側に分布する傾向にあり、全て９世紀後半～10世紀初頭の幅に収まる。全形を検出できたものは少ないが、東カマドを持つものが多い。

掘立柱建物跡は第１区から１号掘立柱建物跡、第６区から２・３号掘立柱建物跡が検出された。調査区の都合上、いずれも規模等は不明である。１・２号はほぼ真北方向を向いているが、３号のみ大幅に軸がずれている。時期は出土遺物や周辺遺構との関係から住居跡と同じ時期と思われる。

柵列跡も掘立柱建物跡同様、第１・６区から１列ずつ検出された。このうち１号柵列跡は１号掘立柱建物跡の柱筋とほぼ並ぶことから、周辺ピットと併せて庇になる可能性もあるが、１号掘立建物跡の全形が不明であることから柵列跡として報告した。住居跡、掘立柱建物跡と同時期と思われる。

溝跡は第１区から３・４号溝跡、第４区から１号溝跡、第６区から５～７号溝跡が検出された。調査区の都合上、いずれも規模等は不明である。時期は１号が中世、２～４号が平安時代、その他は不明である。５号は２号掘立柱建物跡に付随する可能性が、６・７号は土坑になる可能性がある。

土坑は第２区以外から検出された。平面形は円形、長方形等様々である。すべての土坑の帰属する時期は定かではないが、主に平安時代と中・近世に分けられ、東側に平安時代、西側に中・近世のものが分布する。後者については覆土に多量の礫が投入されていた点が特徴的である。

井戸跡は第４区から２基検出された。時期は西側土坑群と同じく、中・近世と思われる。

埋甕は第４区北西端から１基のみ検出された。出土土器から中世と思われる。

ピットは第２区以外から検出された。概して集中して分布する傾向にある。帰属時期は不明である。

遺構外出土遺物は図示可能なものだけでも328点と多く、主に３箇所から検出された。遺物は縄文時代から古墳時代末、平安時代、中・近世と幅広いが、最も多く検出されたのは平安時代の遺物である。

= 昭和 61 年度調査区

= 昭和 62 年度調査区

= 昭和 63 年度調査区

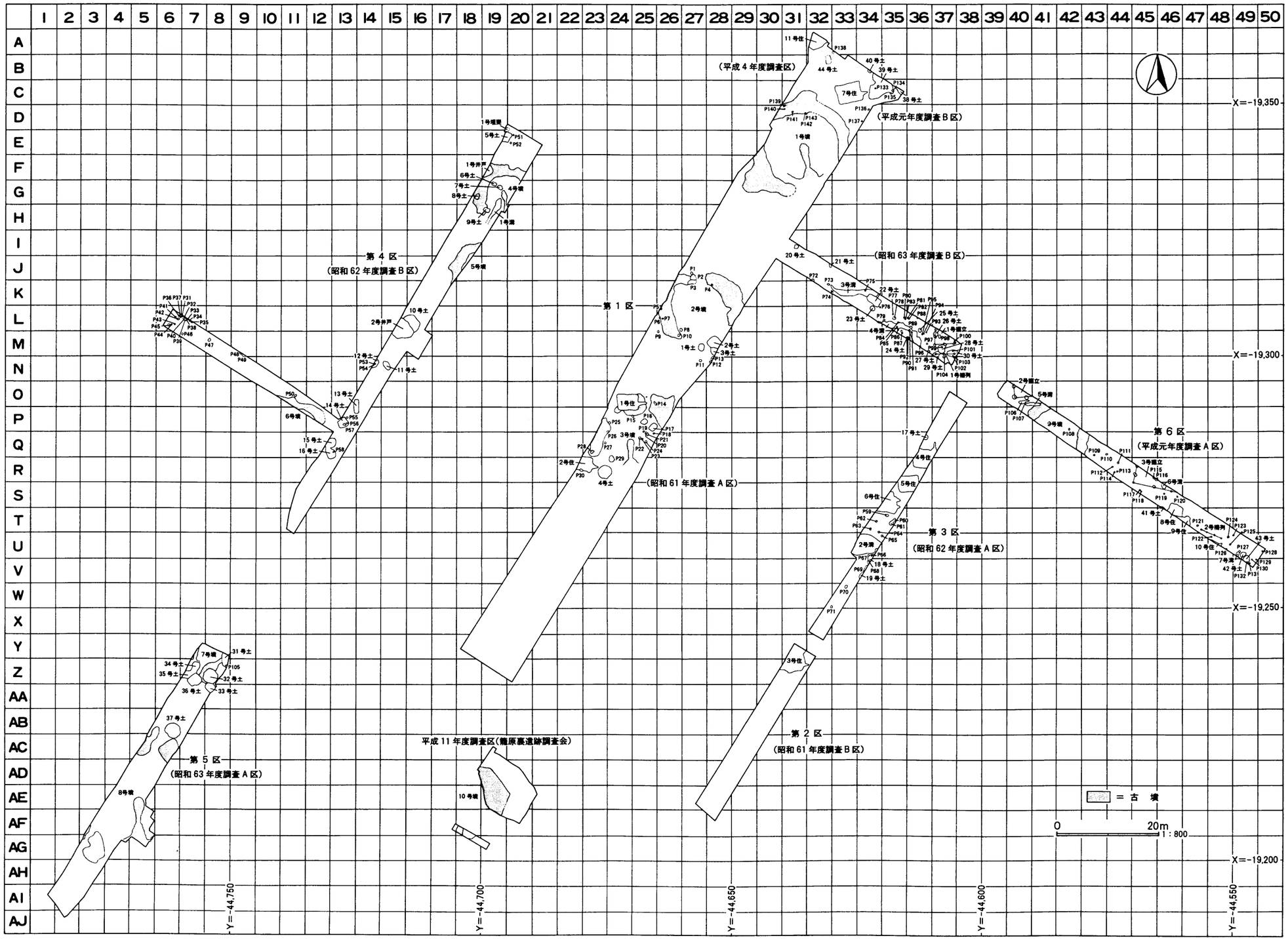
= 平成元年度調査区

= 平成4年度調査区

= 平成 11 年度調査区
（籠原裏遺跡調査会）

0　100m

第３図　調査地点位置図



第４図　籠原裏遺跡全測図

Ⅳ　遺構と遺物

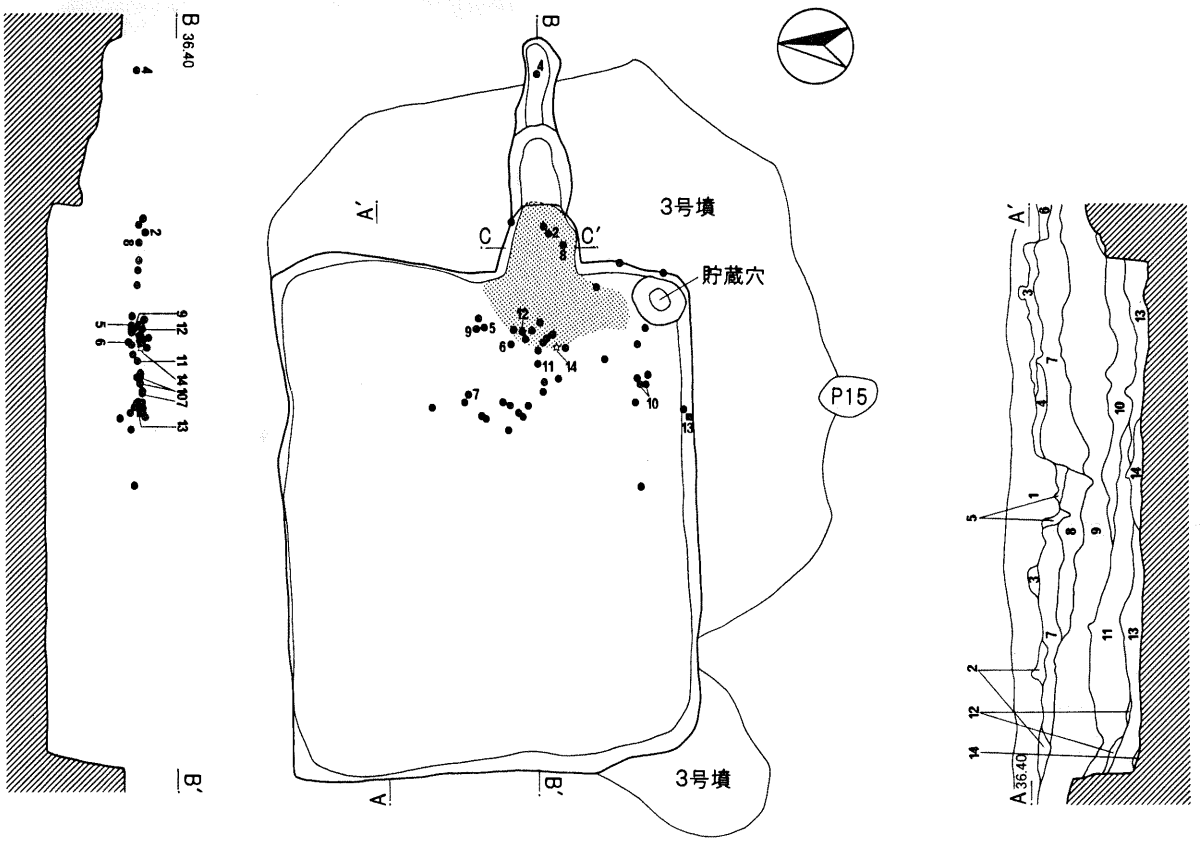
1　竪穴住居跡

第１号住居跡（第５図）

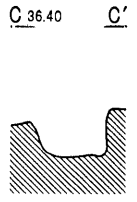
第１区O・P－24・25グリッドに位置する。籠原裏古墳群３号墳の北側周溝を切っている。

長軸4.25ｍ、短軸3.31ｍの長方形を呈する。主軸方向はN－84°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.63ｍを測る。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土はややランダムな層位を示すが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央からやや南寄りに位置する。袖部及び袖石はない。壁外へは1.84ｍ張り出す。幅は焚口部が0.67ｍ、燃焼部と煙道部の境は0.45ｍ、煙道部先端部は0.17ｍを測る。焚口部から燃焼部まで



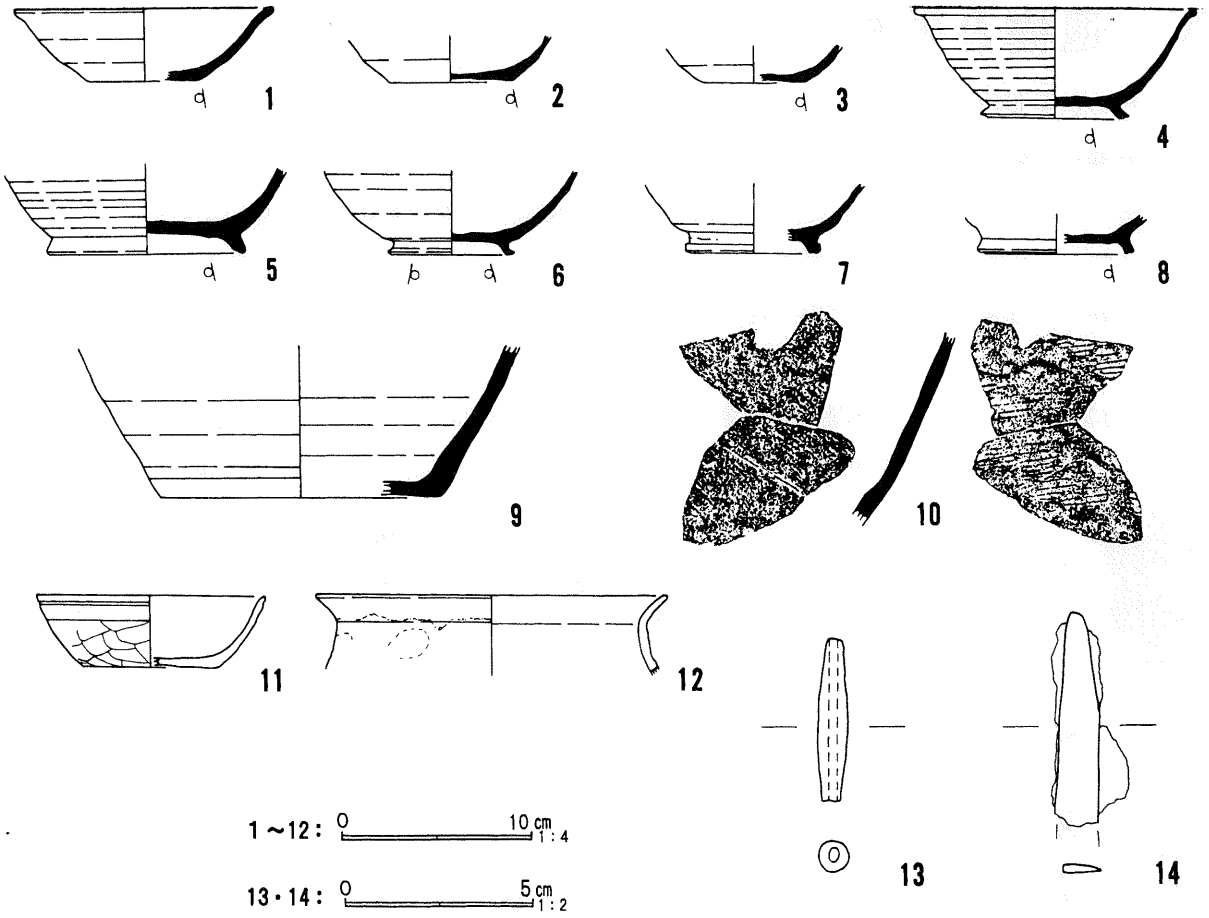
第１号住居跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：火山灰多量、酸化鉄、砂粒・ブロック少量含む。
2 灰褐色土：暗赤褐色粒多量、黄灰色粒を微量含む。１層より暗い。
3 赤灰色土：酸化鉄を含む。砂質。
4 灰褐色土：火山灰少量、焼土微量含む。
5 褐　色　土：火山灰少量、褐色粘ブロックを斑状に含む。砂質。
6 褐灰色土：砂質。
7 明褐色土：黒褐色粒・ブロック含む。
8 黒褐色土：黒色粒、焼土多量含む。
9 黒褐色土：黒色粒・ブロック、焼土多量含む。
10 黒　色　土：黒色粒・ブロック、焼土、ローム粒・ブロック含む。
11 黒褐色土：黒色粒・ブロック、焼土、ローム粒・ブロック多量含む。しまり無。
12 黒褐色土
13 黒　色　土：黒色粒・ブロック、焼土、ローム粒・ブロック含む。
14 灰褐色土：しまり無。



● ＝ 土　器　　☆ ＝ 鉄製品
■ ＝ 土製品　　▒ ＝ 焼　土

0　2ｍ
1：60

第５図　第１号住居跡



第６図　第１号住居跡出土遺物

第３表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	(13.6)	3.8	(5.4)	AHLM	にぶい黄褐色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
2	須恵器　坏	－	(2.4)	6.6	ABDILM	オリーブ灰色	A	60%	末野産。
3	須恵器　坏	－	(1.9)	(5.3)	ABIL	にぶい黄橙色	A	15%	末野産。酸化焔焼成。
4	須恵器高台椀	15.0	5.7	(7.9)	ABHLN	黄灰色	A	50%	末野産。
5	須恵器高台椀	－	(4.1)	(10.4)	ABDGHJLMN	灰黄色	C	20%	末野産。
6	須恵器高台椀	－	(4.4)	6.8	BILN	灰白色	C	20%	末野産。
7	須恵器高台椀	－	(3.6)	7.3	ABDIMN	黒色	B	20%	末野産？酸化焔焼成。
8	須恵器高台椀	－	(2.1)	(8.4)	ABJLM	にぶい黄橙色	B	40%	末野産。
9	須恵器　甕	－	(7.9)	(14.8)	AGLM	灰色	A	10%	末野産。底部ヘラ削り。
10	須恵器　甕	－	－	－	ABHLM	灰白色	B	胴下部片	末野産。
11	土師器　坏	(12.1)	3.8	(7.0)	ABHJK	にぶい赤褐色	A	15%	
12	土師器　甕	(18.7)	(3.9)	－	ADEIJKN	にぶい橙色	A	25%	
13	土　錘	最大長4.3cm、最大径0.8cm、孔径0.2cm。重量2.2ｇ。完形。							
14	刀　子	最大長5.6cm、最大幅1.15cm、最大厚0.2cm。重量(10.2)ｇ。柄部欠。							

はほぼ平坦であり、焼土が散っていた。燃焼部と煙道部の境には高低差0.25ｍの段が設けられ、北側はオーバーハングしていた。煙道部は燃焼部との段から東へやや窪み、真中からほぼ平坦となって先端で鋭角に立ち上がる。カマドの覆土は図示できなかったが天井部崩落土等は確認できず、炭化物や焼土を含む黒色土を確認するにとどまった。カマド南脇には貯蔵穴が設けられている。径0.43×0.37ｍの不整円形を呈する。深さは不明である。壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物（第６図）は須恵器坏、高台付椀、甕、土師器坏、甕、土錘、刀子がある。カマド及び周辺

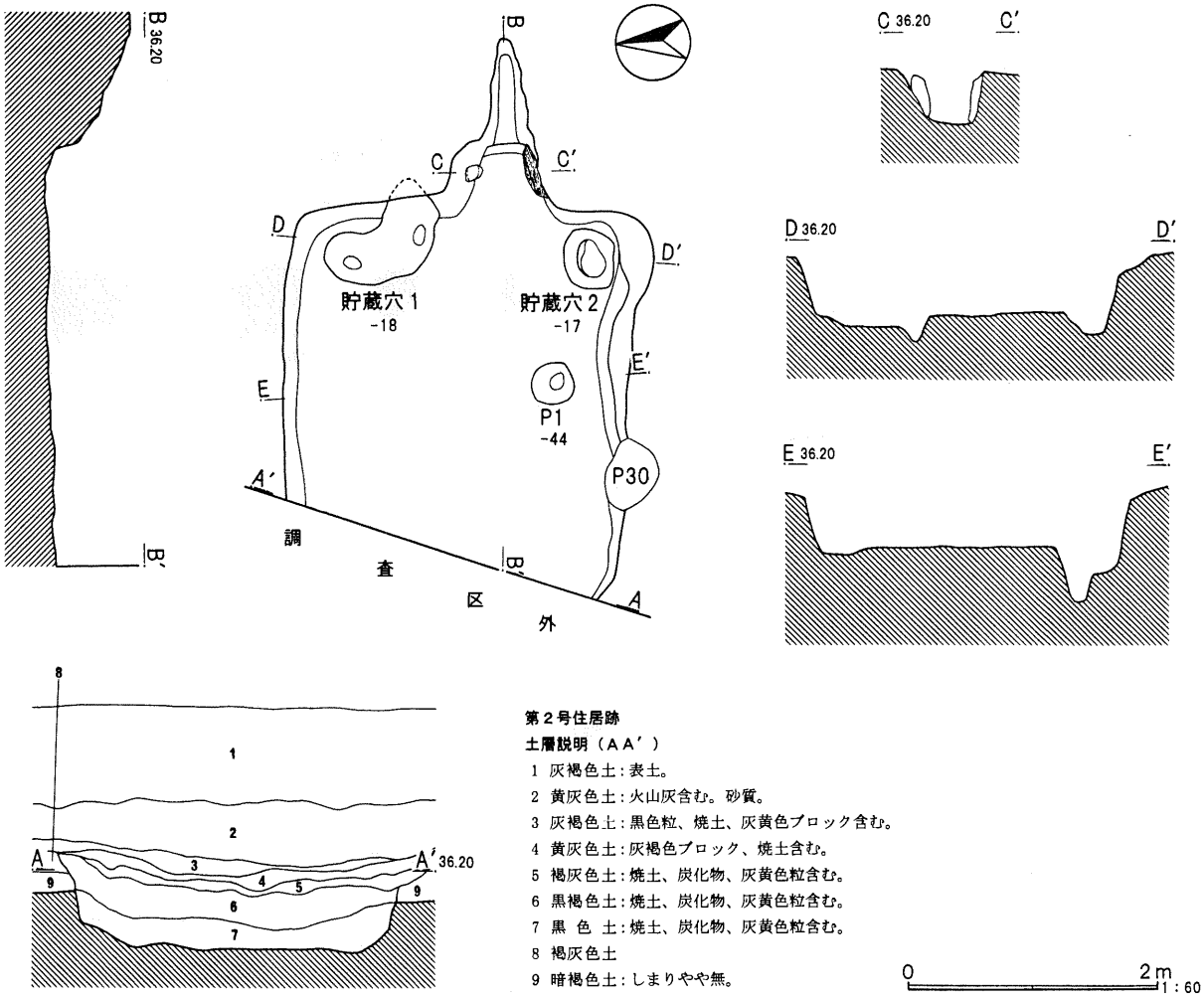
の覆土上層から検出された。須恵器は供膳具の検出が多く、ほとんど末野産である。供膳具の口縁部は外反し、体部が内湾する。底部調整は回転糸切り痕を残す。高台付椀には「ハ」の字に開く高台が付く。甕は底部と胴下部の破片２点のみである。土師器は坏・甕ともに図示可能なものは１点ずつしかない。11は口縁部を横ナデ、体部外面にヘラ削りを施している。12は口縁部が「コ」の字状を呈する甕。外面には輪積痕と指頭圧痕がみられた。土錘は１点のみ検出された。細身で中段がやや膨らむ。完形品。刀子は刃部先端から中段にかけてのみ検出された。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

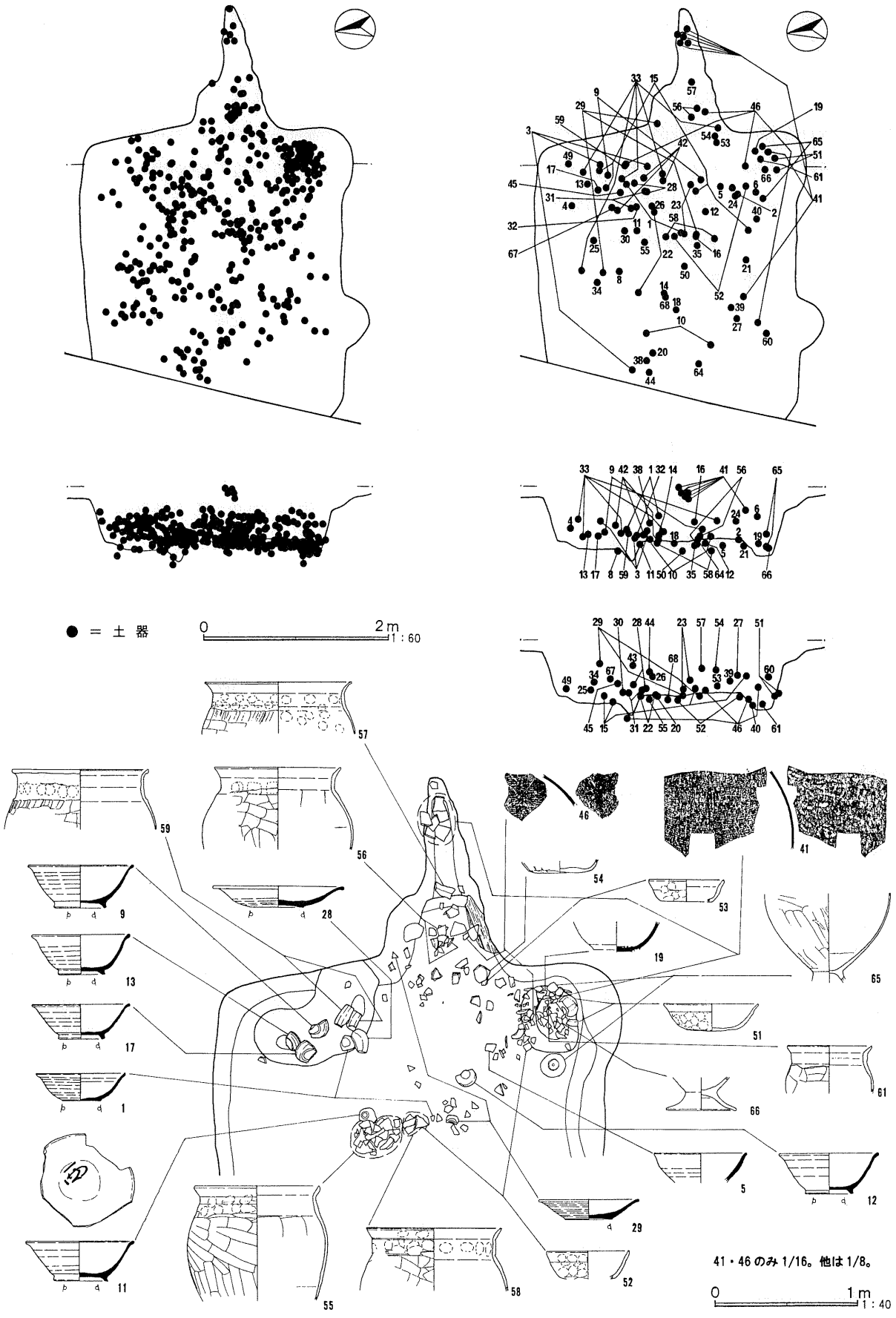
第２号住居跡（第７図）

第１区Ｑ・Ｒ－22・23グリッドに位置する。西側が調査区外にあるため長軸は不明であるが、短軸は2.89ｍを測り、長方形を呈すると思われる。南壁ではピット30に切られている。主軸方向はN－96°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.69ｍを測る。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。全層に炭化物や焼土等を含んでいた。

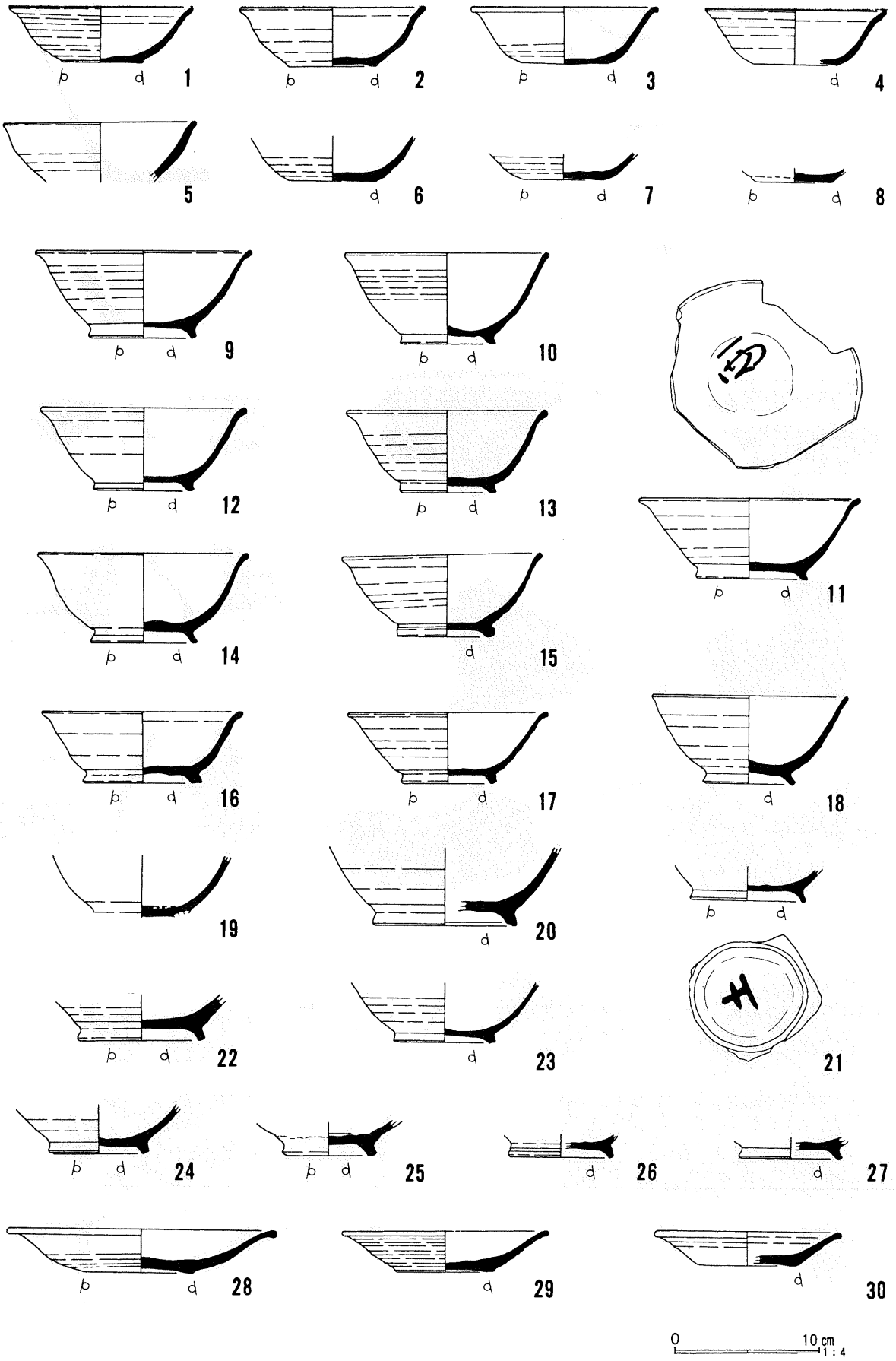
カマドは東壁中央からやや南寄りに位置する。袖石として北側に川原石、南側に片岩がみられた。壁外へは1.32ｍ張り出す。幅は焚口部が0.91ｍ、燃焼部と煙道部との境は0.5ｍ、煙道部先端部は0.12ｍを測る。焚口部から燃焼部はやや窪む。燃焼部と煙道部の境には高低差0.2ｍの段があり、煙道部は先端に



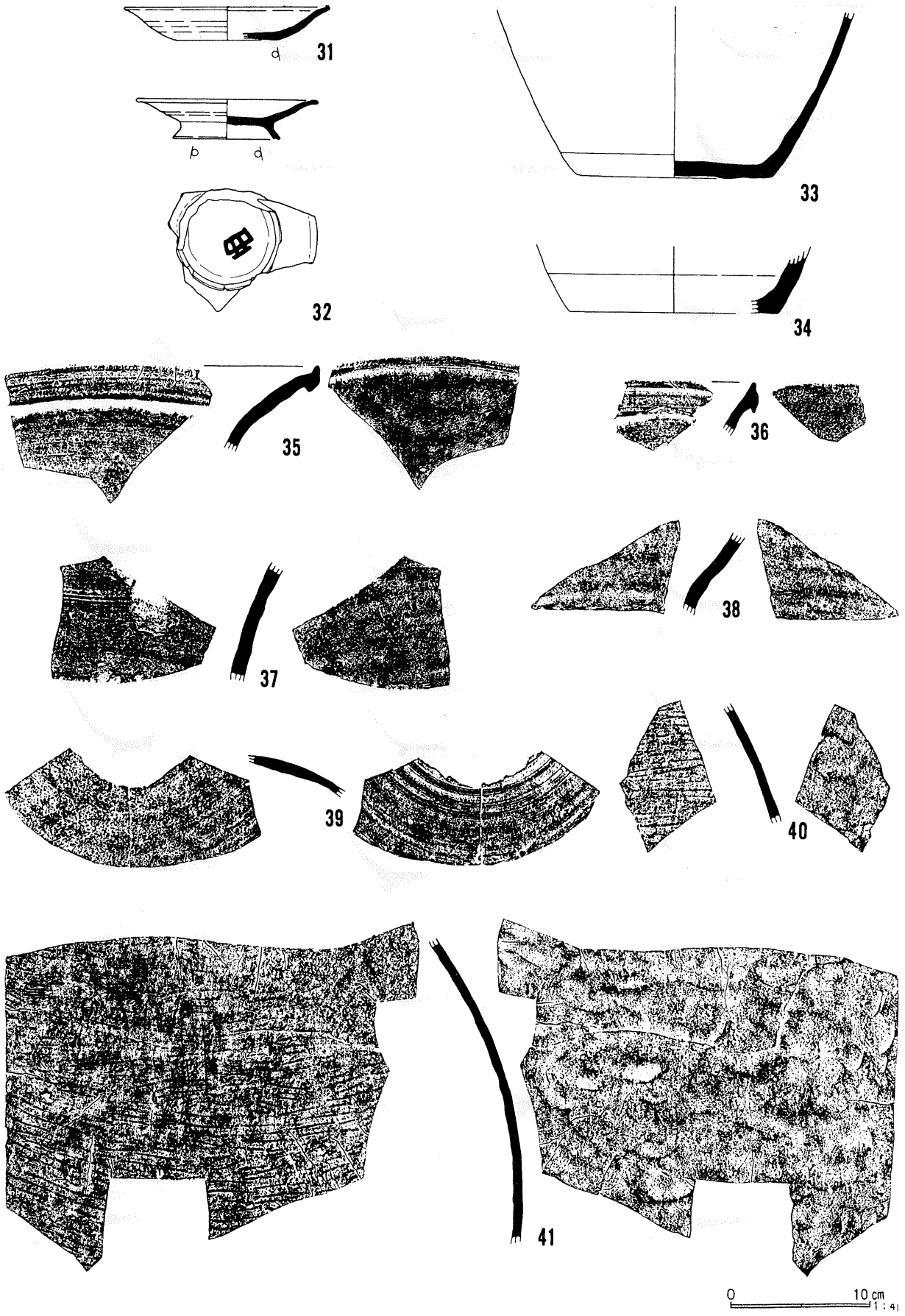
第７図　第２号住居跡



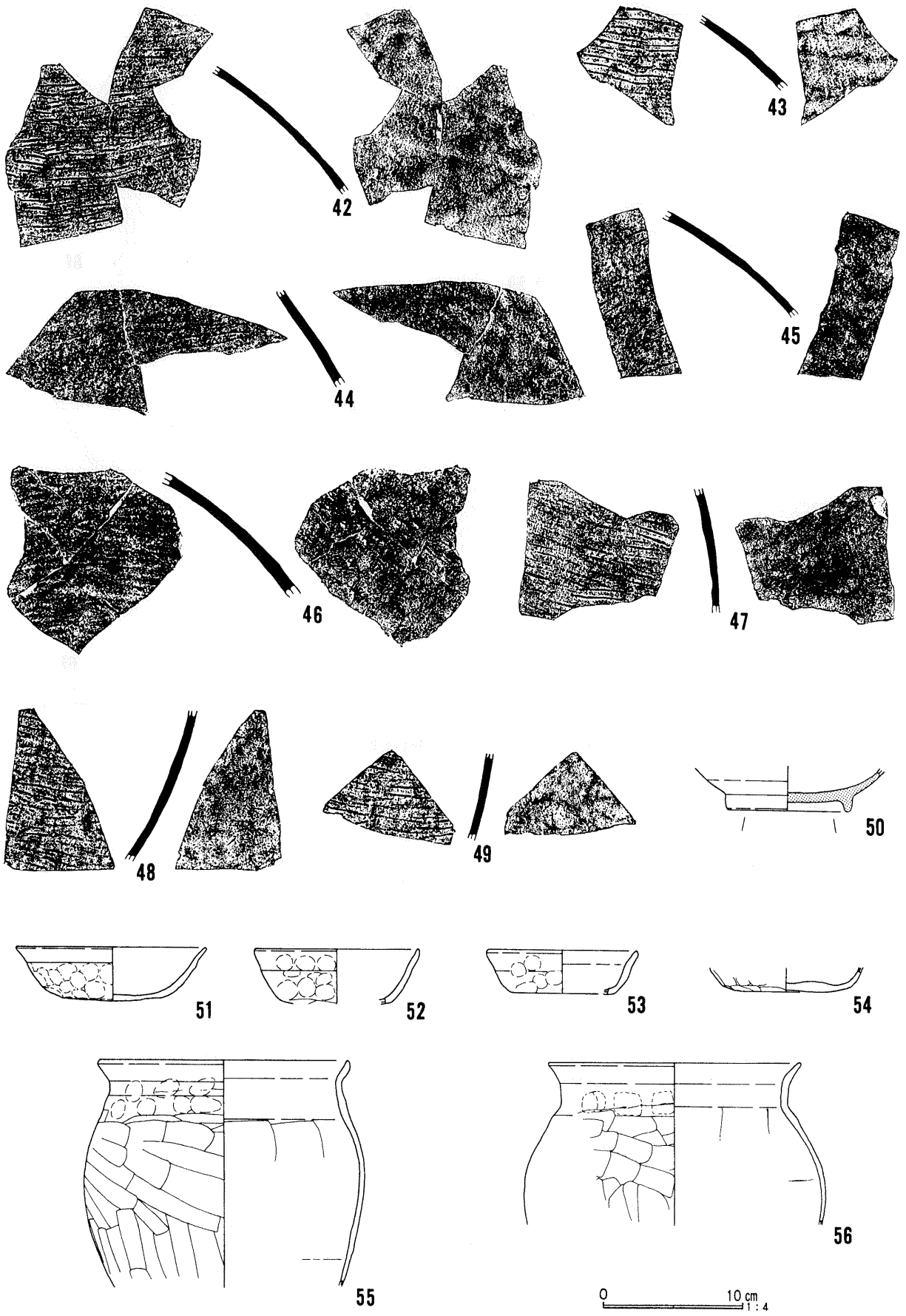
第８図　第２号住居跡遺物出土状況



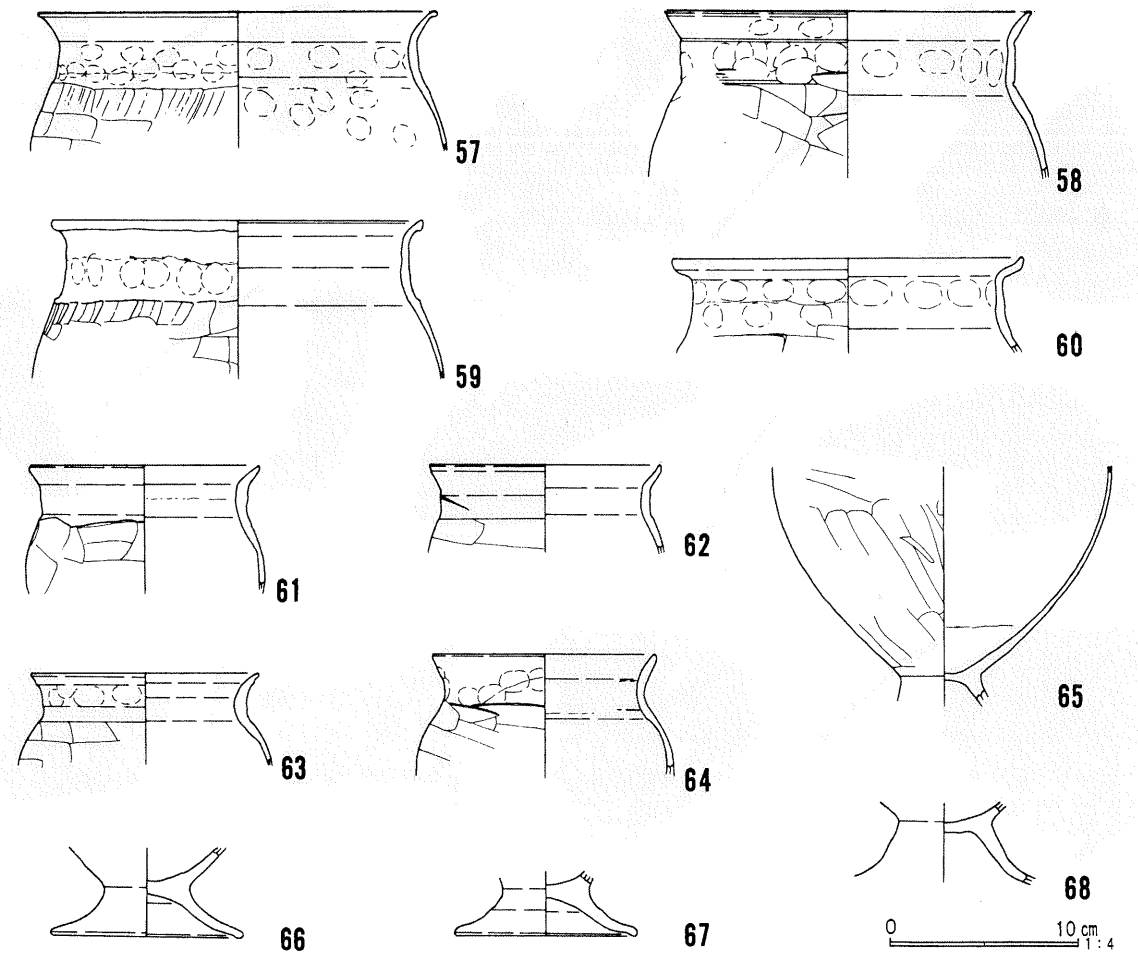
第９図　第２号住居跡出土遺物（１）



第10図　第２号住居跡出土遺物（２）



第11図　第２号住居跡出土遺物（３）



第12図　第２号住居跡出土遺物（４）

第４表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	12.8	3.9	5.5	ABGLN	暗灰色	A	80%	末野産。
2	須恵器　坏	(12.9)	4.1	6.2	AGLM	灰色	A	30%	末野産。
3	須恵器　坏	13.0	3.95	6.4	ABDILN	灰白色	B	50%	末野産。
4	須恵器　坏	(12.6)	3.75	(5.9)	AGHILN	暗灰色	B	15%	末野産。
5	須恵器　坏	(13.5)	(4.1)	－	ALMN	黄灰色	A	20%	末野産。
6	須恵器　坏	－	(3.0)	6.0	ABDHIL	にぶい黄橙色	C	60%	末野産。
7	須恵器　坏	－	(1.8)	5.6	ADHJKL	橙色	B	50%	末野産。酸化焔焼成。
8	須恵器　坏	－	(1.0)	5.2	ABCGHILN	暗灰色	A	80%	末野産。
9	須恵器高台椀	15.0	6.0	7.4	ABHLMN	灰白色	B	70%	末野産。
10	須恵器高台椀	14.3	6.3	6.7	ABCGILN	灰色	A	80%	末野産。
11	須恵器高台椀	(15.2)	5.6	7.7	AHILN	にぶい赤褐色	C	60%	末野産。酸化焔焼成。底部内面墨書「西」有。
12	須恵器高台椀	(14.3)	5.7	7.0	ABHLN	灰色	A	60%	末野産。
13	須恵器高台椀	14.0	5.7	6.7	AILMN	灰色	B	60%	末野産。
14	須恵器高台椀	(14.6)	6.1	7.4	BHLN	黄灰色	C	70%	末野産。
15	須恵器高台椀	14.0	5.6	6.7	ABGHILN	灰褐色	A	90%	末野産。
16	須恵器高台椀	(14.0)	4.95	8.4	ABDGILN	灰白色	B	30%	末野産。
17	須恵器高台椀	(14.0)	4.9	6.7	ABGHLMN	黒褐色	A	70%	末野産。
18	須恵器高台椀	(13.7)	6.1	6.4	ALN	灰色	A	45%	末野産。
19	須恵器高台椀	－	(4.15)	-	ABDGHILN	褐灰色	B	60%	末野産。酸化焔焼成。
20	須恵器高台椀	－	(5.4)	(10.0)	BDLN	灰白色	B	25%	末野産。
21	須恵器高台椀	－	(2.3)	8.0	ABHILN	灰黄色	B	90%	末野産。底部外面墨書「土」有。
22	須恵器高台椀	－	(3.2)	8.9	ABDHIKL	灰黄色	C	80%	末野産。
23	須恵器高台椀	－	(4.1)	7.1	ABIL	灰色	A	30%	末野産。
24	須恵器高台椀	－	(3.4)	7.0	ABJLN	黄灰色	B	50%	末野産。
25	須恵器高台椀	－	(2.35)	6.6	ADGHILN	黄灰色	B	90%	末野産。

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
26	須恵器高台椀	－	(1.6)	(7.3)	AHLMN	灰色	A	50%	末野産。
27	須恵器高台椀	－	(1.5)	(7.2)	ABL	黄灰色	B	50%	末野産。
28	須恵器　皿	18.8	3.0	7.6	DHLMN	にぶい赤褐色	C	70%	末野産。酸化焔焼成。
29	須恵器　皿	(14.4)	2.8	(6.6)	ABDGHLN	暗灰色	B	35%	末野産。
30	須恵器　皿	(13.1)	2.4	7.0	ABL	灰色	A	20%	末野産。
31	須恵器　皿	(14.7)	2.4	(7.1)	ABIKLMN	灰黄色	C	20%	末野産。
32	須恵器高台皿	(13.1)	2.8	7.7	ABGHILM	黄灰色	B	30%	末野産。底部外面墨書「西」有。
33	須恵器　甕	－	(11.9)	14.0	ADFGHJN	灰色	B	85%	南比企産。底部ヘラ削り。
34	須恵器　甕	－	(4.8)	(15.0)	ABHK	灰白色	C	20%	末野産？底部ヘラ削り。
35	須恵器　甕	－	－	－	ABFH	灰色	A	口縁部片	南比企産。内面自然釉有。
36	須恵器　甕	－	－	－	AMN	褐灰色	B	口縁部片	末野産？
37	須恵器　甕	－	－	－	AHL	灰色	B	頸部片	末野産。
38	須恵器　甕	－	－	－	ABDGHI	暗灰色	A	頸部片	南比企産。内面自然釉有。
39	須恵器　甕	－	－	－	BFN	黄灰色	A	肩部片	南比企産。外面自然釉有。
40	須恵器　甕	－	－	－	ABFJN	灰色	A	肩部片	南比企産。
41	須恵器　甕	－	－	－	ABDFGN	暗灰色	A	肩部片	南比企産。内外面自然釉有。
42	須恵器　甕	－	－	－	ABFGN	灰色	A	肩部片	南比企産。
43	須恵器　甕	－	－	－	ABFGHN	灰色	A	肩部片	南比企産。
44	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	肩部片	南比企産。外面自然釉有。
45	須恵器　甕	－	－	－	ABFG	灰色	A	肩部片	南比企産。外面自然釉有。
46	須恵器　甕	－	－	－	ABN	灰色	C	肩部片	末野産？ピット29出土第58図10と同一個体。
47	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	A	胴部片	南比企産。
48	須恵器　甕	－	－	－	ABEFGHN	灰色	A	胴下部片	南比企産。
49	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰色	A	胴下部片	南比企産。
50	灰釉高台椀	－	(3.2)	8.8	ABHN	灰白色	A	40%	東濃産。内面釉刷毛塗り。
51	土師器　坏	13.6	3.8	7.2	ABDGHIN	橙色	B	100%	
52	土師器　坏	(11.8)	(3.9)	(8.0)	DI	にぶい黄橙色	A	10%	
53	土師器　坏	(10.9)	3.1	(7.3)	BHIK	褐灰色	A	15%	
54	土師器　坏	－	(1.8)	9.1	ABDHJM	橙色	B	95%	
55	土師器　甕	18.0	(16.1)	－	ABHIKM	明赤褐色	A	70%	
56	土師器　甕	(18.1)	(11.6)	－	ABHKN	にぶい赤褐色	A	20%	
57	土師器　甕	(21.0)	(7.3)	－	ABDGHIJL	赤褐色	B	25%	
58	土師器　甕	19.4	(8.7)	－	ABCGHJM	にぶい赤褐色	A	70%	
59	土師器　甕	(19.5)	(8.4)	－	ABHIK	橙色	A	40%	
60	土師器　甕	(18.6)	(5.0)	－	ABDHJK	明赤褐色	A	25%	
61	土師器　甕	(12.1)	(6.6)	－	ABGHJLM	にぶい赤褐色	A	25%	
62	土師器　甕	(12.2)	(4.6)	－	ABEHK	橙色	A	30%	
63	土師器　甕	12.0	(4.8)	－	ABCHJMN	にぶい赤褐色	B	50%	
64	土師器　甕	(11.8)	(6.4)	－	ABHK	明赤褐色	A	30%	口縁部内面炭化物付着。
65	土師器台付甕	－	(12.7)	－	ABGJHM	黒褐色	B	70%	
66	土師器台付甕	－	(4.7)	(10.2)	ABCGHJ	赤褐色	C	30%	底部内面炭化物付着。
67	土師器台付甕	－	(3.4)	9.7	ABDEHJKN	明赤褐色	A	90%	
68	土師器台付甕	－	(4.4)	－	BGHJK	にぶい赤褐色	B	70%	内面炭化物付着。

向かって緩やかに立ち上がる。先端には煙出し用に須恵器甕破片（41）がみられた。カマドの覆土は図示できなかったが天井部崩落土等は確認できず、炭化物や焼土を含む黒色土を確認するにとどまった。

カマドの両脇には貯蔵穴が2つ設けられている。北西隅にある貯蔵穴1は径0.98×0.46m、床面からの深さは最大0.18mを測り、いびつな瓢箪状を呈する。東壁側にオーバーハングしていた。南東隅にある貯蔵穴2は径0.49×0.4m、床面からの深さは0.19mを測り、隅丸方形を呈する。ピットは貯蔵穴2西側の南壁沿いから1つ検出された。径0.35m、床面からの深さは0.44mを測り、円形を呈する。柱穴かどうかは不明であるが、掘り込みはしっかりしている。壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第9～12図）は須恵器坏、高台付椀、皿、高台付皿、甕、灰釉陶器高台付椀、土師器坏、甕、台付甕がある。遺物は土器のみである。出土量が多く、須恵器供膳具の検出が目立つ。遺物は住居跡のほぼ全面及び全層から検出されたが、貯蔵穴2及び周辺からの検出が多い（第8図）。

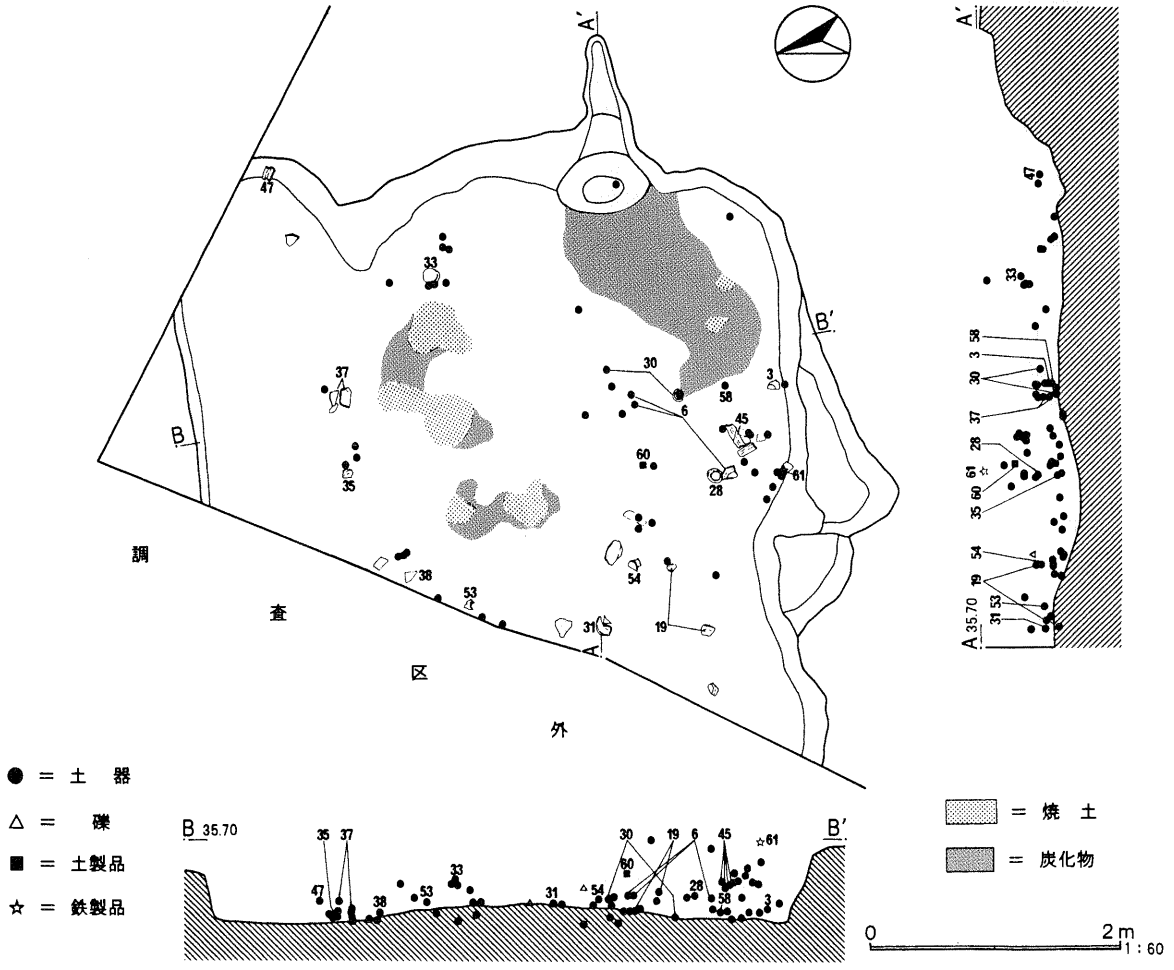
須恵器はすべて末野産である。坏は口径13cm、器高4cm、底径6cm前後のものが主体となる。高台付椀は口径14cm、底径は7cm前後を測るが、器高は高低差がある。皿は体部が緩やかに内湾するタイプ（28・31）と直線的なタイプ（29・30）がある。前者は器壁が薄く、後者は厚手である。高台付皿は1点のみ検出された。皿の後者タイプに高台が付く。11・21・32には墨書がみられた。11・32は「西」、21は「士」が描かれており、11のみ内面にある。甕は末野産が少なく南比企産が多い。ほとんどが籠原裏古墳群3号墳からの流れ込みと思われる。46は本住居跡東側に位置するピット29出土の破片（第58図10）と同一個体であった。灰釉陶器高台付椀は高台部のみ検出された。高台部断面は三日月形をしており、底部調整はヘラ削りである。内面には刷毛塗りによる施釉がみられる。東濃産。黒笹90号窯式併行と思われる。土師器坏は51～53が外面に指オサエ、底部にヘラ削りを施しているが、54は体部と底部両方にヘラ削りを施している。甕は口縁部が「コ」の字状を呈し、内外面に輪積痕と指頭圧痕がある。55のみ「コ」の字が崩れ、器壁も厚手であり退化的な様相を示す。61～64は台付になる可能性が高い。台付甕は台部のみの検出が多い。64は口縁部内面、66・68は内面にそれぞれ炭化物の付着がみられた。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、9世紀末～10世紀初頭と思われる。

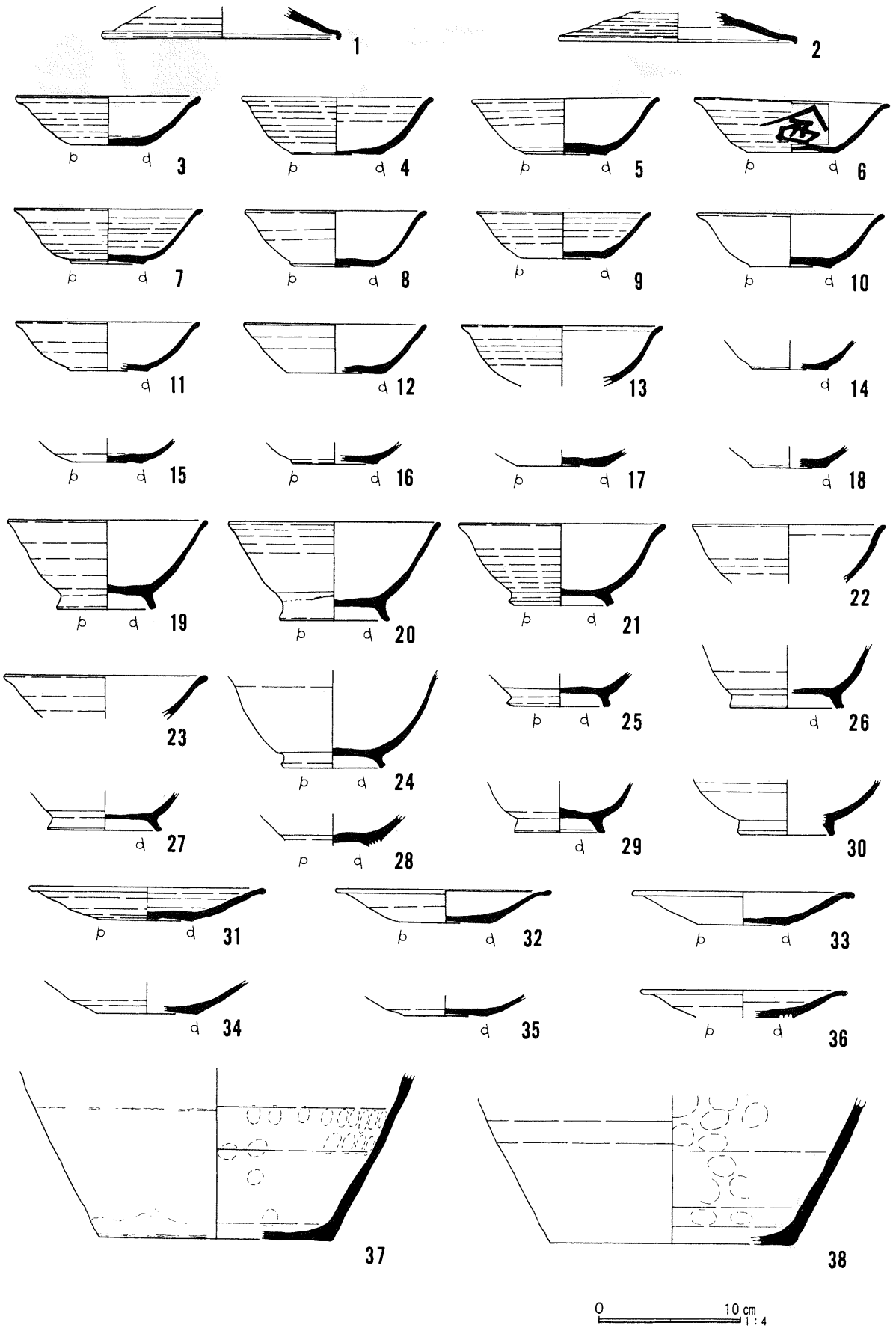
第3号住居跡（第13図）

第2区Y・Z－30～32グリッドに位置する。北東部の一部と西側は調査区外にある。

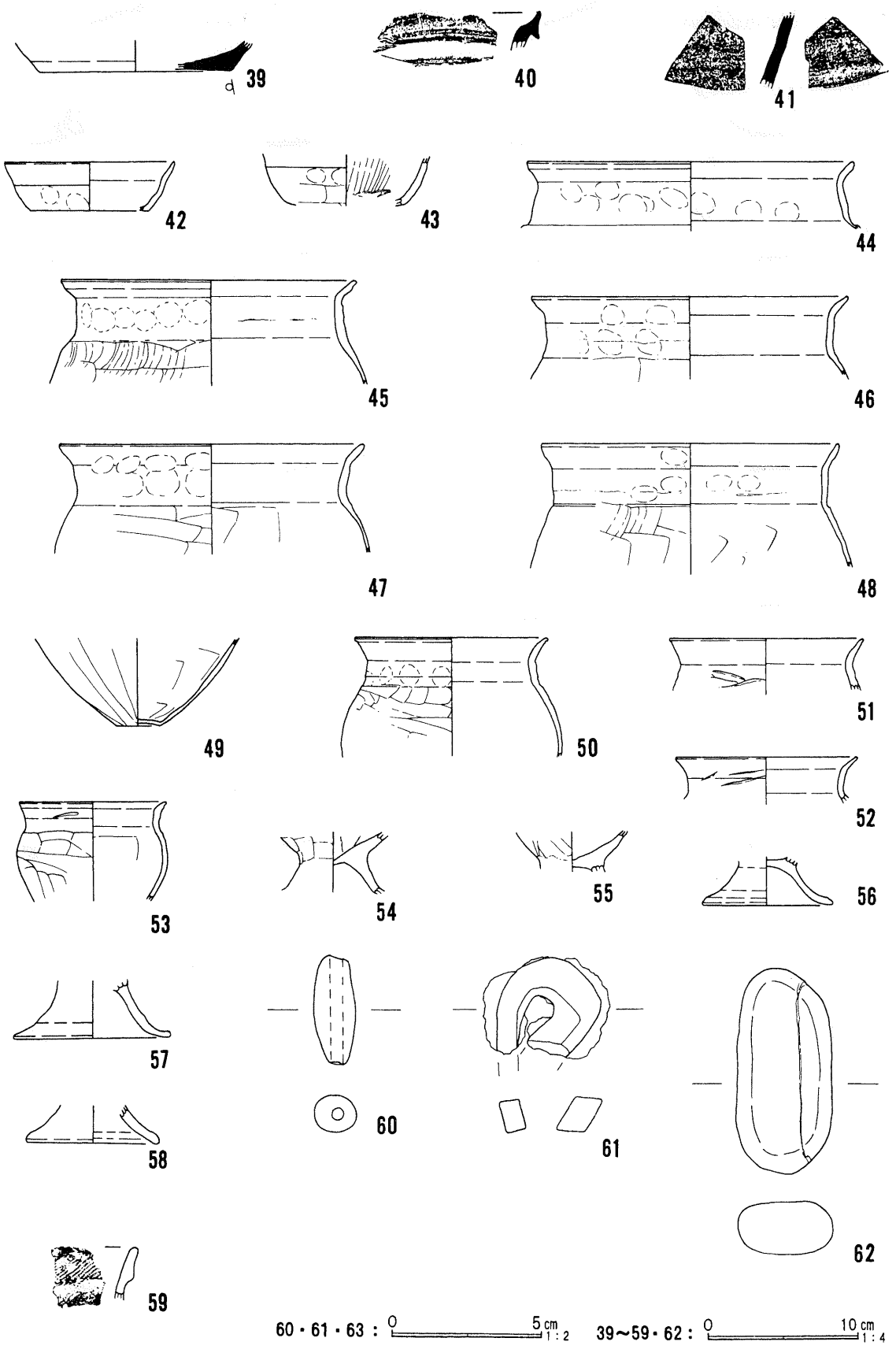
長軸は不明であるが短軸は4.98mを測り、長方形を呈すると思われる。主軸方向はN－100°－Eを指



第13図　第3号住居跡



第14図　第３号住居跡出土遺物（１）



第15図　第３号住居跡出土遺物（２）

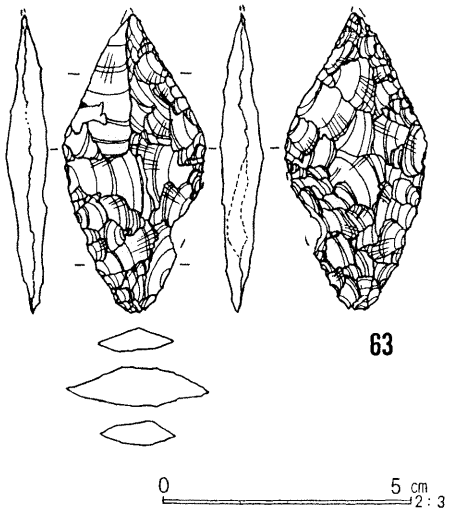
す。確認面からの深さは最大0.69ｍを測る。床面には凹凸がみられた。覆土は図示できなかったが全層黒色系の土であった。床面中央とカマド前には焼土と炭化物がみられた。自然堆積と考えられる。

南壁外には半円状の掘り込みが２つ並んでみられたが、本住居跡に伴うものかは不明である。壁外へは最大0.69ｍ張り出す。また北東隅にも半円状の張り出しがあるが、これは本住居跡に伴うものと思われる。壁外へは0.46ｍ張り出している。

カマドは東壁中央から南寄りに位置する。袖部及び袖石はない。壁外への張り出しは0.91ｍと短い。焚口部から燃焼部は径0.79×0.49ｍ、床面からの深さ0.09ｍの浅い土坑状を呈する。燃焼部と煙道部の境には高低差0.32ｍの段がある。煙道部の幅は燃焼部との境で0.35ｍ、先端で0.13ｍを測る。煙道部はほぼ平坦で先端で鋭角に立ち上がる。カマドの覆土は図示できなかったが天井部崩落土等は確認できず、焼土や炭化物を含む黒色系の土を確認するにとどまった。壁溝、ピット、貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第14～16図）は、須恵器蓋、坏、高台付椀、皿、高台付皿、甕、土師器坏、甕、台付甕、土錘、不明鉄製品、砥石がある。また、流れ込みの遺物として古墳時代前期・壺、旧石器時代・尖頭器も出土した。遺物は主に住居跡中央から南壁沿いにかけて検出された。須恵器供膳具の検出が多い。

須恵器は末野産がほとんどを占めるが５のみ南比企産である。供膳具の底部調整はすべて回転糸切り痕を残す。蓋は２点のみ検出された。ともに椀蓋か。坏は口径13㎝、器高４㎝、底径６㎝前後のものが主体となる。６の外面には、「畠」の墨書がみられた。高台付椀は口径14.5㎝、底径は7.5㎝前後のものが主体となるが器高は高低差がある。皿は５点、高台付皿は１点のみ検出された。体部が緩やかに内湾するものが多い。甕は底部片が多い。37・38は内面の指オサエが顕著であった。37は外面がアバタ状に剥離している。39は底径が小さく器壁も薄い。鉢かもしれない。底部調整は回転糸切りである。土師器坏は２点のみ検出された。43の内面には放射状及び螺旋状暗文がみられた。甕は口縁部が「コ」の字状を呈し、内外面に輪積痕と指頭圧痕がみられる。50～53は台付になる可能性が高い。台付甕は接合部と台部のみ検出された。49のみ内面に炭化物、外面に煤の付着がみられた。土錘は１点のみ検出された。太めで中段の膨らみが小さい。完形品。61は不明鉄製品。１㎝前後の角状を呈し、屈曲している。用途は不明である。62は一面のみ平滑であり、砥石の可能性がある。中粒砂岩。



第16図　第３号住居跡出土石器（旧石器時代）

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

なお、流れ込み遺物である59は古墳時代前期・壺の口縁部片。複合口縁部外面には細かい単節LR縄文、内面には横位のミガキが施されている。63は旧石器時代の尖頭器。覆土から検出された。黒耀石製。菱形を呈する木葉形である。長さ5.9㎝、幅2.85㎝、最大厚0.8㎝を測り、最大径は体部上半にある。重量は現状で10.8ｇである。先端及び右側縁の一部を欠く。樋状剥離が先端から表面左側縁の肩の張り出し方向に向けて１回だけ施されており、剥離面の末端部付近や打点部付近は後の加工で失われている。本遺跡周辺では旧石器時代唯一の貴重な資料である。

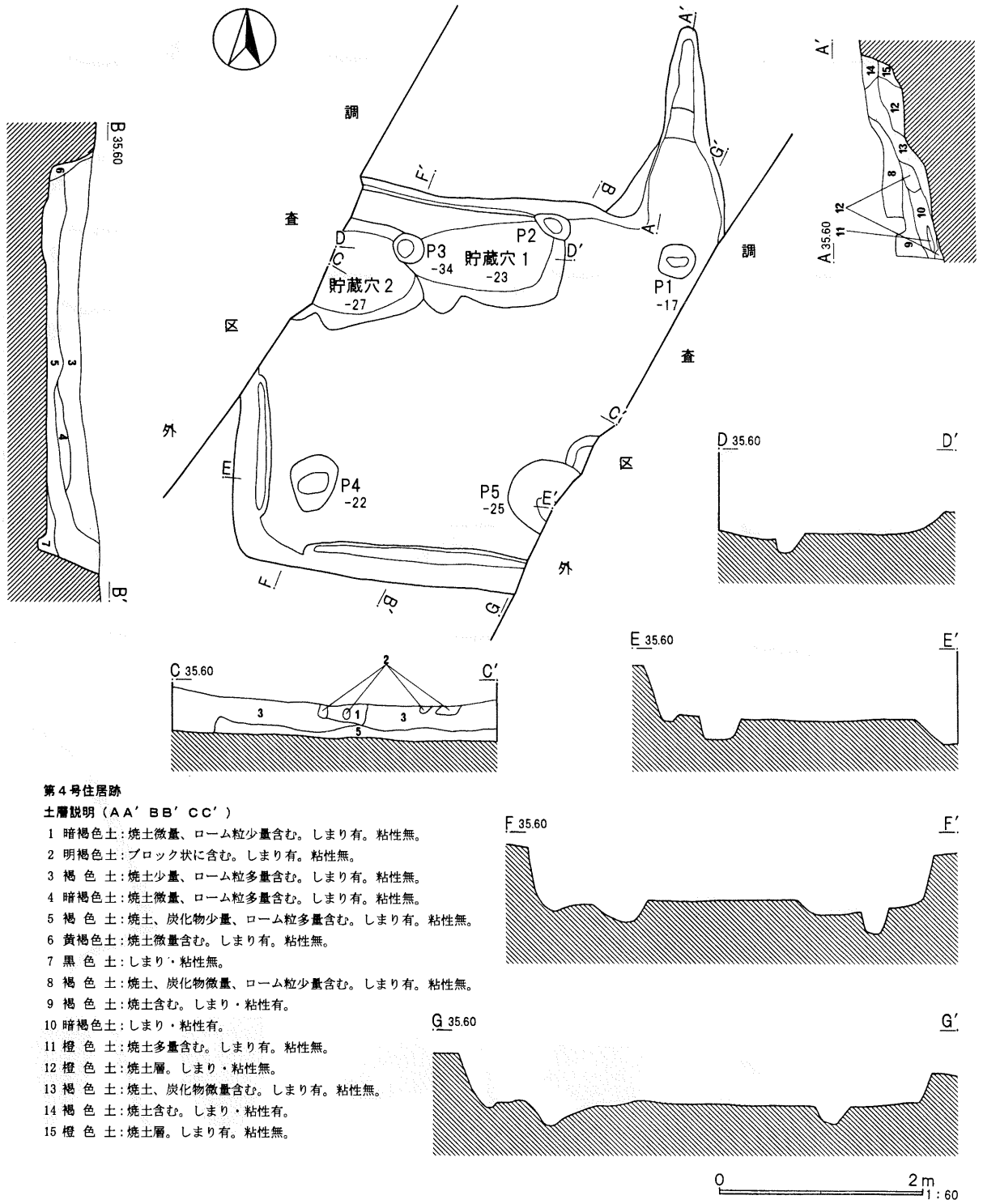
第５表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(16.9)	(2.2)	－	ABGLN	灰色	A	15%	末野産。
2	須恵器　蓋	(16.9)	(2.1)	－	ABDHL	灰黄色	B	15%	末野産。
3	須恵器　坏	(13.0)	3.4	5.4	ABLN	灰色	A	50%	末野産。
4	須恵器　坏	13.6	4.0	6.2	ABCEGHLN	にぶい橙色	B	90%	末野産。
5	須恵器　坏	13.3	4.1	5.8	AFN	灰色	A	70%	南比企産。
6	須恵器　坏	13.7	3.8	6.1	ABGLN	灰白色	A	80%	末野産。口縁部外面墨書「畣」有。
7	須恵器　坏	(13.4)	3.8	5.2	ABLN	黄灰色	B	50%	末野産。
8	須恵器　坏	12.8	3.9	6.0	ABHLMN	にぶい黄橙色	B	90%	末野産。酸化焔焼成。
9	須恵器　坏	12.3	3.2	5.9	ABLN	黄灰色	B	70%	末野産。
10	須恵器　坏	(13.2)	3.7	5.7	ABGHLN	灰白色	B	80%	末野産。
11	須恵器　坏	(13.0)	3.4	(5.6)	ABHKL	灰黄色	B	20%	末野産。
12	須恵器　坏	(13.0)	3.4	6.3	BDE	にぶい黄橙色	C	50%	末野産？酸化焔焼成。
13	須恵器　坏	(14.2)	(4.2)	－	ABHLN	黄灰色	A	25%	末野産。
14	須恵器　坏	－	(2.0)	(5.2)	ABHL	灰色	A	25%	末野産。
15	須恵器　坏	－	(1.6)	5.0	ABHL	灰色	A	90%	末野産。
16	須恵器　坏	－	(1.4)	6.1	ABDEGH	明褐色	C	50%	末野産？酸化焔焼成。
17	須恵器　坏	－	(1.1)	(6.3)	ACEHL	にぶい橙色	C	90%	末野産。酸化焔焼成。
18	須恵器　坏	－	(1.5)	(5.6)	AEH	灰褐色	B	40%	末野産？
19	須恵器高台椀	14.2	6.2	7.1	ADLMN	灰色	A	70%	末野産。
20	須恵器高台椀	(15.0)	6.9	7.8	ABDHLN	黄灰色	A	50%	末野産。
21	須恵器高台椀	14.6	5.7	7.4	ABHLN	灰色	A	75%	末野産。
22	須恵器高台椀	(13.6)	(4.1)	－	ABGLN	灰色	A	20%	末野産。
23	須恵器高台椀	(14.5)	(3.0)	－	AHL	オリーブ黒色	A	15%	末野産。
24	須恵器高台椀	－	(6.9)	7.4	ABGHLN	灰色	C	60%	末野産。
25	須恵器高台椀	－	(2.4)	7.4	ABG	浅黄色	B	90%	産地不明。
26	須恵器高台椀	－	(4.4)	(8.1)	AHLN	灰色	A	30%	末野産。
27	須恵器高台椀	－	(2.6)	8.1	ABDHL	灰黄褐色	B	50%	末野産。
28	須恵器高台椀	－	(2.1)	－	ADEHLN	にぶい褐色	C	85%	末野産。
29	須恵器高台椀	－	(3.5)	6.4	ABHK	灰白色	C	60%	末野産？
30	須恵器高台椀	－	(3.9)	6.9	ABHLN	灰黄色	C	45%	末野産。
31	須恵器　皿	16.8	2.3	6.7	ABDEKL	褐灰色	B	70%	末野産。
32	須恵器　皿	15.3	2.3	6.4	ABL	灰色	B	90%	末野産。
33	須恵器　皿	(15.8)	2.3	6.2	ABDKLN	灰黄褐色	C	40%	末野産。酸化焔焼成。
34	須恵器　皿	－	(2.2)	(7.0)	ABDGHLN	灰黄色	C	45%	末野産。
35	須恵器　皿	－	(1.4)	(5.8)	ABILM	にぶい黄橙色	C	30%	末野産。
36	須恵器高台皿	(14.6)	(1.8)	－	ABCHLN	黄灰色	C	40%	末野産。
37	須恵器　甕	－	(11.8)	(16.5)	BDEGHLMN	灰色	C	20%	末野産。外面アバタ状剥離。底部ヘラ削り。
38	須恵器　甕	－	(10.4)	(17.0)	ABHLN	灰色	C	10%	末野産。底部ヘラ削り。
39	須恵器　甕	－	(2.1)	(12.8)	CJK	灰白色	C	20%	末野産？
40	須恵器　甕	－	－	－	ABDHI	黄灰色	C	口縁部片	末野産？
41	須恵器　甕	－	－	－	ABDHLN	灰色	A	胴下部片	末野産。
42	土師器　坏	(11.4)	3.3	(7.8)	AGIJK	にぶい赤褐色	B	10%	
43	土師器　坏	－	(3.4)	(8.0)	BDM	橙色	A	10%	内面放射状、螺旋状暗文有。
44	土師器　甕	(22.0)	(4.4)	－	ABGHKM	橙色	A	20%	
45	土師器　甕	19.8	(7.0)	－	ABEHKM	褐灰色	A	90%	
46	土師器　甕	(21.2)	(5.5)	－	ABHKM	明赤褐色	A	10%	
47	土師器　甕	(20.4)	(7.2)	－	ABCGHKM	橙色	A	20%	
48	土師器　甕	(20.0)	(8.3)	－	ABDGKM	赤褐色	B	25%	
49	土師器　甕	－	(5.8)	2.8	ABCGHKM	黒褐色	A	90%	内面炭化物、外面煤付着。
50	土師器　甕	(13.0)	(7.9)	－	ABHKM	明赤褐色	A	25%	
51	土師器　甕	(13.0)	(3.5)	－	ABDEHJK	にぶい赤褐色	A	20%	
52	土師器　甕	(12.2)	(3.2)	－	ABHJ	赤褐色	A	40%	
53	土師器　甕	9.8	(6.6)	－	ABHJK	にぶい橙色	A	60%	
54	土師器台付甕	－	(4.15)	－	ABCGHN	赤褐色	B	90%	
55	土師器台付甕	－	(2.6)	－	ABEGHKM	にぶい橙色	B	40%	
56	土師器台付甕	－	(3.2)	8.8	ABEGHJKM	褐灰色	A	70%	
57	土師器台付甕	－	(3.8)	10.5	ABDEHJKN	橙色	A	100%	
58	土師器台付甕	－	(2.5)	(9.0)	ABGHJK	橙色	B	25%	
59	土師器　壺	－	－	－	BNJ	にぶい橙色	B	口縁部片	古墳時代前期。
60	土　錘	最大長3.6cm、最大径1.4cm、孔径0.4cm。重量6.3ｇ。完形。							

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
61	不明鉄製品	最大長(3.5)cm、最大幅1.3cm、最大厚1.15cm。重量（24.1）g。両端欠。屈曲している。							
62	砥　石？	最大長13.8cm、最大幅6.4cm、最大厚3.8cm。重量555 g。中粒砂岩。完形。上面のみ平滑。一面使用 ？							
63	旧石器尖頭器	最大長5.9cm、最大幅2.85cm、最大厚0.8cm。重量（10.8）g。黒耀石。一部欠。木葉形。							

第４号住居跡（第17図）

第３区Q・R－36・37グリッドに位置する。北西端と南東部は調査区外にある。

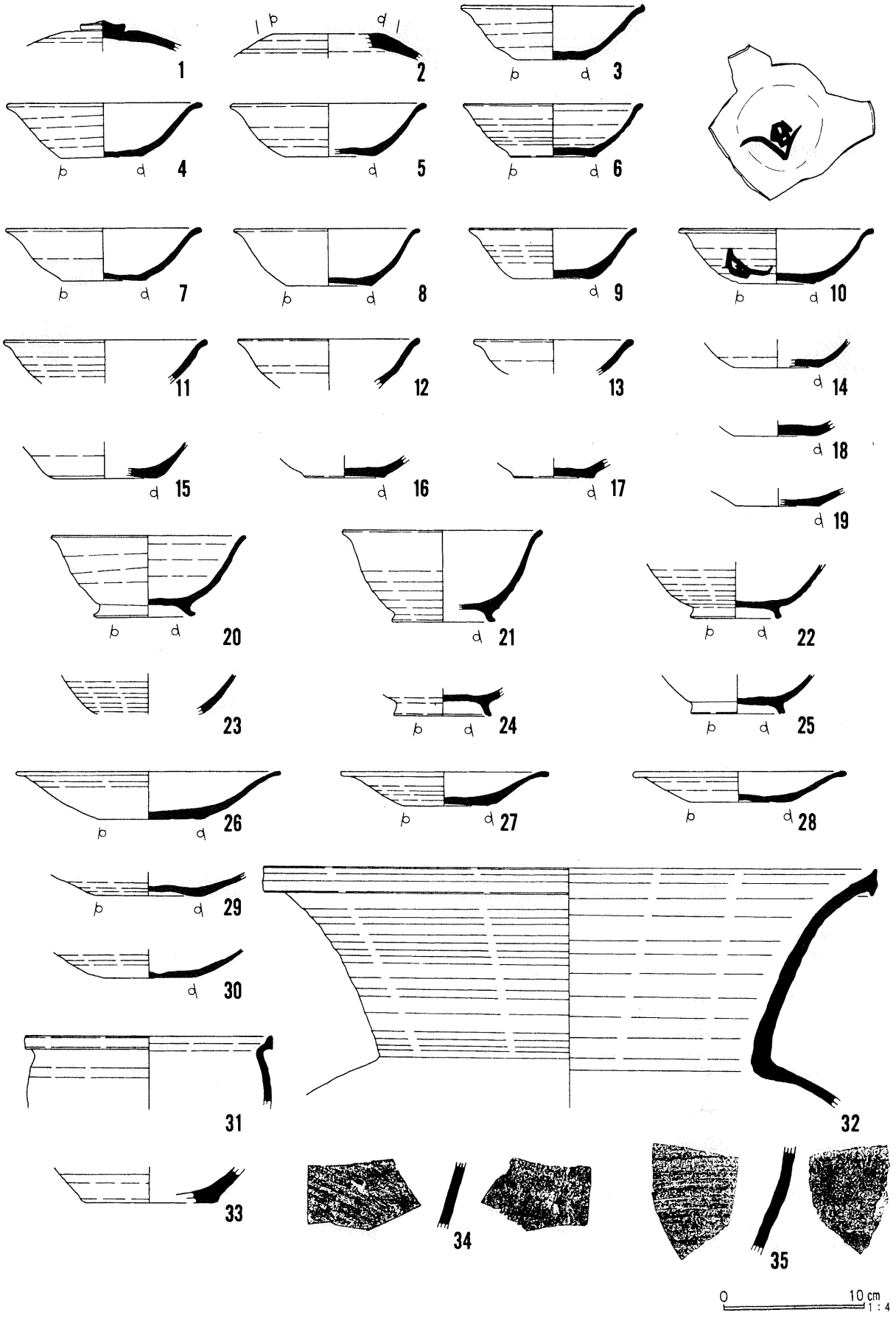


第４号住居跡

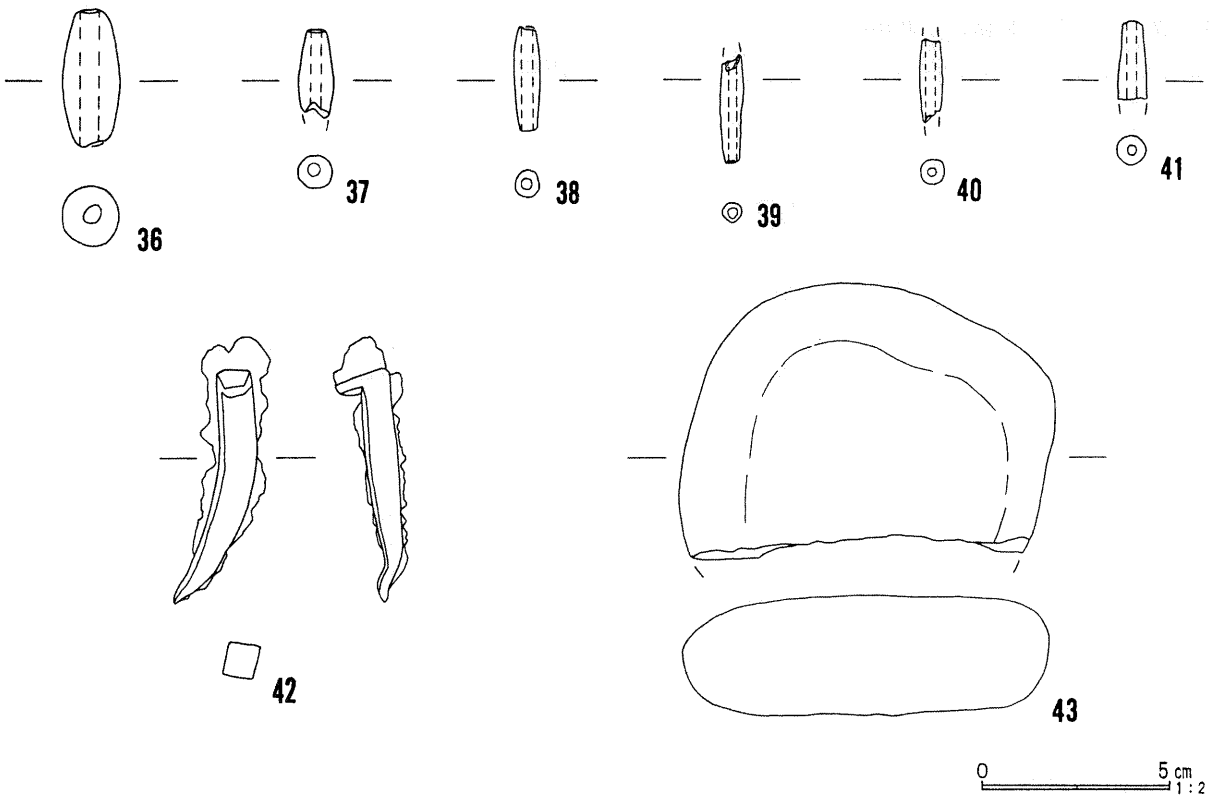
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）

1 暗褐色土：焼土微量、ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。
2 明褐色土：ブロック状に含む。しまり有。粘性無。
3 褐　色　土：焼土少量、ローム粒多量含む。しまり有。粘性無。
4 暗褐色土：焼土微量、ローム粒多量含む。しまり有。粘性無。
5 褐　色　土：焼土、炭化物少量、ローム粒多量含む。しまり有。粘性無。
6 黄褐色土：焼土微量含む。しまり有。粘性無。
7 黒　色　土：しまり・粘性無。
8 褐　色　土：焼土、炭化物微量、ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。
9 褐　色　土：焼土含む。しまり・粘性有。
10 暗褐色土：しまり・粘性有。
11 橙　色　土：焼土多量含む。しまり有。粘性無。
12 橙　色　土：焼土層。しまり・粘性無。
13 褐　色　土：焼土、炭化物微量含む。しまり有。粘性無。
14 褐　色　土：焼土含む。しまり・粘性有。
15 橙　色　土：焼土層。しまり有。粘性無。

第17図　第４号住居跡



第18図　第４号住居跡出土遺物（１）



第19図　第４号住居跡出土遺物（２）

短軸は3.92ｍ、長軸は約4.6ｍ前後になると思われ、横長の長方形を呈する。主軸方向はN－７°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.54ｍを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。ほとんどの層に焼土を含み、５層にのみ炭化物がみられた。

カマドは北西隅に位置する。袖部及び袖石はない。壁外へは1.98ｍ張り出す。幅は焚口部が0.97ｍ、燃焼部と煙道部の境で0.42ｍ、煙道部先端は0.15ｍを測る。焚口部から燃焼部までは緩やかに立ち上がり、燃焼部と煙道部の境には高低差0.2ｍの段が設けられている。煙道部はほぼ平坦であり先端で鋭角に立ち上がる。焚口部前にはピットがあるがカマドに関連するものか。覆土に天井部崩落土は確認できなかったが、10層以外はいずれも焼土を含み、中～下層には焼土層がみられた。

カマド西脇からは貯蔵穴が２つ並んで検出された。東側の貯蔵穴１は長軸1.56ｍ、短軸0.94ｍのいびつな楕円形を呈する。床面からの深さは0.23ｍを測り、西側で貯蔵穴２とピット３に接続している。貯蔵穴２は西側が調査区外にあるため長軸は不明であるが、短軸は1.07ｍを測る。貯蔵穴１同様、いびつな楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.27ｍである。ピットは５つ確認された。Ｐ１は前述のとおり、カマド前に位置する。柱穴とは考えづらく灰溜用のピットであろうか。Ｐ２・３は北壁沿いにあり、貯蔵穴１を挟んでいる。径が小さいが掘り込みがしっかりしており柱穴とみて良さそうである。Ｐ４・５はやや位置がずれているが主柱穴と思われる。壁溝は検出した範囲内でほぼ全周するが、カマド西側と西壁中央、南西隅で途切れる。幅は0.26～0.38ｍ、床面からの深さは0.05～0.09ｍである。

出土遺物（第18・19図）は須恵器蓋、坏、高台付椀、皿、鉢、甕、土錘、鉄釘、台石がある。遺物は住居跡のほぼ全面及び全層から検出された。須恵器供膳具の検出が圧倒的に多い。土師器は図示可能なものはなかった。須恵器はほとんど末野産である。供膳具の底部調整はすべて回転糸切り痕を残す。蓋

第６表　第４号住居跡出土遺物観察表

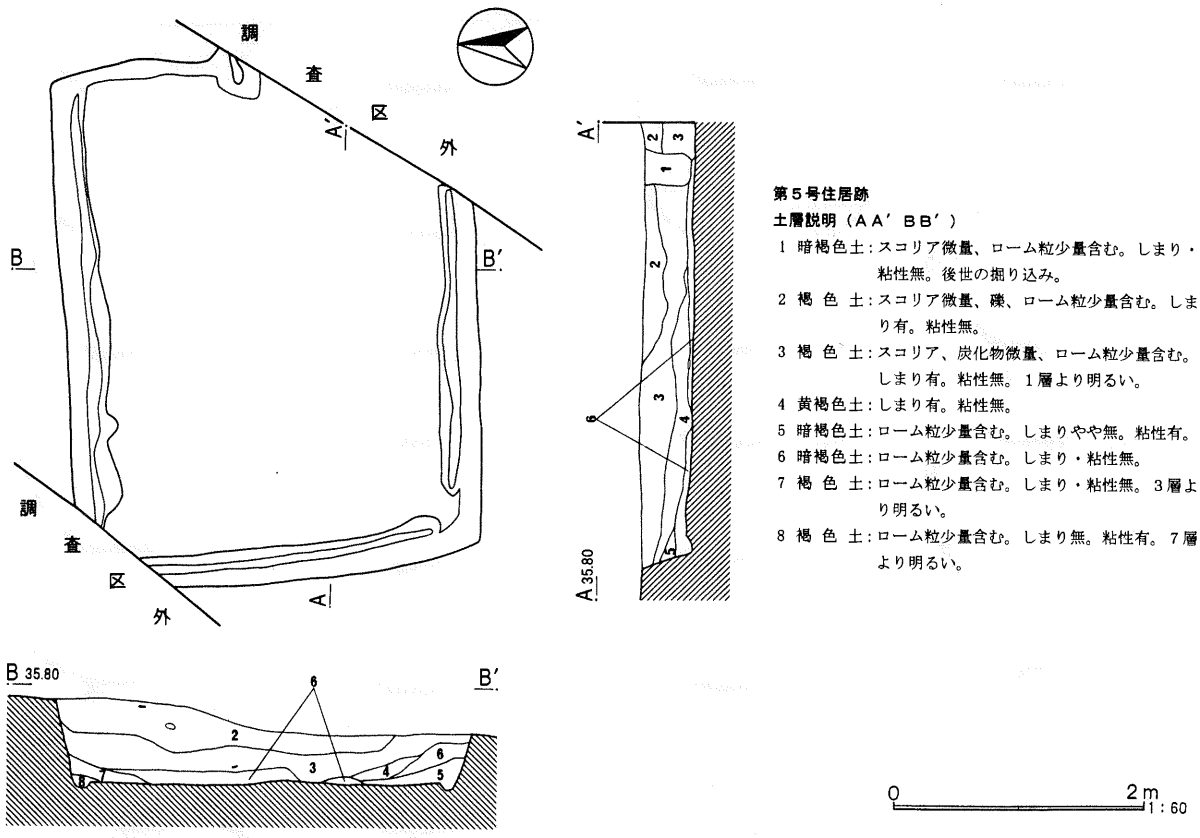
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	－	(2.2)	－	ALN	灰色	B	10%	末野産。
2	須恵器　蓋	－	(1.9)	－	ABEGHLMN	灰黄色	C	20%	末野産。
3	須恵器　坏	13.2	3.9	5.2	ADHL	黄灰色	B	100%	末野産。
4	須恵器　坏	14.0	3.9	5.8	ABDHKLN	灰黄色	C	80%	末野産。
5	須恵器　坏	(14.0)	3.8	(6.2)	ABGHKL	暗灰色	B	35%	末野産。
6	須恵器　坏	(12.9)	3.7	6.0	AHL	暗灰色	A	35%	末野産。
7	須恵器　坏	(14.0)	3.7	6.0	ABCELN	灰色	B	40%	末野産。
8	須恵器　坏	13.3	4.1	6.2	ABGL	暗灰色	B	80%	末野産。
9	須恵器　坏	(12.0)	3.6	(6.0)	AB	灰色	A	30%	産地不明。
10	須恵器　坏	(14.0)	3.9	5.3	ABDGHKL	灰黄色	C	50%	末野産。底部内面、体部外面墨書「畣」有。
11	須恵器　坏	(14.6)	(3.1)	－	ABDHKLN	浅黄色	C	15%	末野産。酸化焔焼成。
12	須恵器　坏	(13.0)	(3.5)	－	AGLN	灰色	A	10%	末野産。
13	須恵器　坏	(11.4)	(2.5)	－	ABGLN	灰色	A	20%	末野産。
14	須恵器　坏	－	(2.0)	(6.0)	ABHLN	灰色	A	40%	末野産。
15	須恵器　坏	－	(2.6)	(7.2)	AGL	黄灰色	A	20%	末野産。
16	須恵器　坏	－	(1.6)	(5.8)	ABGHLN	暗灰色	B	30%	末野産。
17	須恵器　坏	－	(1.4)	(5.8)	ABCL	にぶい赤褐色	C	80%	末野産。
18	須恵器　坏	－	(1.1)	(6.0)	ABG	灰褐色	C	25%	末野産？
19	須恵器　坏	－	(1.3)	(6.0)	ABCGMN	にぶい褐色	C	20%	末野産？酸化焔焼成。
20	須恵器高台椀	14.0	5.9	7.3	ABGHLN	にぶい黄色	C	100%	末野産。
21	須恵器高台椀	(14.4)	6.5	(7.4)	ABGKL	灰白色	B	15%	末野産。
22	須恵器高台椀	－	(4.0)	6.5	ABHL	黄灰色	B	80%	末野産。
23	須恵器高台椀	－	(2.9)	－	ABHLN	灰色	B	40%	末野産。
24	須恵器高台椀	－	(2.0)	7.0	ADLN	灰色	B	80%	末野産。
25	須恵器高台椀	－	(2.8)	6.8	AGHL	灰色	B	90%	末野産。
26	須恵器　皿	19.0	3.4	7.4	ABEGHLM	灰色	A	70%	末野産。
27	須恵器　皿	15.0	2.4	6.3	ALN	灰色	A	95%	末野産。
28	須恵器　皿	(15.4)	2.2	7.2	ABDHLN	灰黄色	B	35%	末野産。
29	須恵器　皿	－	(1.7)	7.4	ABHL	灰白色	C	80%	末野産。
30	須恵器　皿	－	(2.0)	(6.5)	AGHLN	灰色	A	15%	末野産。
31	須恵器　鉢	(17.8)	(5.2)	－	ABH	灰色	A	5%	末野産？
32	須恵器　甕	(43.6)	(17.1)	－	ABLN	灰色	A	50%	末野産。
33	須恵器　甕	－	(2.5)	(9.8)	ABGHL	褐灰色	B	25%	末野産。底部ヘラ削り。
34	須恵器　甕	－	－	－	ABDN	灰白色	C	胴下部片	末野産？
35	須恵器　甕	－	－	－	ABGL	灰色	B	胴下部片	末野産。
36	土　錘	最大長3.7cm、最大径1.55cm、孔径0.5cm。重量（6.9）g。片端一部欠。							
37	土　錘	最大長（2.3）cm、最大径0.9cm、孔径0.3cm。重量（1.7）g。片端欠。							
38	土　錘	最大長（2.75）cm、最大径0.7cm、孔径0.3cm。重量（1.2）g。片端一部欠。							
39	土　錘	最大長（2.9）cm、最大径0.6cm、孔径0.25cm。重量（1.2）g。片端欠。							
40	土　錘	最大長（2.2）cm、最大径0.6cm、孔径0.2cm。重量（0.6）g。両端欠。							
41	土　錘	最大長（2.05）cm、最大径0.75cm、孔径0.2cm。重量（1.1）g。半分欠。							
42	鉄　釘	最大長6.1cm、最大幅0.8cm、最大厚0.9cm。重量17.8g。完形。先端部屈曲。							
43	台　石？	最大長（7.2）cm、最大幅9.7cm、最大厚3.55cm。重量（395）g。閃緑岩。1/3欠。							

は２点のみ検出された。２は回転糸切り痕が残る。つまみは付かないタイプと思われる。坏は口径14cm、器高４cm、底径６cm前後のものが主体となる。10の底部内面と外面には３号住出土の墨書と同じ「畣」が描かれている。高台付椀は他の住居跡同様、器高に高低差がありそうである。皿は体部が緩やかに内湾するタイプ（26・30）とほぼ直線的なタイプ（27～29）がある。器壁に違いはない。鉢は口縁部片１点のみである。甕は32の口径が43.6cmと大きい。肩部以下を欠く。33は鉢の可能性がある。土錘は６点検出された。いずれも中段の膨らみが小さいが、36のみ太めで短く、他は細身で小振りである。鉄釘は中段から先端部が屈曲している。完形品。43は扁平な形をしており、台石か。１/３を欠く。閃緑岩。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第５号住居跡（第20図）

第３区R・S－35・36グリッドに位置する。カマドを含む南東部と北西隅は調査区外にある。

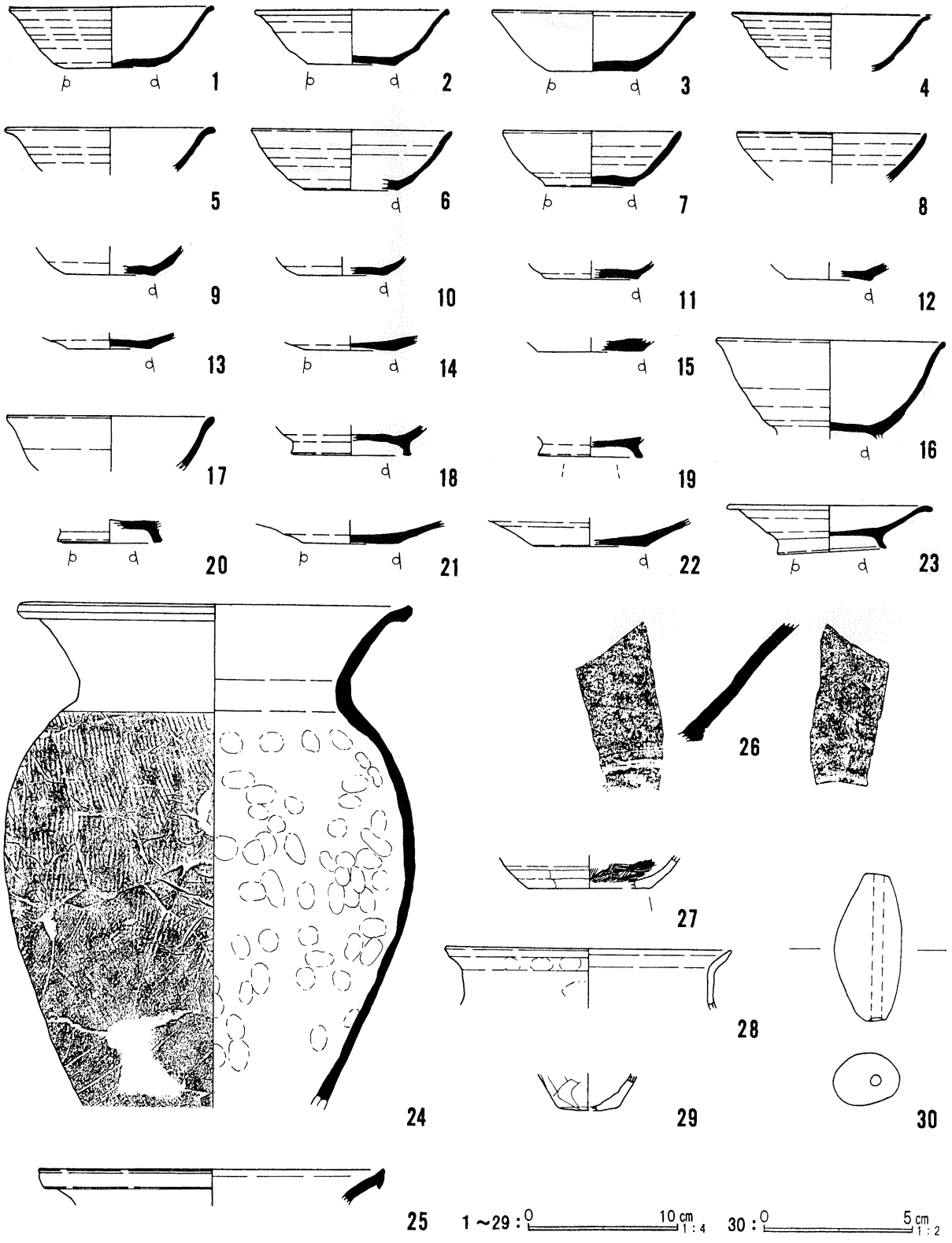


第20図　第５号住居跡

長軸4.24ｍ、短軸3.29ｍの長方形を呈する。主軸方向はN－86°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.63ｍを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。上～中層に混入物を多く含む。

カマドは東壁ほぼ中央に位置する。北側袖が検出されただけであり、その他は不明である。壁溝は東壁以外全周しており、北西隅と南西隅で途切れる。幅0.30m前後、深さは0.05ｍ前後である。ピット、貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第21図）は須恵器坏、高台付椀、皿、高台付皿、甕、土師器坏、甕、土錘がある。遺物は住居跡のほぼ全面及び全層から出土した。須恵器供膳具が圧倒的に多い。須恵器はほとんど末野産であるが11のみ南比企産である。供膳具の底部調整は19以外回転糸切り痕を残す。坏は口径13.5cm、器高４cm、底径６cm前後のものが主体となる。６～８は須恵器としたがロクロ土師器かもしれない。厚手で胎土が粉っぽく、器形や法量が他と異なる。高台付椀は完形品がないが、法量に差がありそうである。19のみ底部調整がヘラナデである。皿は体部から底部にかけての破片２点のみである。体部はほぼ直線的である。高台付皿は１点のみである。体部はほぼ直線的である。甕のうち、24は口縁部の大半と底部を欠くが、全形を知りうる数少ない資料である。胴上部に最大径を持つ。肩部以下には縦・斜位方向に全面タタキが施されている。また内面には多数の指頭圧痕がみられた。土師器坏は底部片１点のみである。外面は横位のヘラ削り、内面には横・斜位の細かいミガキと黒色処理が施されている。高台部は付かない。甕は口縁部と底部の破片のみである。28は「コ」の字状を呈する。外面は指頭圧痕のみである。土



第21図　第５号住居跡出土遺物

錘は１点のみ検出された。太めで中段の膨らみが大きい。完形品。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀末～10世紀初頭と思われる。

第７表　第５号住居跡出土遺物観察表

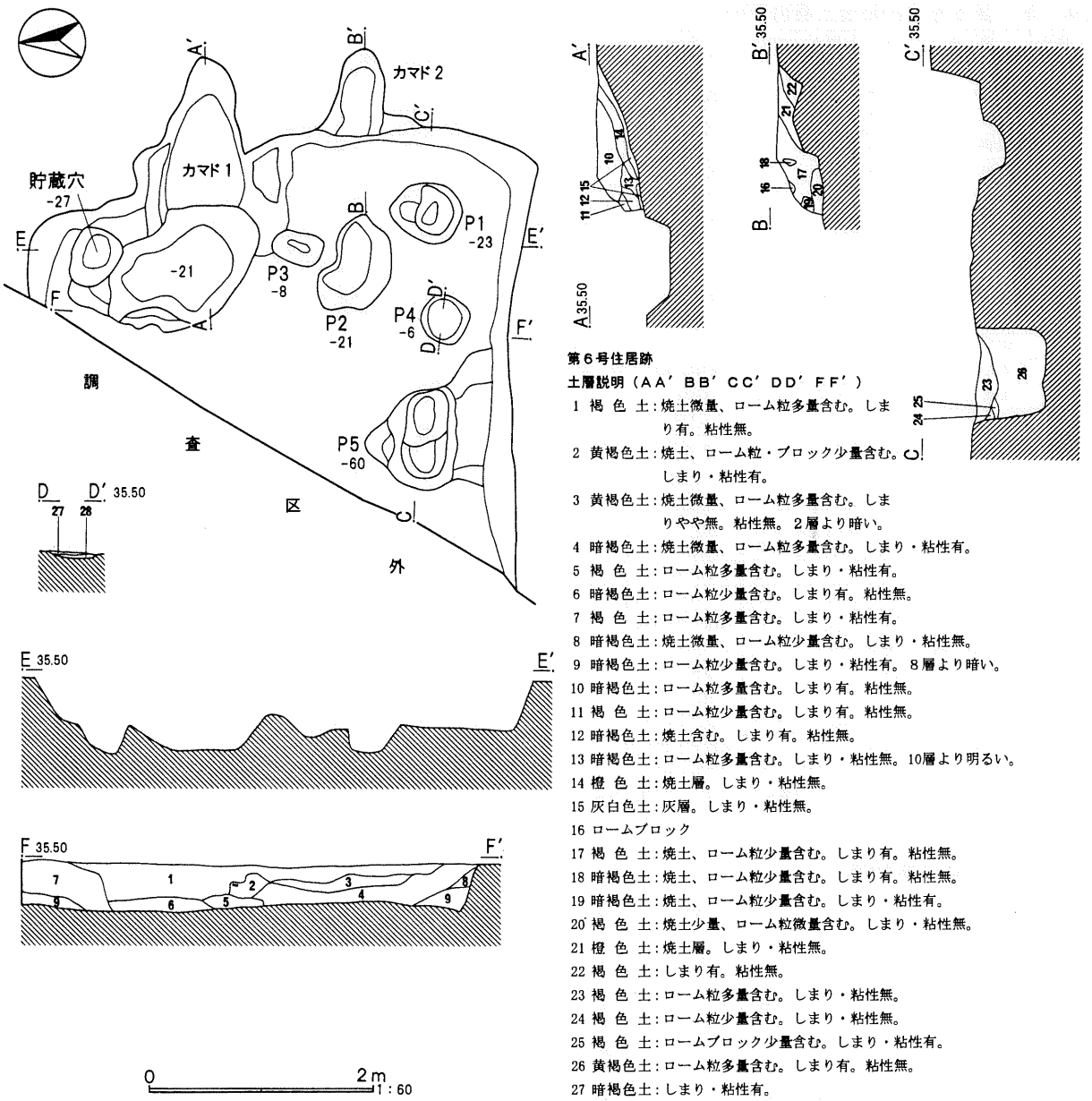
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	13.7	4.0	6.1	BDMN	にぶい黄色	C	95%	末野産？
2	須恵器　坏	(13.0)	3.7	6.0	ABDGHKLN	灰黄色	C	55%	末野産。
3	須恵器　坏	(13.7)	4.0	5.8	AEGHL	にぶい橙色	C	60%	末野産。酸化焔焼成。
4	須恵器　坏	(13.4)	(3.7)	－	ABHL	灰白色	B	20%	末野産。
5	須恵器　坏	(14.1)	(3.0)	－	ABGHLN	灰色	B	15%	末野産。
6	須恵器　坏	(13.4)	4.0	(6.3)	BEGHN	暗灰色	B	45%	ロクロ土師器の可能性有。
7	須恵器　坏	12.0	3.7	6.0	ABDGHK	にぶい黄褐色	B	100%	ロクロ土師器の可能性有。
8	須恵器　坏	(12.7)	(3.2)	－	ABDHKN	灰黄褐色	B	30%	ロクロ土師器の可能性有。
9	須恵器　坏	－	(2.0)	(6.0)	ABKL	黄灰色	B	40%	末野産。
10	須恵器　坏	－	(1.2)	(5.9)	ABCGHL	淡黄褐色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
11	須恵器　坏	－	(1.2)	(6.2)	ABFN	灰色	A	35%	南比企産。
12	須恵器　坏	－	(1.2)	(5.9)	ABDHL	灰色	B	40%	末野産。
13	須恵器　坏	－	(1.1)	(5.6)	ABDGKN	灰褐色	C	30%	末野産？酸化焔焼成。
14	須恵器　坏	－	(1.0)	(6.0)	ABHLN	灰色	B	40%	末野産。
15	須恵器　坏	－	(0.9)	(7.15)	ABHN	灰色	A	20%	末野産？
16	須恵器高台椀	15.5	(6.5)	－	ABGHL	にぶい黄色	C	90%	末野産。
17	須恵器高台椀	(14.0)	(3.6)	－	ACDGH	浅黄色	C	15%	末野産？
18	須恵器高台椀	－	(2.0)	(8.1)	ABHL	黄灰色	B	30%	末野産。
19	須恵器高台椀	－	(1.4)	(7.0)	ABDGHL	灰色	C	40%	末野産。
20	須恵器高台椀	－	(1.5)	7.0	ABGL	灰色	A	50%	末野産。
21	須恵器　皿	－	(1.6)	6.6	ABGKL	灰色	A	50%	末野産。
22	須恵器　皿	－	(1.9)	(7.5)	ABL	灰白色	B	30%	末野産。
23	須恵器高台皿	13.9	3.2	7.3	ABCGHLMN	黄灰色	C	70%	末野産。
24	須恵器　甕	(26.3)	(33.7)	－	AGL	灰色	A	40%	末野産。
25	須恵器　甕	(23.2)	(2.3)	－	ABHKL	灰色	A	10%	末野産。
26	須恵器　甕	－	－	－	ABDLN	灰色	A	胴下部片	末野産。
27	土師器　坏	－	(2.2)	(8.2)	ACGHK	灰色	A	10%	内面黒色処理、ミガキ。
28	土師器　甕	(19.2)	(3.9)	－	ABDGHJKM	にぶい黄橙色	A	10%	
29	土師器　甕	－	(2.5)	(4.0)	ABDGHKM	暗褐色	A	30%	
30	土　錘	最大長4.9cm、最大径2.25cm、孔径0.35cm。重量16.9ｇ。完形。							

第６号住居跡（第22図）

第３区S・T－34・35グリッドに位置する。北西部は調査区外にあるため規模等は不明であるが、南北軸は4.39ｍを測る。主軸方向はN－93°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.43ｍを測る。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土はややランダムな層位であるが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。上～中層には焼土がみられた。

カマドは東壁に２つ設けられている。北寄りがカマド１、南寄りがカマド２である。新旧関係は前者が後者より新しい。カマド１は地山掘り残しの袖部が確認されたが両袖とも短い。内側は一部被熱していた。焚口部から燃焼部の幅は0.7ｍ前後であり、煙道部は先端で0.29ｍを測る。壁外への張り出しは0.98ｍと短く、焚口部から煙道部先端までは緩やかに立ち上がる。覆土に天井部崩落土は確認できなかったが、下層には焼土層や灰層が帯状に確認された。また、カマド１前からは土坑状の掘り込みが確認された。カマド１との位置関係からみてカマド２段階に伴う床下土坑と思われる。長軸1.54ｍ、短軸0.95ｍ、床面からの深さ0.21ｍを測り、いびつな楕円形を呈する。カマド２は煙道部のみである。壁外へは0.74ｍと短い。煙道部の幅は0.45ｍ前後を測るが、先端部で0.2ｍにすぼまる。床面と煙道部の境には高低差0.13㎝の段が設けられており、煙道部はやや凹凸を持ちつつ先端で鋭角に立ち上がる。覆土は壁外で焼土層と掘り方と思われる22層が確認されたにとどまる。カマド１北脇には貯蔵穴が設けられている。径0.54×0.43ｍ、深さ0.27ｍを測り、不整円形を呈する。

ピットはカマド２前や南壁沿いから５つ検出された。ピット１はカマド２に伴う貯蔵穴の可能性があ



第6号住居跡

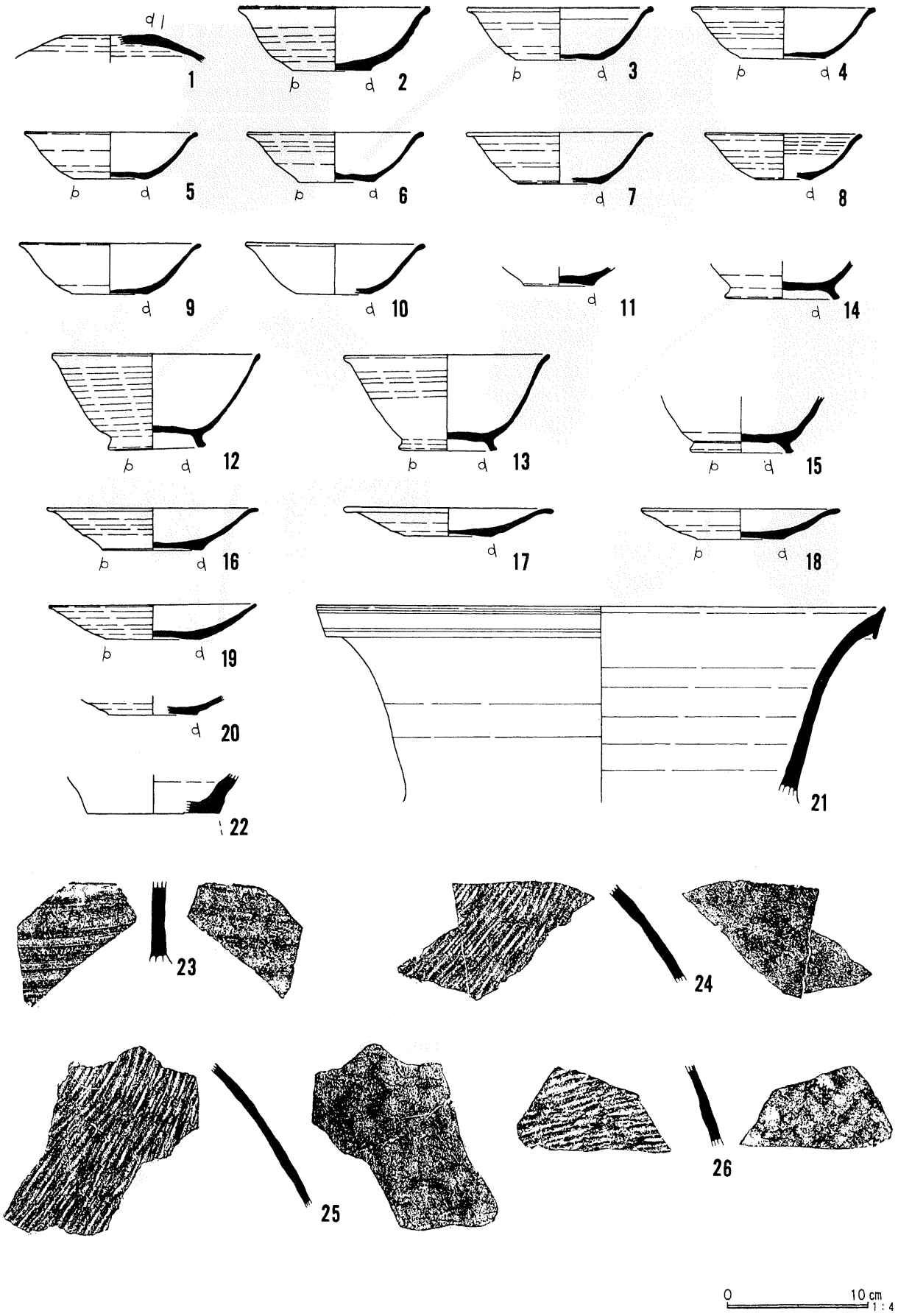
土層説明（AA′ BB′ CC′ DD′ FF′）

1 褐 色 土：焼土微量、ローム粒多量含む。しまり有。粘性無。
2 黄褐色土：焼土、ローム粒・ブロック少量含む。しまり・粘性有。
3 黄褐色土：焼土微量、ローム粒多量含む。しまりやや無。粘性無。2層より暗い。
4 暗褐色土：焼土微量、ローム粒多量含む。しまり・粘性有。
5 褐 色 土：ローム粒多量含む。しまり・粘性有。
6 暗褐色土：ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。
7 褐 色 土：ローム粒多量含む。しまり・粘性有。
8 暗褐色土：焼土微量、ローム粒少量含む。しまり・粘性無。
9 暗褐色土：ローム粒少量含む。しまり・粘性有。8層より暗い。
10 暗褐色土：ローム粒多量含む。しまり有。粘性無。
11 褐 色 土：ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。
12 暗褐色土：焼土含む。しまり有。粘性無。
13 暗褐色土：ローム粒多量含む。しまり・粘性無。10層より明るい。
14 橙 色 土：焼土層。しまり・粘性無。
15 灰白色土：灰層。しまり・粘性無。
16 ロームブロック
17 褐 色 土：焼土、ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。
18 暗褐色土：焼土、ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。
19 暗褐色土：焼土、ローム粒少量含む。しまり・粘性有。
20 褐 色 土：焼土少量、ローム粒微量含む。しまり・粘性無。
21 橙 色 土：焼土層。しまり・粘性無。
22 褐 色 土：しまり有。粘性無。
23 褐 色 土：ローム粒多量含む。しまり・粘性無。
24 褐 色 土：ローム粒少量含む。しまり・粘性無。
25 褐 色 土：ロームブロック少量含む。しまり・粘性有。
26 黄褐色土：ローム粒多量含む。しまり有。粘性無。
27 暗褐色土：しまり・粘性有。
28 橙 色 土：焼土層。しまり無。粘性有。

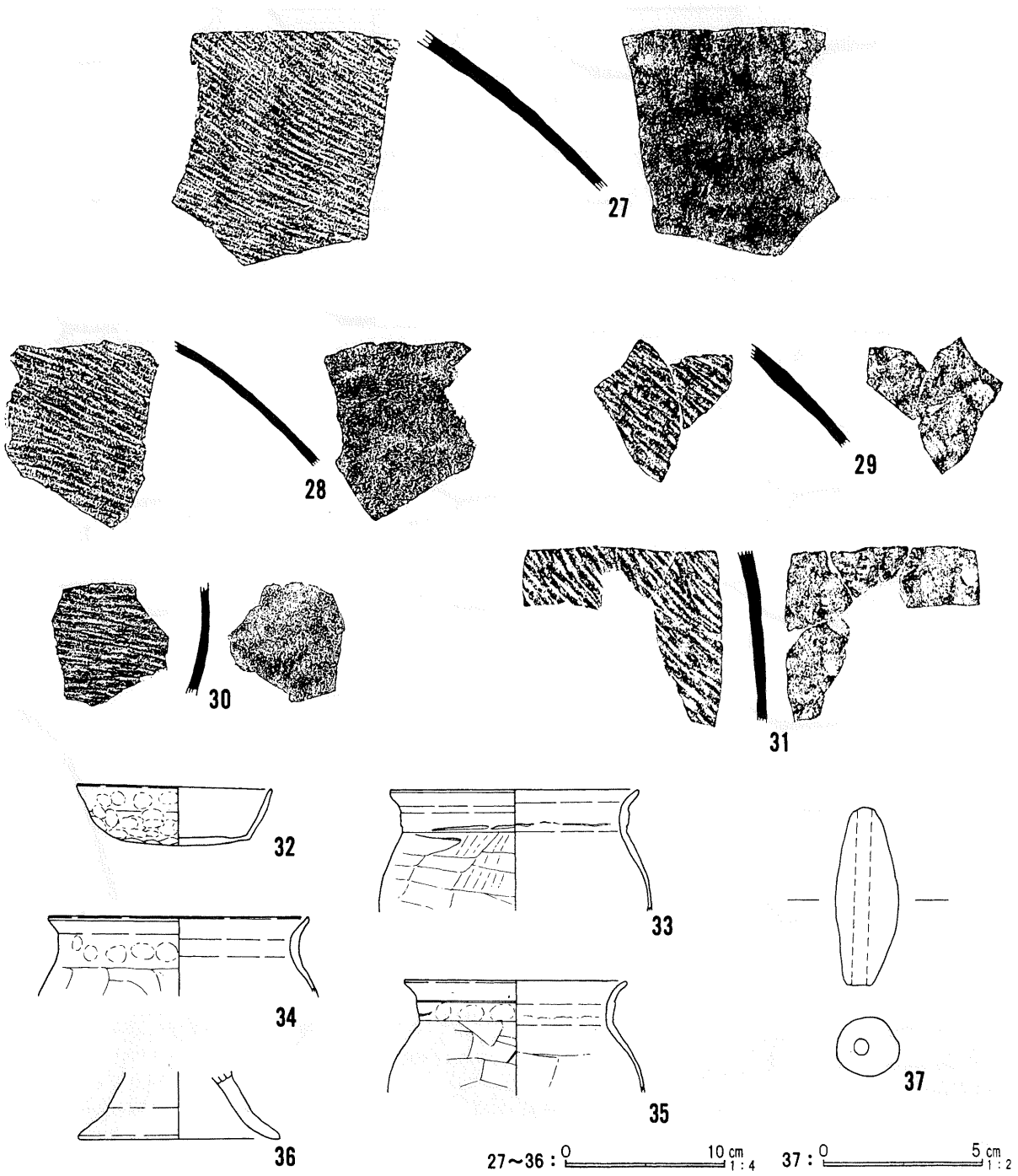
第22図　第6号住居跡

る。ピット2・3はその位置から本住居跡に伴う柱穴とは考えにくく、住居南側にあるピット群と関連するものかもしれない。ピット4は深さが0.06mと浅く、覆土下層には焼土層がみられた。用途は不明である。ピット5は深さが0.6mと深く、他の住居跡にもほぼ同位置にピットが存在することから本住居跡に伴うものと判断した。柱穴かどうかは不明である。壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第23・24図）は須恵器蓋、坏、高台付椀、皿、甕、土師器坏、甕、台付甕、土錘がある。遺物は住居跡のほぼ全面及び全層から検出されたが、カマド周辺からの検出が多い。また他の住居跡同様、須恵器供膳具の検出が多い。須恵器は末野産がほとんどを占める。供膳具の底部調整はすべて回転糸切り痕を残す。蓋は1点のみ検出された。回転糸切り痕を残しており、つまみは付かないと思われる。坏は口径13cm、器高4cm、底径6cm前後のものが主体となる。高台付椀は口径15cm、器高7cm、底径7



第23図　第６号住居跡出土遺物（１）



第24図　第６号住居跡出土遺物（２）

cm前後のものが主体となる。皿は19のみ口縁部が外反せず、直線的である。甕は21の口径が41.0cmと大きい。肩部以下を欠く。22は底部調整が回転ヘラナデである。23以下の破片のうち、23・25のみ南比企産である。頸部から胴上部にかけての破片が多い。土師器坏は１点のみである。口縁部横ナデ後、外面全面に指オサエが施されている。底部はヘラ削りである。甕は口縁部が「コ」の字状を呈する。口縁部内外面に輪積痕や指頭圧痕、ヘラによる刻み等がみられる。台付甕は台部片のみである。土錘は１点のみ検出された。太めで中段の膨らみが大きい。完形品。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第８表　第６号住居跡出土遺物観察表

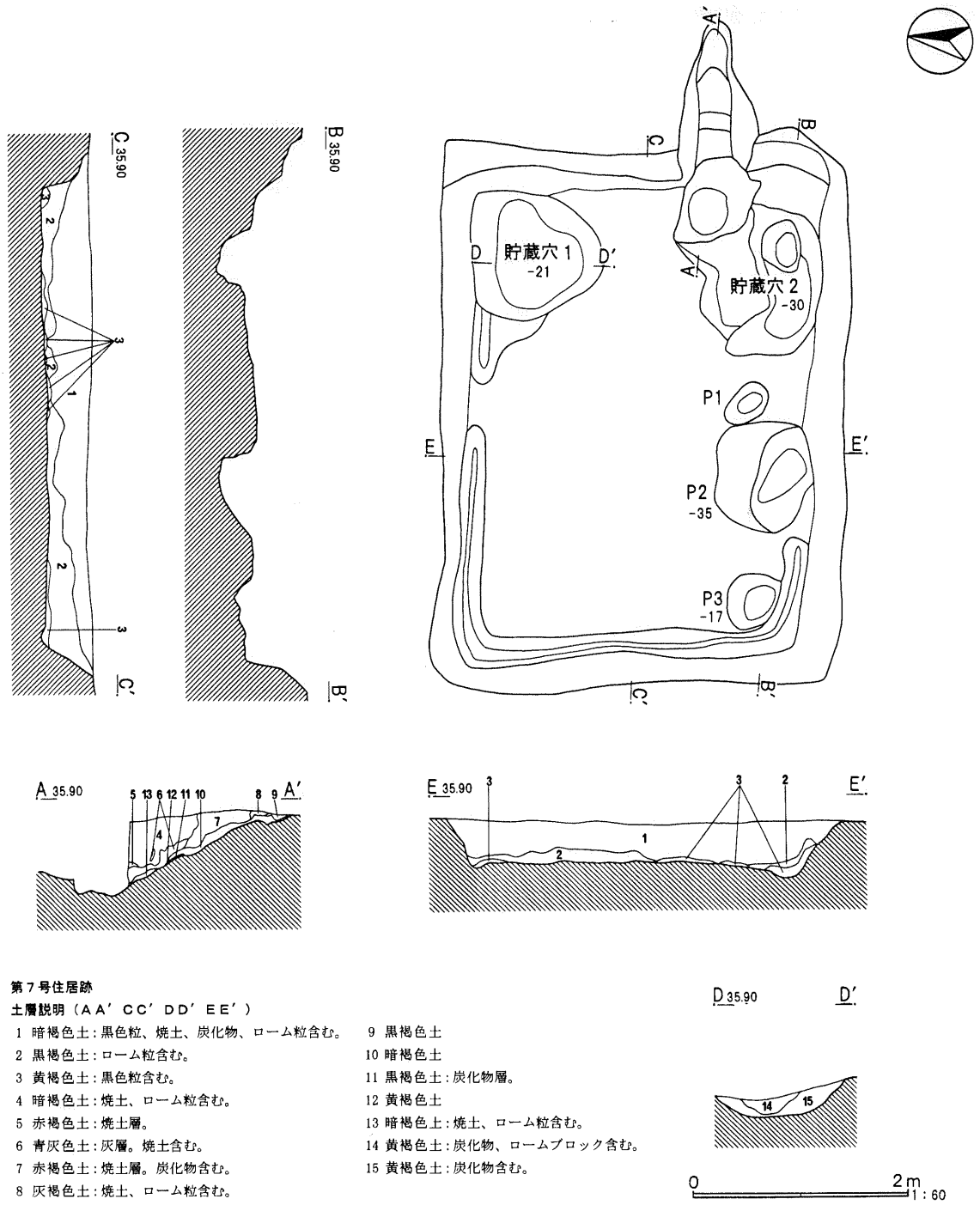
番号	器　種	口径	器高	底径	土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	－	(1.9)	(7.2)	ABDHLM	灰黄色	B	45%	末野産。
2	須恵器　坏	13.8	4.5	5.6	ABGHL	灰白色	B	90%	末野産。
3	須恵器　坏	(13.4)	3.7	6.3	ABH	灰白色	B	50%	末野産？
4	須恵器　坏	13.2	3.65	6.2	ABGHK	淡黄褐色	C	70%	末野産？
5	須恵器　坏	(12.4)	3.3	5.2	ABGLN	黄灰色	B	30%	末野産。
6	須恵器　坏	12.6	3.5	5.6	ABHLN	浅黄色	B	100%	末野産。
7	須恵器　坏	(13.4)	3.6	(6.0)	ABG	灰白色	C	15%	末野産？
8	須恵器　坏	(11.3)	3.3	(4.0)	ABGHN	黄灰色	B	25%	末野産？
9	須恵器　坏	(13.0)	3.6	(5.5)	ABCGHL	暗褐色	B	25%	末野産。
10	須恵器　坏	(12.8)	3.6	(5.2)	ABHL	灰色	A	25%	末野産。
11	須恵器　坏	－	(1.3)	(5.0)	ABCKL	褐灰色	B	25%	末野産。
12	須恵器高台椀	14.9	6.9	7.0	ABHLN	黄灰色	B	95%	末野産。
13	須恵器高台椀	14.8	6.9	7.1	ABDEHLN	褐灰色	B	95%	末野産。
14	須恵器高台椀	－	(2.7)	(8.2)	ABDEGHLN	灰白色	B	35%	末野産。
15	須恵器高台椀	－	(4.0)	7.4	ABGHLN	黒褐色	B	50%	末野産。
16	須恵器　皿	(15.2)	3.0	7.2	BGHL	灰白色	B	40%	末野産。
17	須恵器　皿	(15.1)	2.0	(6.4)	ABGHLMN	褐灰色	C	30%	末野産。
18	須恵器　皿	(14.2)	2.2	6.2	AHLM	灰色	A	40%	末野産。
19	須恵器　皿	14.8	2.6	6.8	AGLN	灰色	B	95%	末野産。
20	須恵器　皿	－	(1.4)	(6.4)	ABGHMN	橙色	B	30%	末野産？酸化焔焼成。
21	須恵器　甕	(41.0)	(13.9)	－	ABHLN	灰色	A	20%	末野産。
22	須恵器　甕	－	(2.8)	(9.4)	ABL	灰白色	A	10%	末野産。
23	須恵器　甕	－	－	－	ABGFN	灰色	B	頸部片	南比企産。
24	須恵器　甕	－	－	－	ABGLN	灰色	A	肩部片	末野産。
25	須恵器　甕	－	－	－	ABDFGHN	灰色	B	肩部片	南比企産。
26	須恵器　甕	－	－	－	ABGL	灰褐色	B	胴上部片	末野産。
27	須恵器　甕	－	－	－	ABGHL	灰色	B	肩部片	末野産。
28	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	A	肩部片	末野産。
29	須恵器　甕	－	－	－	ABDHLN	灰色	B	肩部片	末野産。
30	須恵器　甕	－	－	－	ABGHL	黄灰色	B	胴部片	末野産。
31	須恵器　甕	－	－	－	ABGHLN	灰色	B	胴部片	末野産。
32	土師器　坏	12.2	3.7	8.4	ABHKNM	にぶい赤褐色	A	75%	
33	土師器　甕	(15.6)	(7.5)	－	ABHJKMN	にぶい赤褐色	B	25%	
34	土師器　甕	(16.2)	(5.0)	－	ABGHKM	橙色	A	30%	
35	土師器　甕	(13.9)	(7.0)	－	ABGHKJM	赤褐色	B	45%	
36	土師器台付甕	－	(4.2)	(12.6)	ABHM	明赤褐色	B	20%	
37	土　錘	最大長5.6cm、最大径2.0cm、孔径0.5cm。重量18.0g。完形。							

第７号住居跡（第25図）

第１区C－33・34グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

長軸5.2m、短軸3.76mの長方形を呈する。主軸方向はN－86°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.48mを測る。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土は上層が厚く堆積しており、炭化物や焼土を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央からやや南寄りに位置する。袖部及び袖石はない。壁外へは1.17m張り出す。焚口部から燃焼部はピット状を呈する。径0.78×0.66m、床面からの深さ0.18mを測る。煙道部の幅は燃焼部との境で0.74m程、真中で0.37m、先端で0.23mを測り、階段状を呈する。覆土に天井部崩落土は確認できなかったが、焼土層や灰層、炭化物層が確認された。カマド両脇には貯蔵穴が２つ設けられている。カマド北側にある貯蔵穴１は径1.21×1.18m、深さ0.21mを測り、不整円形を呈する。覆土に炭化物を多く含んでいた。貯蔵穴２はカマド南側に位置する。径0.48×0.38mのピット状の掘り込みが貯蔵穴本体であって、周辺の浅い掘り込みは住居跡の掘り方と思われる。床面からの深さは0.3mである。壁溝は貯蔵穴１西側の北壁から西壁を通って南東隅付近まで巡る。北壁中央は途切れる。幅0.19～0.36m、



第7号住居跡

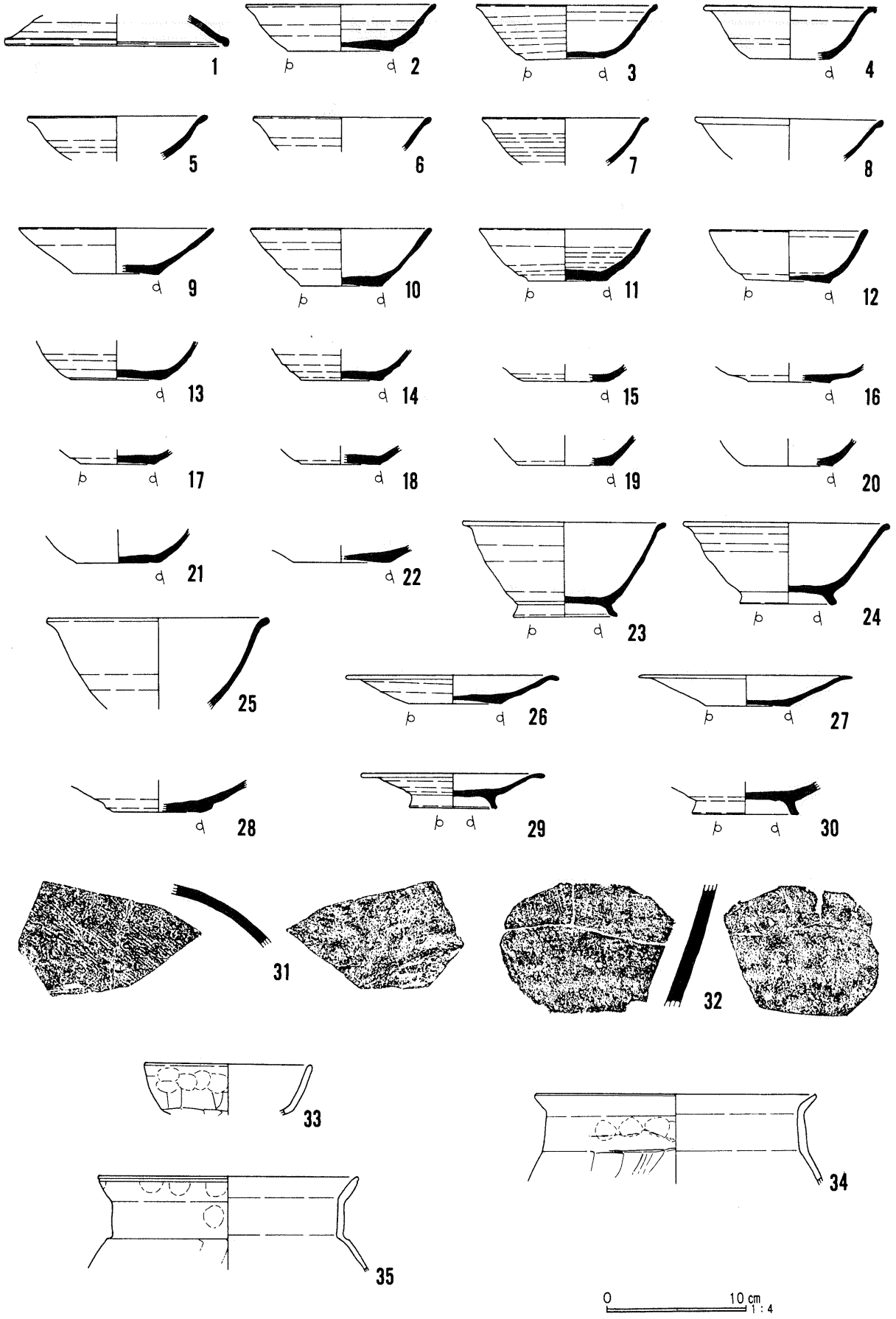
土層説明（AA′ CC′ DD′ EE′）

1 暗褐色土：黒色粒、焼土、炭化物、ローム粒含む。
2 黒褐色土：ローム粒含む。
3 黄褐色土：黒色粒含む。
4 暗褐色土：焼土、ローム粒含む。
5 赤褐色土：焼土層。
6 青灰色土：灰層。焼土含む。
7 赤褐色土：焼土層。炭化物含む。
8 灰褐色土：焼土、ローム粒含む。
9 黒褐色土
10 暗褐色土
11 黒褐色土：炭化物層。
12 黄褐色土
13 暗褐色土：焼土、ローム粒含む。
14 黄褐色土：炭化物、ロームブロック含む。
15 黄褐色土：炭化物含む。

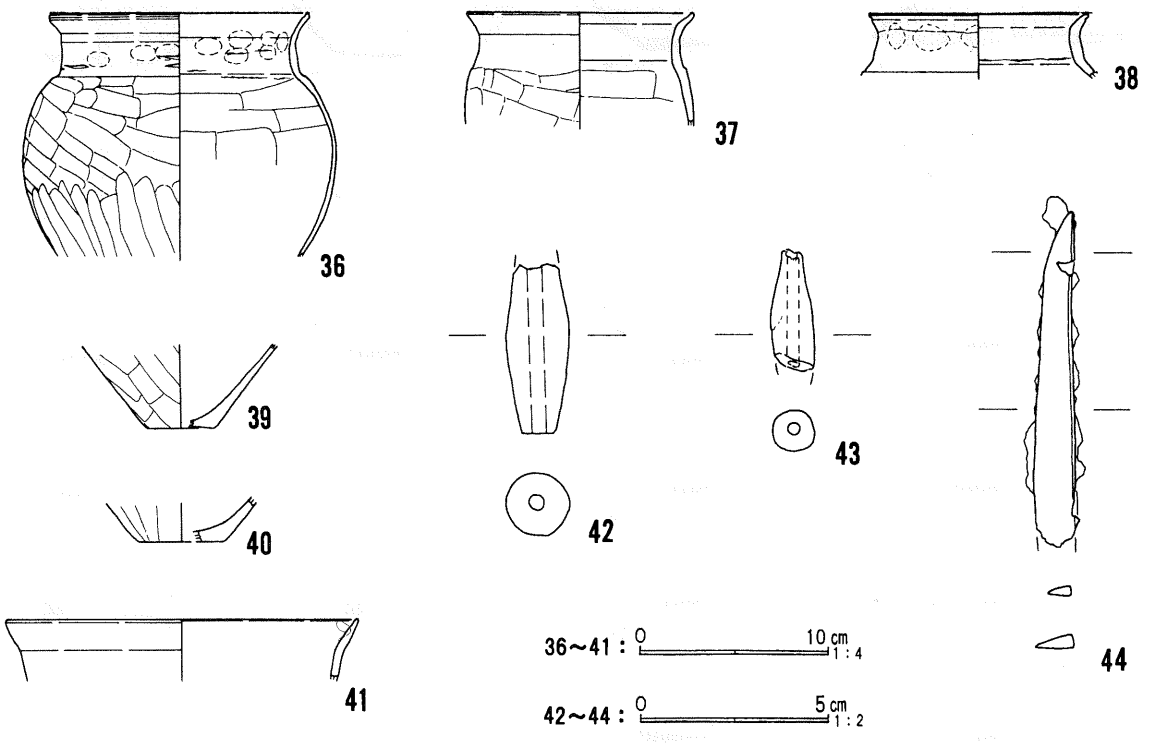
第25図　第7号住居跡

深さは0.03m前後を測る。ピットは南壁沿いから3つ東西方向に並んで検出された。ピットが検出された他の住居跡同様、南側から検出されたことから本住居跡に伴うものと判断した。柱穴かどうかは不明である。このうちピット2は径1.04×0.88m、深さ0.37mを測り、他のものと比べて大きい。

出土遺物（第26・27図）は須恵器蓋、坏、高台付椀、皿、高台付皿、甕、土師器坏、甕、甑、土錘、刀子がある。遺物は住居跡ほぼ全面及び全層から検出されたが、貯蔵穴2周辺からの出土が多かった。他の住居跡同様、須恵器供膳具の検出が多い。須恵器は末野産かその可能性のあるものがほとんどであ



第26図　第７号住居跡出土遺物（１）



第27図　第７号住居跡出土遺物（２）

第９表　第７号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(16.0)	(2.3)	－	ADGL	暗灰色	B	5%	末野産。
2	須恵器　坏	(13.6)	3.4	7.5	BGH	灰白色	A	75%	産地不明。
3	須恵器　坏	13.0	3.9	5.6	ABGHN	黄褐色	B	70%	末野産？
4	須恵器　坏	(12.4)	3.7	(5.7)	ABHMN	灰黄色	A	20%	末野産？
5	須恵器　坏	(12.9)	(3.1)	－	ABHLN	灰色	B	20%	末野産。
6	須恵器　坏	(12.7)	(2.3)	－	ABHLN	灰色	A	25%	末野産。
7	須恵器　坏	(12.0)	(3.3)	－	ABGHL	暗灰色	B	15%	末野産。
8	須恵器　坏	(13.5)	(2.9)	－	ABCHN	灰褐色	B	80%	末野産？
9	須恵器　坏	(14.0)	3.3	(6.0)	BDLMN	黄灰色	C	40%	ロクロ土師器の可能性有。
10	須恵器　坏	(13.0)	4.1	5.6	ABDGHKJN	灰色	B	50%	ロクロ土師器の可能性有。
11	須恵器　坏	12.3	3.7	5.6	ABHKN	灰白色	A	90%	ロクロ土師器の可能性有。
12	須恵器　坏	11.4	3.7	6.0	ABHKMN	灰黄色	A	90%	ロクロ土師器の可能性有。
13	須恵器　坏	－	(2.8)	(6.4)	ABCGHL	灰白色	B	30%	末野産。
14	須恵器　坏	－	(2.2)	(6.1)	ABDGM	にぶい黄橙色	C	40%	末野産？
15	須恵器　坏	－	(1.2)	(6.0)	ADGHL	灰黄色	C	25%	末野産。
16	須恵器　坏	－	(1.3)	(5.8)	ABGLN	灰色	A	25%	末野産。
17	須恵器　坏	－	(1.0)	(5.2)	ABHLN	黄灰色	B	45%	末野産。
18	須恵器　坏	－	(1.3)	(5.7)	ABHLN	灰黄色	B	45%	末野産。
19	須恵器　坏	－	(2.1)	(6.8)	ABGL	黄灰色	B	25%	末野産。
20	須恵器　坏	－	(1.9)	(6.3)	ACGHL	暗灰色	B	25%	末野産。
21	須恵器　坏	－	(2.3)	(6.0)	ADGHLN	灰黄褐色	C	25%	末野産。
22	須恵器　坏	－	(1.4)	(6.9)	AGLN	灰色	A	25%	末野産。
23	須恵器高台椀	(14.6)	6.8	7.5	ABLN	黄灰色	B	80%	末野産。
24	須恵器高台椀	14.8	5.8	6.9	ABGLN	暗灰色	B	70%	末野産。
25	須恵器高台椀	(16.0)	(6.5)	－	ABDHMN	にぶい黄橙色	B	20%	末野産？
26	須恵器　皿	15.3	2.0	6.6	ABL	灰色	A	80%	末野産。
27	須恵器　皿	15.3	2.2	5.9	ABEGHLN	にぶい赤褐色	C	100%	末野産。
28	須恵器　皿	－	(2.3)	(7.6)	ABGLN	灰白色	B	25%	末野産。
29	須恵器高台皿	(13.2)	2.5	(6.3)	ABLN	黒灰色	B	45%	末野産。
30	須恵器高台皿	－	(2.3)	7.6	ABGHLM	灰黄	A	95%	末野産。
31	須恵器　甕	－	－	－	AHLN	灰色	A	肩部片	末野産。
32	須恵器　甕	－	－	－	ABCEGHL	灰白色	C	胴下部片	末野産。

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
33	土師器　坏	(12.0)	(3.6)	(9.4)	ABGHJK	明褐色	B	20%	
34	土師器　甕	(20.2)	(6.4)	－	ABGHJK	橙色	A	25%	
35	土師器　甕	(18.6)	(6.7)	－	ABGHJKM	にぶい赤褐色	B	45%	
36	土師器　甕	13.7	(12.6)	－	ABDGHK	黒褐色	A	90%	
37	土師器　甕	(12.0)	(5.9)	－	ABGHKMN	暗褐色	B	25%	
38	土師器　甕	(11.6)	(3.4)	－	AEGHJ	橙色	A	30%	
39	土師器　甕	－	(4.4)	(3.6)	ABGHKM	にぶい赤褐色	A	40%	
40	土師器　甕	－	(2.4)	(4.4)	ABHK	黄褐色	B	25%	
41	土師器　甑	(18.6)	(3.2)	－	ABEHKLM	橙色	A	20%	
42	土　錘	最大長（4.5）cm、最大径1.65cm、孔径0.4cm。重量（11.3）g。片端欠。							
43	土　錘	最大長（3.3）cm、最大径1.1cm、孔径0.35cm。重量（3.4）g。片端欠。							
44	刀　子	最大長（8.9）cm、最大幅1.0cm、最大厚0.35cm。重量（9.5）g。柄部欠。							

る。供膳具の底部調整はすべて回転糸切り痕を残す。蓋は１点のみ検出された。椀蓋か。坏は口径13cm、器高3.5cm、底径６cm前後のものが主体となる。２は器高が低く、胎土に黒色粒を多量含む。産地は不明であるが搬入品と思われる。９～12は須恵器としたがロクロ土師器かもしれない。厚手で胎土が粉っぽく、器形や法量が他と異なる。高台付椀は３点のみである。法量に差がある。皿・高台付皿は体部が緩やかに内湾するもの（26・29）と直線的なもの（27）がある。26・27・29は器壁が薄く、28・30は厚い。甕は肩部片と胴下部片の２点のみ検出された。土師器坏は１点のみである。口縁部は横ナデ、体部外面は横位のヘラ削り、口縁部と体部の境には指オサエが施されている。底部はヘラ削りである。甕は口縁部が「コ」の字状を呈し、内外面に輪積痕や指頭圧痕がみられる。37・38は台付になる可能性がある。41は甑の口縁部片。１点のみ検出された。土錘は２点検出された。ともに片端を欠く。42は太め、43は細身である。ともに中段の膨らみが小さい。刀子は刃部先端から柄に近い部分のみ検出された。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第８号住居跡（第28図）

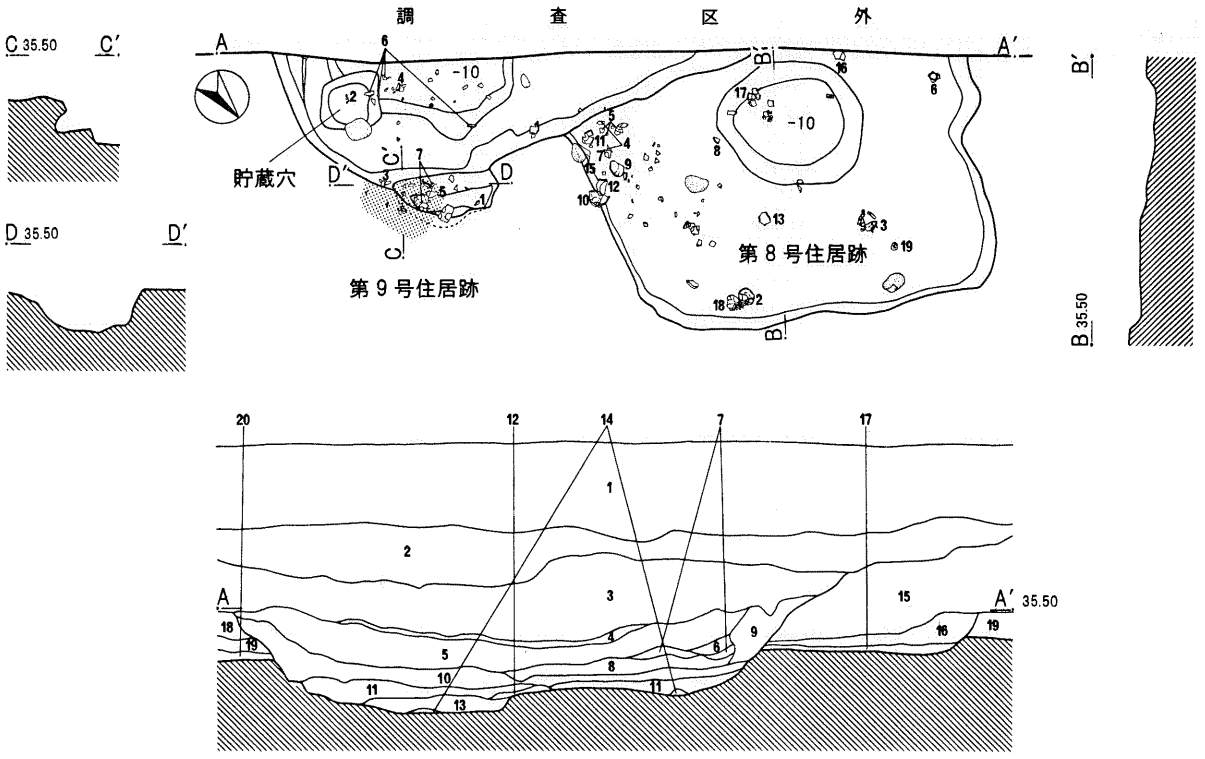
第６区S・T－46・47グリッドに位置する。南東部を９号住居跡に切られ、南西部は調査区外にある。

正確な規模等は不明であるが、東西軸は3.25ｍを測る。南北軸方向はN－122°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.1ｍと浅いが、調査区境での土層断面では0.34ｍ前後の掘り込みであったことが確認された。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土は褐色系の２層（16・17層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。

カマド、柱穴、貯蔵穴は確認されなかったが、調査区との境付近から床下土坑と思われる掘り込みが検出された。長軸1.16ｍ、短軸0.99ｍで、床面からの深さは0.1ｍと浅い。不整円形を呈する。

出土遺物（第29図）は須恵器坏、高台付椀、皿、高台付皿、鉢、甕、土師器坏、軽石がある。東壁沿いからの検出が多く、やはり須恵器供膳具が多い。須恵器はほとんど末野産である。供膳具の底部調整はすべて回転糸切り痕を残す。坏は口径13.5cm、器高3.5cm、底径６cm前後のものが主体となる。高台付椀は口径14.5cm、底径7.5cm前後のものが主体となるが器高は高低差がある。皿・高台付皿は１点ずつ検出された。ともに体部は緩やかに内湾する。鉢は口縁部片１点のみである。甕は肩部片と胴上部片２点のみである。土師器坏は２点検出された。17は口縁部が横ナデ、体部外面は指オサエ、18は外面全面に指オサエを施している。底部はともにヘラ削りである。なお、17は床下土坑からではなく床面直上から検出された。19は軽石。完形品。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。



第８・９号住居跡
土層説明（ＡＡ′）

1 表　土
2 褐 色 土：粘性有。
3 黄褐色土：褐色土含む。
4 黄褐色土：酸化鉄含む。粘性有。
5 黄褐色土：焼土微量含む。しまり・粘性有。
6 褐 色 土：焼土微量、ローム粒少量含む。
7 黄褐色土：粘性有。
8 黄褐色土：灰褐色粒含む。粘性有。
9 黄褐色土：褐色土含む。しまりやや無。
10 灰褐色土：酸化鉄、焼土含む。粘性有。
11 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック含む。
12 黄褐色土：粘性有。
13 褐 色 土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック多量含む。
14 黄褐色土：粘性有。
15 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒微量含む。
16 暗褐色土：ローム粒微量含む。
17 褐 色 土：ローム粒多量含む。
18 黄褐色土：焼土、炭化物、暗褐色ブロック含む。粘性有。
19 黒褐色土
20 黄褐色土

＝ 焼　土

0　2m
1：60

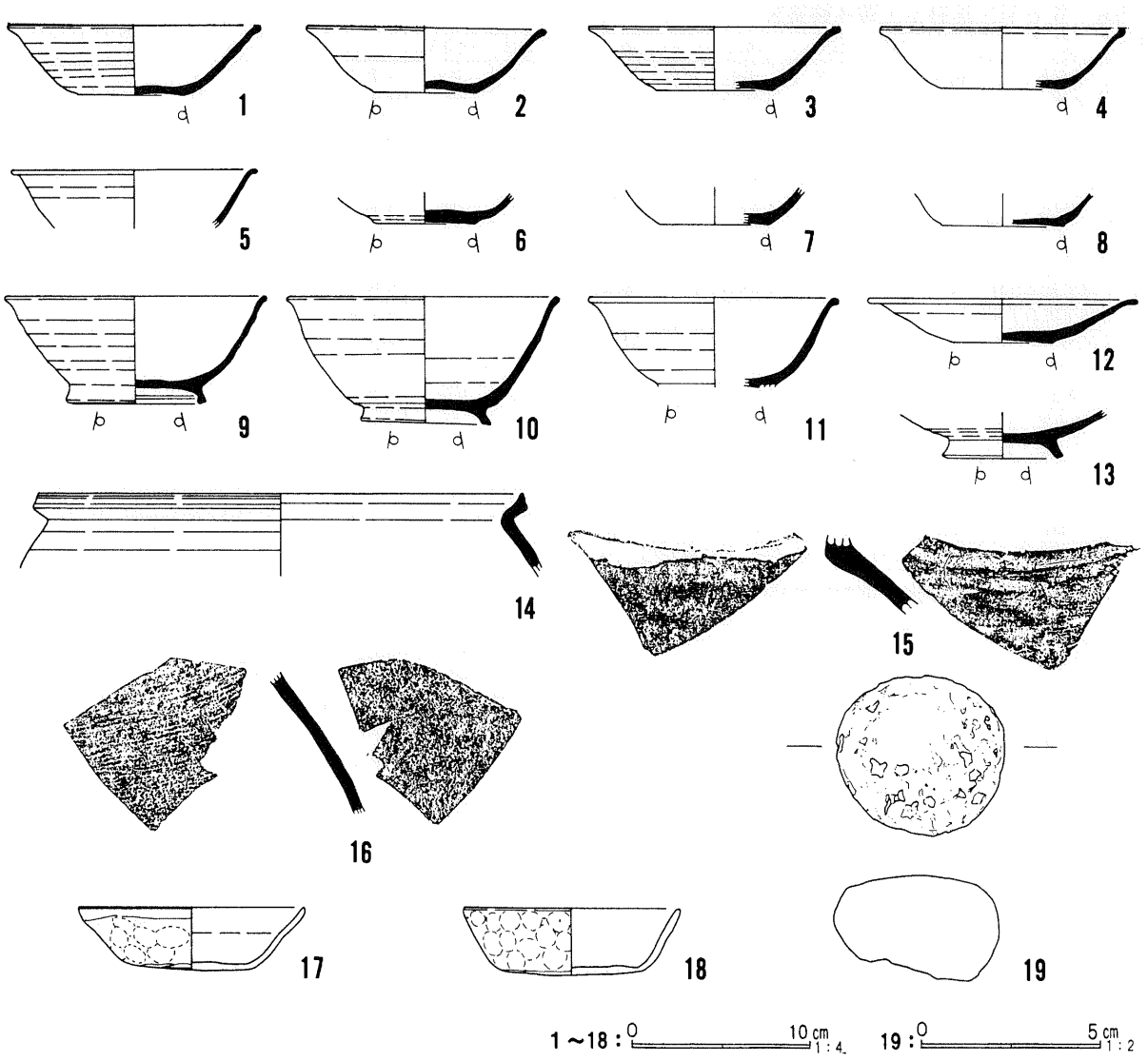
第28図　第８・９号住居跡

第９号住居跡（第28図）

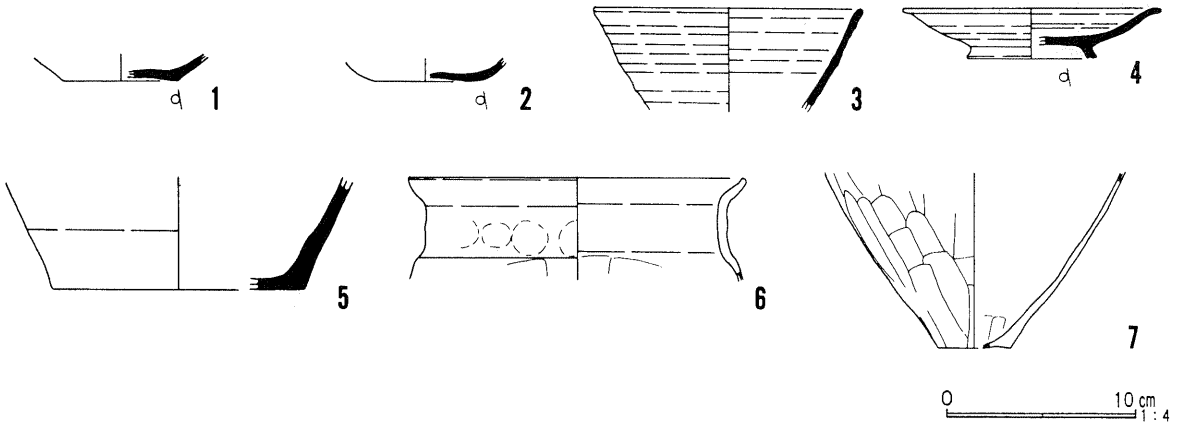
第６区Ｔ－46・47グリッドに位置する。南側大半が調査区外にあり、北西部では第８号住居跡を切っている。カマドを含む北東隅付近のみ検出された。

正確な規模等は不明である。主軸方向はN－20°－Eを指す。確認面からの深さは0.34ｍを測るが、調査区境の土層断面では0.7ｍ前後の掘り込みであったことが確認された。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。中～下層にかけて焼土や炭化物を含む傾向にあった。

カマドは北東隅からやや西側に位置する。覆土に多量の焼土を含むことや貯蔵穴と思われるピットとの位置関係からみてカマドと判断した。煙道部は確認面の関係から検出できず、焚口部から燃焼部のみ確認されたと思われる。よって、壁外への張り出しは0.35ｍと短く、張り出した先端が燃焼部と煙道部の境にある段であったと思われる。幅は焚口部で0.82ｍ、燃焼部奥で0.55ｍを測る。袖部及び袖石はない。焚口部から燃焼部までは床面との高低差0.11ｍの段があり、燃焼部奥はオーバーハングしている。



第29図　第８号住居跡出土遺物



第30図　第９号住居跡出土遺物

第10表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	14.0	3.8	5.8	ABHL	灰色	A	50%	末野産。
2	須恵器　坏	13.2	3.6	5.6	ACGLMN	灰黄褐色	C	90%	末野産。
3	須恵器　坏	(14.0)	3.5	(6.4)	AEGLM	にぶい褐色	C	30%	末野産。
4	須恵器　坏	(13.7)	3.3	(6.9)	ABGLN	灰色	B	20%	末野産。
5	須恵器　坏	(13.7)	(3.2)	－	ABLN	灰色	A	30%	末野産。
6	須恵器　坏	－	(1.7)	(5.8)	ABLN	褐灰色	B	80%	末野産。
7	須恵器　坏	－	(2.0)	(6.0)	ABEGHLN	にぶい赤褐色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
8	須恵器　坏	－	(1.8)	(6.8)	ABDGHM	灰黄色	C	30%	末野産？
9	須恵器高台椀	(14.6)	5.95	(7.7)	ABDGHLN	黄灰色	B	50%	末野産。
10	須恵器高台椀	15.2	7.1	7.2	ABHLN	灰色	A	80%	末野産。
11	須恵器高台椀	14.0	(5.0)	－	ABGHKLN	灰白色	B	60%	末野産。
12	須恵器　皿	(15.1)	2.4	(5.6)	ABHL	灰黄色	A	40%	末野産。
13	須恵器高台皿	－	(2.6)	6.8	ABGLMN	灰黄色	A	90%	末野産。
14	須恵器　鉢	(26.8)	(4.6)	－	ABCDGHM	にぶい黄橙色	C	10%	末野産？
15	須恵器　甕	－	－	－	ABGHL	灰色	B	肩部片	末野産。
16	須恵器　甕	－	－	－	AEGLN	赤灰色	B	胴上部片	末野産。
17	土師器　坏	12.6	3.6	7.0	ABHM	橙色	B	60%	
18	土師器　坏	(12.0)	4.2	(8.0)	BHJKM	橙色	A	70%	
19	軽　石	最大長4.5cm、最大幅4.7cm、最大厚2.8cm。重量28.0ｇ。完形。							

第11表　第９号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	－	(1.4)	(6.0)	ADEGHN	明赤褐色	C	20%	末野産？酸化焔焼成。
2	須恵器　坏	－	(1.2)	(6.0)	ABH	黄灰色	B	30%	末野産？
3	須恵器高台椀	(14.4)	(5.3)	－	ABCEGHLMN	明褐色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
4	須恵器高台皿	(13.7)	2.6	(6.9)	ABGHLN	灰白色	B	30%	末野産。
5	須恵器　甕	－	(5.9)	(13.4)	ABEGLN	灰色	A	15%	末野産。
6	土師器　甕	(17.9)	(5.4)	－	ABEN	明褐色	A	20%	
7	土師器　甕	－	(9.2)	(3.9)	ABDHJKM	黒褐色	A	30%	

覆土は図示できなかったが、前述のとおり焼土を多量含んでいた。カマド東脇には貯蔵穴が設けられている。径0.49×0.45ｍの方形を呈する。深さは不明である。またカマド前には床下土坑と思われる掘り込みが確認された。南側が調査区外にあるため詳細は不明であるが、東西軸は調査区との境で1.47ｍを測り、深さは0.1ｍと浅い。北東部で貯蔵穴と重複している。壁溝、ピットは確認されなかった。

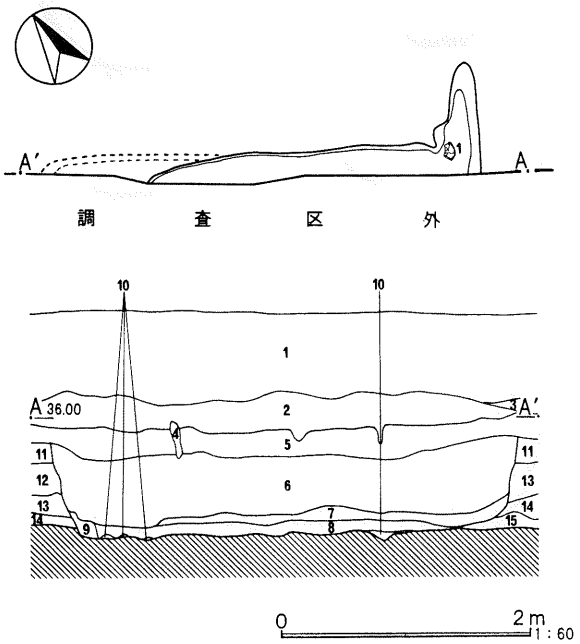
出土遺物（第30図）は須恵器坏、高台付椀、高台付皿、甕、土師器甕がある。カマド及び貯蔵穴周辺から出土した。須恵器はすべて末野産かその可能性のあるものである。供膳具の底部調整は回転糸切り痕を残す。坏は底部片のみ検出された。３は口縁部から体部にかけての破片。口縁部から体部にかけて直線的である。高台付皿は１点のみ検出された。５は甕の底部片。底部調整はヘラ削りである。土師器は甕のみ検出された。６は口縁部が「コ」の字状を呈する甕。口縁端部がやや受け口状を呈する。外面には指頭圧痕がみられた。７は胴下部から底部までの破片。器壁が薄い。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第10号住居跡（第31図）

第６区Ｕ－47・48グリッドに位置する。カマドと北壁が検出されただけで、大半が調査区外にある。

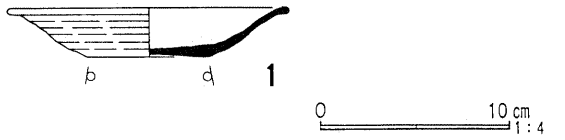
正確な規模等は不明である。主軸方向はN－34°－Eを指す。確認面からの深さは0.1ｍと浅いが、調査区境での土層断面では0.75ｍ前後の深い掘り込みであったことが確認された。また、北壁自体も確認面で検出したものより大きくなることが判明した。よって北壁は3.51ｍを測る。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土は上層が厚く堆積し、焼土や炭化物等を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。



第10号住居跡

土層説明（AA′）

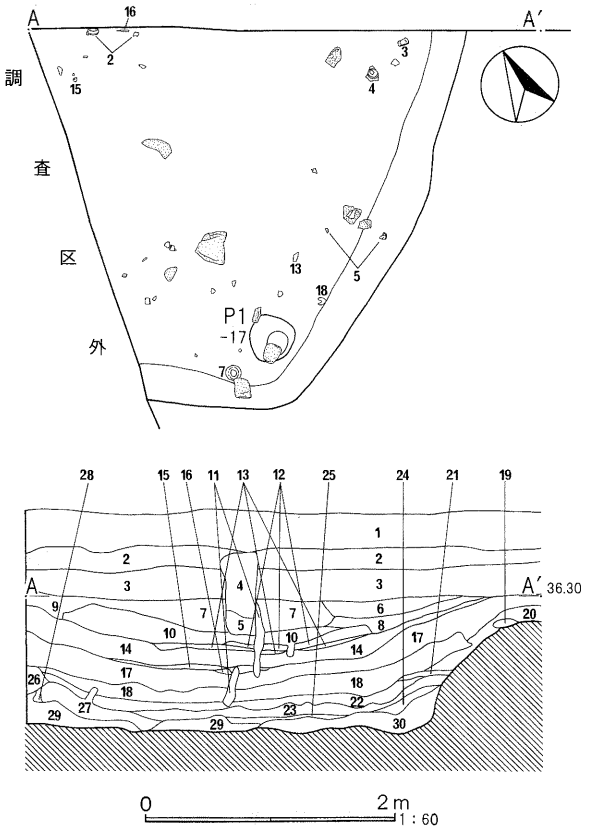
1 表　　土
2 黄褐色土：しまり・粘性有。
3 褐　色　土：焼土含む。
4 暗褐色土
5 暗褐色土：焼土、炭化物多量含む。4層より明るい。
6 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック含む。
7 暗褐色土：焼土、ローム粒含む。
8 黒褐色土：ローム粒多量含む。
9 暗褐色土：しまり無。粘性有。
10 黄褐色土：粘性有。
11 暗褐色土：焼土、炭化物微量、ローム粒多量含む。
12 暗褐色土：ローム粒多量含む。しまり有。
13 暗褐色土：しまり無。
14 褐　色　土：しまり無。
15 黄褐色土：しまり無。



第31図　第10号住居跡・出土遺物

第12表　第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　皿	(14.9)	2.5	6.4	ABDEGHLMN	にぶい黄色	B	40%	末野産。

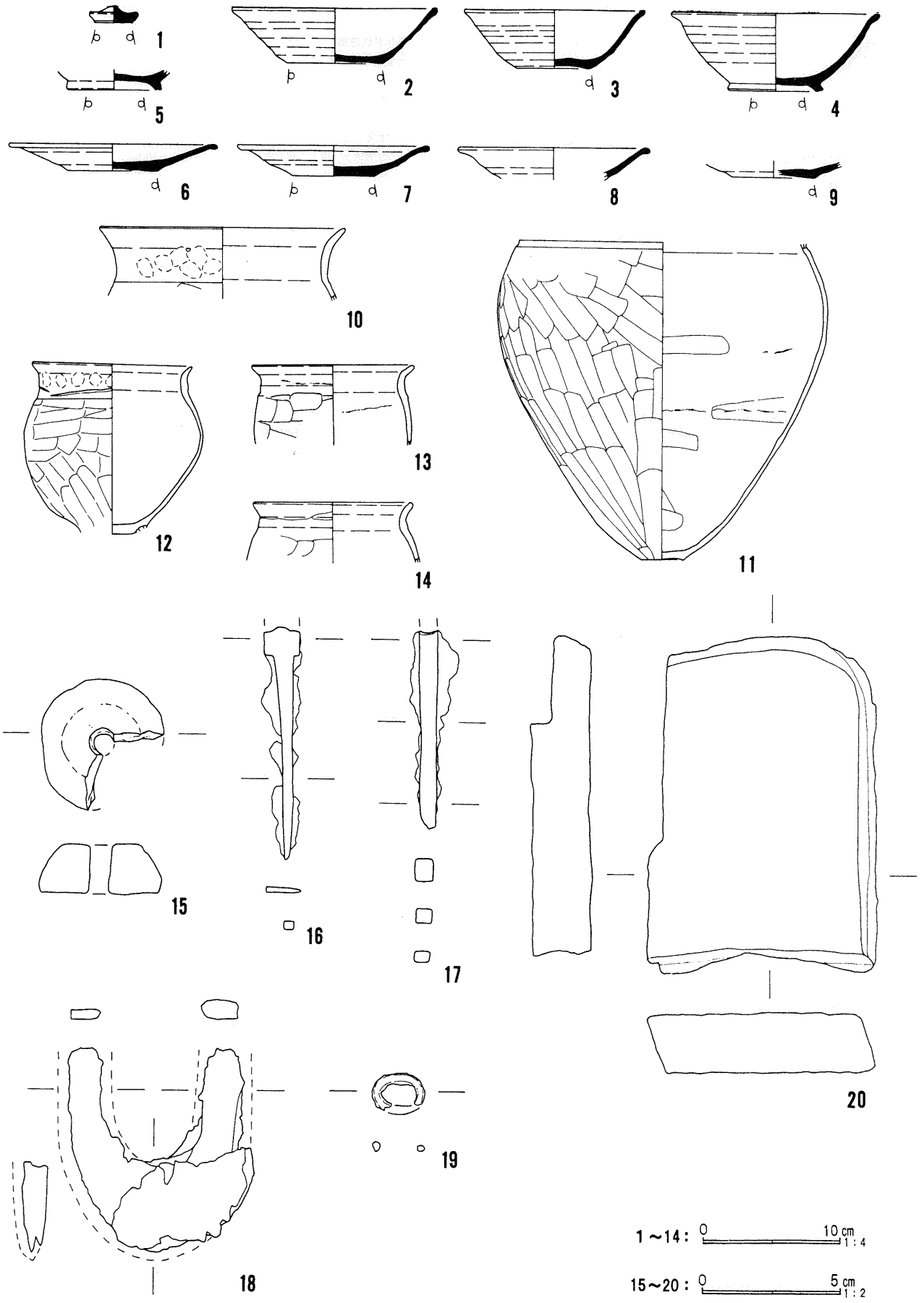


第11号住居跡

土層説明（AA′）

1 表　　土
2 暗 褐 色 土：火山灰、焼土、炭化物含む。
3 暗 褐 色 土：火山灰、焼土、炭化物含む。2層より暗い。
4 暗 褐 色 土：火山灰、ローム粒含む。
5 褐　色　土：ローム粒、黒褐色粒含む。砂質。
6 褐　色　土：ローム粒・ブロック含む。
7 明 褐 色 土
8 黄 褐 色 土：ローム粒・ブロック含む。粘性有。
9 明 褐 色 土：砂質。
10 灰 褐 色 土：褐色粒含む。粘性有。
11 根　の　跡
12 褐　色　土：粘性有。
13 明黄褐色土：粘性有。
14 灰 褐 色 土：砂質。
15 黄 褐 色 土：粘性有。
16 赤 褐 色 土：焼土層。
17 褐　色　土：暗褐色粒、焼土、炭化物含む。粘性有。
18 黄 褐 色 土：暗褐色ブロック、焼土、炭化物、ローム粒含む。粘性有。
19 ロームブロック
20 暗 褐 色 土：焼土、ローム粒・ブロック含む。
21 黄 褐 色 土：暗褐色粒・ブロック含む。
22 黄 褐 色 土：暗褐色粒微量含む。粘性有。
23 暗 褐 色 土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック含む。
24 黒 褐 色 土：焼土、ローム粒含む。
25 灰 褐 色 土：焼土、炭化物、ローム粒含む。しまり有。
26 暗 褐 色 土：黒褐色粒、焼土、炭化物、ローム粒含む。
27 灰 褐 色 土：焼土、炭化物、灰、ローム粒含む。粘性有。
28 赤 褐 色 土：焼土層。
29 黄 褐 色 土：焼土、炭化物、灰含む。
30 暗 褐 色 土：黒褐色粒、焼土、炭化物、ローム粒・ブロック含む。

第32図　第11号住居跡



第33図　第11号住居跡出土遺物

カマドは北東隅に位置する。壁外への張り出しは0.7ｍと短い。袖部及び袖石はない。焚口部の幅は0.35ｍ、煙道部先端は0.1ｍを測る。焚口部から煙道部まで緩やかに立ち上がる。覆土は図示できなかったが、焼土や炭化物を含む黒色土が確認されたにとどまる。壁溝、ピット、貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第31図）は須恵器皿のみである。カマド前の床面直上から検出された。口縁部が強く外反し、体部は緩やかに内湾する。底部調整は回転糸切り痕を残す。末野産。

遺物からみて本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第11号住居跡（第32図）

第１区Ａ－32グリッドに位置する。南西隅付近が検出されただけで大半が調査区外にある。

正確な規模等は不明である。南北軸方向はN－49°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.9ｍと深い。床面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と考えられる。ほぼ全層に焼土や炭化物等を含む傾向にあった。ピットは南西隅で１つ検出された。径0.38×0.35ｍ、床面からの深さ0.17ｍの不整円形を呈する。カマド、壁溝、貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第33図）は須恵器蓋、坏、高台付椀、皿、土師器甕、台付甕、土製紡錘車、刀子、鉄鏃先、不明銅製品、不明石製品がある。須恵器はすべて供膳具である。産地はほとんどが末野産である。底部調整はすべて回転糸切り痕を残す。蓋はつまみのみ検出された。底面に回転糸切り痕が残る。坏・高台付椀はともに２点検出されたが、法量や器形が異なる。皿は６の体部が直線的である以外は緩やかに内湾する。土師器甕は10が「コ」の字状口縁部を持つが、13・14はやや崩れており、器壁も厚く退化的様相を呈する。内外面には輪積痕や指頭圧痕、ヘラによる刻み等がみられる。13・14は台付になる可能性がある。11は胴のつまった倒卵形を呈する。台付甕は１点のみである。台部を欠く。15は土製紡錘車。1/4を欠く。16・17は刀子かその可能性のあるものである。いずれも刃部を欠き、柄部のみ検出された。18は鏃先。残存状態が悪く、刃部はほとんど残っていない。19は環状の銅製品。用途は不明である。1/4程度欠く。20は不明石製品。片岩製で板状を呈する。用途は不明である。

これらの遺物から本住居跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

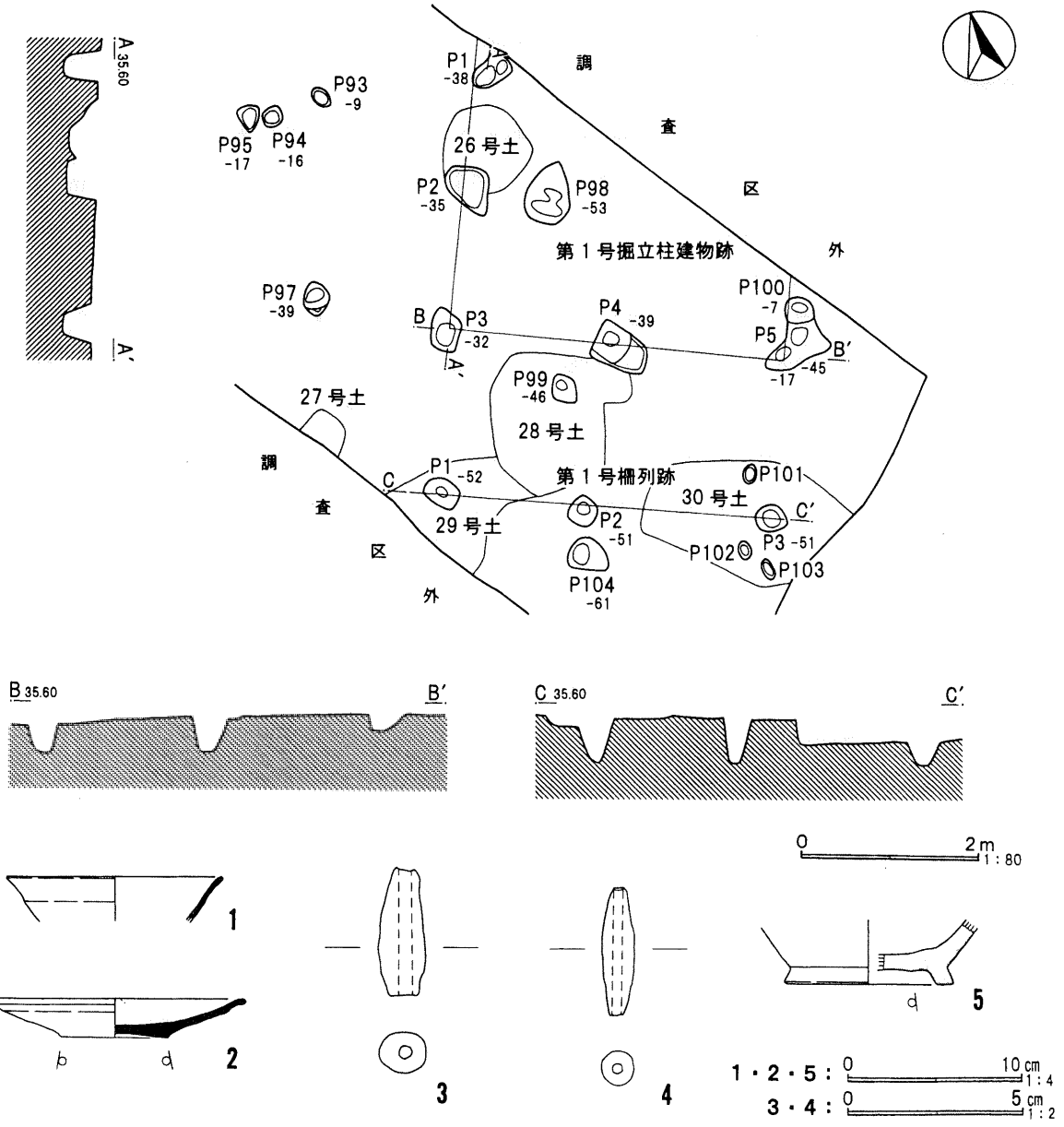
第13表　第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	－	(1.2)	－	ABN	灰色	A	100%	末野産？
2	須恵器　坏	(15.0)	4.0	7.0	ABGHLMN	にぶい褐色	C	40%	末野産。酸化焔焼成。
3	須恵器　坏	(13.2)	4.2	(5.4)	ABGHLK	灰色	B	30%	末野産。
4	須恵器高台椀	(15.2)	5.6	7.0	ABLJG	暗黄灰色	B	60%	末野産。
5	須恵器高台椀	－	(1.4)	6.9	ADGHLMN	にぶい黄褐色	C	70%	末野産。
6	須恵器　皿	(15.2)	1.95	(6.4)	ABGN	黄灰色	B	20%	末野産？
7	須恵器　皿	14.0	2.2	6.0	ABDGHLMN	にぶい黄橙色	C	100%	末野産。
8	須恵器　皿	(14.0)	2.2	－	ABGN	灰色	B	25%	末野産？
9	須恵器　皿	－	(1.2)	(6.0)	ABGHKLN	黄灰色	B	25%	末野産。
10	土師器　甕	(17.9)	(5.2)	－	ABDGHKM	にぶい赤褐色	B	15%	
11	土師器　甕	－	(23.0)	3.0	ABDHKJM	にぶい橙色	A	40%	
12	土師器台付甕	11.6	(12.4)	－	ABCGHKMN	にぶい赤褐色	B	80%	
13	土師器　甕	(11.8)	(5.8)	－	ABEGHJM	橙色	A	20%	
14	土師器　甕	(11.6)	(4.3)	－	ABHKM	にぶい黄褐色	B	30%	
15	土製紡錘車	最大径4.8cm、孔径0.7cm、最大厚1.9cm。重量32.9ｇ。1/4欠。							
16	刀　子	最大長（8.5）cm、最大幅1.3cm、最大厚刃部0.2、柄部0.3cm。重量（8.1）ｇ。刃部欠。							
17	刀　子？	最大長（7.2）cm、最大幅0.65cm、最大厚0.8cm。重量（12.8）ｇ。刃部欠。							
18	鉄鏃先	最大長（7.4）cm、最大幅（6.5）cm、最大厚（0.9）cm。重量（57.6）ｇ。芯部のみ残存。刃部欠。							
19	不明銅製品	最大径1.8cm、最大厚0.35cm。重量（0.4）ｇ。1/4欠。環状。							
20	不明石製品	最大長24.8cm、最大幅16.5cm、最大厚4.5cm。重量3250ｇ。片岩。板状。							

2　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第34図）

第１区L・M－37グリッドに位置する。ピット２が26号土坑を切り、ピット４は28号土坑、ピット５はピット100と重複しているが新旧関係は不明である。また、本建物跡内にピット98があるが伴うもの



第34図　第１号掘立柱建物跡・第１号柵列跡・出土遺物

第14表　第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	(12.4)	(2.5)	－	ABDHLN	灰黄色	A	10%	P4出土。末野産。
2	須恵器　皿	(15.1)	2.2	6.2	BCHL	灰白色	B	70%	P4出土。末野産。
3	土　錘	最大長3.6cm、最大径1.3cm、孔径0.35cm。重量5.6ｇ。完形。P2出土。							
4	土　錘	最大長3.65cm、最大径0.9cm、孔径0.3cm。重量2.7ｇ。完形。P2出土。							

第15表　第１号柵列跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
5	灰釉陶器　瓶	－	(3.7)	(9.6)	ABGN	灰白色	A	40%	P2出土。産地不明。

か不明である。北東部の大半が調査区外にある。

規模は不明である。検出した状況では２間×２間の側柱建物跡であるが、ピット５がＬ字状の平面形態をしていることからみて南北棟と想定される。桁行2.85ｍ以上、梁行3.9ｍを測る。主軸方向はＮ－21°－Ｅを指す。柱間は西側桁行がピット１から３まで1.2ｍ、1.65ｍ、梁行はピット３から５まで1.8ｍ、2.1ｍを測り、桁行・梁行ともに柱筋はほぼ通るが一定していない。柱穴の深さは平均0.35ｍ前後である。ピット５は掘り込みが２つみられるが、柱筋からみて西側の浅い方が該当すると思われる。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。

なお、本建物跡の南側には１号柵列跡が位置している。本建物跡の梁行に平行し、柱筋もほぼ揃うことから西側のピット93や97等も含めて庇になる可能性もあるが、全形が不明であることから個別に報告した。１号柵列跡との距離は1.8ｍを測る。

出土遺物（第34図）は須恵器坏、皿、土錘である。１・２はピット４、３・４はピット２からそれぞれ出土した。１の口縁部は外反が弱く、やや古相を示す。２は底部調整に回転糸切り痕を残す。末野産。土錘は３が太めで中段の膨らみが小さく、４は細身で中段がやや膨らむ。ともに完形品。

これらの遺物から本建物跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第２号掘立柱建物跡（第35図）

第６区Ｏ－40グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。本建物跡の南側にはピット106・107及び５号溝が位置する。ピットは関連するものかどうか不明である。５号溝は短いが、本建物跡の雨落ち溝の可能性がある。本建物跡の北東部大半が調査区外にある。

規模等は不明である。現状では１間×２間の建物である。ピット１と２の柱間は2.1ｍ、ピット２と３は2.4ｍを測る。主軸方向はＮ－１°－Ｅを指し、ほぼ東西南北に軸があっている。柱穴はすべて径0.8ｍ前後と大きい。深さはピット１と３は約0.4ｍ程であるが、ピット２のみ0.53ｍとやや深い。いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。

出土遺物（第35図）は須恵器坏、土錘である。ピット１から出土した。１は末野産。底部調整は回転糸切り痕を残す。土錘はともに太めで中段の膨らみが小さい。半分を欠く。

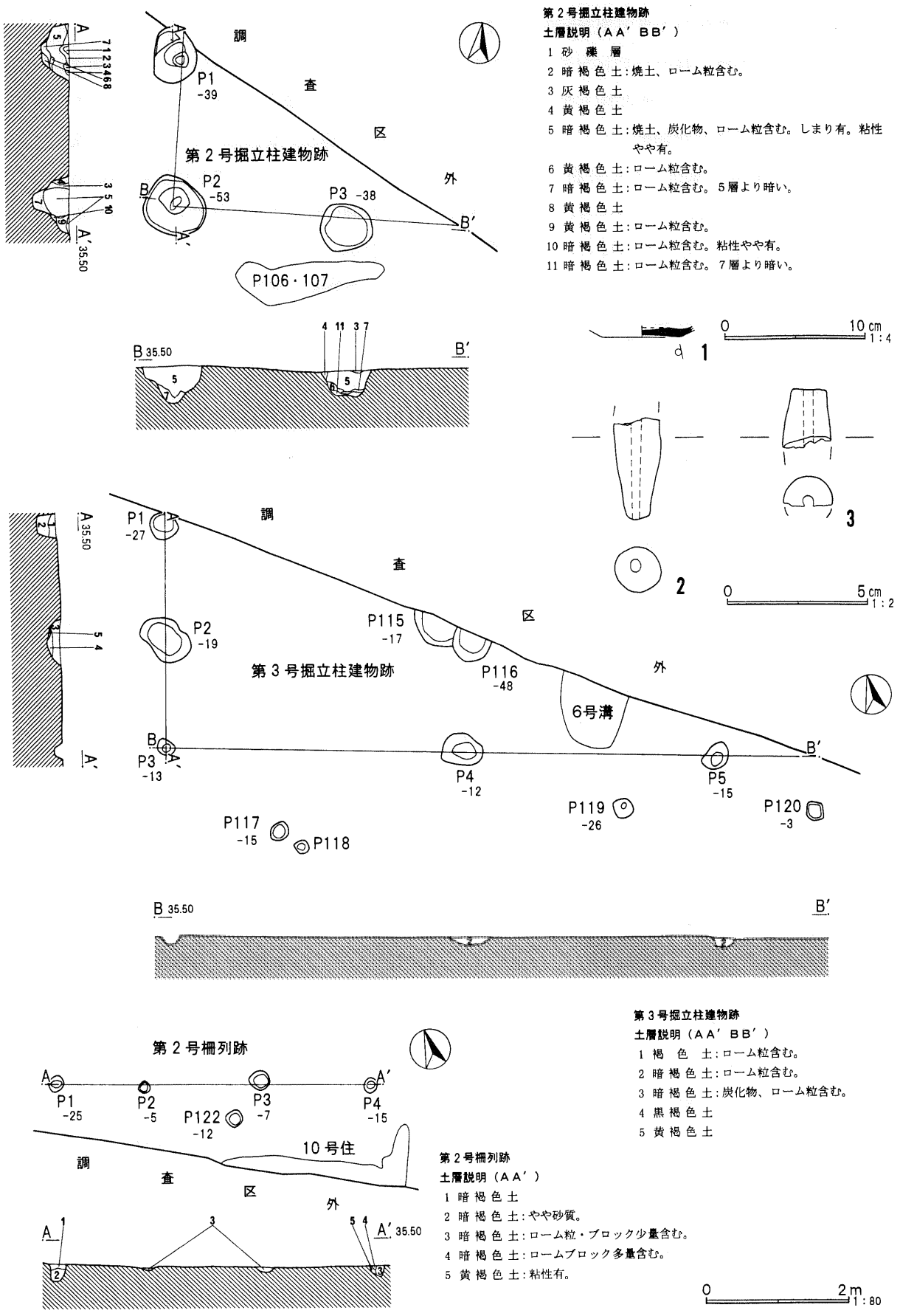
これらの遺物から本建物跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第３号掘立柱建物跡（第35図）

第６区Ｒ・Ｓ－45・46グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、本建物跡内に６号溝とピット115・116が位置する。６号溝との新旧関係は不明である。ピット115・116は本建物跡に付随する可能性がある。北東部大半が調査区外にある。

規模は不明である。現状では２間×３間の側柱建物跡であるが、平面形態からみて東西棟と想定される。桁行7.8ｍ以上、梁行3.2ｍ以上を測る。主軸方向はＮ－104°－Ｅを指し、他の建物跡とは軸がずれる。柱間は西側梁行がピット１から３までは1.8ｍ、1.5ｍ、桁行はピット３から５まで4.2ｍ、3.6ｍを測り、桁行・梁行ともに柱筋はほぼ通るが一定していない。柱穴は大小差がある。深さは0.12～0.27ｍと全体的に浅い。なお、南側にはピット117～120が本建物跡の柱筋に揃えずに等間隔で並んでいるが、付随するものかどうかは不明である。いずれの柱穴からも柱痕・遺物は検出されなかった。

本建物跡の帰属する時期は、周辺遺構との位置等からみて他の建物跡と同じく９世紀後半と思われる。



第35図　第２・３号掘立柱建物跡・第２号柵跡・出土遺物

第16表　第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	－	(0.8)	(5.5)	ABHLN	灰色	B	40%	P1出土。末野産。
2	土　錘	最大長（3.6）cm、最大径1.65cm、孔径0.4cm。重量（8.7）g。半分欠。P1出土。							
3	土　錘	最大長（2.1）cm、最大径1.75cm、孔径0.35cm。重量（3.9）g。半分欠。P1出土。							

3　柵列跡

第１号柵列跡（第34図）

第１区M－37グリッドに位置する。１号掘立柱建物跡の南側に位置し庇になる可能性がある。ピット１が29号土坑に切られ、ピット３は30号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間はピット１から３まで1.65ｍ、2.1ｍを測り、柱筋はほぼ通るが一定していない。主軸方向はN－109°－Eを指し、１号掘立柱建物跡とほぼ同軸方向を向く。柱穴は径0.3ｍ前後、確認面からの深さは0.51～0.52ｍを測る。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。

出土遺物（第34図）は、灰釉陶器瓶の底部片のみである。ピット２から出土した。産地は不明であるが胎土は白っぽく、礫や黒色粒を含んでいる。底部調整は回転糸切り痕を残す。

本柵列跡の帰属する時期は、出土遺物と１号掘柱建物跡との位置関係からみて９世紀後半と思われる。

第２号柵列跡（第35図）

第６区T・U－47・48グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はないが、10号住居跡の北側に平行して位置しており関連すると思われる。

柱間はピット１から４まで1.2ｍ、1.65ｍ、1.65ｍを測り、柱筋はほぼ通るが一定していない。主軸方向はN－109°－Eを指す。柱穴は径0.2ｍ前後、確認面からの深さは0.05～0.25ｍとバラツキがあるが、全体的に浅い。いずれの柱穴からも柱痕・遺物は検出されなかった。

本柵列跡の帰属する時期は、10号住居跡との位置関係からみて９世紀後半と思われる。

4　溝　跡

第１号溝跡（第36図）

第４区G・H－19グリッドに位置する。籠原裏古墳群４号墳の墳丘を切っている。

南西方向から北東方向へ走り、検出された長さは4.72ｍを測る。南側は確認面の関係からか途切れている。幅は北側で1.22ｍ、南側で0.58ｍを測る。確認面からの深さは北側で0.53ｍ、南側で0.18ｍを測る。断面形はほぼ逆台形状を呈する。覆土は暗褐色土による単一層であり自然堆積と思われる。北側上面には5～20㎝程の礫が集中してみられ、溝の外側にも広がっていた。礫の用途は不明であるが、覆土が埋まった段階でのものであり、４号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。

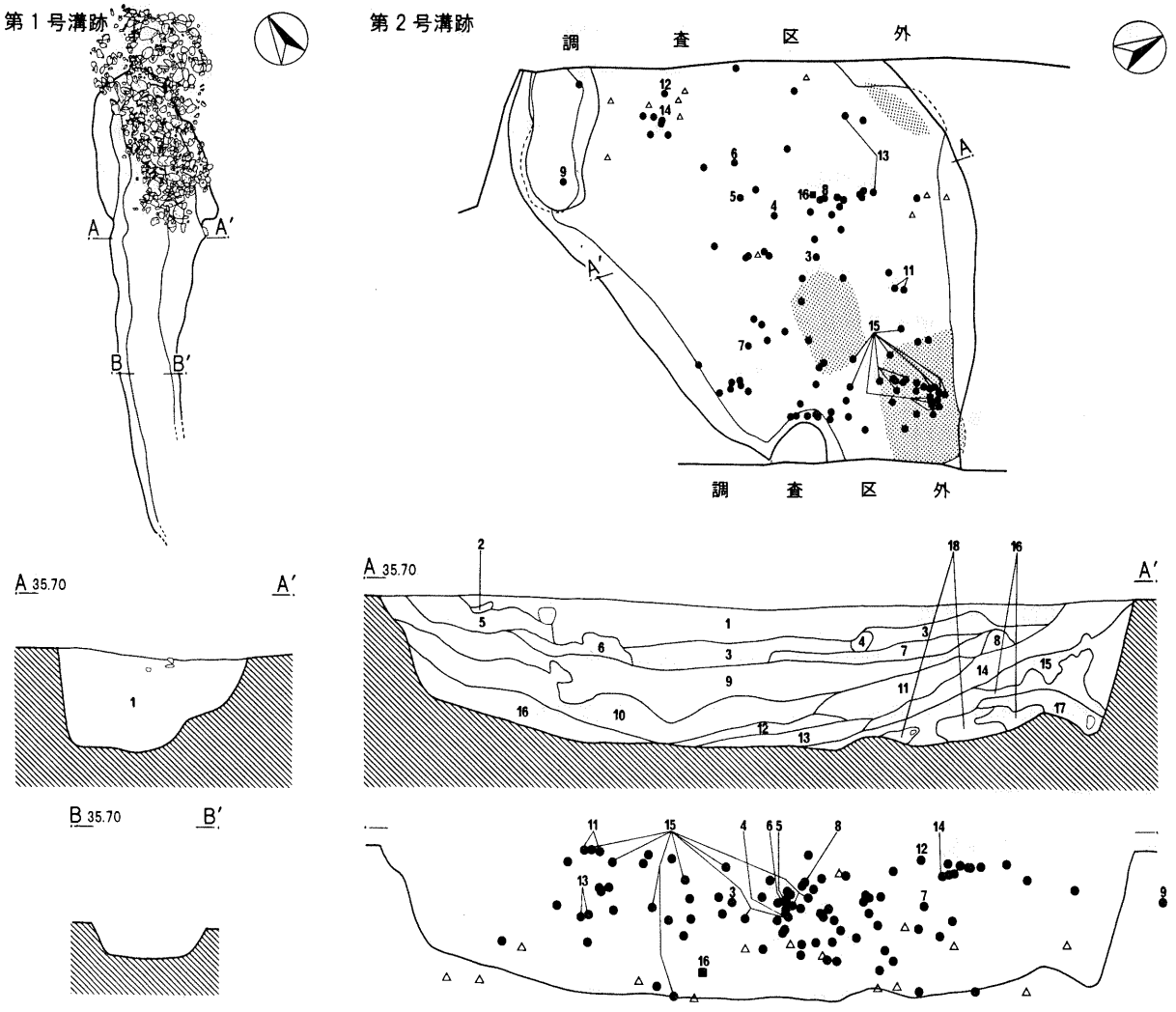
出土遺物（第39図）はロクロ土師器高台付椀、陶器甕のみである。覆土から出土した。１は高台部のみである。底部調整は回転ヘラナデである。流れ込み遺物。２は常滑甕の胴下部片。外面にはスタンプがみられる。本溝跡に伴う唯一の遺物である。

上記の遺物から本溝跡の帰属する時期は、中世と思われる。

第２号溝跡（第36図）

第３区U－33・34グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びている。検出された長さは4.98ｍを測る。幅は東側で1.76ｍ、西側で4.08ｍを測り、東から西に向かって幅広になる。確認面からの深さは最大0.8ｍを測り、断面形は横長の逆台形状を呈する。覆土は暗褐色土を主体とし、北側上層には焼土がまとまってみられた。用途は不明である。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。南西部底面にはピット状の掘り込みがみられた。北西部は調査区外にあり、長軸は不明であるが短軸は0.76ｍ、底面からの深さは0.15ｍを測る。南側はややオーバーハングしていた。性格は不明である。



第１号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：礫、ローム粒含む。

第２号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：焼土微量、ローム粒少量含む。しまり有。粘性やや無。
2 灰褐色土：しまり無。粘性有。
3 暗褐色土：焼土微量、ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。１層より暗い。
4 暗褐色土：ローム粒微量含む。しまり無。粘性有。
5 暗褐色土：焼土微量、ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。１・２層より明るい。
6 黄褐色土：しまり・粘性有。
7 褐　色　土：ローム粒含む。しまり有。粘性やや無。
8 暗褐色土：ローム粒含む。しまり・粘性無。３層より暗く、９層より明るい。
9 暗褐色土：ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。８層より暗い。
10 褐　色　土：黒色粒微量、ロームブロック多量含む。しまり・粘性有。
11 黄褐色土：ロームブロック含む。しまり・粘性有。
12 暗褐色土：ローム粒含む。しまり・粘性有。
13 暗褐色土：ローム粒微量含む。しまり・粘性有。
14 褐　色　土：ローム粒含む。しまり無。粘性有。
15 暗褐色土：ローム粒微量含む。しまり・粘性無。
16 褐　色　土：しまり・粘性有。
17 暗褐色土：礫、ローム粒微量含む。しまりやや無。粘性有。
18 黄褐色土：礫含む。しまり・粘性有。

第36図　第１・２号溝跡

出土遺物（第39図）は須恵器坏、高台付椀、皿、甕、土師器甕、土錘がある。主に上～中層から検出された。住居跡同様、須恵器供膳具の検出が多い。須恵器はほとんど末野産であるが14のみ南比企産である。供膳具は口縁部が外反し、体部は内湾する。高台付椀は高台部のみ検出された。底部調整はすべて回転糸切り痕を残す。甕は頸部片と胴下部片３点のみ検出された。土師器は図示可能なものは15のみである。底部を欠く。「コ」の字口縁部外面に指頭圧痕がみられる。胴部以下は倒卵形を呈する。土錘は１点のみ検出された。やや細身で中段の膨らみが小さい。片端を欠く。

これらの遺物から本溝跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第３号溝跡（第37図）

第１区Ｋ－32～34グリッドに位置する。南東部で22号土坑に切られ、東側ではピット75と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

ほぼ東西方向に走るが、西側先端は北西方向に曲がって途切れる。東側は調査区外に延びているが、その形態から北側に曲がっていると思われ、弧状を呈する。検出された長さは10ｍである。幅は1.2ｍ前後であるが、西側先端付近は0.30ｍ前後と狭くなる。確認面からの深さは東側の最も深い所で0.62ｍを測るが、西側先端では0.06ｍと浅くなる。断面形はほぼ逆台形状を呈する。覆土は黒褐色土を主体とし、所々に焼土や炭化物を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第39図）は須恵器蓋、坏、高台付椀、皿、土錘がある。遺物は主に東側の調査区境付近と西側先端部前の２箇所より検出された。図示可能な土器は須恵器供膳具のみである。底部調整は回転糸切り痕を残す。すべて末野産かその可能性のあるものである。蓋はその大きさから椀蓋か。18は底部のみ100%残存しており、周縁を意図的に欠いた可能性がある。付着物等はみられず、用途は不明である。高台付椀は口縁部の外反が弱い。皿は体部が直線的である。20は器壁が厚手である。土錘は１点のみ検出された。やや細身で中段の膨らみが大きい。完形品。

これらの遺物から本溝跡の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

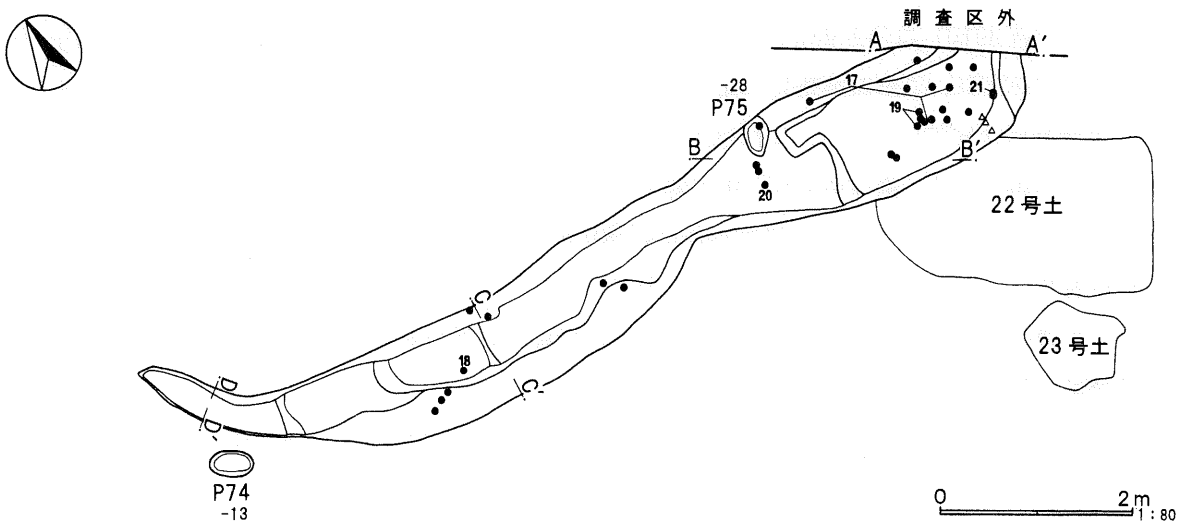
第４号溝跡（第38図）

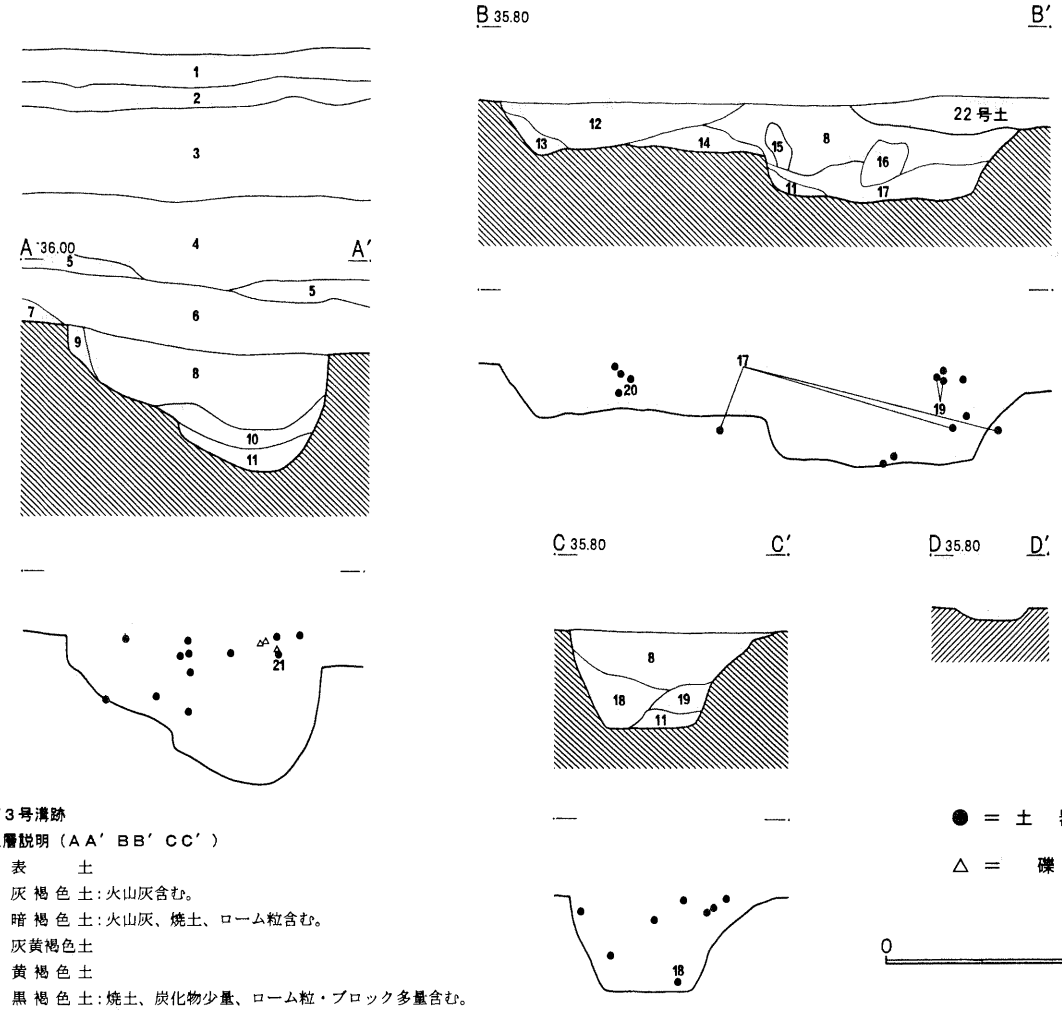
第１区Ｌ・Ｍ－34～36グリッドに位置する。所々でピットと重複関係にあるが、新旧関係は不明である。周辺にはピットや土坑が多数存在するが、本溝跡との関係は不明である。

西から南東方向へ弧状に巡り、調査区外に延びている。検出された長さは8.54ｍを測る。幅は0.28～1.58ｍと一定していない。東側はテラス状を呈する。確認面からの深さは北側で0.47ｍを測り、東側では0.20ｍ前後である。断面形は東側のテラス以外はほぼ逆台形状を呈する。覆土は褐色土を主体とし、焼土や炭化物等を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第39図）は須恵器蓋、坏、高台付椀、皿、コップ形、土錘がある。ほぼ全面に散在し、上層からの検出が多い。住居跡同様、須恵器の検出が多い。図示可能な土器は須恵器供膳具のみである。底部調整は33以外回転糸切り痕を残す。産地はほとんど末野産である。蓋はつまみと口縁部片。24は椀蓋か。坏は25・26・29の口縁部と体部が直線的である。高台付椀は口縁部から体部の破片のみ検出された。皿は口縁部の外反が強い。体部は緩やかに内湾する。33はコップ形土器。外面と底部内面に自然釉がみられる。上部を欠く。土錘は１点のみ検出された。太めで中段の膨らみは小さい。完形品。

これらの遺物から本溝跡の帰属する時期は、９世紀中～後半と思われる。



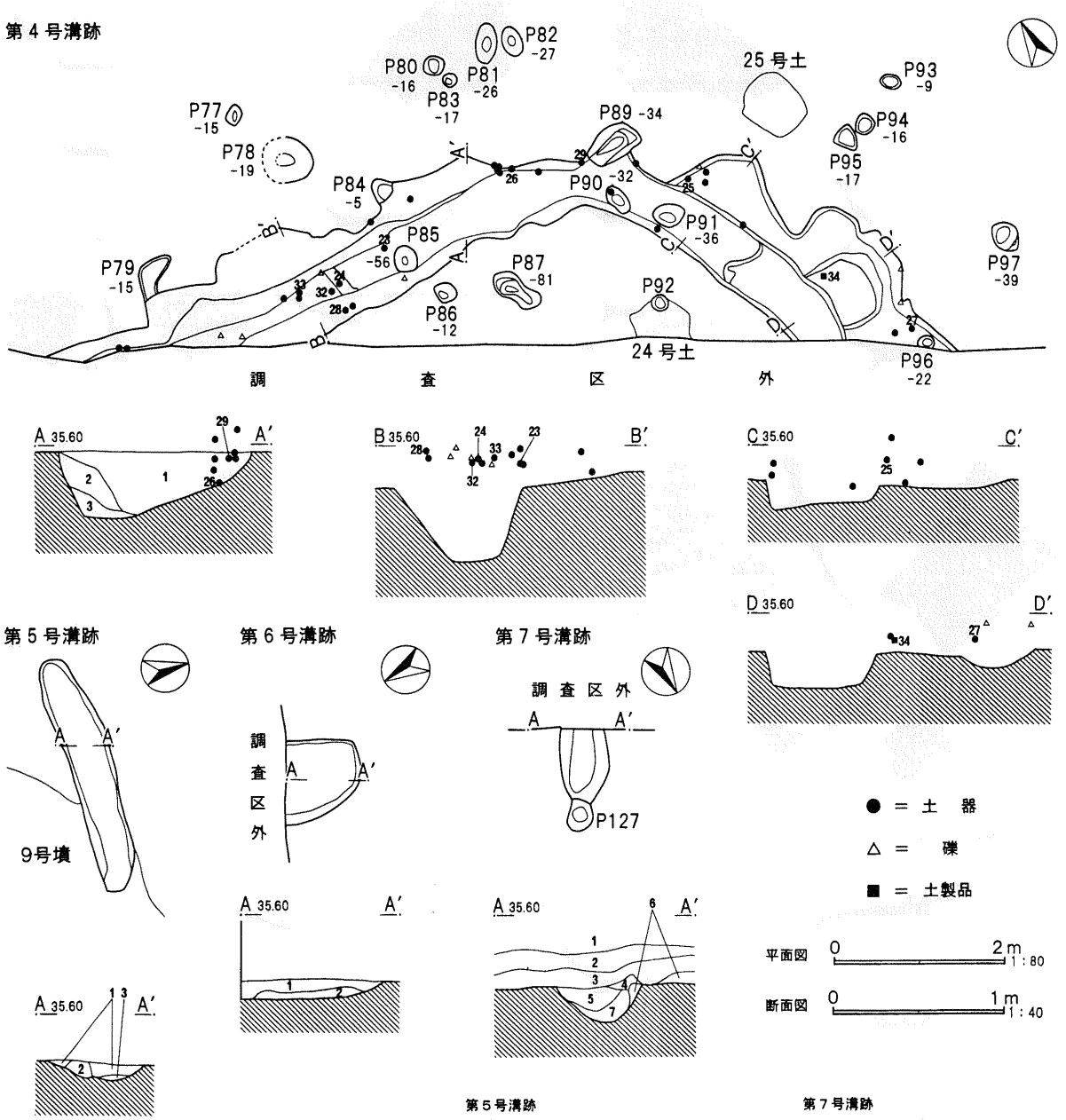


第3号溝跡

土層説明（AA′ BB′ CC′）

1 表　　土
2 灰 褐 色 土：火山灰含む。
3 暗 褐 色 土：火山灰、焼土、ローム粒含む。
4 灰黄褐色土
5 黄 褐 色 土
6 黒 褐 色 土：焼土、炭化物少量、ローム粒・ブロック多量含む。
7 黒 褐 色 土：焼土、炭化物少量、ローム粒多量含む。
8 黒 褐 色 土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック少量含む。
9 暗 褐 色 土：ローム粒含む。
10 黒 褐 色 土：炭化物、ローム粒・ブロック少量含む。
11 黒 褐 色 土：ローム粒・ブロック多量含む。
12 暗 褐 色 土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック含む。
13 褐　色　土：黒褐色土、ローム粒含む。
14 褐　色　土
15 黒 褐 色 土：焼土、炭化物、ロームブロック多量含む。
16 黒 褐 色 土：黒色土、焼土、炭化物含む。
17 褐　色　土：下層にロームブロック含む。
18 黒 褐 色 土：焼土、炭化物、ローム粒含む。
19 黒 褐 色 土

第37図　第3号溝跡



第４号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック含む。
2 褐　色　土：炭化物、ローム粒含む。
3 褐　色　土：ロームブロック多量含む。

第５号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土
2 褐　色　土
3 褐　色　土：２層より暗い。

第６号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：ローム粒含む。
2 黒褐色土：ローム粒・ブロック含む。

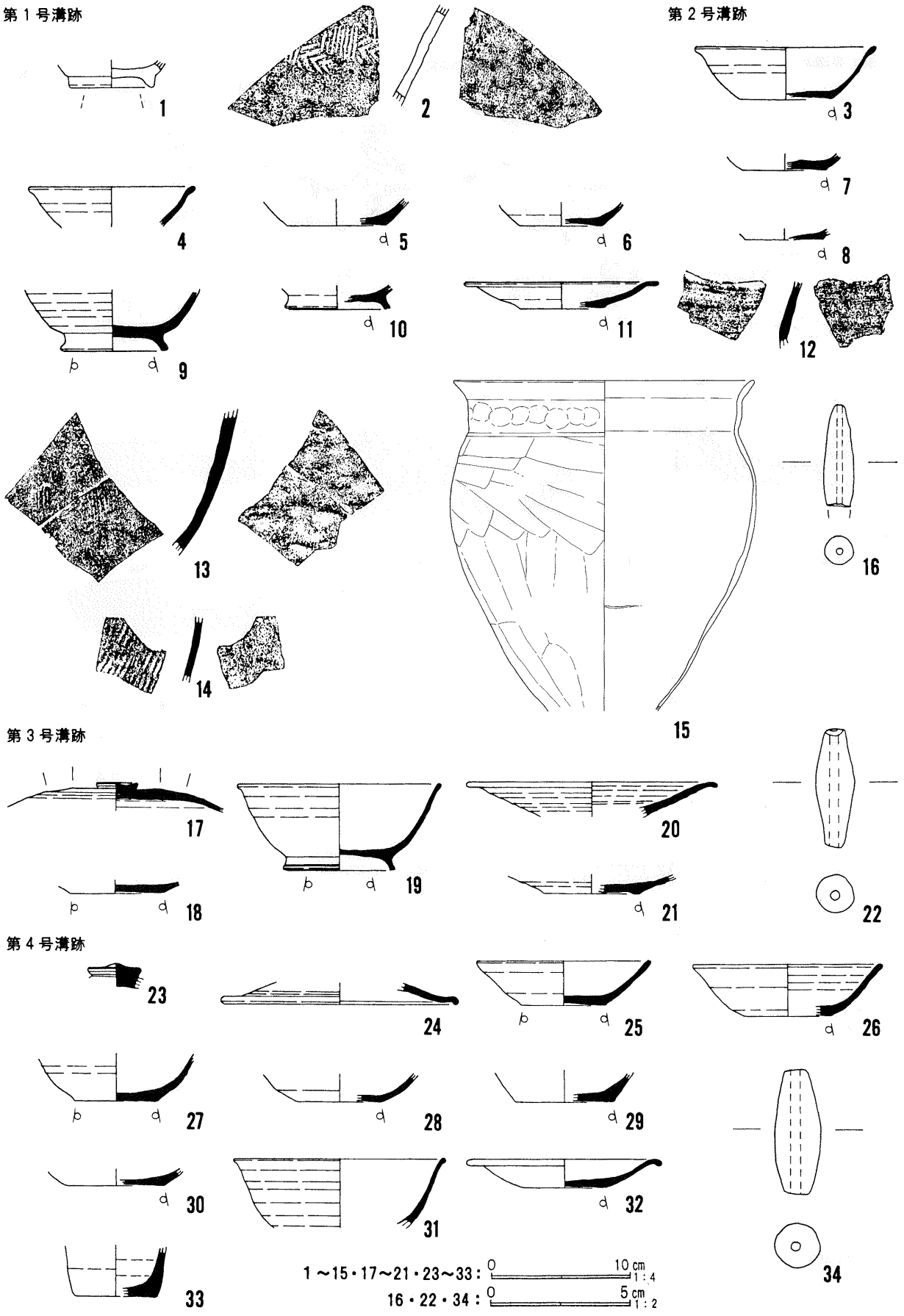
第７号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：しまりやや無。
2 黒褐色土：１層より明るい。
3 暗褐色土
4 褐　色　土
5 暗褐色土
6 黄褐色土
7 褐　色　土

第38図　第４～７号溝跡

第５号溝跡（第38図）

第６区O・P－40・41グリッドに位置する。東側で籠原裏古墳群９号墳の周溝を切っている。

ほぼ東西方向に走っている。２号掘立柱建物跡の南側柱列に平行していることから２号建物跡の雨落


第１号溝跡
第２号溝跡
第３号溝跡
第４号溝跡
1～15・17～21・23～33：0 10cm 1:4
16・22・34：0 5cm 1:2

第39図　溝跡出土遺物

第17表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	第１号溝跡	土師器高台椀	－	(2.0)	(6.1)	BGHKM	浅黄橙色	B	75%	
2	第１号溝跡	陶器　甕	－	－	－	－	暗赤褐色	A	胴下部片	常滑産。
3	第２号溝跡	須恵器　坏	(13.0)	3.8	(6.7)	ABGHKL	黄灰色	C	40%	末野産。
4	第２号溝跡	須恵器　坏	(12.0)	(2.9)	－	ABGHLN	黄灰色	B	20%	末野産。
5	第２号溝跡	須恵器　坏	－	(1.9)	(7.0)	BDHL	灰白色	C	20%	末野産。
6	第２号溝跡	須恵器　坏	－	(1.7)	(6.0)	ABCEJMN	黄褐色	C	20%	末野産？
7	第２号溝跡	須恵器　坏	－	(1.2)	(6.0)	ABDGHL	暗灰色	B	25%	末野産。
8	第２号溝跡	須恵器　坏	－	(0.7)	(5.5)	AHLN	灰色	A	25%	末野産。
9	第２号溝跡	須恵器高台椀	－	(4.4)	7.7	AGHL	黒褐色	B	90%	末野産。
10	第２号溝跡	須恵器高台椀	－	(1.7)	(7.6)	ABLN	黄灰色	A	25%	末野産。
11	第２号溝跡	須恵器　皿	(14.0)	1.9	6.2	AGHL	灰色	A	40%	末野産。
12	第２号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	AGL	暗灰色	B	頸部片	末野産。
13	第２号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABGL	灰色	A	胴下部片	末野産。
14	第２号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABF	灰色	A	胴下部片	南比企産。
15	第２号溝跡	土師器　甕	21.4	(24.1)	－	ABGHJKMN	褐色	A	80%	
16	第２号溝跡	土　錘	最大長（3.6）cm、最大径1.1cm、孔径0.2cm。重量（4.1）g。片端欠。							
17	第３号溝跡	須恵器　蓋	－	(2.0)	－	ABGL	灰色	A	30%	末野産。
18	第３号溝跡	須恵器　坏	－	(1.0)	6.7	ABDJKM	浅黄橙色	C	90%	末野産？酸化焔焼成。
19	第３号溝跡	須恵器高台椀	(14.6)	6.2	8.0	ABGN	灰白色	C	80%	末野産？
20	第３号溝跡	須恵器　皿	(18.0)	(2.5)	－	ABGHLN	灰色	A	35%	末野産。
21	第３号溝跡	須恵器　皿	－	(1.4)	(6.9)	ABGH	にぶい黄橙色	C	25%	末野産？酸化焔焼成。
22	第３号溝跡	土　錘	最大長4.25cm、最大径1.4cm、孔径0.3cm。重量6.9g。完形。							
23	第４号溝跡	須恵器　蓋	－	(1.7)	－	ADGHLM	にぶい黄色	C	100%	末野産。
24	第４号溝跡	須恵器　蓋	(17.0)	(1.5)	－	ABHJLN	灰色	A	10%	末野産。
25	第４号溝跡	須恵器　坏	(12.5)	3.2	6.0	ABGHLN	灰色	B	60%	末野産。
26	第４号溝跡	須恵器　坏	(13.6)	3.7	(6.3)	BDEGHLMN	にぶい黄橙色	C	20%	末野産。
27	第４号溝跡	須恵器　坏	－	(3.4)	(5.9)	ACHMN	にぶい赤褐色	A	60%	末野産？
28	第４号溝跡	須恵器　坏	－	(2.0)	(6.0)	ABGL	灰白色	B	30%	末野産。
29	第４号溝跡	須恵器　坏	－	(2.1)	(7.0)	ABL	灰色	B	25%	末野産。
30	第４号溝跡	須恵器　坏	－	(1.2)	(7.0)	ABDGHL	灰色	B	25%	末野産。
31	第４号溝跡	須恵器高台椀	(15.2)	(4.9)	－	ABLN	灰色	A	20%	末野産。
32	第４号溝跡	須恵器　皿	(14.0)	2.0	(5.8)	ABHL	灰色	B	20%	末野産。
33	第４号溝跡	須恵器コップ形	－	(3.6)	(5.7)	ABN	黄灰色	B	25%	末野産？外面、底部内面自然釉有。
34	第４号溝跡	土　錘	最大長4.5cm、最大径1.6cm、孔径0.35cm。重量11.0g。完形。							

ち溝になる可能性がある。２号建物跡との距離は0.6ｍ程である。検出された長さは2.9ｍと短いが、本来は東方向に延びていた可能性がある。幅は0.25ｍ前後、確認面からの深さは0.1ｍ程と浅い。断面形は舟底状を呈する。覆土はランダムな層位ではあるが、自然堆積と思われる。混入物はみられない。遺物は検出されなかった。

本溝跡の帰属する時期は、２号掘立柱建物跡との位置関係からみて９世紀後半と思われる。

第６号溝跡（第38図）

第６区Ｓ－46グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、３号掘立柱建物跡内に位置している。新旧関係は不明である。北側は調査区外に延びており、その形状から土坑になる可能性がある。

北西方向から南東方向に走っている。検出された長さは0.88ｍと短い。幅は調査区境で最大1.02ｍを測り、確認面からの深さは0.11ｍと浅い。断面形は舟底状を呈する。覆土は黒褐色土２層からなり、自然堆積と思われる。遺物は検出されなかった。

本溝跡の帰属する時期は不明である。

第７号溝跡（第38図）

第６区Ｕ－49グリッドに位置する。北端でピット127と重複しているが新旧関係は不明である。南側は調査区外に延びており、６号溝跡同様、その形状から土坑になる可能性がある。

ほぼ南北方向に走っている。検出された長さは0.9ｍと短い。幅は最大0.58ｍ、確認面からの深さは

0.21ｍを測る。断面形は舟底状を呈する。覆土はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。遺物は検出されなかった。

本溝跡の帰属する時期は不明である。

5　土　坑

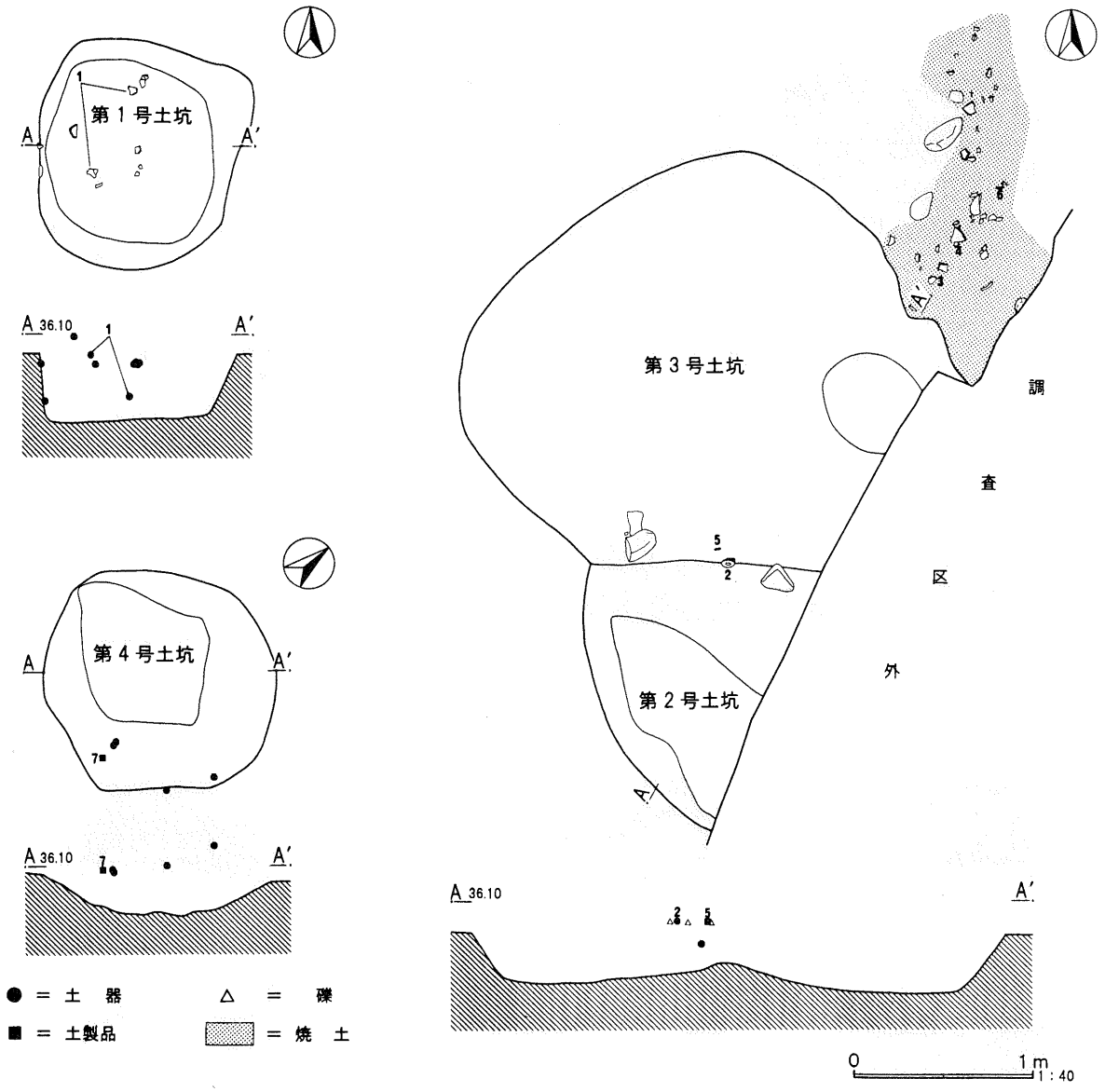
土坑は全調査区を通して計44基（第40～50図）が検出されている。以下、事実記載が必要なもののみ記載する。規模・平面形等については一覧表（第18表）を参照のこと。

第３号土坑（第40図）

第１区M－27・28グリッドに位置する。籠原裏古墳群２号墳石室前に位置しており、本土坑が切って

第18表　土坑一覧表

土坑No.	挿図No.	位置	平面形	長(m)	短(m)	深(m)	時期	覆土	出土遺物	備　考
1号土	第40図	第1区M-27	方形	1.32	1.19	0.4	9c中	不明	須恵器	2号墳より新。
2号土	第40図	第1区M-28	－	－	－	0.29	9c後～	埋戻	－	2号墳･3号土より新。
3号土	第40図	第1区M-27･28	長方形	－	2.48	0.35	9c後	埋戻	須恵器･土師器･土製品	2号墳より新。2号土より古。
4号土	第40図	第1区R-23･24	不整円形	1.3m前後		0.21	9c後	不明	土製品	3号墳より新。
5号土	第41図	第4区E-19･20	長方形	2.02	1.4？	0.46	13c前	埋戻	かわらけ･須恵器･土師器	1号埋甕より古。
6号土	第41図	第4区G-19	長方形	1.02	0.7	0.31	中･近世	埋戻	陶器･在地系土器	4号墳より新。覆土に礫含。
7号土	第41図	第4区G-19	長方形	1.19	0.73	0.17	中･近世	埋戻	－	4号墳より新。覆土に礫含。
8号土	第41図	第4区G-18	長方形	1.2	0.66	0.38	中･近世	埋戻	石製品	4号墳より新。覆土に礫含。
9号土	第41図	第4区H-19	長方形	1.12	0.82	0.54	中･近世	埋戻	陶器･須恵器･石製品	4号墳より新。覆土に礫含。
10号土	第42図	第4区L･M-15･16	不整円形	3.6m前後		2.46	中世	自然	在地系土器	2号井戸より古。覆土に礫含。
11号土	第41図	第4区N-15	長方形	1.87	1.12	0.56	中･近世	不明	－	
12号土	第43図	第4区N-14	方形？	－	－	0.62	中･近世	自然	－	P53より新。P54との新旧不明。
13号土	第43図	第4区O･P-13･14	長方形	2.64	1.07	0.47	中･近世	不明	－	
14号土	第43図	第4区P-13	方形	2	1.85	0.59	中･近世	自然	－	P56･57との新旧不明。
15号土	第43図	第4区Q-12･13	楕円形	2.81	－	0.87	不明	不明	－	16号土との新旧不明。
16号土	第43図	第4区Q･R-12･13	不整円形	2.29	1.82	0.92	7c末	不明	須恵器	15号土との新旧不明。
17号土	第44図	第3区Q-36	方形？	－	－	0.46	9c代	自然	須恵器	
18号土	第44図	第3区U･V-34	方形？	－	－	0.26	9c代？	不明	－	P66･67･68との新旧不明。
19号土	第44図	第3区V-34	方形？	－	－	0.31	9c代？	不明	－	P69との新旧不明。
20号土	第44図	第1区I-31	方形	0.76	0.73	0.07	9c代？	不明	－	
21号土	第44図	第1区J-32	長方形	－	0.52	0.16	9c代？	不明	－	
22号土	第45図	第1区K･L-34	長方形	2.92	1.66	0.2	9c後	不明	須恵器･土師器･鉄製品	3号溝より新。
23号土	第45図	第1区L-34	五角形	1.07	0.97	0.39	9c代？	不明	－	
24号土	第45図	第1区M-35･36	五角形	－	－	0.11	9c代？	不明	－	P92との新旧不明。
25号土	第45図	第1区L･M-36	長方形	0.73	0.66	0.26	9c後	不明	須恵器	
26号土	第45図	第1区M-37	不整円形	1m前後		0.33	9c後	不明	須恵器	1号掘立より古。
27号土	第45図	第1区M-36	長方形？	－	－	0.24	不明	不明	－	
28号土	第46図	第1区M-37	L字状	1.67	1.63	0.19	9c中	不明	須恵器	29号土より新。P99より古。
29号土	第46図	第1区M･N-36･37	－	－	－	0.17	9c中後	不明	須恵器･土製品	28号土より古。1号柵より新。
30号土	第46図	第1区M･N-37･38	楕円形	－	1.41	0.31	9c中後	不明	須恵器･土製品	ピットとの新旧不明。
31号土	第46図	第5区Y･Z-8	楕円形	－	－	0.55	中･近世	不明	－	7号墳より新。P105と新旧不明。
32号土	第46図	第5区Z-7･8	円形	2.35m前後		0.78	中世	不明	陶器･石製品	7号墳･33号土より新。
33号土	第47図	第5区Z･AA-8	方形	1.51	1.49	0.67	中･近世	不明	－	7号墳より新。32号土より古。
34号土	第47図	第5区Z-7	長方形	－	1.22	0.28	中･近世	不明	－	7号墳より新。35･36号土と新旧？
35号土	第47図	第5区Z-7	長方形	－	1.31	0.31	中･近世	不明	－	7号墳より新。34･36号土と新旧？
36号土	第47図	第5区Z･AA-7	長方形	2.16	1.73	0.91	中性	不明	在地系土器	7号墳より新。34･35号土と新旧？
37号土	第48図	第5区AB･AC-6･7	不整円形	2.61	2.34	1.89	中世	不明	陶器･古銭	覆土に礫含。
38号土	第48図	第1区C-35	－	－	－	0.71	中･近世	不明	須恵器･土師器･縄文土器	覆土上面に礫有。
39号土	第49図	第1区B･C-34･35	－	－	－	0.59	中･近世	不明	－	ピットとの新旧不明。覆土に礫含。
40号土	第49図	第1区B-34	－	－	－	0.17	不明	不明	－	
41号土	第49図	第6区S･T-46	円形？	－	－	0.24	不明	不明	－	
42号土	第50図	第6区U-49	楕円形	1.23	0.95	0.14	9c代？	不明	－	
43号土	第50図	第6区U･V-49	不整円形	1.38	1.26	0.12	9c代？	不明	－	
44号土	第50図	第1区A･B-32	長方形	1.67	1.05	0.42	9c後	不明	須恵器	



第40図　第１～４号土坑

いると思われる。南側では２号土坑に切られ、東側は調査区外にある。

長軸は不明であるが短軸は2.48ｍを測り、隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは最大0.35ｍである。覆土は図示できなかったが、ローム粒を多量含む褐色土が堆積していた。人為的に埋め戻されたと思われる。また、本土坑の北東側には焼土層が薄く広がっていた。同時期の遺物が含まれていたことから本土坑に伴うものと判断した。用途は不明である。

出土遺物（第51図）は須恵器高台付椀、土師器甕、土錘がある。２・５は覆土、３・４・６は北東側に広がる焼土から検出された。土器は底部のみの検出である。土錘は４のみ完形品である。

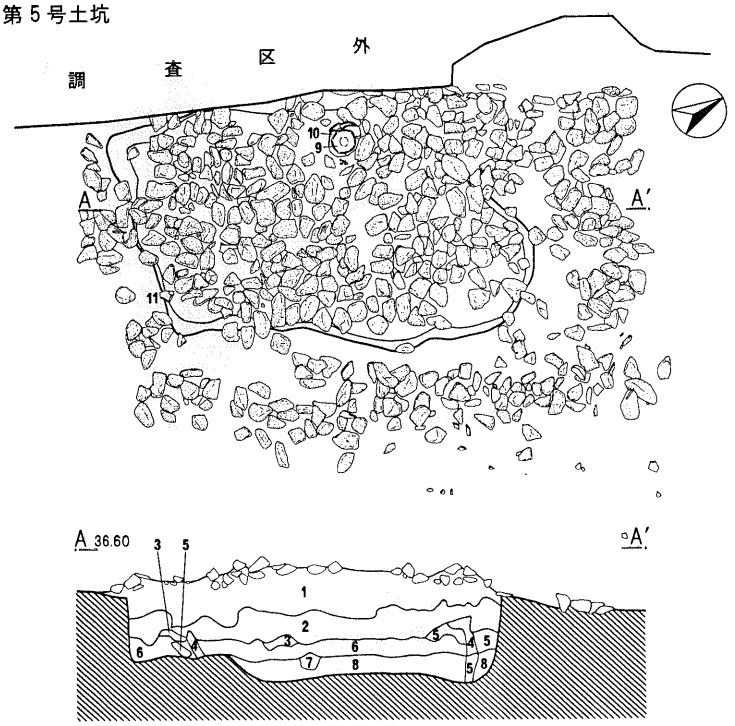
これらの遺物から本土坑の帰属する時期は、９世紀後半と思われる。

第５号土坑（第41図）

第４区Ｅ－19・20グリッドに位置する。北西部で１号埋甕に切られ、西側は調査区外にある。

長軸は2.02ｍ、短軸は不明であるが1.4ｍ程のいびつな長方形を呈すると思われる。確認面からの深さ

第５号土坑



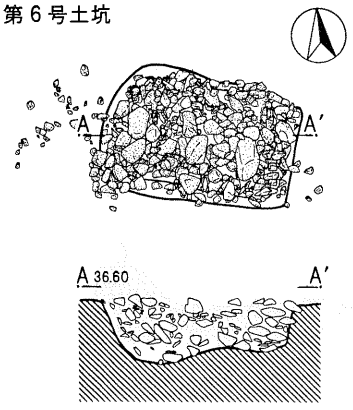
第５号土坑

土層説明（ＡＡ′）

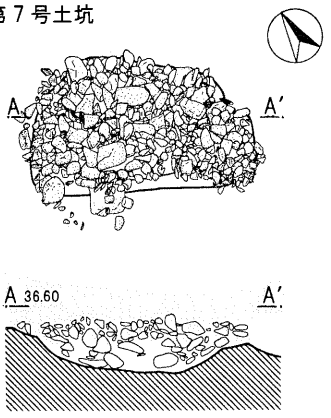
1 黒褐色土：焼土、ロームブロック少量、ローム粒多量含む。
2 黒褐色土：焼土少量、ローム粒・ブロック多量含む。
3 黒褐色土：焼土、ロームブロック少量、ローム粒多量含む。１層とほぼ同じ。
4 暗褐色土：焼土、ローム粒少量含む。しまり無。
5 黄褐色土：焼土、ローム粒含む。しまり無。
6 黒褐色土：焼土、ローム粒少量含む。
7 暗褐色土：焼土含む。
8 暗褐色土：ローム粒少量含む。

0 1m 1：40

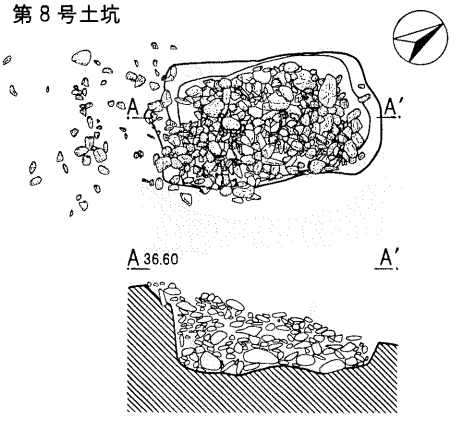
第６号土坑



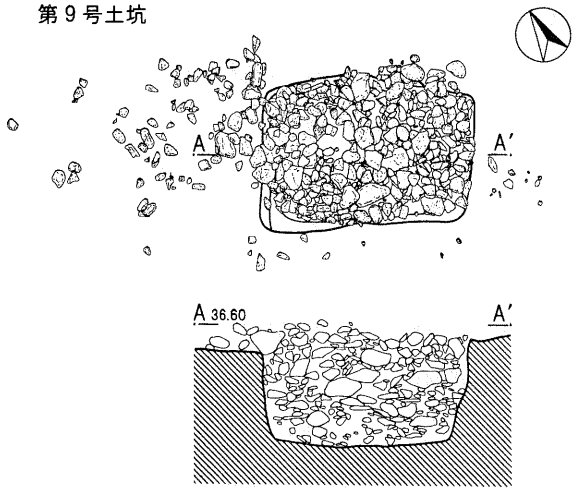
第７号土坑



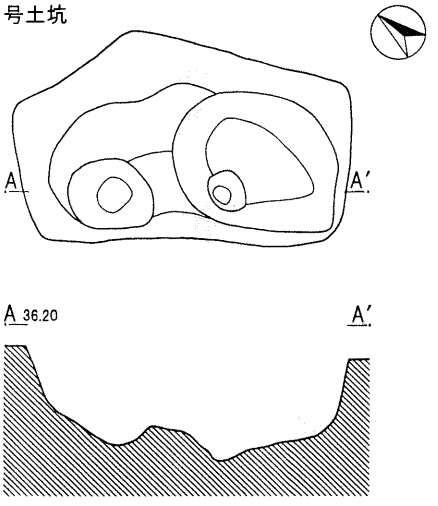
第８号土坑



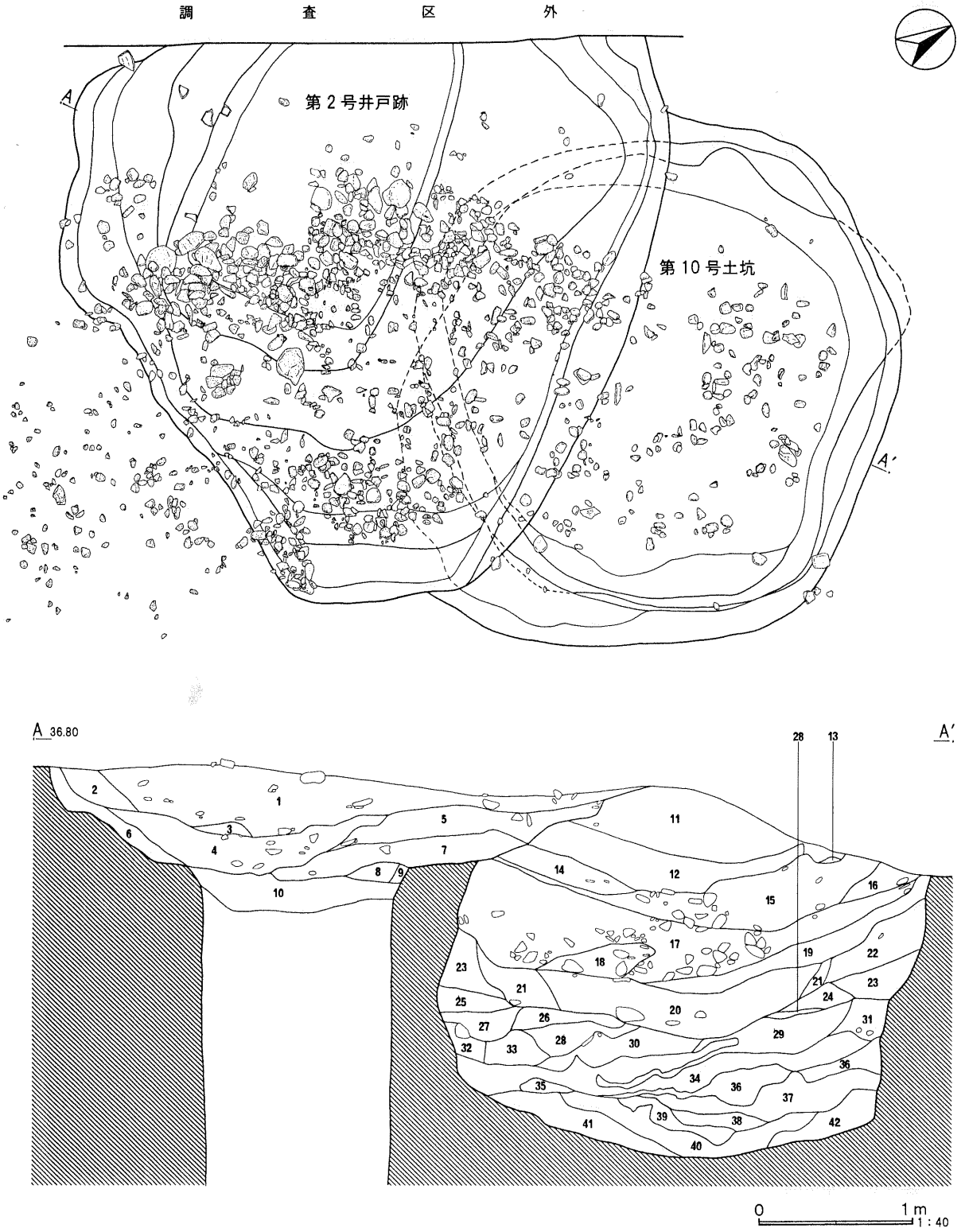
第９号土坑



第11号土坑



第41図　第５～９・11号土坑



第42図　第10号土坑・第２号井戸跡

は南側で0.35 m前後、北側の一段下がった所で0.46 mを測り、後者が本土坑で最も深い。覆土はほぼ帯状に堆積し、人為的に埋め戻されたと思われる。覆土上面には10 cm前後の礫がみられ、土坑外にも広

第２号井戸跡・第10号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：１～２cmの礫多量、５～10cmの礫、片岩少量含む。
2 暗褐色土：１～２cmの礫少量含む。
3 黄褐色土：0.5cmの礫、ロームブロック多量含む。
4 暗褐色土：２～５cmの礫多量、ロームブロック少量含む。
5 黄褐色土：１～５cmの礫少量、ロームブロック多量含む。
6 暗褐色土：0.5～１cmの礫少量含む。
7 暗褐色土：３～４cmの礫、ローム粒少量含む。
8 暗褐色土：0.5cmの礫、ローム粒含む。
9 黄褐色土
10 暗褐色土：砂、0.5～１cmの礫、ローム粒含む。
11 暗褐色土：0.5cm及び２～３cmの礫少量含む。
12 暗褐色土：0.5～１cm及び２～３cmの礫、ロームブロック少量含む。
13 黒褐色土
14 暗褐色土：0.5～１cm礫多量、２～３cmの礫少量含む。
15 暗褐色土：１～３cm及び５～10cmの礫多量含む。
16 黒褐色土：１～２cmの礫少量含む。
17 暗褐色土：0.5～１cmの礫多量、５～10cmの礫少量含む。
18 暗褐色土：２～３cm及び８～10cmの礫少量含む。
19 暗褐色土：１～３cmの礫少量含む。
20 暗褐色土：0.5～１cmの礫多量、８～10cmの礫少量含む。
21 黄褐色土：黒褐色土含む。
22 暗褐色土：0.5～１cm及び２～３cmの礫、ロームブロック含む。
23 黒褐色土：ロームブロック含む。しまり無。
24 暗褐色土：粘性有。
25 暗褐色土：0.5cmの礫含む。粘性有。
26 暗褐色土：粘性有。
27 灰褐色土：粘性有。
28 黄褐色土：覆土南側に黒褐色土含む。
29 暗褐色土：酸化鉄、0.2～0.5cmの礫含む。
30 暗褐色土：１～２cmの礫部分的に含む。
31 暗褐色土：１～２cmの礫多量、３～４cmの礫少量含む。粘性有。
32 褐色土
33 黒褐色土
34 黄褐色土
35 暗褐色土：黒褐色土、ロームブロック含む。
36 褐色土：上層がやや黒い。
37 明黄褐色土
38 暗褐色土
39 黄褐色土：粘性有。
40 黒褐色土：シルト質。
41 褐色土：シルト質。
42 黄褐色土：黒褐色土、ローム粒含む。

がっていた。用途は不明であるが、礫は４号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。

出土遺物（第51図）はかわらけ、須恵器坏、高台付椀、皿、土師器坏がある。９～11は礫中から出土し、９・10は重なって検出された。その他は覆土からの検出である。８は手づくねであり、13世紀前半代に位置づけられる。ほぼ完形品。摩滅が顕著であった。須恵器は10が高台部を欠くが、いずれも残りが良いものである。土師器坏はいずれも破片である。

本土坑の帰属する時期は遺物９～11の出土状況からすると９世紀後半代に思えるが、礫やかわらけの存在、周辺遺構との関係からみて13世紀前半代と判断した。９～11は礫中に据えられた状況で検出されたことから、なんらかの目的で二次的に利用されたものと思われる。

第６号土坑（第41図）

第４区Ｇ－19グリッドに位置する。籠原裏古墳群４号墳の墳丘を切っている。

長軸1.02ｍ、短軸0.7ｍの長方形を呈する。確認面からの深さは最大0.31ｍを測る。覆土はローム粒を含む黒色土で１～23cm程の礫を多量含み、礫は土坑外にも散らばっていた。用途は不明であるが、人為的に埋め戻されたと思われる。礫は４号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。

出土遺物（第51図）は陶器椀、片口、鉢、折縁皿、甕、在地系の鉢、火鉢、内耳鍋がある。いずれも破片であり、礫に混じって検出された。

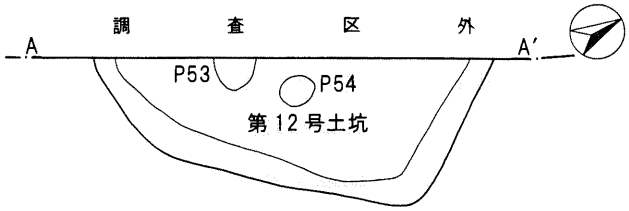
本土坑の帰属する時期は中・近世の遺物が混在しているため判然としない。よって、大まかではあるが中・近世段階としておく。中世段階のものが20～22・24・25、近世段階のものが14～19・23である。

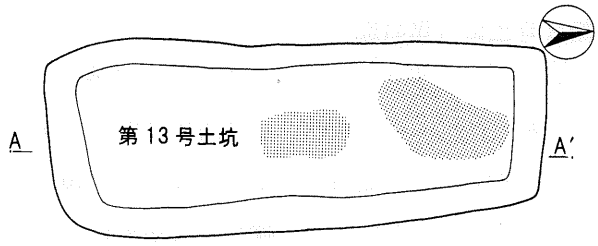
第７号土坑（第41図）

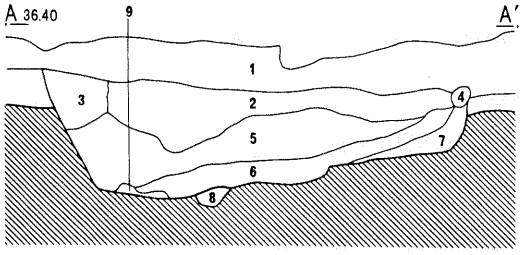
第４区Ｇ－19グリッドに位置する。６号土坑同様、籠原裏古墳群４号墳の墳丘を切っている。

長軸1.19ｍ、短軸0.73ｍの長方形を呈する。確認面からの深さは最大0.17ｍを測る。覆土はローム粒を含む黒色土で１～18cm程の礫を多量含み、礫は土坑外にも散らばっていた。用途は不明であるが人為的に埋め戻されたと思われる。礫は４号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。

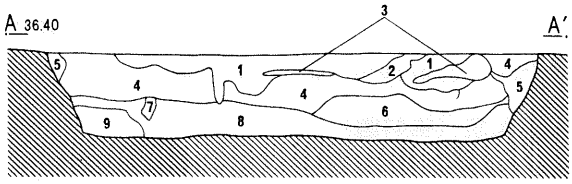
遺物は出土しなかったが、その様相から本土坑も６号土坑同様、中・近世段階としておく。





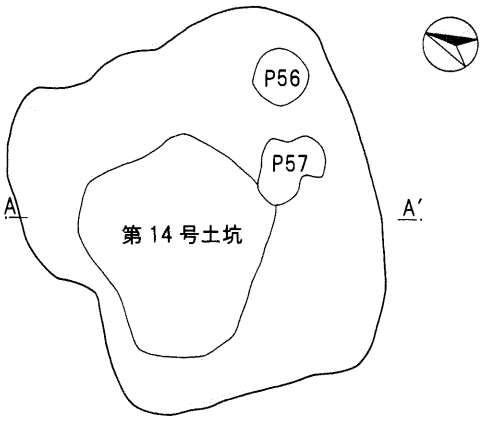


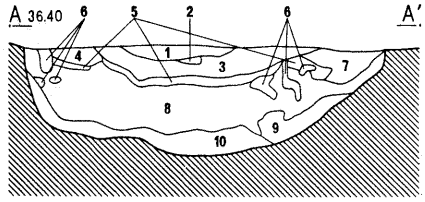
= 焼 土



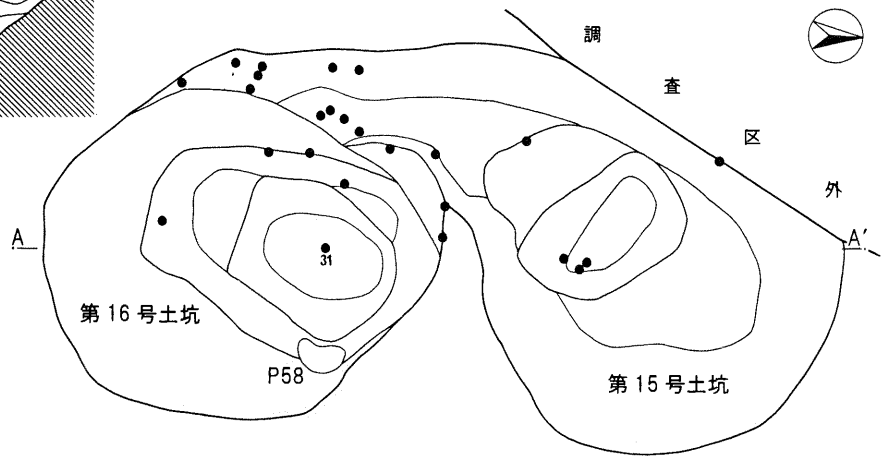
第12号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 褐 色 土：しまり・粘性無。
2 暗褐色土：火山灰含む。しまり・粘性有。
3 暗褐色土：火山灰、ローム粒含む。しまり・粘性有。２層より明るい。
4 ロームブロック
5 黒 色 土：火山灰、ローム粒含む。しまり・粘性有。
6 黒 色 土：ローム粒多量含む。しまり・粘性有。
7 黄褐色土：しまり・粘性無。
8 褐 色 土：しまり・粘性有。
9 黄褐色土

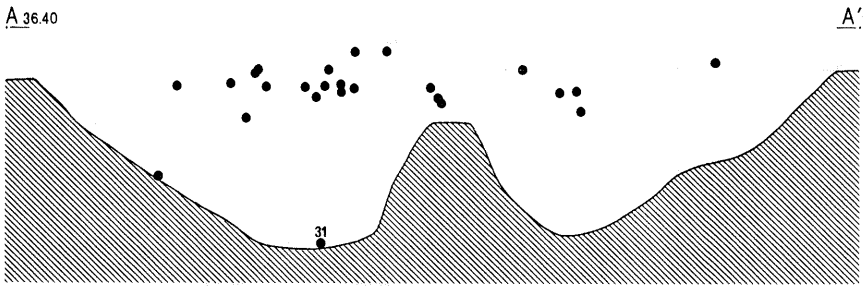
第13号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黒 色 土：ローム粒含む。しまり無。粘性有。
2 暗褐色土：ロームブロック含む。しまり・粘性有。
3 赤褐色土：焼土層。
4 暗褐色土：ローム粒含む。しまり無。粘性有。
5 暗褐色土：ローム粒微量含む。しまり無。粘性有。
6 黒 色 土：ローム粒少量含む。しまり無。粘性有。
7 ロームブロック
8 黒 色 土：ローム粒含む。しまり無。粘性有。
9 暗褐色土：ローム粒少量含む。しまり無。粘性有。





第14号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：しまり無。粘性有。
2 黒 色 土：ローム粒含む。しまり・粘性無。
3 暗灰色土：火山灰、酸化鉄含む。しまり有。粘性無。砂質。
4 暗褐色土：火山灰含む。しまり・粘性有。
5 黒 色 土：ローム粒含む。しまり・粘性無。
6 黄褐色土：ローム粒多量含む。しまり無。粘性有。
7 暗褐色土：火山灰、ローム粒含む。しまりやや無。粘性無。
8 黒 色 土：ローム粒少量含む。しまり無。粘性有。
9 暗褐色土：ローム粒・ブロック含む。しまり無。粘性有。
10 暗褐色土：ローム粒多量含む。しまり・粘性無。





● = 土 器

0 1m
1:40

第43図　第12～16号土坑

第８号土坑（第41図）

第４区Ｇ－18グリッドに位置する。籠原裏古墳群４号墳の西側周溝を切っている。

長軸1.2ｍ、短軸0.66ｍの長方形を呈する。確認面からの深さは最大0.38ｍを測る。覆土はローム粒を含む黒色土で１～18㎝程の礫を多量含み、礫は土坑南側にもみられた。用途は不明であるが、人為的に埋め戻されたと思われる。礫は４号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。

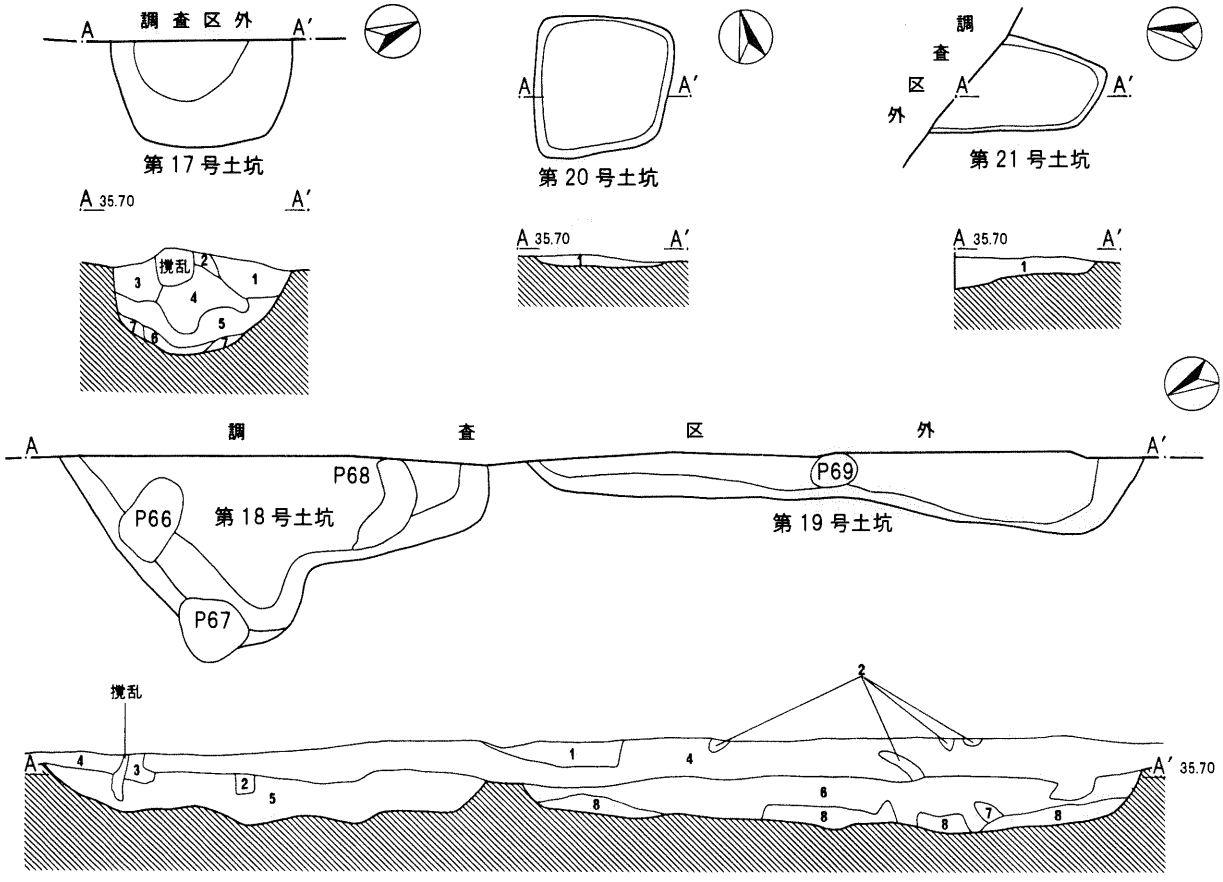
出土遺物（第51図）は不明石製品のみである。礫中から検出された。チャート製で板状を呈する。一面のみ平滑であり、一部擦痕がみられた。用途は不明である。半分を欠く。

26のみでは時期を決定するのは難しいが、その様相から本土坑も中・近世段階としておく。

第９号土坑（第41図）

第４区Ｈ－19グリッドに位置する。８号土坑同様、籠原裏古墳群４号墳の西側周溝を切っている。

長軸1.12ｍ、短軸0.82ｍの長方形を呈する。確認面からの深さは最大0.54ｍを測る。覆土はローム粒



第17号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：スコリア微量、ローム粒少量含む。しまり有。粘性無。
2 褐 色 土：ローム粒微量含む。しまり・粘性有。
3 褐 色 土：ローム粒含む。しまり有。粘性無。
4 褐 色 土：しまり有。粘性無。
5 暗褐色土：スコリア、ローム粒微量含む。しまり有。粘性無。
6 暗褐色土：しまりやや無。粘性無。
7 暗褐色土：しまり有。粘性無。

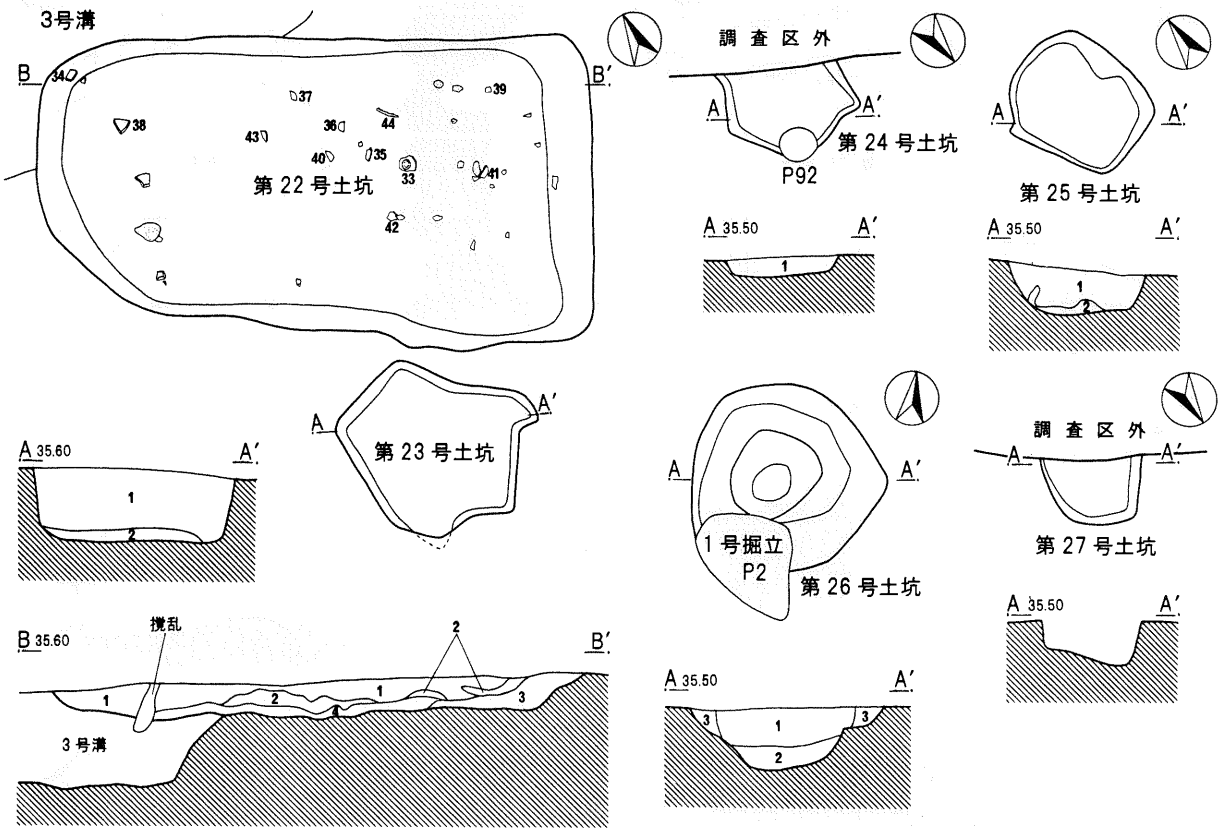
第18・19号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 褐 色 土：ローム粒少量含む。しまり・粘性有。
2 暗褐色土：しまり・粘性無。
3 黄褐色土：ローム粒多量含む。しまり・粘性無。
4 褐 色 土：ローム粒少量含む。しまり・粘性有。
5 暗褐色土：ローム粒微量含む。しまり・粘性無。
6 暗褐色土：ローム粒含む。しまり有。粘性無。5層より明るい。
7 暗褐色土：ローム粒多量含む。しまり・粘性無。
8 暗褐色土：しまり・粘性有。

第20号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：ロームブロック多量含む。

第21号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：ローム粒・ブロック含む。

0　1ｍ　1：40

第44図　第17～21号土坑



第22号土坑
土層説明（ＢＢ′）
1 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒含む。
2 暗褐色土：焼土、ローム粒少量、炭化物多量含む。
3 暗褐色土：黄褐色粒、焼土、炭化物、ローム粒含む。
4 暗褐色土：炭化物少量、ローム粒多量含む。

第23号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：ローム粒・ブロック含む。
2 暗褐色土：ロームブロック含む。

第24号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：褐色ブロック含む。

第25号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：ローム粒・ブロック少量含む。
2 暗褐色土：ロームブロック多量含む。

第26号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒含む。
2 暗褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
3 暗褐色土：ローム粒・ブロック含む。

0 1m 1：40

第45図　第22～27号土坑

を含む黒色土で１～20cm程の礫を多量含み、礫は土坑外にも散らばっていた。用途は不明であるが、人為的に埋め戻されたと思われる。礫は４号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。

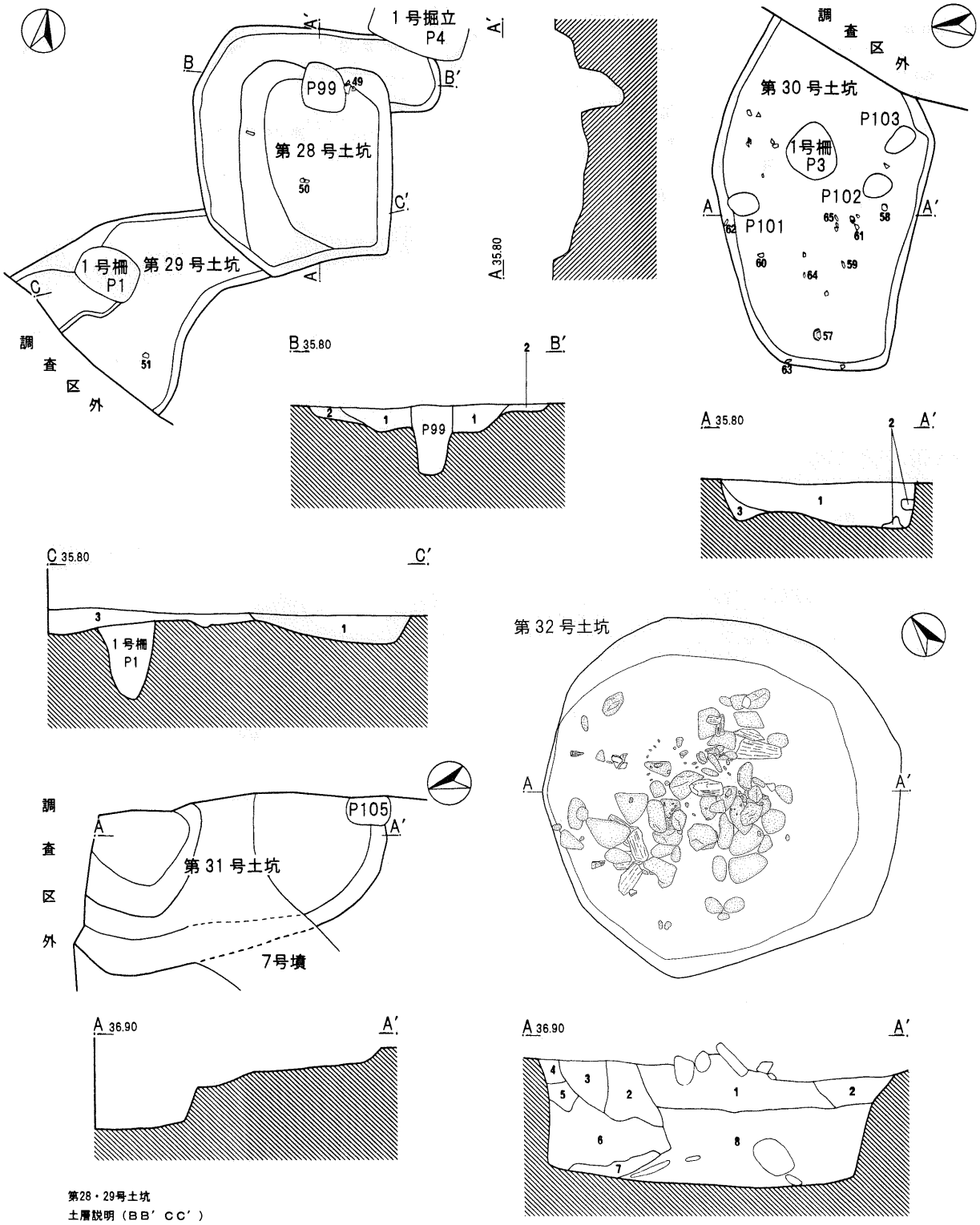
出土遺物（第52図）は陶器天目茶椀、須恵器坏、不明石製品がある。すべて礫中から検出された。27は口縁部のみ検出された。28は流れ込み。29の不明石製品はチャート製。欠損箇所が多いが表面が平滑であり、棒状を呈する。用途は不明である。

本土坑も６～８号土坑同様、その様相から中・近世段階としておく。

第10号土坑（第42図）

第４区Ｌ・Ｍ－15・16グリッドに位置する。南西部上面を第２号井戸跡に切られている。

径3.6ｍ前後の不整円形を呈する。確認面からの深さは最大で2.46ｍを測り、非常に深い。覆土はややランダムな層位であるが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。中層には礫が多量含まれていた。用途は不明であるが、礫は籠原裏古墳群の葺石や石室に使用されたものと思われる。



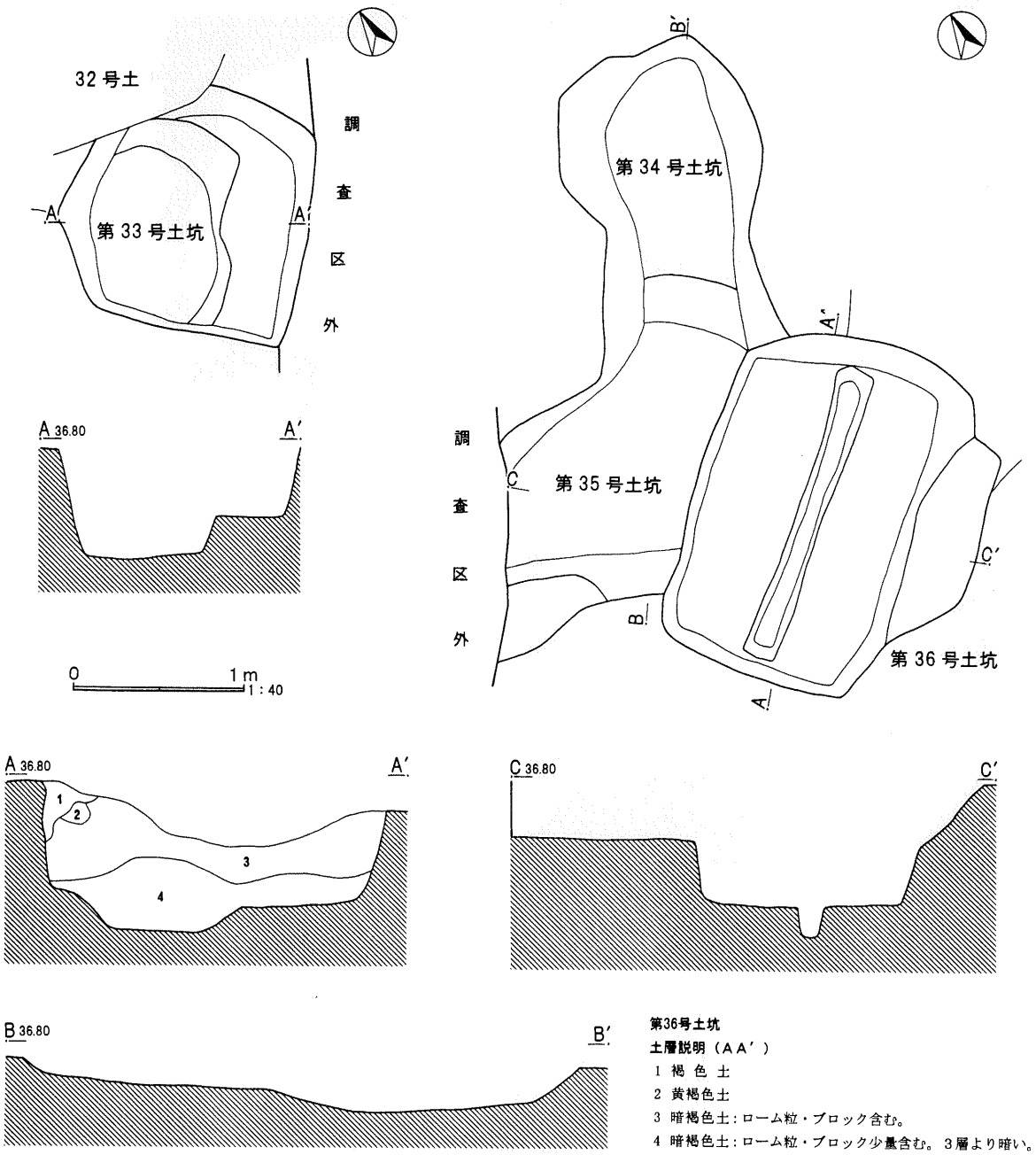
第28・29号土坑
土層説明（BB′ CC′）
1 黒褐色土：黄褐色粒、炭化物、ローム粒含む。
2 黒褐色土：焼土、ローム粒含む。
3 暗褐色土：砂、ローム粒含む。

第30号土坑
土層説明（AA′）
1 黒褐色土：褐色ブロック、焼土、炭化物、ロームブロック含む。
2 褐色ブロック
3 黒褐色土

第32号土坑
土層説明（AA′）
1 暗褐色土：砂、礫多量含む。
2 灰黄褐色土
3 黒褐色土：ローム粒・ブロック含む。
4 黒褐色土：ローム粒含む。
5 暗褐色土：砂、礫含む。
6 黒　色　土：灰黄褐色ブロック含む。
7 褐　色　土
8 暗褐色土：灰黄褐色土多量含む。

0　1m
1：40

第46図　第28～32号土坑



第47図　第33～36号土坑

出土遺物（第52図）は在地系の甕のみである。覆土から検出された。胴上部のみの検出である。

本土坑の帰属する時期は、出土遺物や覆土の様相等から中世と思われる。

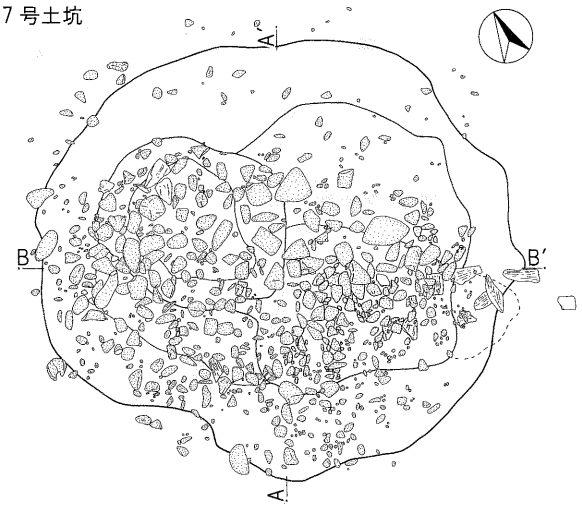
第16号土坑（第43図）

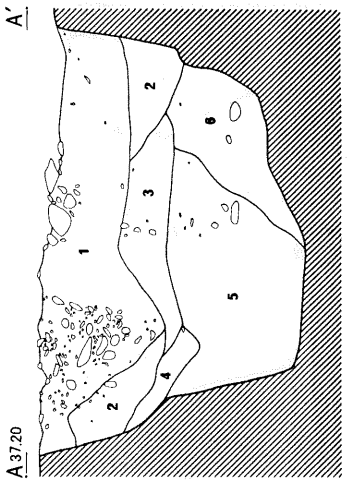
第4区Q・R－12・13グリッドに位置する。北西部で15号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

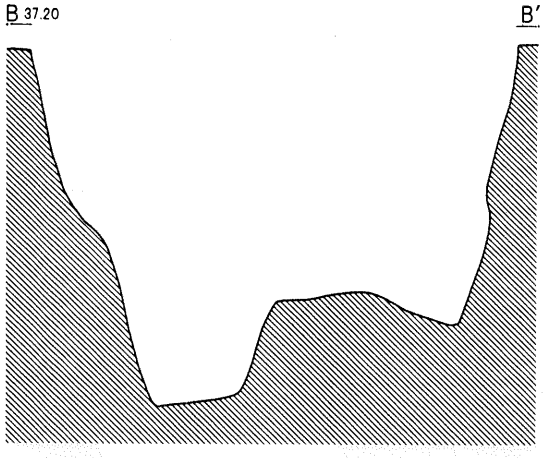
長軸2.29m、短軸1.82mの不整円形を呈する。確認面からの深さは最大0.92mを測る。覆土は図示できなかったが、ローム粒を含む暗褐色土であった。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第52図）で図示可能なものは須恵器長頸瓶のみである。底面から出土した。頸部のみ検出された。胎土は白っぽい。湖西産か。

第 37 号土坑





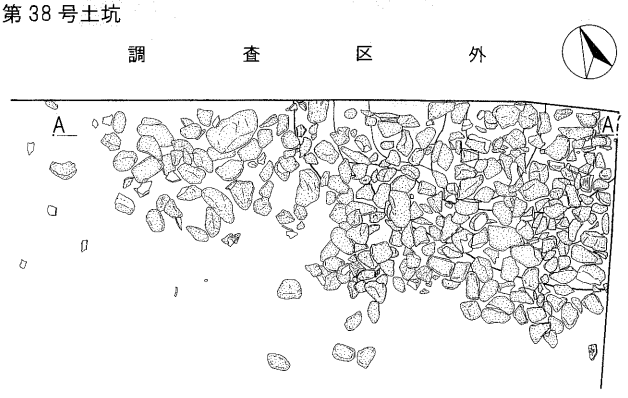


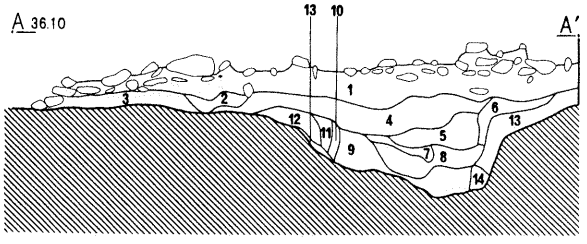
第37号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1 暗褐色土：焼土、炭化物少量、礫、ローム粒多量含む。
2 暗褐色土：ローム粒・ブロック含む。
3 暗褐色土：炭化物、礫、ローム粒・ブロック含む。
4 暗褐色土：ロームブロック含む。
5 暗褐色土：礫、ローム粒含む。
6 暗褐色土：炭化物、ローム粒含む。

第 38 号土坑





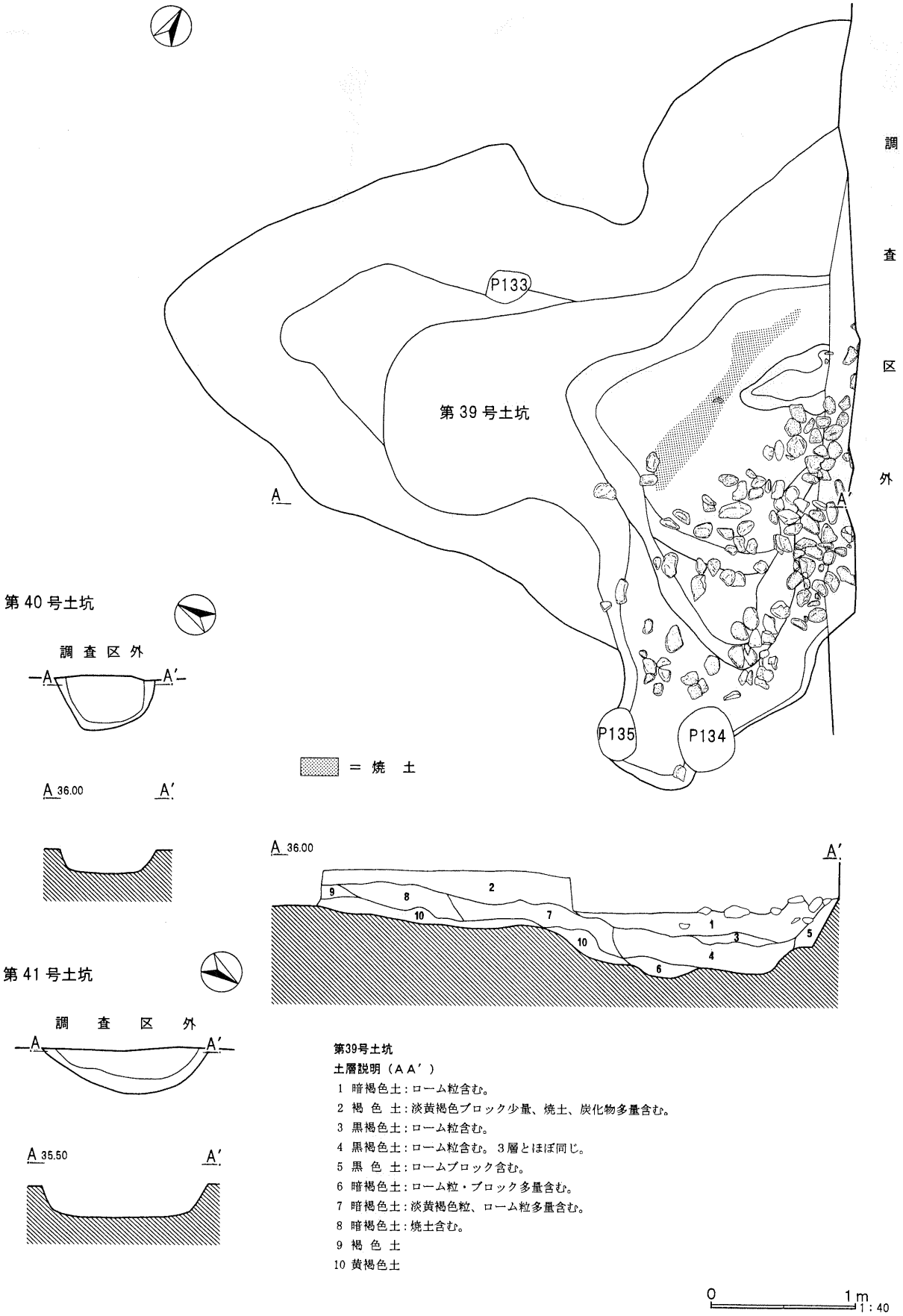
第38号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1 暗褐色土：ローム粒少量含む。
2 暗褐色土：黒色粒、ローム粒・ブロック含む。
3 褐　色　土
4 暗褐色土：ローム粒含む。1層より暗い。
5 暗褐色土：ローム粒微量含む。
6 褐　色　土
7 黒　色　土
8 暗褐色土
9 黄褐色土：黒色粒、ロームブロック多量含む。
10 淡黄色土
11 黒褐色土
12 暗褐色土
13 褐　色　土
14 黄褐色土

0　1m
1：40

第48図　第37・38号土坑

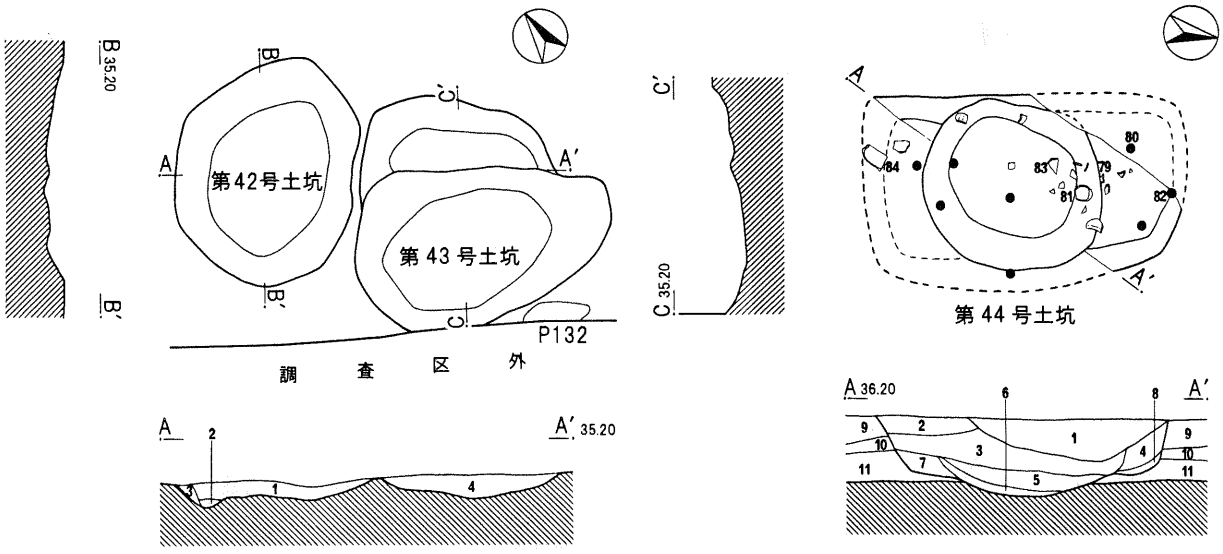


第39号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1 暗褐色土：ローム粒含む。
2 褐 色 土：淡黄褐色ブロック少量、焼土、炭化物多量含む。
3 黒褐色土：ローム粒含む。
4 黒褐色土：ローム粒含む。３層とほぼ同じ。
5 黒 色 土：ロームブロック含む。
6 暗褐色土：ローム粒・ブロック多量含む。
7 暗褐色土：淡黄褐色粒、ローム粒多量含む。
8 暗褐色土：焼土含む。
9 褐 色 土
10 黄褐色土

第49図　第39～41号土坑



第42・43号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：ロームブロック多量含む。
2 暗褐色土：ロームブロック含む。
3 暗褐色土：ロームブロック主体。
4 暗褐色土：ロームブロック多量含む。

0　1m
1：40

第44号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：黒褐色粒、焼土、炭化物、ローム粒含む。
2 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒・ブロック含む。
3 暗褐色土：焼土多量、黒褐色粒、炭化物、ローム粒少量含む。
4 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム粒含む。
5 黒褐色土：焼土、炭化物、ローム粒含む。
6 暗褐色土：黒褐色粒、焼土、炭化物含む。
7 暗褐色土：黒褐色粒・ブロック、焼土、ローム粒含む。
8 暗褐色土：黒褐色粒、焼土、炭化物含む。
9 黒褐色土：焼土、ローム粒含む。
10 黒褐色土：焼土微量含む。９層より暗い。
11 暗褐色土

第50図　第42～44号土坑

上記の遺物から本土坑の帰属する時期は古墳時代末期と思われ、籠原裏古墳群と唯一同時期の遺構である。古墳群に関連する可能性が高い。

第37号土坑（第48図）

第５区ＡＢ・ＡＣ－６・７グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

長軸2.61ｍ、短軸2.34ｍの不整円形を呈する。確認面からの深さは最大1.89ｍである。覆土はレンズ状に堆積していたが、人為的に埋め戻されたと思われる。１層には焼土や炭化物の他に３～25㎝程の礫を多量含み、礫は土坑外にも散らばっていた。用途は不明であるが、８号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。

出土遺物（第53図）は陶器甕、古銭がある。覆土検出である。69は肩部片。70は北宋銭・紹聖元宝。

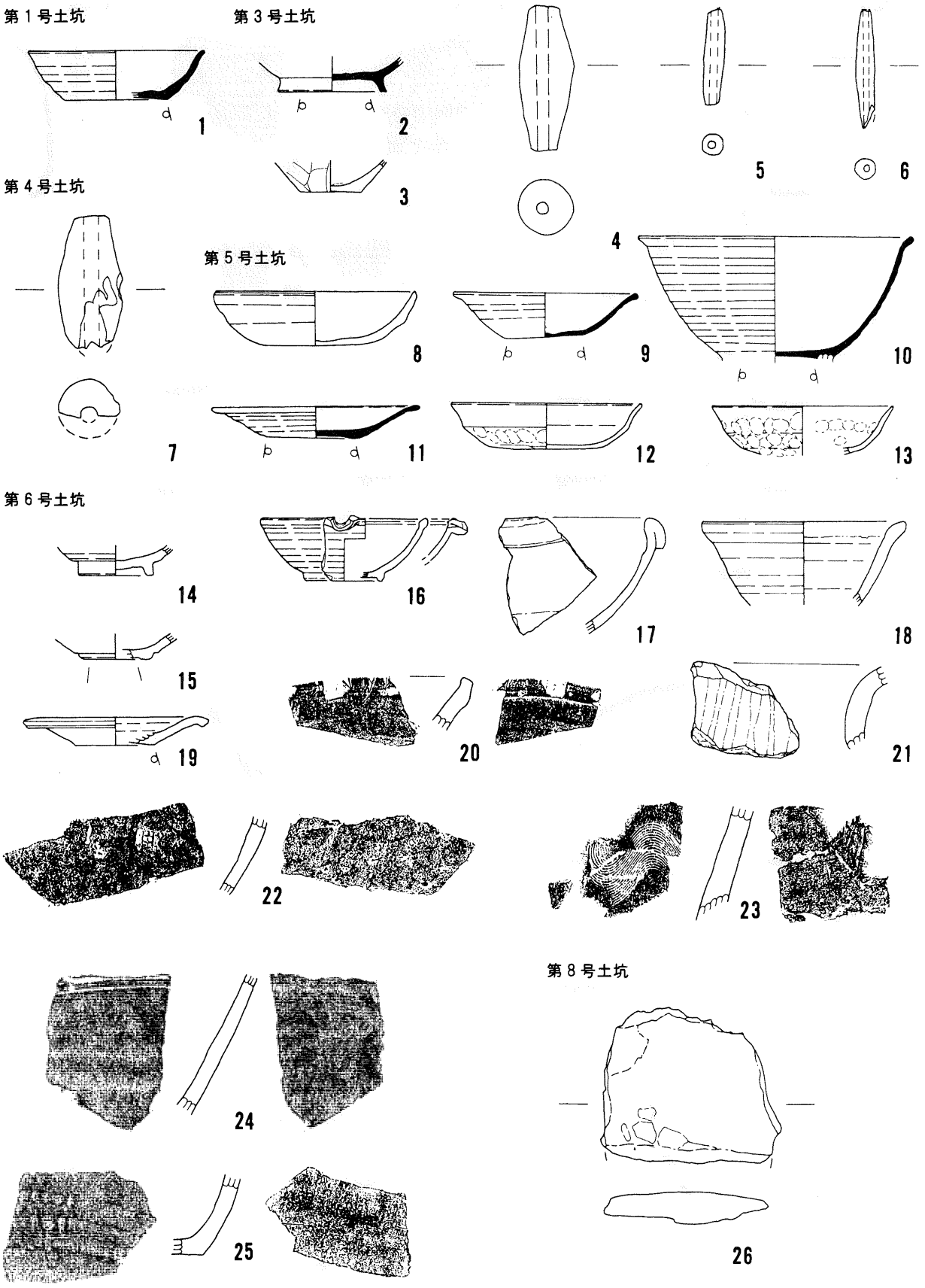
上記の遺物から、本土坑の帰属する時期は中世と思われる。

第38号土坑（第48図）

第１区Ｃ－35グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。北側と東側は調査区外にある。

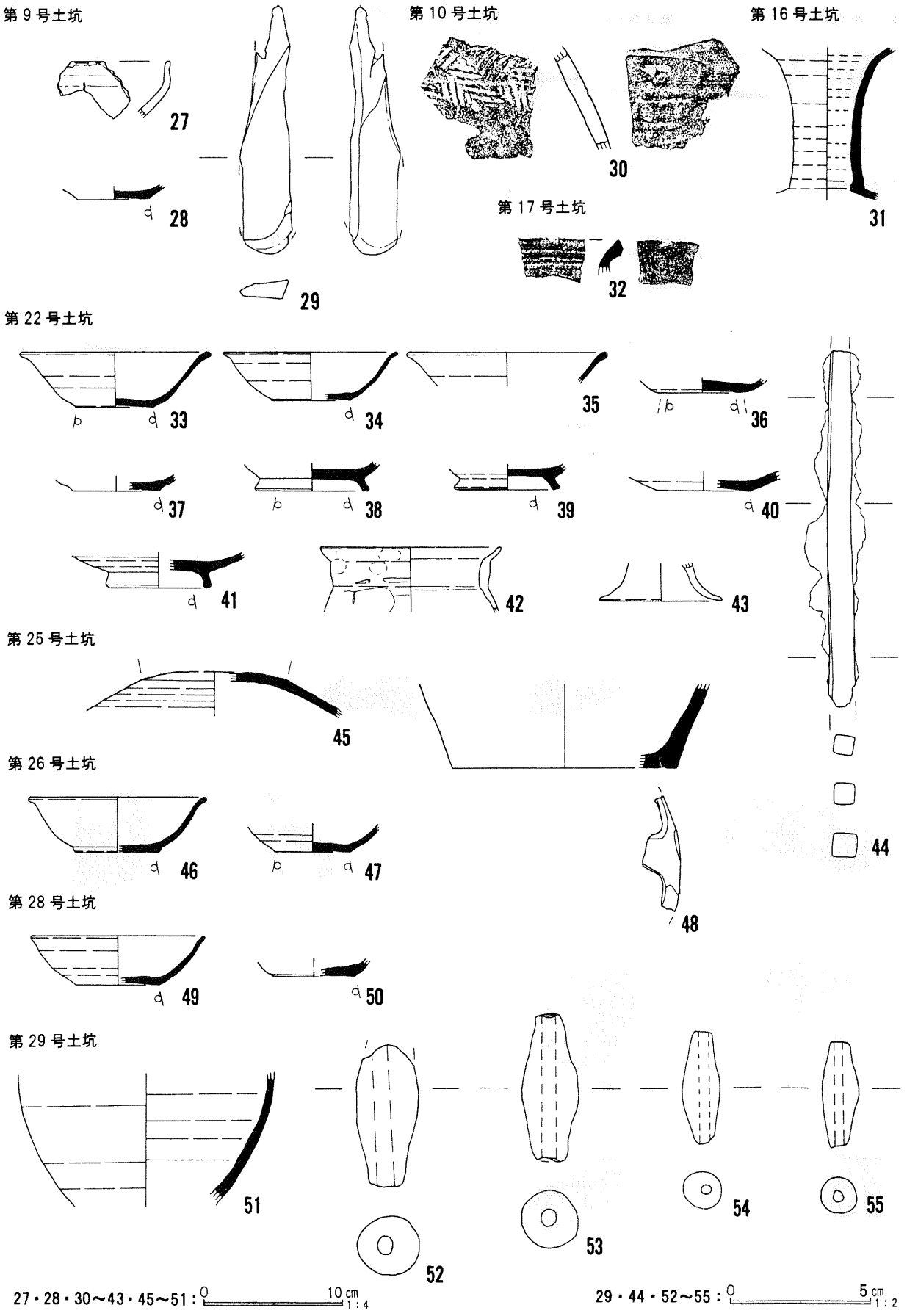
規模及び平面形は不明であるが、検出した南北は調査区境で0.97ｍ、東西は1.75ｍを測る。確認面からの深さは最大0.71ｍである。覆土上面には5～30㎝程の礫が多量に広がっており、土坑外にも散らばっていた。用途は不明であるが、１号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。覆土はレンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第53図）は須恵器高台付椀、甕、土師器坏、甕、縄文土器・深鉢がある。すべて流れ込みと思われる。覆土から検出された。縄文土器・深鉢は縄文時代中期中葉のものである。すべて胴部片で



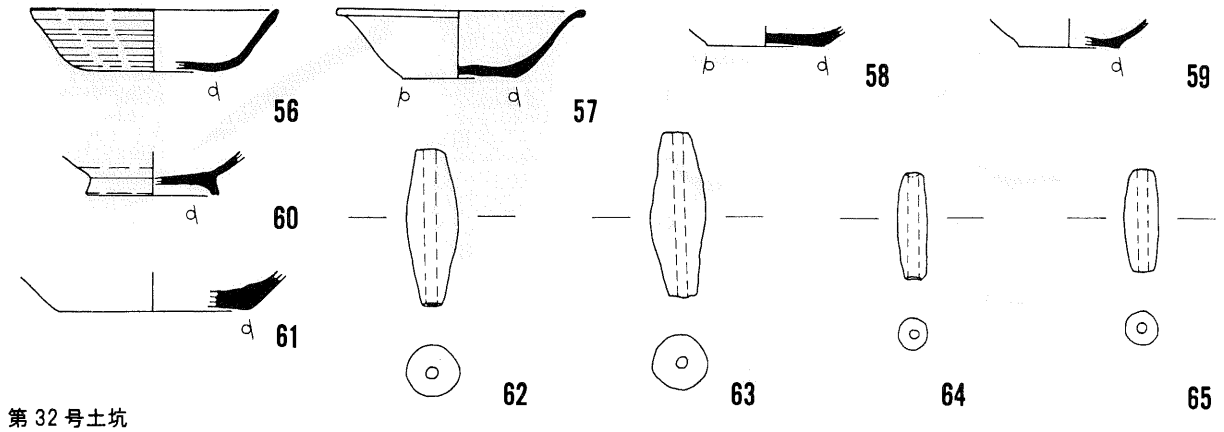
1～3・8～25：0 10cm 1:4　4～7・26：0 5cm 1:2

第51図　土坑出土遺物（1）

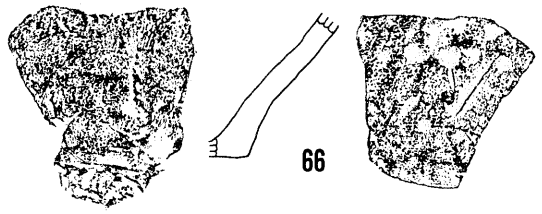


第52図　土坑出土遺物（2）

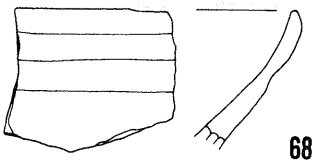
第30号土坑



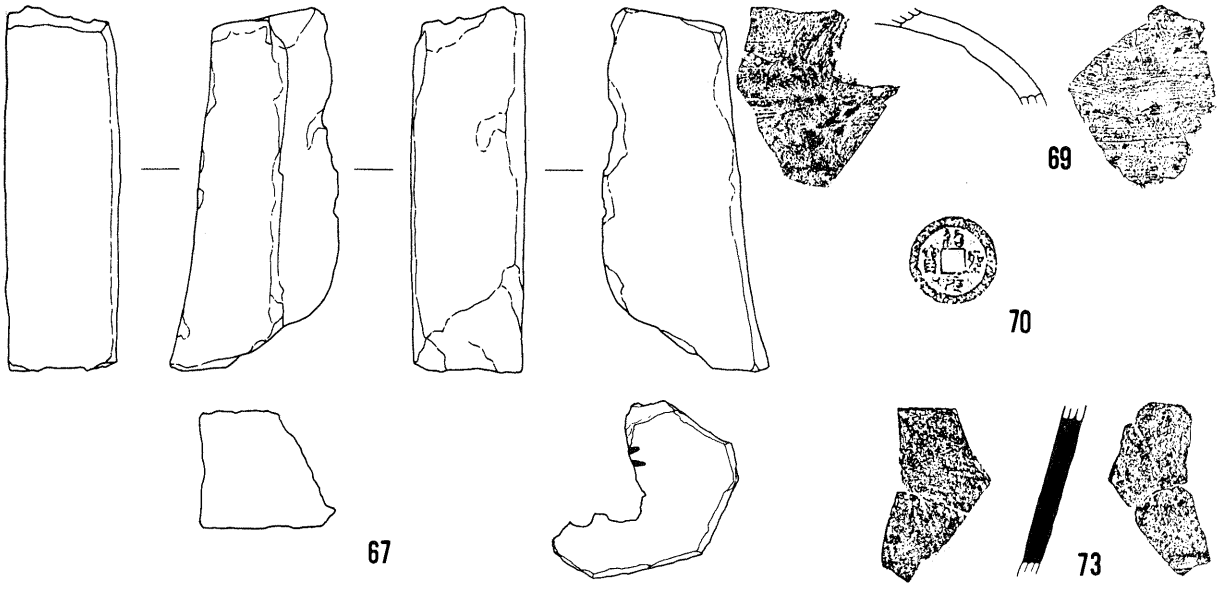
第32号土坑



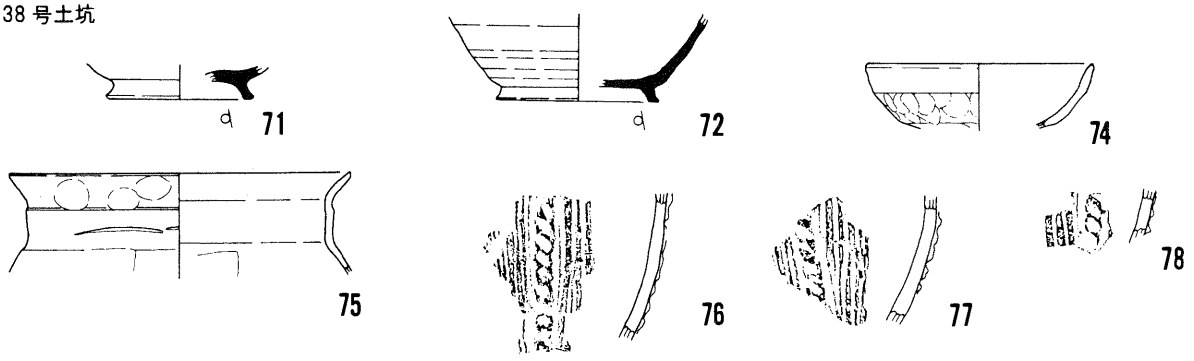
第36号土坑



第37号土坑



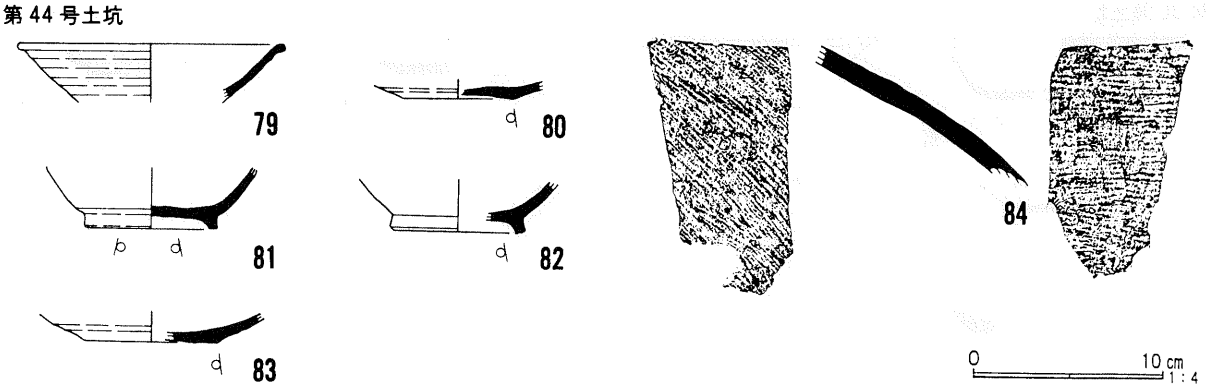
第38号土坑



56～61・66・68・69・71～78：0 10cm 1:4　62～65・67・70：0 5cm 1:2

第53図　土坑出土遺物（3）

第44号土坑



第54図　土坑出土遺物（4）

第19表　土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	第1号土坑	須恵器　坏	(12.4)	(3.4)	(7.2)	ABFN	灰色	C	30%	南比企産。
2	第2号土坑	須恵器高台椀	－	(2.4)	7.6	ABDLN	灰色	B	95%	末野産。
3	第2号土坑	土師器　甕	－	(2.2)	(4.2)	ABGHMN	にぶい褐色	B	25%	
4	第2号土坑	土　錘	最大長5.1cm、最大径1.9cm、孔径0.4cm。重量16.8g。完形。							
5	第2号土坑	土　錘	最大長3.3cm、最大径0.7cm、孔径0.25cm。重量（1.7）g。両端一部欠。							
6	第2号土坑	土　錘	最大長4.2cm、最大径0.7cm、孔径0.2cm。重量（1.8）g。片端欠。							
7	第4号土坑	土　錘	最大長（4.65）cm、最大径（2.25）cm、孔径0.6cm。重量（11.0）g。半分欠。							
8	第5号土坑	かわらけ	14.2	3.8	－	－	橙色	C	95%	摩滅顕著。手づくね。
9	第5号土坑	須恵器　坏	13.0	3.2	5.4	ABHL	黄灰色	A	100%	末野産。
10	第5号土坑	須恵器高台椀	19.3	(8.8)	－	ABDGL	灰黄色	C	70%	末野産。
11	第5号土坑	須恵器　皿	(14.7)	2.3	6.3	ABGHLM	灰白色	B	60%	末野産。
12	第5号土坑	土師器　坏	(13.4)	3.2	(8.0)	AGHJK	橙色	B	30%	
13	第5号土坑	土師器　坏	(12.8)	(3.4)	(8.5)	ABHJKM	橙色	A	25%	
14	第6号土坑	陶器　椀	－	(2.1)	5.2	－	にぶい黄橙色	A	80%	瀬戸美濃産。
15	第6号土坑	陶器　椀	－	(1.8)	(5.0)	－	浅黄色	A	40%	瀬戸美濃産。内面灰釉。
16	第6号土坑	陶器　片口	(11.7)	4.5	(5.6)	－	オリーブ色	A	20%	瀬戸美濃産。内外面灰釉。
17	第6号土坑	陶器　鉢	－	(8.0)	－	－	灰オリーブ色	A	口縁部片	瀬戸美濃産。内外面灰釉。
18	第6号土坑	陶器　鉢	(14.4)	(5.8)	－	－	にぶい赤褐色	A	20%	瀬戸美濃産。外面鉄釉。
19	第6号土坑	陶器　折縁皿	(13.0)	1.95	(5.5)	－	浅黄色	A	15%	口縁部外面、内面鉄釉。
20	第6号土坑	土器　鉢	－	－	－	－	灰色	A	口縁部片	在地系。須恵質。
21	第6号土坑	陶器　甕	－	－	－	－	にぶい赤褐色	A	頸部片	常滑産。
22	第6号土坑	陶器　甕	－	－	－	－	赤褐色	A	胴下部片	常滑産。
23	第6号土坑	土器　火鉢	－	－	－	－	にぶい赤褐色	A	胴下部片	在地系。土師質。
24	第6号土坑	土器　内耳鍋	－	－	－	－	灰色	B	胴部片	在地系。瓦質。
25	第6号土坑	土器　内耳鍋	－	－	－	－	黒褐色	B	底部片	在地系。瓦質。
26	第8号土坑	不明石製品	最大長（5.5）cm、最大幅6.3cm、最大厚1.15cm。重量55g。チャート。半分欠？一面のみ平滑。擦痕有。							
27	第9号土坑	陶器天目茶椀	－	(4.0)	－	－	浅黄色	A	10%	瀬戸美濃産。内外面鉄釉。
28	第9号土坑	須恵器　坏	－	(1.1)	(5.2)	ABDK	にぶい黄橙色	C	45%	産地不明。
29	第9号土坑	不明石製品	最大長8.9cm、最大幅（1.8）cm、最大厚0.7cm。重量1.5g。チャート。半分欠？棒状。表面平滑。							
30	第10号土坑	土器　甕	－	－	－	－	灰色	A	胴上部片	在地系。須恵質。
31	第16号土坑	須恵器長頸瓶	－	(10.9)	－	AB	灰白色	A	75%	湖西産？内外面自然釉有。
32	第17号土坑	須恵器　甕	－	－	－	ABDLN	灰色	B	口縁部片	末野産。
33	第22号土坑	須恵器　坏	(13.7)	3.9	5.6	ABEGHLN	オリーブ灰色	C	70%	末野産。
34	第22号土坑	須恵器　坏	(12.5)	3.4	(5.7)	ABLN	灰色	A	25%	末野産。
35	第22号土坑	須恵器　坏	(14.4)	(2.4)	－	ABDLN	灰黄色	C	30%	末野産。
36	第22号土坑	須恵器　坏	－	(1.0)	6.0	ABEFH	灰色	A	50%	南比企産。
37	第22号土坑	須恵器　坏	－	(1.1)	(6.2)	ACDGKL	褐色	C	25%	末野産。
38	第22号土坑	須恵器高台椀	－	(2.0)	(8.2)	ABGHLM	灰色	B	40%	末野産。
39	第22号土坑	須恵器高台椀	－	(1.8)	(7.6)	ABDGMN	浅黄色	C	35%	末野産？
40	第22号土坑	須恵器　皿	－	(1.4)	(6.8)	ABHL	黄灰色	A	30%	末野産。
41	第22号土坑	須恵器高台皿	－	(2.5)	(7.6)	AGHLN	灰色	B	40%	末野産。
42	第22号土坑	土師器　甕	(13.0)	(4.6)	－	ABHKM	にぶい橙色	B	15%	№43と同一個体？
43	第22号土坑	土師器台付甕	－	(2.7)	(8.8)	ABHJKM	にぶい橙色	A	25%	№42と同一個体？
44	第22号土坑	不明鉄製品	最大長（12.7）cm、最大幅0.85cm、最大厚0.85cm。重量（48.9）g。両端欠。棒状。							

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
45	第25号土坑	須恵器　蓋	－	(3.2)	－	ADGLMN	にぶい黄色	C	40%	末野産。
46	第26号土坑	須恵器　坏	(12.8)	4.0	(6.2)	ABEGN	黄灰色	B	15%	末野産？
47	第26号土坑	須恵器　坏	－	(2.0)	5.4	ABGKM	暗褐色	B	90%	末野産？
48	第26号土坑	須恵器　甑	－	(6.0)	(16.0)	ABHL	灰色	A	10%	末野産。底部ヘラ削り。
49	第28号土坑	須恵器　坏	(12.5)	3.5	(6.0)	ABHLM	灰白色	B	30%	末野産。
50	第28号土坑	須恵器　坏	－	(1.3)	(6.0)	ABGHL	灰黄褐色	C	25%	末野産。
51	第29号土坑	須恵器長頸瓶	－	(9.8)	－	ABL	灰オリーブ色	B	30%	末野産。内面一部、外面自然釉有。
52	第29号土坑	土　錘	最大長（5.1）cm、最大径2.2cm、孔径0.6cm。重量（21.1）g。片端欠。							
53	第29号土坑	土　錘	最大長5.3cm、最大径2.0cm、孔径0.5cm。重量（16.2）g。片端一部欠。							
54	第29号土坑	土　錘	最大長4.0cm、最大径1.35cm、孔径0.35cm。重量（6.2）g。片端一部欠。							
55	第29号土坑	土　錘	最大長3.8cm、最大径1.35cm、孔径0.3cm。重量5.6g。完形。							
56	第30号土坑	須恵器　坏	(13.1)	(3.2)	(6.6)	ADLN	灰色	A	15%	末野産。
57	第30号土坑	須恵器　坏	13.1	3.6	6.0	ABHL	灰色	A	60%	末野産。
58	第30号土坑	須恵器　坏	－	(1.1)	6.2	ABHLN	褐灰色	A	80%	末野産。
59	第30号土坑	須恵器　坏	－	(1.5)	(5.3)	ABDN	灰黄褐色	B	30%	末野産？
60	第30号土坑	須恵器高台椀	－	(2.3)	7.0	ABJN	灰色	A	50%	末野産？
61	第30号土坑	須恵器　甕	－	(2.0)	(10.0)	AGL	褐灰色	A	25%	末野産。
62	第30号土坑	土　錘	最大長4.15cm、最大径1.35cm、孔径0.3cm。重量6.6g。完形。							
63	第30号土坑	土　錘	最大長4.3cm、最大径1.45cm、孔径0.3cm。重量7.8g。完形。							
64	第30号土坑	土　錘	最大長2.85cm、最大径0.8cm、孔径0.3cm。重量1.7g。完形。							
65	第30号土坑	土　錘	最大長2.75cm、最大径0.9cm、孔径0.25cm。重量2.1g。完形。							
66	第32号土坑	陶器　鉢	－	－	－	－	灰黄色	B	底部片	常滑産。
67	第32号土坑	不明石製品	最大長9.6cm、最大幅3.8cm、最大厚3.15cm。重量126g。片岩。完形？三面平。							
68	第36号土坑	土器　鉢	－	－	－	－	黄灰色	C	口縁部片	在地系。
69	第37号土坑	陶器　甕	－	－	－	－	赤褐色	B	肩部片	常滑産。
70	第37号土坑	紹聖元宝	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.15cm。重量2.6g。完形。北宋銭。初鋳年1094年。							
71	第38号土坑	須恵器高台椀	－	(1.8)	(7.8)	ABGL	灰色	B	30%	末野産。
72	第38号土坑	須恵器高台椀	－	(4.6)	(8.7)	ABDGKM	にぶい黄橙色	B	45%	末野産？底部内面墨書有。
73	第38号土坑	須恵器　甕	－	－	－	ABDHL	黄灰色	C	胴下部片	末野産。
74	第38号土坑	土師器　坏	(12.0)	3.4	(8.0)	ABKHM	にぶい橙色	B	30%	
75	第38号土坑	土師器　甕	(18.0)	(5.3)	－	ABEJKM	にぶい褐色	A	15%	
76	第38号土坑	縄文土器深鉢	－	－	－	ABHMN	明褐色	B	胴部片	縄文中期中葉。77・78と同一個体。
77	第38号土坑	縄文土器深鉢	－	－	－	ABHMN	明褐色	B	胴部片	縄文中期中葉。76・78と同一個体。
78	第38号土坑	縄文土器深鉢	－	－	－	BEKMN	明褐色	B	胴部片	縄文中期中葉。76・77と同一個体。
79	第44号土坑	須恵器　坏	(14.1)	(3.1)	－	ABL	灰色	A	25%	末野産。
80	第44号土坑	須恵器　坏	－	(0.95)	(5.8)	AGLN	灰色	B	45%	末野産。
81	第44号土坑	須恵器高台椀	－	(3.2)	7.0	ADGHLMN	暗黄灰色	B	60%	末野産。
82	第44号土坑	須恵器高台椀	－	(2.7)	(7.1)	ABGKL	灰色	A	30%	末野産。
83	第44号土坑	須恵器　皿	－	(1.6)	(7.0)	ABJLM	灰黄色	C	25%	末野産。
84	第44号土坑	須恵器　甕	－	－	－	ABDL	灰色	A	肩部片	末野産。

あり、同一個体と思われる。縦位方向の条線文に刻みの施された隆帯が垂下している。

出土遺物はすべて流れ込みであり、本土坑の帰属する時期はその様相から中・近世段階と思われる。

第39号土坑（第49図）

第１区Ｂ・Ｃ－34･35グリッドに位置する。所々でピットと重複しているが、新旧関係は不明である。38号土坑の北西部に隣接する。北東部は調査区外にある。

規模及び平面形は不明であるが検出した南北は5.68ｍ、東西は4.38ｍを測り、非常に大きい。確認面からの深さは0.59ｍである。覆土は10層からなる。西側で確認された２・８層には焼土を含んでいた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。覆土上面には礫が広がっていたが、量は少なく東側にのみみられた。礫の大きさは６～22cm程であった。用途は不明であるが、１号墳の葺石ないし石室に使用されたものを転用したと思われる。遺物は検出されなかった。

本土坑の帰属する時期は、覆土の様相や周辺遺構との関係等からみて中･近世段階のものと思われる。

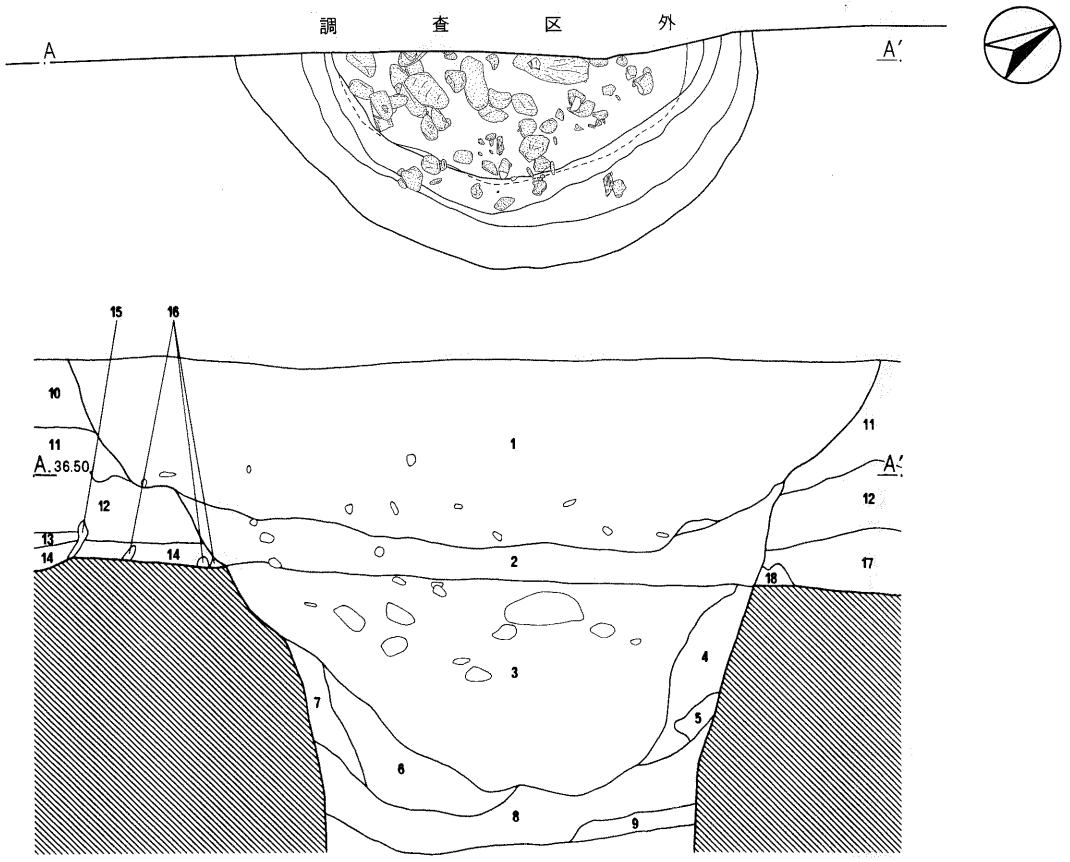
6　井戸跡

第１号井戸跡（第55図）

第４区F－19グリッドに位置する。籠原裏古墳群４号墳の周溝を切り、西側は調査区外にある。

調査区境での南北軸は2.76ｍ、確認面からの深さは1.48ｍを測るが、調査区境での土層断面では現地表面に近い所から掘り込まれていたことが確認された。よって、径4.3ｍ前後、深さ2.6ｍ以上の円形を呈する。立ち上がりは深さ0.6～0.7ｍまでは斜め、以下はほぼ垂直ないし鋭角である。覆土はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。主に上層には火山灰、中層には５～40㎝程の礫や炭化物、下層にはローム粒やロームブロックを含んでいた。

出土遺物（第56図）は陶器皿、須恵器坏、土師器甕がある。すべて覆土からの検出である。２～４は流れ込み遺物である。１は口縁部片。口縁端部内外面にのみ緑釉を施している。瀬戸美濃産。須恵器坏は底部のみ検出された。底部調整は回転糸切り痕を残す。末野産。土師器甕は口縁部のみ検出された。

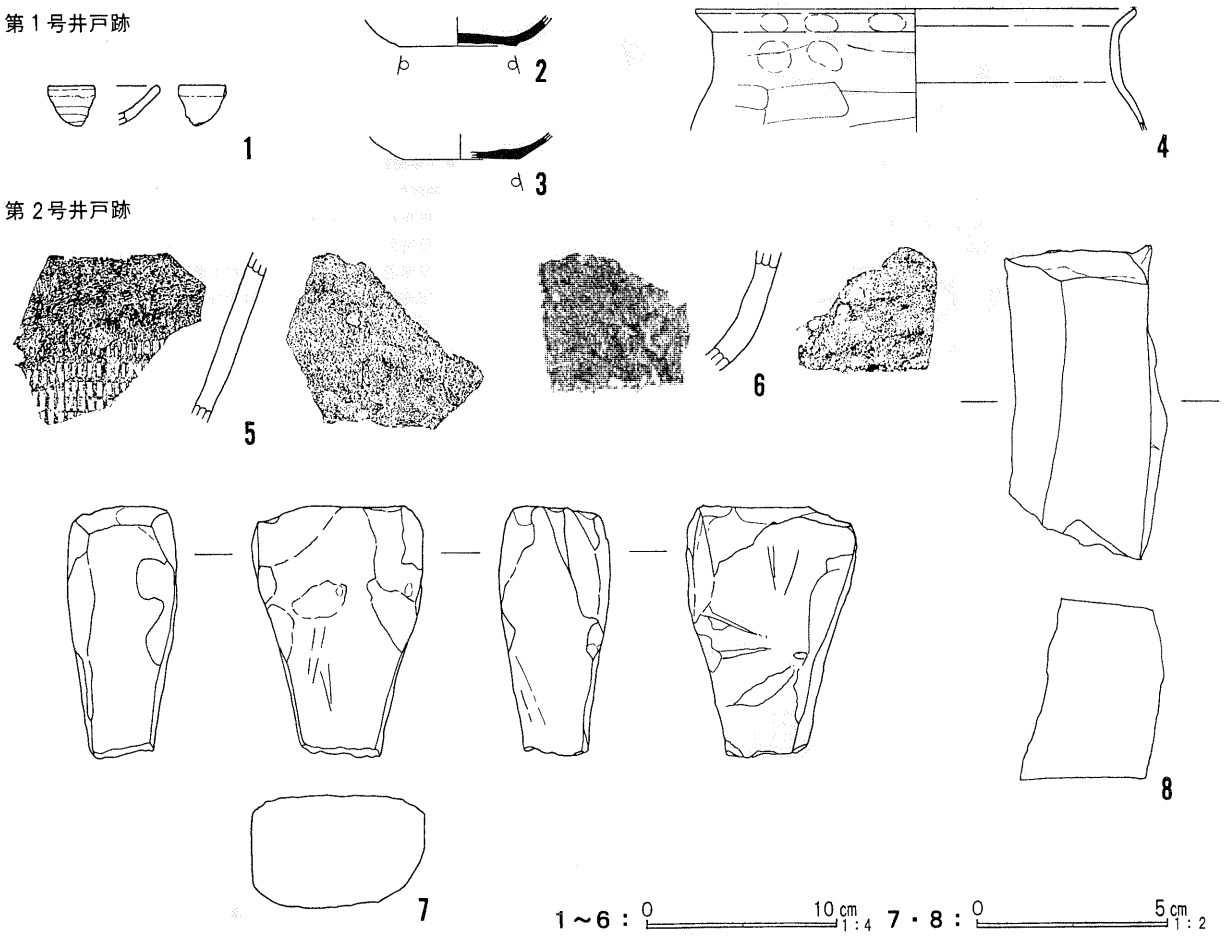


第１号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 明褐色土：火山灰、礫少量含む。
2 暗褐色土：火山灰、褐色粒、礫少量含む。
3 暗褐色土：炭化物少量、礫多量含む。
4 黄褐色土：ローム粒多量含む。
5 暗褐色土：ローム粒含む。
6 暗褐色土：炭化物、礫、ローム粒含む。
7 暗褐色土：ローム粒含む。
8 黒褐色土：ロームブロック含む。
9 黒褐色土：ローム粒多量含む。
10 褐　色　土：火山灰多量含む。
11 褐　色　土：火山灰、礫含む。
12 淡黄色土：火山灰、暗褐色土少量含む。
13 黄褐色土：暗褐色土少量含む。
14 褐　色　土
15 褐色ブロック
16 黒褐色ブロック
17 黒　色　土：褐色土少量含む。
18 暗褐色土

0　1ｍ
1：40

第55図　第１号井戸跡



第56図　井戸跡出土遺物

第20表　井戸跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	第１号井戸跡	陶器　皿	－	－	－	－	にぶい黄橙色	A	口縁部片	瀬戸美濃産。口縁端部内外面緑釉。
2	第１号井戸跡	須恵器　坏	－	(1.5)	6.0	ADEGHL	黄灰色	C	70%	末野産。
3	第１号井戸跡	須恵器　坏	－	(1.4)	(6.0)	ABGHL	灰色	B	40%	末野産。
4	第１号井戸跡	土師器　甕	(23.2)	(6.5)	－	ABGHKM	にぶい褐色	A	10%	
5	第２号井戸跡	陶器　甕	－	－	－	－	にぶい赤褐色	A	胴下部片	常滑産。
6	第２号井戸跡	土器　内耳鍋	－	－	－	－	灰色	B	胴下部片	在地系。
7	第２号井戸跡	砥　石	最大長6.6cm、最大幅4.5cm、最大厚2.9cm。重量114ｇ。凝灰岩。完形。四面使用。							
8	第２号井戸跡	不明石製品	最大長8.4cm、最大幅4.1cm、最大厚4.9cm。重量259ｇ。片岩。完形？二面平。							

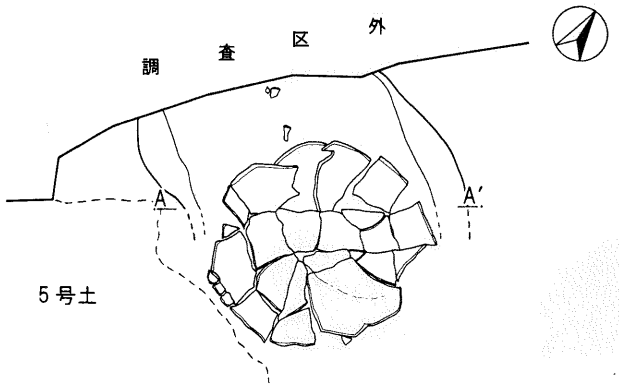
「コ」の字状を呈し、外面には指頭圧痕、輪積痕がみられる。

本井戸跡の帰属する時期は、遺物と周辺遺構との関係からみて中・近世段階のものとしておく。

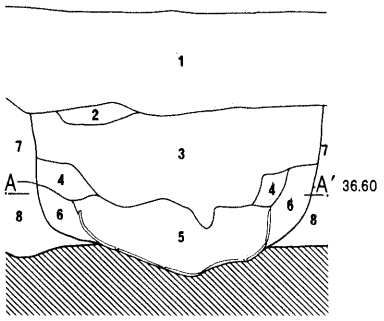
第２号井戸跡（第42図）

第４区L・M－15・16グリッドに位置する。北東部で10号土坑の上部を切り、北西部は調査区外にある。

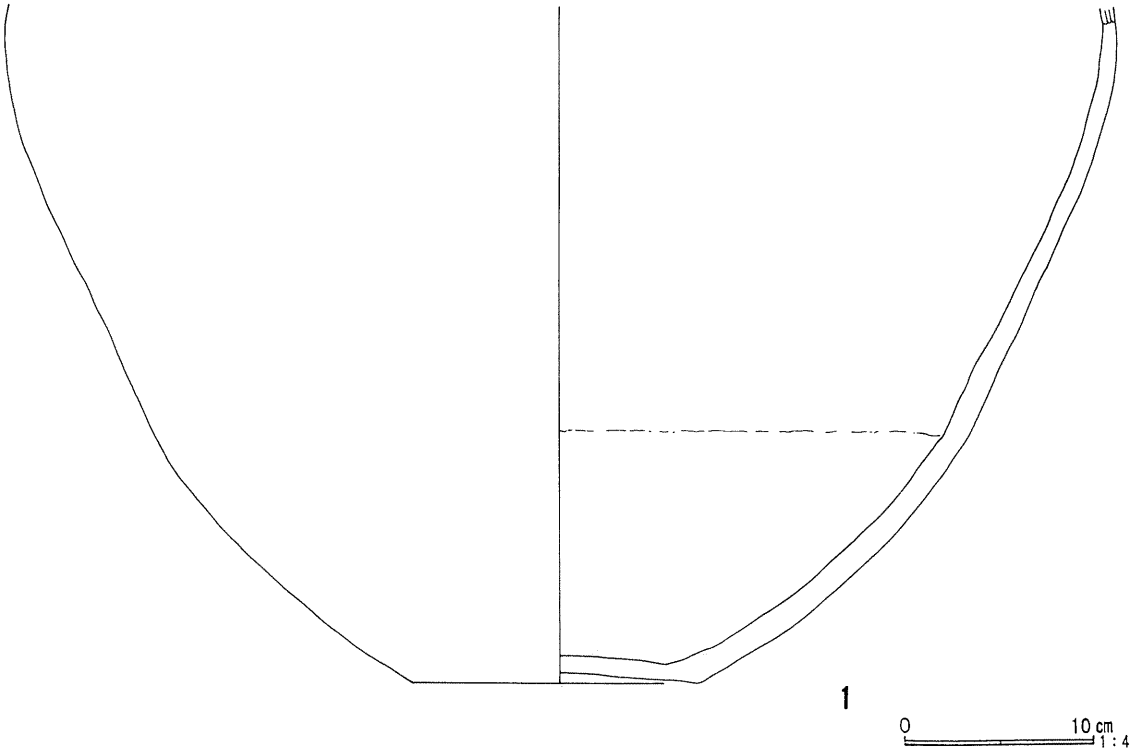
長軸は不明であるが短軸は4.13ｍを測り、南東部が張り出したいびつな方形を呈すると思われる。確認面からの深さは2.82ｍを測るが、底面まで調査することができなかったため本来はさらに深くなる。立ち上がりは南西部が深さ約0.3ｍまでほぼ垂直、南東部から北側にかけては緩やかなテラス状になっている。中央からやや西側にある井筒部分はほぼ垂直に掘られていた。覆土は暗褐色土が主体となる。レ



第１号埋甕
土層説明（ＡＡ′）
1 暗褐色土：火山灰含む。
2 黄褐色土
3 暗褐色土：火山灰、ローム粒少量含む。
4 暗褐色土：焼土、ローム粒含む。
5 黄褐色土
6 黄褐色土
7 暗褐色土：３層より暗い。
8 黄褐色土：黒褐色土含む。



0 50 cm 1：20



第57図　第１号埋甕・出土遺物

第21表　第１号埋甕出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土器　甕	－	(35.8)	15.2	－	灰黄色	B	40%	在地系。土師質。

ンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。上層東側では２～30㎝の礫を多量含んでおり、礫は井戸跡の南側にも若干広がっていた。井戸枠等は確認されなかった。

出土遺物（第56図）は陶器甕、内耳鍋、砥石、不明石製品がある。すべて覆土から検出された。７のみ流れ込み遺物と思われる。５・６はともに胴下部片。５は常滑産であり、外面にはスタンプがみられる。６は在地系の内耳鍋。外面には斜位の刷毛目が施されている。７は凝灰岩製で四面使用している。完形品。８は片岩製の不明石製品。二面が平らであるが平滑ではない。用途は不明である。

これらの遺物からみて、本井戸跡の帰属する時期は中世と思われる。

7　埋　甕

第１号埋甕（第57図）

第４区Ｄ・Ｅ－19・20グリッドに位置する。南側で５号土坑上部を切っていると思われるが、直接的な切り合い関係は把握できなかった。また東側の立ち上がりも確認面の関係から検出できなかった。西側の立ち上がりは調査区外にある。

規模・平面形は不明であるが、調査区境での北東－南西軸は1.34ｍを測る。確認面からの深さは僅か0.15ｍしかないが、調査区境での土層断面では最大0.86ｍの掘り込みであったことが確認された。立ち上がりはほぼ垂直であり、船底状を呈する底面に甕が設置されていた。甕は胴上部以上を欠くため、覆土が甕の内側に入り込んでいた。２～５層はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われるが、６層のみ甕の外周にみられたことから甕を設置する際に埋め戻された土と思われる。３層には火山灰、４層には焼土を含んでいたが、甕の内側にある５層には混入物はみられなかった。

出土遺物は在地系の甕のみである。胴上部以上を欠くため全形は不明であるが、球胴形を呈すると思われる。摩滅が顕著であり調整は不明であるが、胴下部内面には輪積痕がみられた。

本遺構は坑内に土器が設置されていたことから埋甕として報告したが、性格及び用途は不明である。

上記の遺物から本埋甕の帰属する時期は中世と思われる。

8　ピット

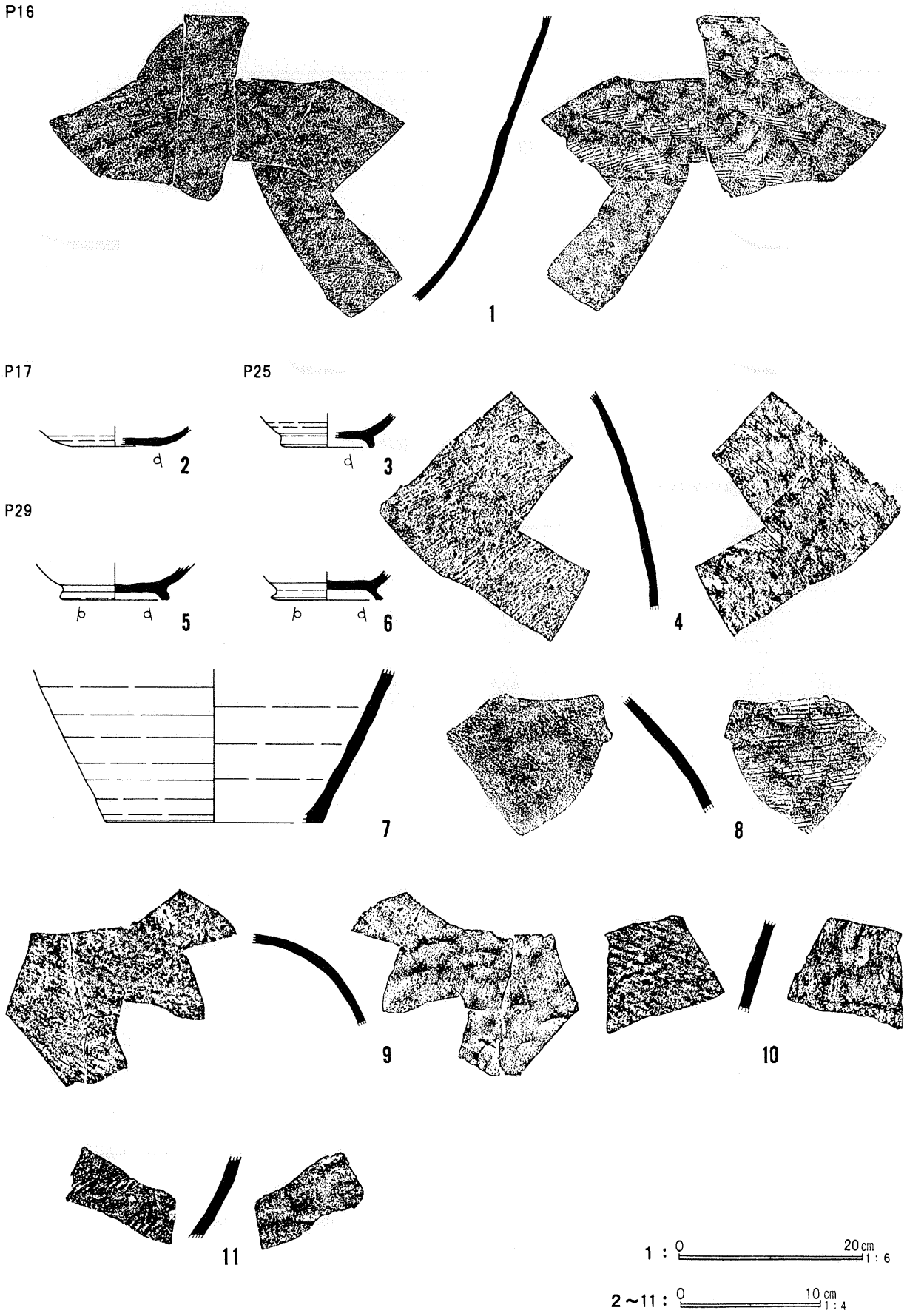
ピットは第２区以外から検出された。全調査区を通して検出された数は計143基である。第１区では74基（Ｐ１～30・72～104・133～143）、第３区では13基（P59～71）、第４区では28基（P31～58）、第５区では１基のみ（P105）、第6区では27基（P106～132）が検出されている。

第22表　ピット計測表

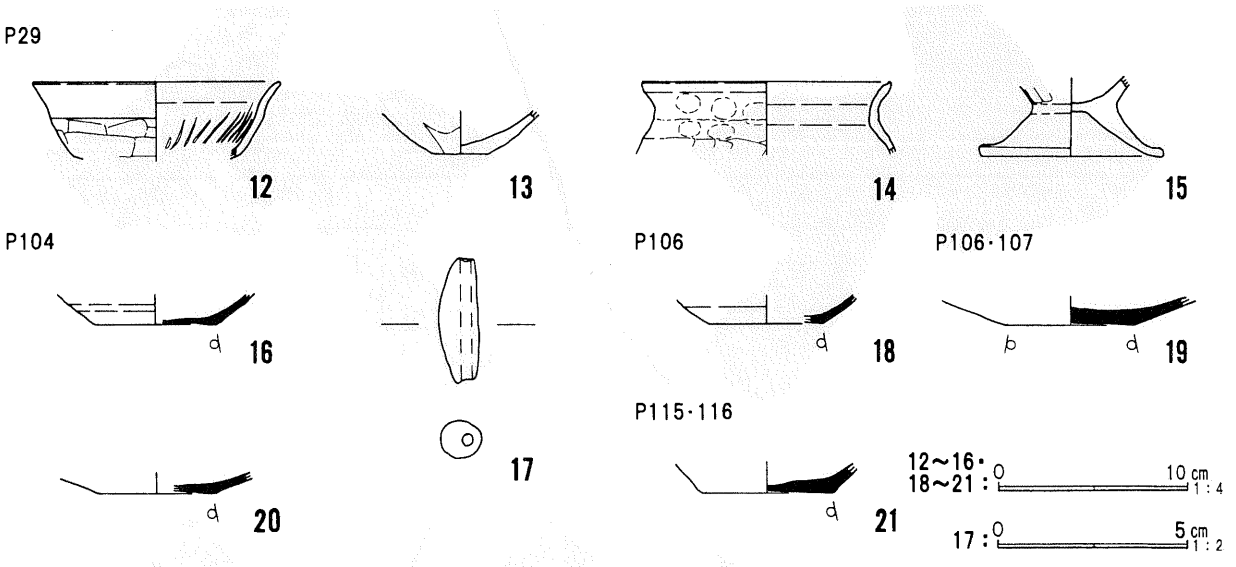
No.	位　置	長径	短径	深さ	備　考	No.	位　置	長径	短径	深さ	備　考
P1	1区J-27G	－	36	－	2号墳より新。	P12	1区N-28G	－	69	－	
P2	1区J-27G	109	－	－	2号墳より新。	P13	1区N-28G	－	52	－	
P3	1区J･K-27G	－	94	－	2号墳より新。	P14	1区O-25G	42	22	－	3号墳より新。
P4	1区K-28G	27	25	－	2号墳より新。	P15	1区P-25G	24	18	－	3号墳より新。
P5	1区L-26G	30	27	27	2号墳より新。	P16	1区P-25G	65	55	－	3号墳より新。
P6	1区L-26G	31	31	22	2号墳より新。	P17	1区P-25G	81	63	－	3号墳より新。
P7	1区L-26G	20	18	41	2号墳より新。	P18	1区Q-25G	16	11	－	3号墳より新。
P8	1区L-26･27G	61	59	－	2号墳より新。	P19	1区P-25G	14	12	－	3号墳より新。
P9	1区L･M-26G	44	40	－		P20	1区Q-25G	23	21	－	3号墳より新。
P10	1区M-26G	38	28	－	2号墳より新。	P21	1区Q-25G	－	24	－	3号墳より新。
P11	1区N-27G	53	46	－		P22	1区Q-25G	23	17	－	3号墳より新。

No.	位　置	長径	短径	深さ	備　　考
P23	1区Q-25G	19	17	－	3号墳より新。
P24	1区Q-25G	26	19	－	3号墳より新。
P25	1区P-24G	27	23	－	3号墳より新。
P26	1区P・Q-23・24G	28	26	－	3号墳より新。
P27	1区Q-23G	25	21	－	3号墳より新。
P28	1区Q-24G	38	28	－	3号墳より新。
P29	1区Q・R-24G	65	51	－	3号墳より新。
P30	1区R-22G	59	43	－	2号住より新。
P31	4区L-7G	73	－	73	周辺ピットとの新旧不明。
P32	4区L-7G	31	－	13	周辺ピットとの新旧不明。
P33	4区L-7G	－	33	36	周辺ピットとの新旧不明。
P34	4区L-7G	－	40	38	周辺ピットとの新旧不明。
P35	4区L-7G	43	－	45	周辺ピットとの新旧不明。
P36	4区L-6G	29	25	22	周辺ピットとの新旧不明。
P37	4区L-6G	45	42	44	周辺ピットとの新旧不明。
P38	4区L-7G	52	－	65	周辺ピットとの新旧不明。
P39	4区L-7G	－	－	57	周辺ピットとの新旧不明。
P40	4区L-7G	－	－	41	周辺ピットとの新旧不明。
P41	4区L-6G	37	31	50	
P42	4区L-6G	58	43	43	
P43	4区L-6G	25	23	8	
P44	4区L-6G	35	33	11	
P45	4区L-6G	61	52	16	
P46	4区M-7G	37	31	12	
P47	4区M-8G	39	34	9	
P48	4区M-9G	31	－	5	
P49	4区M-9G	92	－	10	
P50	4区O-11G	50	43	16	
P51	4区E-20G	17	15	16	
P52	4区E-20G	21	19	24	
P53	4区N-14G	－	21	48	12号土坑より古。
P54	4区N-14G	19	16	54	12号土坑との新旧不明。
P55	4区P-13G	38	31	25	
P56	4区P-13G	40	35	62	14号土坑との新旧不明。
P57	4区P-13G	29	29	36	14号土坑との新旧不明。
P58	4区Q-13G	26	15	－	16号土坑との新旧不明。
P59	3区T-35G	62	54	6	
P60	3区T-35G	84	60	8	
P61	3区T-35G	86	75	7	
P62	3区T-34G	40	36	9	
P63	3区T-34G	39	32	13	
P64	3区T・U-34G	35	30	11	
P65	3区U-34・35G	37	34	11	
P66	3区U-34G	44	29	12	18号土坑との新旧不明。
P67	3区U-34G	41	35	14	18号土坑との新旧不明。
P68	3区V-34G	53	18	18	18号土坑との新旧不明。
P69	3区V-34G	25	18	19	19号土坑との新旧不明。
P70	3区W-33G	60	45	9	
P71	3区W-32・33G	46	39	－	
P72	1区J・K-32G	－	39	53	
P73	1区K-32G	50	40	13	
P74	1区K-32・33G	47	27	13	
P75	1区K-34G	42	27	28	3号溝との新旧不明。
P76	1区L-34G	30	25	19	
P77	1区L-35G	23	17	15	
P78	1区L-35G	－	54	19	
P79	1区L-35G	46	－	15	4号溝との新旧不明。
P80	1区L-35G	23	23	16	
P81	1区L-36G	48	25	26	
P82	1区L-36G	37	23	27	
P83	1区L-35G	17	17	17	

No.	位　置	長径	短径	深さ	備　　考
P84	1区L-35G	－	29	5	4号溝との新旧不明。
P85	1区L-35G	29	26	56	4号溝との新旧不明。
P86	1区L-35G	29	24	12	
P87	1区L・M-35G	62	26	81	
P88	1区L-36G	35	30	19	
P89	1区L-36G	－	39	34	4号溝との新旧不明。
P90	1区L-36G	37	23	32	4号溝との新旧不明。
P91	1区M-36G	33	29	36	4号溝との新旧不明。
P92	1区M-36G	20	18	－	24号土坑との新旧不明。
P93	1区M-36G	25	18	9	
P94	1区M-36G	24	23	16	
P95	1区M-36G	32	27	17	
P96	1区M-36G	－	18	22	4号溝との新旧不明。
P97	1区M-36G	39	31	39	
P98	1区M-37G	72	54	53	
P99	1区M-37G	39	31	46	28号土坑より新。
P100	1区M-37G	33	29	7	
P101	1区M-37G	20	15	－	30号土坑との新旧不明。
P102	1区M-37G	21	16	－	30号土坑との新旧不明。
P103	1区M・N-37G	23	14	－	30号土坑との新旧不明。
P104	1区M・N-37G	47	38	61	
P105	5区O-40G	29	－	－	31号土坑との新旧不明。
P106	6区O-40G	91	44	26	
P107	6区O-40G	131	47	35	
P108	6区P-42G	42	31	－	
P109	6区Q-43G	38	34	－	
P110	6区Q-43・44G	39	31	12	
P111	6区R-44G	51	32	14	
P112	6区R-44G	34	26	15	
P113	6区R-44G	36	33	20	
P114	6区R-44G	38	26	－	
P115	6区R-45G	－	－	17	
P116	6区R-45・46G	－	56	48	
P117	6区S-45G	30	26	15	
P118	6区S-45G	17	18	－	
P119	6区S-46G	30	27	26	
P120	6区S-46G	27	22	3	
P121	6区T-47G	32	22	13	
P122	6区U-48G	23	23	12	
P123	6区U-48・49G	26	24	7	
P124	6区U-48G	27	19	8	
P125	6区U-48G	33	27	16	
P126	6区U-48G	－	25	－	
P127	6区U-49G	－	29	－	7号溝との新旧不明。
P128	6区U-50G	29	28	12	
P129	6区V-49G	21	21	16	
P130	6区V-49G	27	18	－	
P131	6区V-49G	46	41	28	
P132	6区V-49G	36	－	－	
P133	1区C-34G	34	25	－	39号土坑との新旧不明。
P134	1区C-35G	48	42	－	39号土坑との新旧不明。
P135	1区C-35G	39	28	－	39号土坑との新旧不明。
P136	1区D-34G	36	34	－	
P137	1区D-34G	32	26	－	
P138	1区A-33G	45	－	13	
P139	1区C-31G	37	26	40	1号墳より新。
P140	1区D-31G	20	18	－	1号墳より新。
P141	1区D-31G	34	30	80	1号墳より新。
P142	1区D-31G	23	14	50	1号墳より新。
P143	1区D-31G	29	26	－	1号墳より新。



第58図　ピット出土遺物（1）



第59図　ピット出土遺物（2）

第23表　ピット出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	Pit16	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	褐灰色	B	胴下部片	南比企産。
2	Pit17	須恵器　坏	－	(1.4)	(6.1)	ABGL	灰色	A	25%	末野産。
3	Pit25	須恵器高台椀	－	(2.4)	(6.7)	ABGHLN	灰色	A	20%	末野産。
4	Pit25	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	紫灰色	A	胴上部片	南比企産。
5	Pit29	須恵器高台椀	－	(2.6)	7.8	ABHKLN	にぶい黄橙色	B	70%	末野産。酸化焔焼成。
6	Pit29	須恵器高台椀	－	(2.0)	8.0	ABKL	灰色	A	60%	末野産。
7	Pit29	須恵器　甕	－	(10.9)	(15.4)	ABG	灰白色	C	15%	末野産？
8	Pit29	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰色	A	肩部片	南比企産。
9	Pit29	須恵器　甕	－	－	－	ABFG	明黄褐色	A	肩部片	南比企産。外面自然釉有。
10	Pit29	須恵器　甕	－	－	－	ABEH	灰黄色	C	胴下部片	末野産？２号住第11図46と同一個体。
11	Pit29	須恵器　甕	－	－	－	AHL	褐灰色	A	胴下部片	末野産。
12	Pit29	土師器　坏	(13.0)	(4.1)	－	ABGHKM	にぶい黄褐色	B	30%	内面放射状暗文有。
13	Pit29	土師器　甕	－	(2.3)	(3.0)	ABEHKM	にぶい赤褐色	A	15%	
14	Pit29	土師器　甕	(13.2)	(3.8)	－	ABCGHKM	明赤褐色	B	25%	
15	Pit29	土師器台付甕	－	(4.2)	9.5	ABEM	橙色	A	90%	
16	Pit104	須恵器　坏	－	(1.6)	(6.4)	ABHL	灰色	A	15%	末野産。
17	Pit104	土　錘	最大長3.3cm、最大径1.1cm、孔径0.3cm。重量3.4g。完形。							
18	Pit106	須恵器　坏	－	(1.5)	(6.0)	BGJ	灰白色	B	10%	末野産？
19	Pit106・107	須恵器　皿	－	(1.5)	6.6	ABLMN	灰白色	B	100%	末野産。
20	Pit106・107	須恵器　皿	－	(1.1)	(6.1)	AL	青灰色	B	15%	末野産。
21	Pit115・116	須恵器　坏	－	(1.6)	(7.0)	AGL	暗灰色	B	30%	末野産。

第Ⅲ章でも述べたとおり、ピットは集中して分布する傾向にある。第１区ではA～D－31～35グリッド、J～N－26～28グリッド、J～N－32～37グリッド、O～R－22～25グリッドで集中してみられた。第３区ではT～W－32～35グリッドに集中している。第４区ではL～N－６～９グリッドに集中しており、この他にも点在している。第５区では北東端で１基のみ検出された。第６区では調査区内全面に点在している。なお、第１区の１号掘立柱建物跡及び第６区の２・３号掘立柱建物跡の周辺に位置するピットについては、第Ⅳ章の２・３でも述べたとおり、庇になる可能性がある。ピットは集中して分布するが規則的に並ぶものはない。各ピットの数値等については第22表を参照のこと。

出土遺物（第58・59図）は須恵器坏、高台付椀、皿、甕、土師器坏、甕、台付甕、土錘がある。出土位置については第23表を参照のこと。図示可能な遺物が検出されたピットは第１区と第６区に限られる。

検出された須恵器坏・高台坏椀・皿はすべて底部ないし高台部のみである。底部調整は回転糸切り痕

を残す。産地はすべて末野産かその可能性のあるものであり、９世紀後半代に位置づけられる。甕はすべて破片での検出である。７以外はほとんど南比企産であり、これらが検出されたピット16・29は籠原裏古墳群３号墳周辺に位置していることから３号墳からの流れ込みと思われる。なお、ピット29出土の10は第２号住居跡出土遺物第11図46と同一個体である。

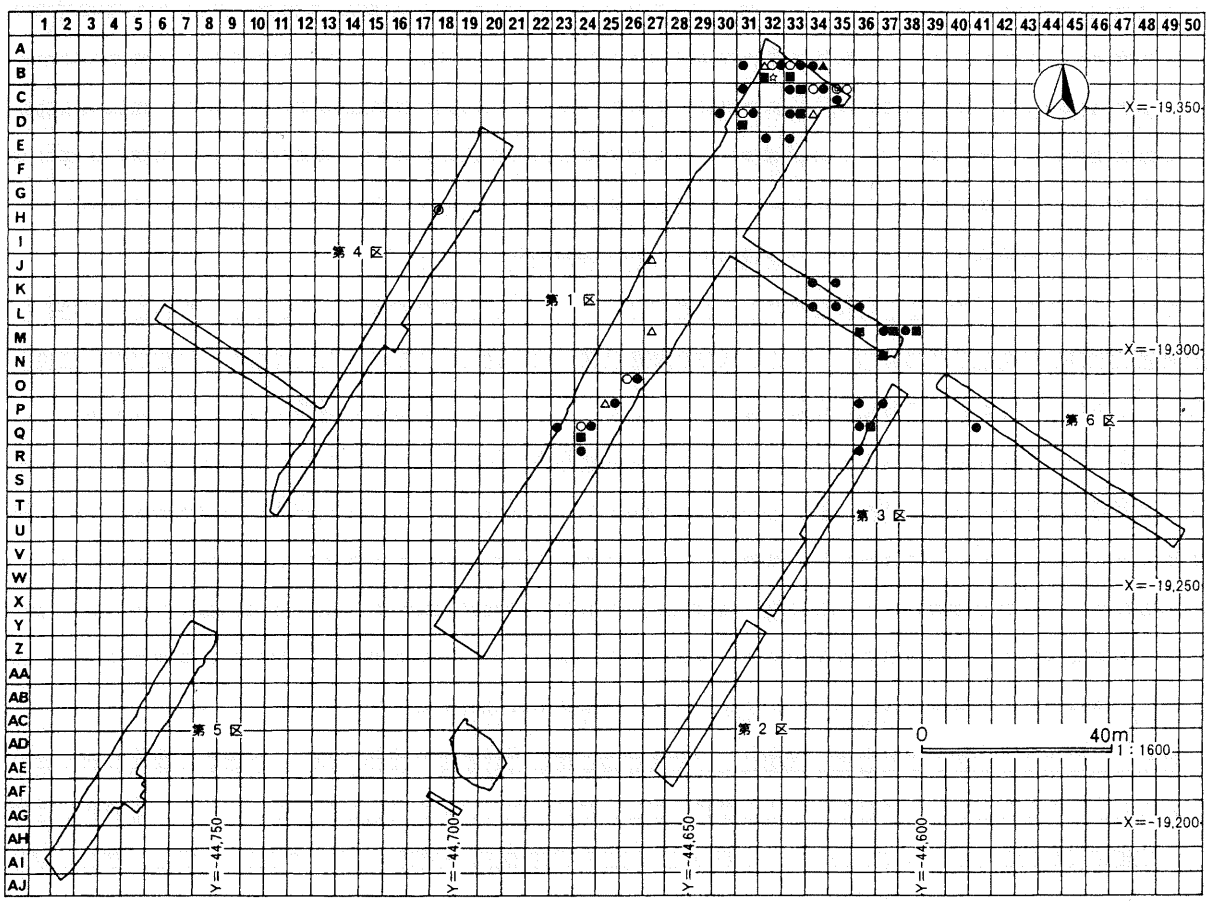
土師器坏は１点のみ検出された。唯一検出された模倣坏である。深身で内面には放射状暗文が施されている。籠原裏古墳群３号墳からの流れ込みと思われる。甕はすべて９世紀後半代のものである。14は口縁部の「コ」の字が崩れ、器壁も厚手であり退化的な様相を示す。外面には指頭圧痕や輪積痕がみられた。台付になる可能性が高い。土錘は１点のみ検出された。小振りで中段の膨らみが大きい。完形品。

遺物は７世紀末と９世紀後半のものに分けられるが、後者がピットに伴うものかは不明である。よって、遺物が出土しなかったピットの存在も含めてピット群の帰属する時期は不明と言わざるを得ない。

9　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は縄文時代から古墳時代末、平安時代、中・近世と幅広い。遺物は土器、土製品、鉄製品、石器、石製品があり、図示したものだけでも328点と非常に多い。主体となるのは平安時代である。

遺物の出土位置は大きく３つに分けることができる（第60図）。１つは第１区北側のＢ～Ｅ－30～35



◎：縄文時代・土器　△：縄文時代・石器　○：古墳時代・土器　●：平安時代・土器
■：平安時代・土製品　☆：平安時代・鉄製品　▲：平安時代・石製品

第60図　遺構外出土遺物分布図

グリッド、２つ目は第１区の中央からやや南西部のO～R－23～26グリッド、３つ目は第１区東側及び第３区北側のK～R－34～38グリッドである。なお、第60図に示した遺物は出土位置の明確なもののみを対象とし、一括遺物や時期不明の石製品については扱っていない。以下、時代・遺物毎に述べていく。

第61図１～14は縄文時代の遺物。今回の調査では縄文時代の遺構は検出されていないが、遺物は第１区及び第４区の包含層から出土した。遺物は土器と石器が検出されており、土器は縄文時代前期後葉から中期中葉にかけてのものであることから、石器も同時期のものと思われる。１～６は縄文土器・深鉢。１・２は縄文時代中期中葉の土器。１は胴上部片、２は胴下部片。ともに縦位方向の条線文に刻みの施された隆帯が垂下するが、１の上部には横位方向にも沈線が描かれている。出土位置が38号土坑出土の縄文土器（第53図76～78）と重なり、文様も同じであることから同一個体と思われる。３～６は縄文時代前期後葉の土器。第４区から検出された唯一の図化可能な遺構外出土遺物である。３は口縁部片、４～６は胴下部片。同一個体と思われる。３は波状口縁になると思われる。外面にはＲＬ単節縄文が施文され、内面には横・斜位のナデが施されている。胎土に繊維は含まない。７～14は縄文時代の石器。７・８は石鏃。ともに完形品。７は第１区一括遺物であるが、平成元年度調査Ｂ区出土であることから、Ｂ～Ｄ－33～35グリッドのいずれかから検出された。非常に薄く、両面とも側面を剥離して刃部を造り出している。基部は弧状に抉りが入っている。黒耀石製。８も第１区一括遺物であるが、昭和63年度調査Ｂ区出土であることから、Ｉ～Ｎ－31～38グリッドのいずれかから検出された。両面とも側面を剥離して刃部を造り出しており、基部は僅かに抉りが入る。チャート製。９～14は打製石斧。調査年度が異なるものもあるが、すべて第１区からの検出である。すべて片面に自然面を残しており、側面を剥離して刃部を造り出している。９～13は撥形。すべて完形品。９は他と比べて大型である。中段には緩い抉りが入る。10は刃部付近のみであるが、二次的に使用されたと思われる。14は短冊形。半分を欠く。石材は９・14が中粒砂岩、10・11・13が粘板岩、12が細粒砂岩である。

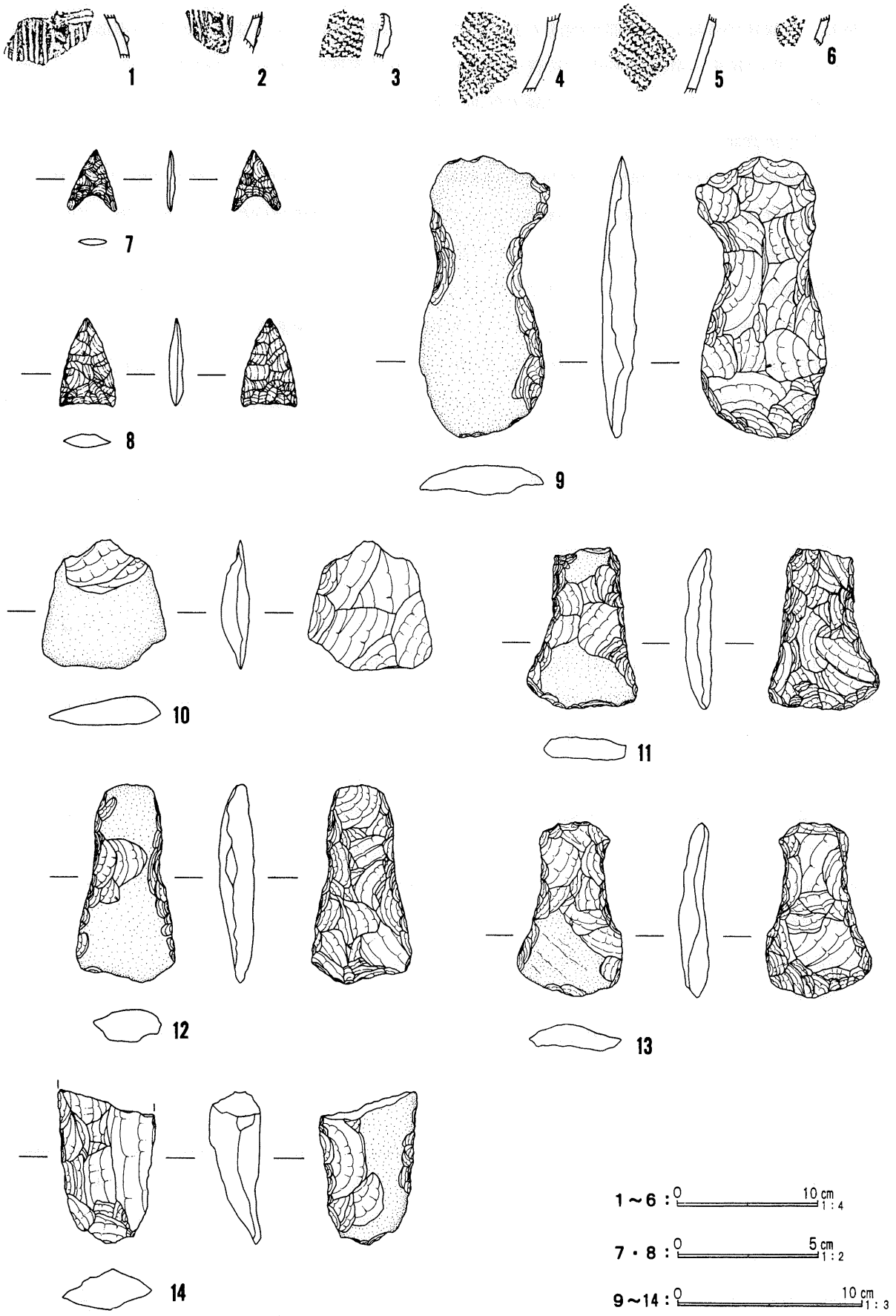
第62～71図15～293は主に平安時代の土器であるが、一部古墳時代末も含まれる。須恵器の供膳具と土師器は時期の判別が容易であったが、須恵器甕は破片での検出が多く、出土位置も平安時代の遺物に混じって検出されたため判別が困難である。よって、ここでは平安時代の遺物といっしょに掲載した。なお、明らかに古墳時代末の土器といえるものは須恵器甕（第66図204～207・212・第67図220）、土師器坏（第70図268・269）、甕（第71図282）の９点だけである。以下、平安時代の遺物を中心として器種毎に述べていくが、古墳時代末の遺物については数が少ないためその都度述べていくこととする。

平安時代の土器は遺構出土土器同様、須恵器・土師器・灰釉陶器がある他に緑釉陶器が１点のみ出土した。９世紀後半から10世紀初頭にかけてのものが主体となり、須恵器の出土量が圧倒的に多い。これらは主に遺構外出土遺物が集中してみられた３つの地点から検出された。

第62～70図15～262は須恵器。遺構出土の須恵器同様、供膳具の検出が多く、産地も南比企産に比べて末野産が圧倒的に多い。供膳具の底部調整は南比企産の坏以外は回転糸切り痕を残す。末野産の供膳具には酸化焔焼成のものもみられた。主体となる器形は遺構出土遺物と同じである。なお、甕にのみ古墳時代末のものがみられた。詳細については後述する。

蓋は図示できたものは第62図15のみである。口径の大きさから坏蓋と思われる。

第62・63図16～109は坏。破片での検出が多いが、主体となるのは口径13cm、器高４cm、底径６cm前



第61図　遺構外出土遺物（1）

後を測り、口縁部が外反し、体部が内湾するものである。産地はほとんど末野産かその可能性の高いものであり、9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる。19は内外面にタールの付着がみられたことから灯明用に使用されたと思われる。29は口縁部外面に墨書がみられたが、文字というよりは記号に近い。破片であるため詳細については不明である。

上記の一群の他にも時期や産地の異なるものがみられた（16～18・38・45・73・98）。16・18・38・45は南比企産である。16は口縁部から体部にかけて内湾し、底部調整は回転糸切り後外周ヘラ削りを施している。器高が低く、器壁も厚手である。9世紀前半頃に位置づけられる。45は底部のみの検出であるが底部調整が16と同じであり、同時期に位置づけられる。18は深身で口縁部から体部にかけてほぼ直線的である。10世紀前半に位置づけられるものであり、主体となる末野産よりやや新しい。38は口縁部のみの検出であるが外反しており、主体となる一群と同時期のものである。17・73は須恵器としたがロクロ土師器とした方がいいかもしれない。17は器形や法量が7号住居跡出土遺物第26図11・12と似ている。98は産地不明である。器壁が厚手で硬質である。胎土に白色粒を多量含む。

第63～65図110～171は高台付椀。産地不明のものが2点ある以外は、すべて末野産かその可能性の高いものである。口径15cm、器高6.5cm、底径8cm前後を測り、口縁部が外反し、体部は内湾し、「ハ」の字の高台部が付く。9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる。110は図化した箇所以外口縁部は外反しており、法量は他と比べて小さいが、主体となる一群と同時期のものと思われる。111・112は口縁部の外反が弱く、法量も大きい。主体となる一群よりもやや古い様相を呈する。131は体部外面に墨書がみられたが、上部を欠くため詳細は不明である。120は回転糸切り痕上に×印があるが刻みが浅い。

第65図172～190は皿。遺構出土土器同様、いずれも口縁部は外反するが、体部が緩やかに内湾するものとほぼ直線的なものがある。産地はすべて末野産かその可能性の高いものである。口径14cm、器高2cm、底径6cm前後のものが主体となる。9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる。

第65図191～195は高台付皿。皿同様、口縁部は外反するが体部が緩やかに内湾するものとほぼ直線的なものがある。高台部は「ハ」の字に開く。産地もすべて末野産かその可能性の高いものであり、酸化焔焼成が多い。口径14cm、器高3cm、底径7cm前後のものが主体となるが、193は器高が4.6cmと高く、高台付椀との中間的な様相を呈している。

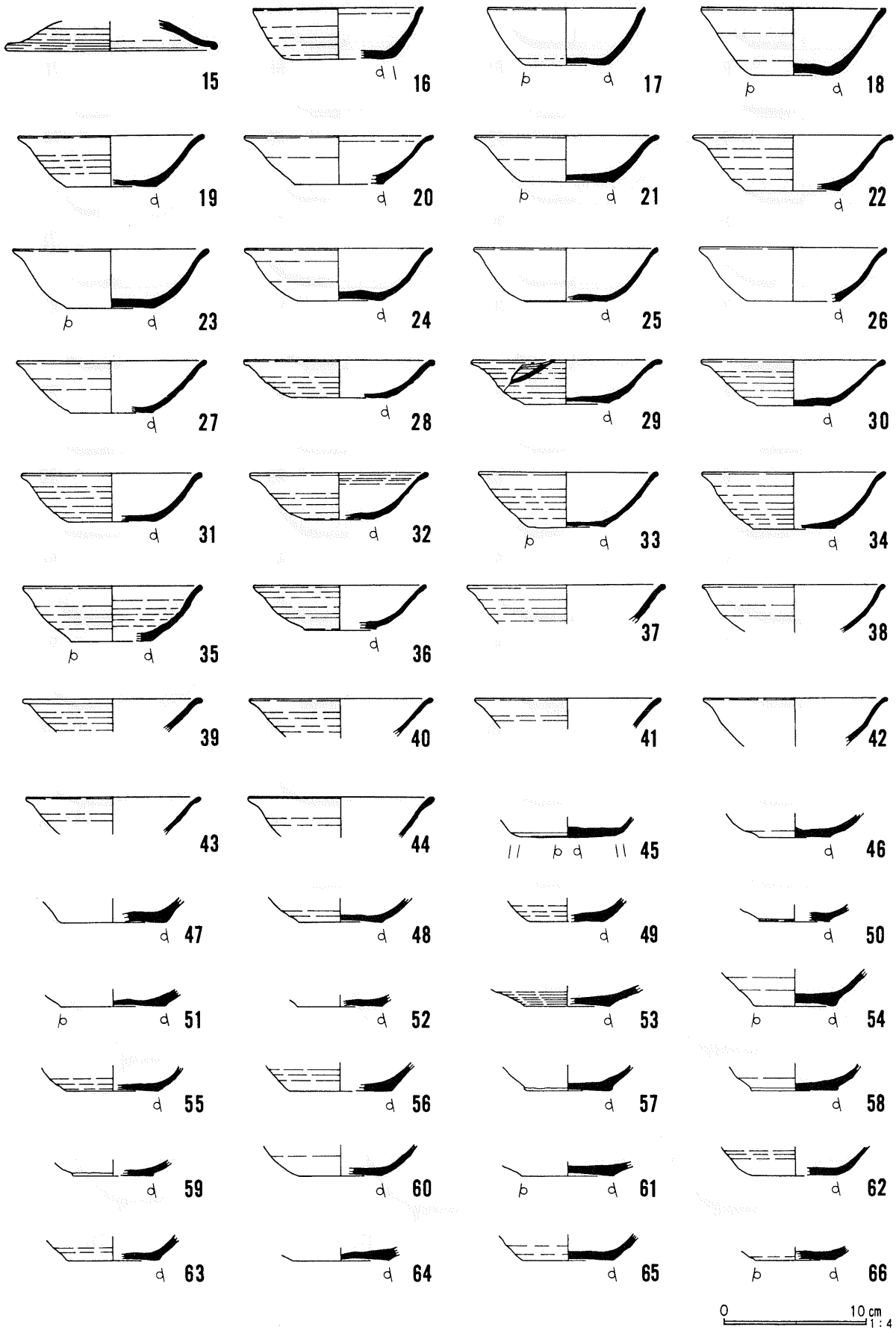
第65図196・197は壺。いずれも口縁部片。末野産。196は外面に自然釉が付着していた。

第65図198は鉢。口縁部片であるため甑の可能性もある。末野産。

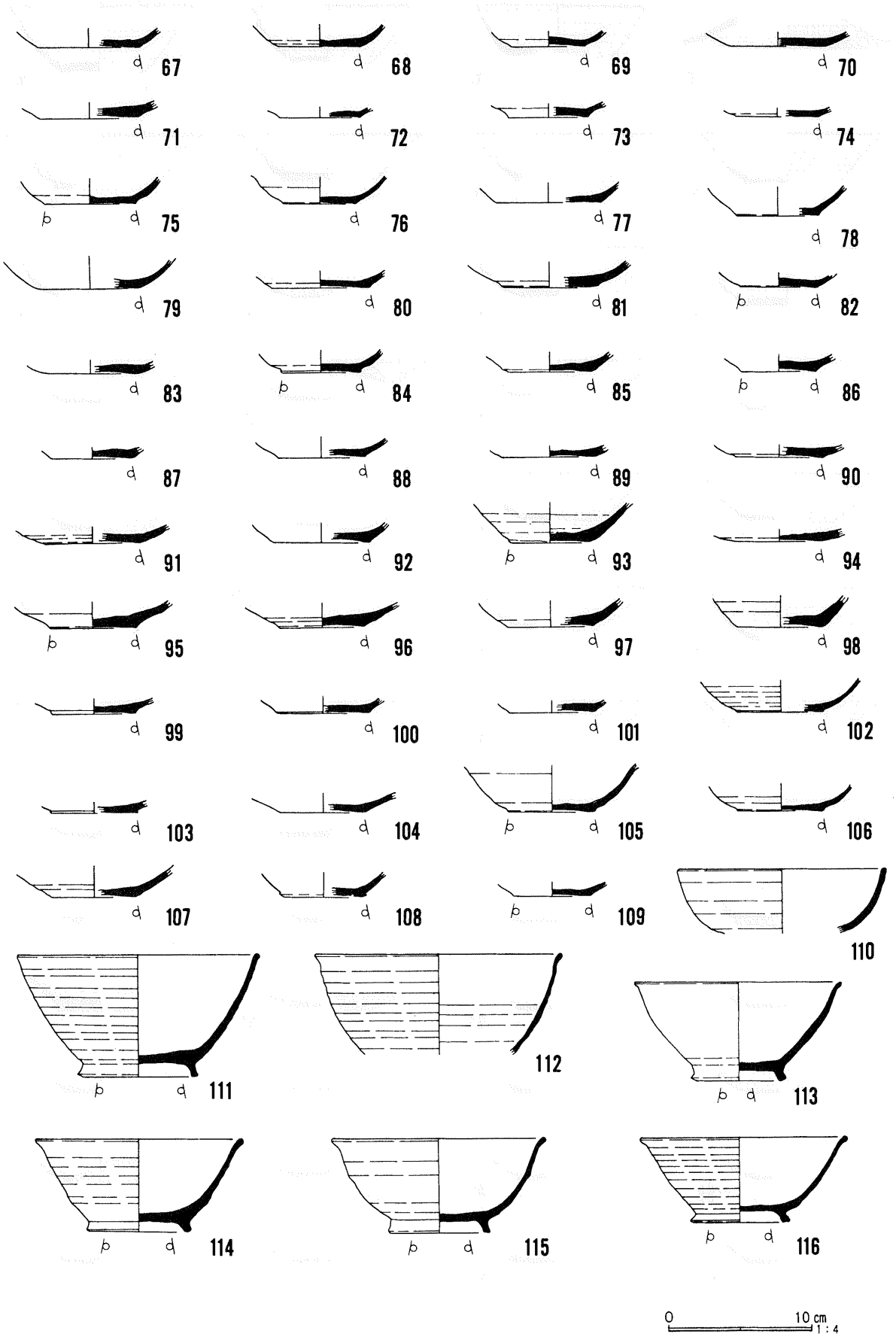
第66図199・200は瓶。199は口縁部から頸部を欠くが肩部以下の残りが良い。球胴形を呈する。末野産。底部調整は回転糸切り痕を残す。200は産地不明である。硬質で胎土に白色粒を多量含んでおり、遺構外出土の坏第63図98と似ている。底部調整は回転ヘラ削りである。

第66～70図201～262は甕。前述のとおり、古墳時代末のものも含まれると思われるが判別が困難である。古墳時代末に該当するものは204～207・212・220の6点である。これらは籠原裏古墳群からの流れ込みと思われる。なお、上記の6点以外の甕については平安時代のものとして扱った。

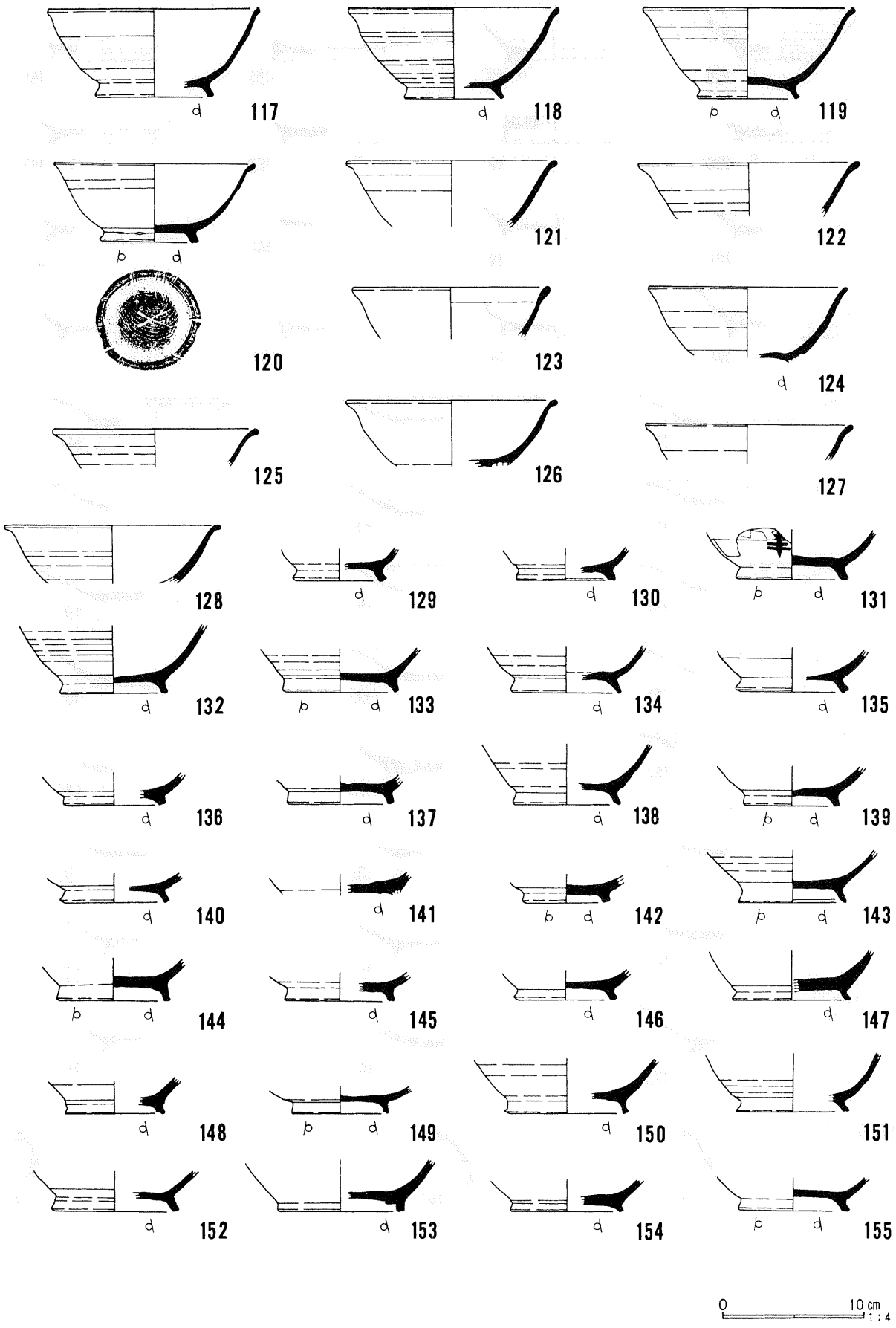
甕はいずれも破片での検出である。産地は南比企産が8点あるだけでその他はすべて末野産かその可能性の高いものである。また、甕としたものには大型と小型のものがみられ、小型のものは壺とした方がいいかもしれない。第66図201～204は底部片。204のみ古墳時代末である。大型で器壁が比較的薄



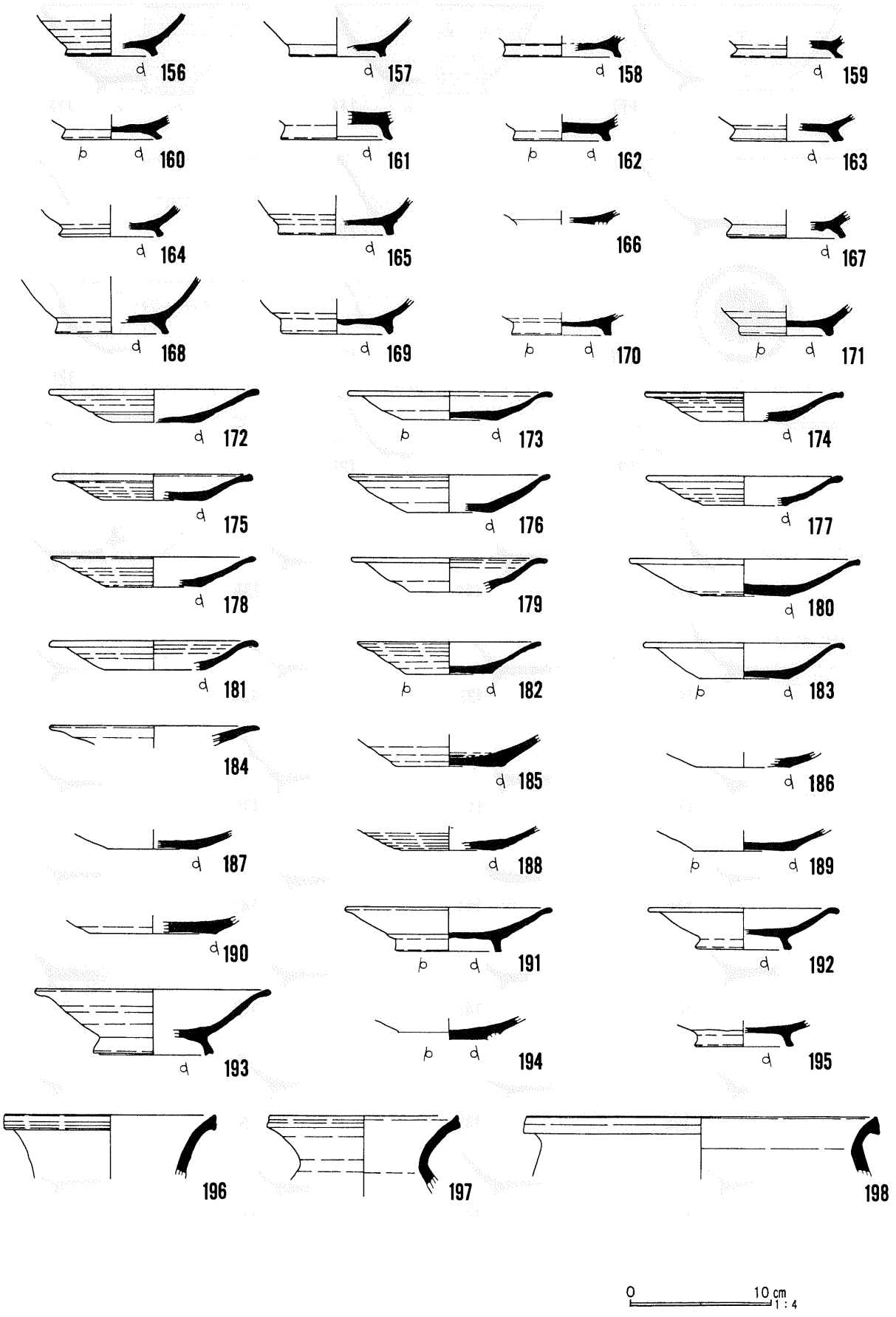
第62図　遺構外出土遺物（2）



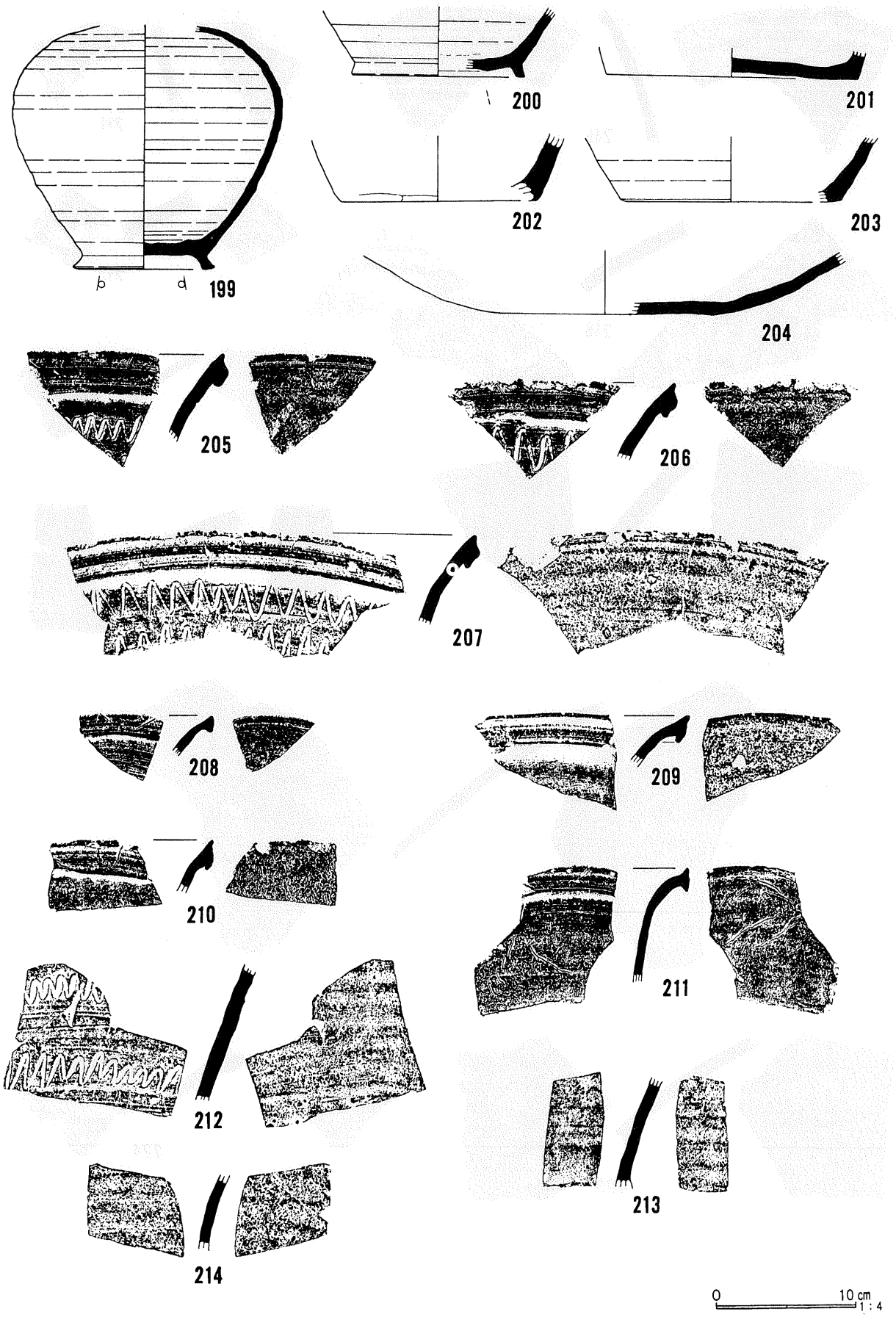
第63図　遺構外出土遺物（3）



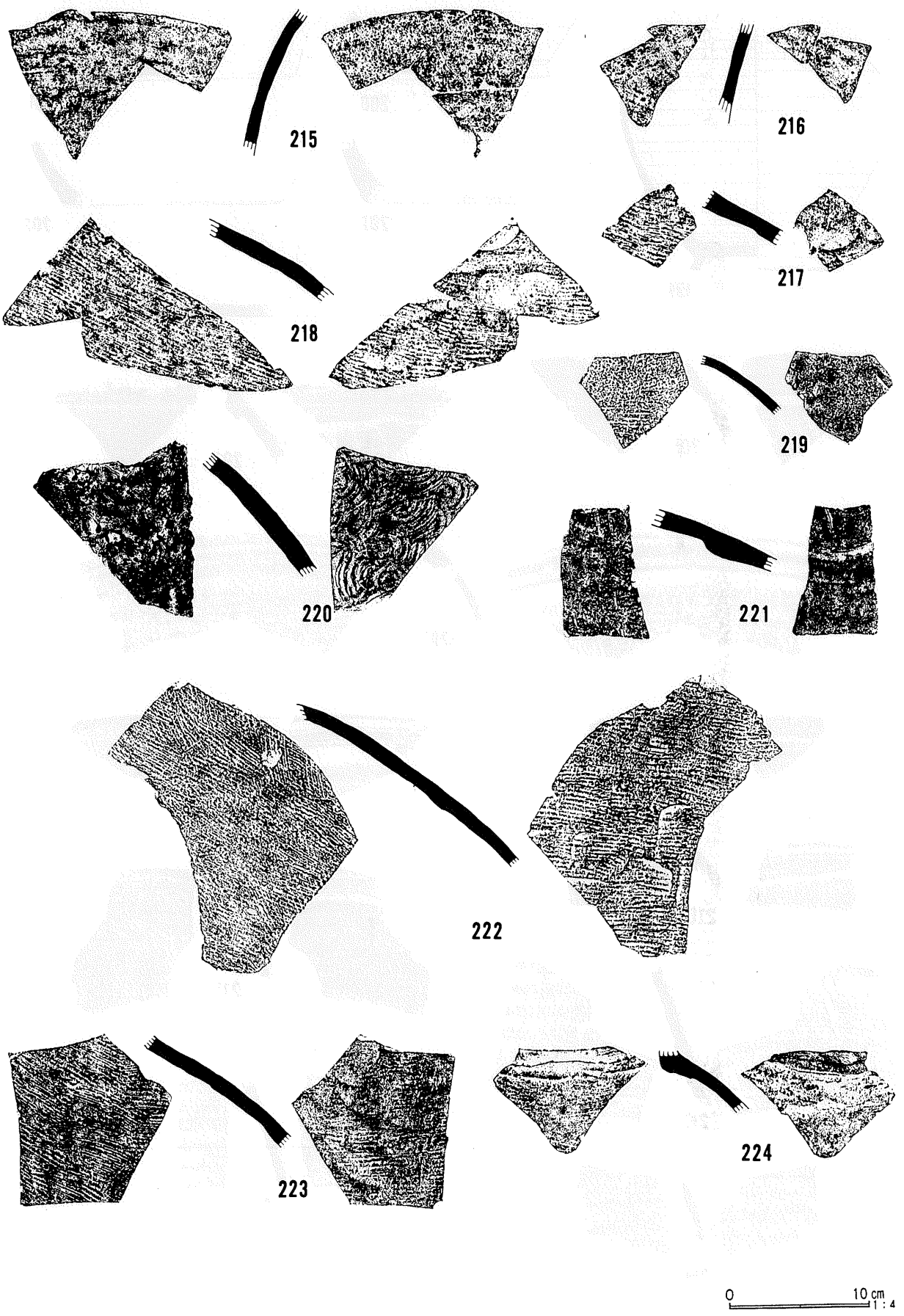
第64図　遺構外出土遺物（4）



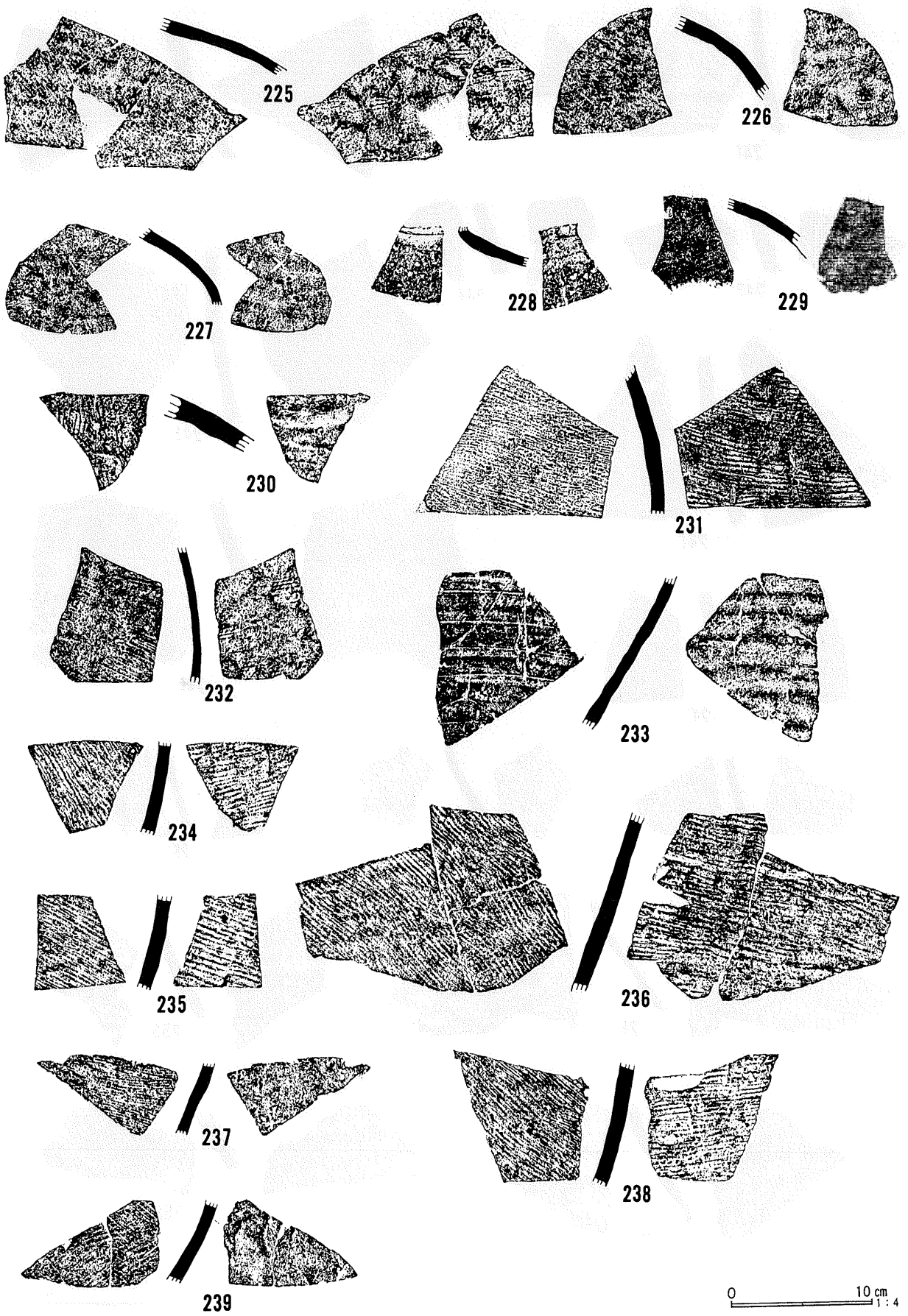
第65図　遺構外出土遺物（5）



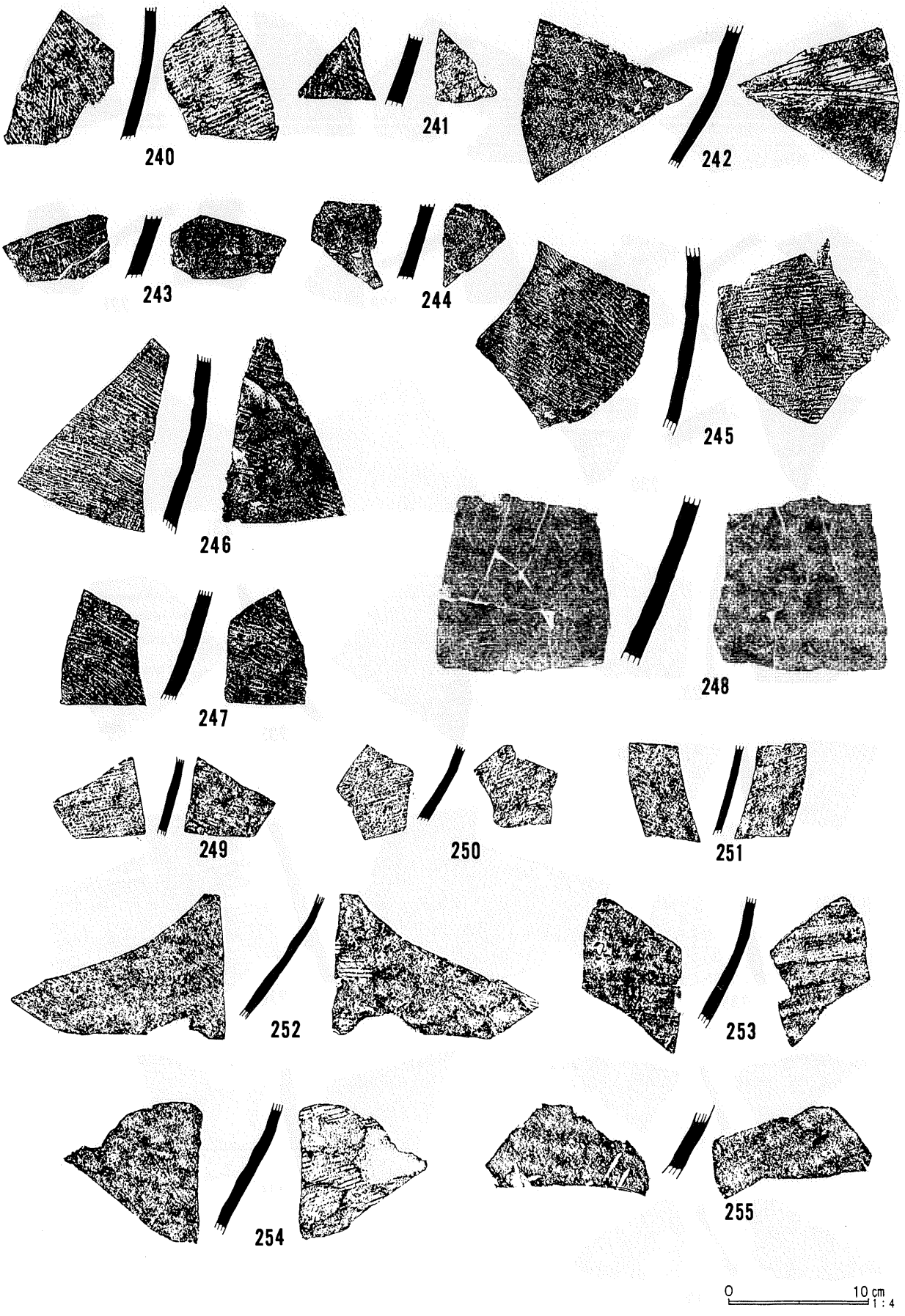
第66図　遺構外出土遺物（6）



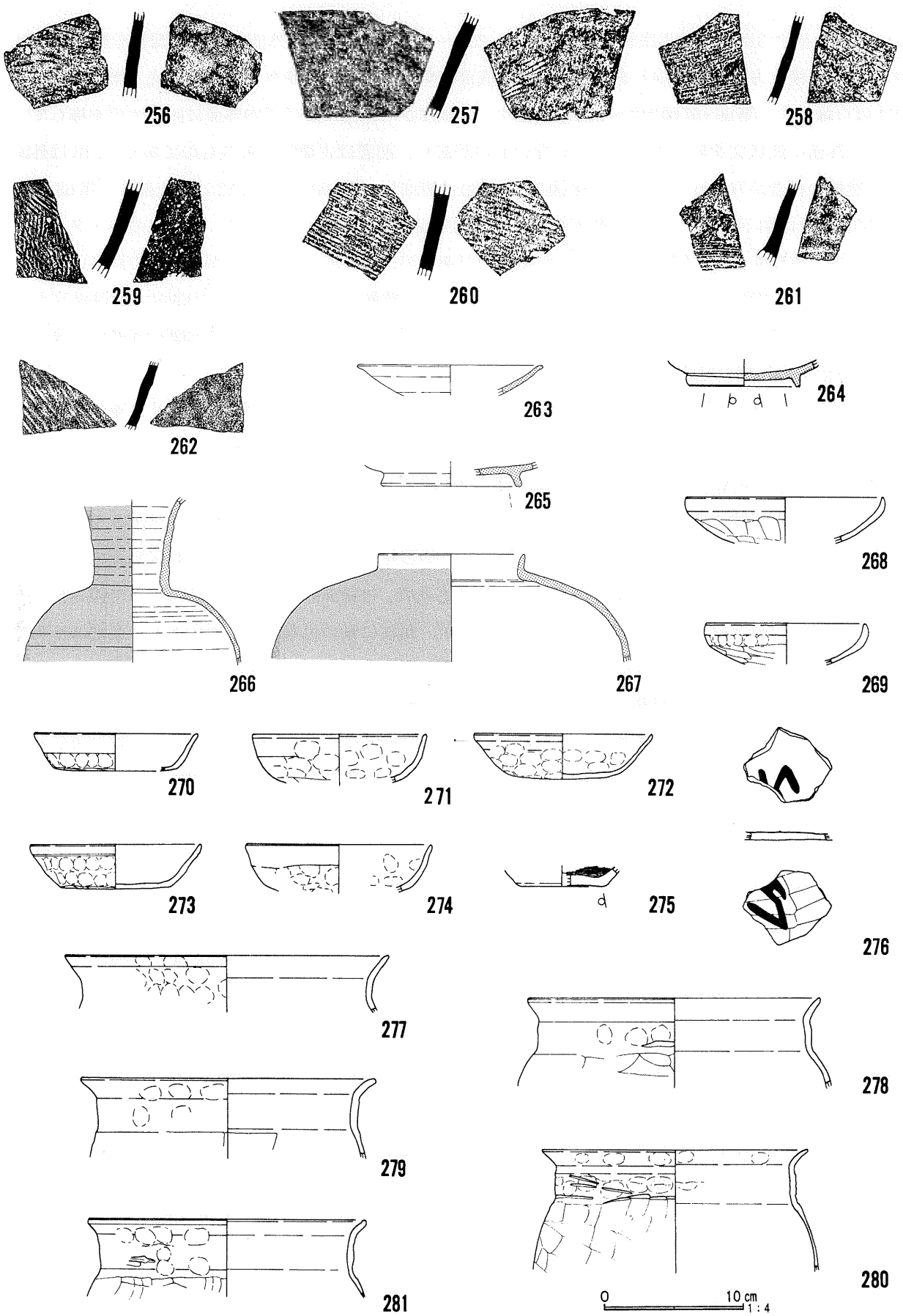
第67図　遺構外出土遺物（7）



第68図　遺構外出土遺物（8）



第69図　遺構外出土遺物（9）



第70図　遺構外出土遺物（10）

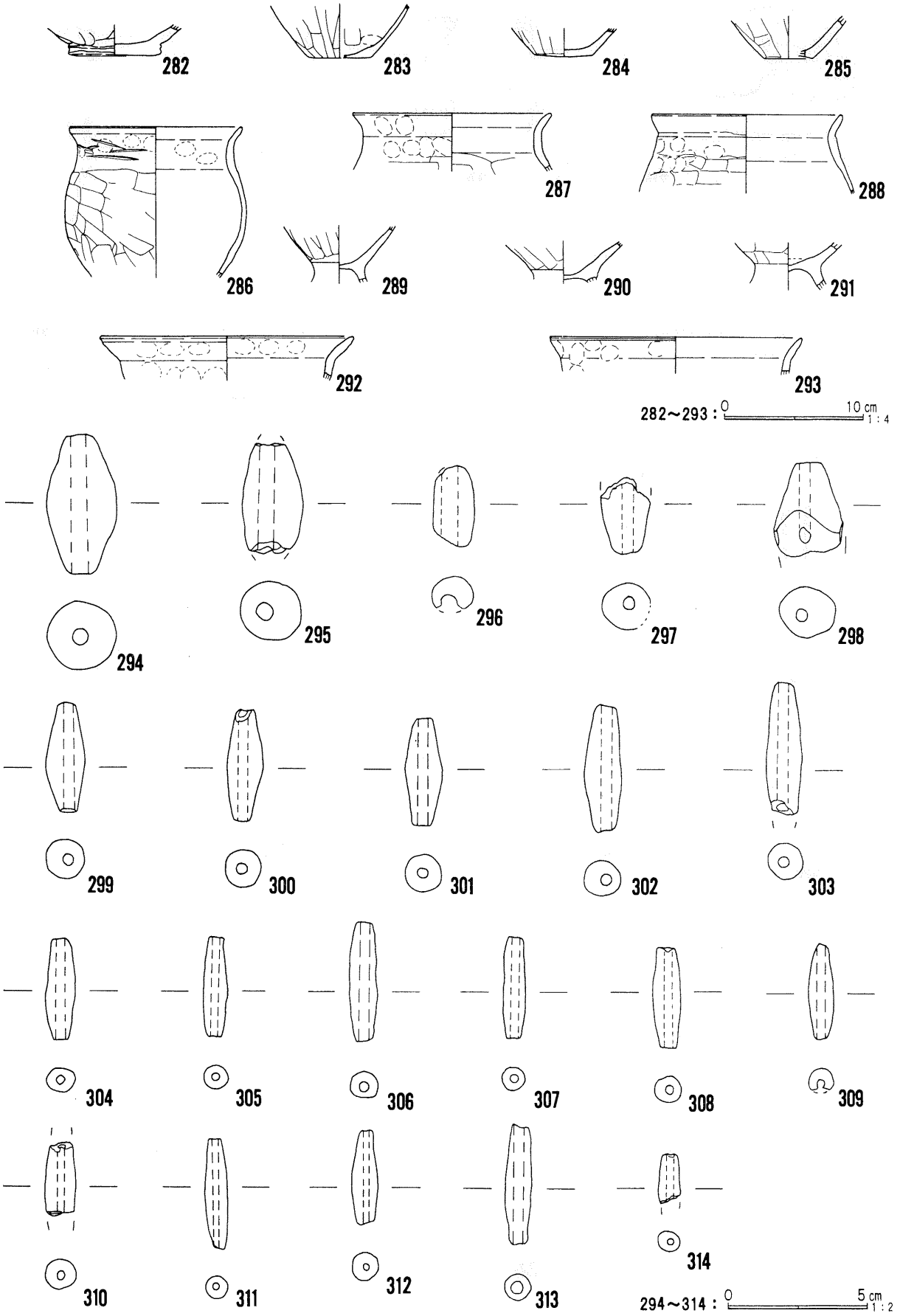
い。球形を呈するが底部は平底状を呈している。201～203は胴下部に内外面回転ナデ調整を施すが、202のみ下端に横位方向のヘラ削りを施している。底部調整はすべてヘラ削りである。平底。第66図205～211は口縁部片、第66・67図212～216は頸部片。口縁部から頸部にかけて内外面に回転ナデを施しているが、外面に波状文を施文するものとしないものがあり、前者は古墳時代末のものである。216は外面に自然釉の付着がみられた。第67・68図217～230は肩部片、第68図231・232は胴上部片、第68～70図233～262は胴下部片。肩部から胴下部にかけて内外面にタタキ目があるもの、片面にのみタタキ目があるもの、内外面ともに回転ナデが施されるものがあるが、内外面にタタキ目があるものが多い。このうち220のみ古墳時代末のものである。外面には帯状の自然釉が付着しており、内面には青海波文がみられた。233は焼きが悪く、調整は内外面ともに回転ナデである。須恵器としたが羽釜の可能性もある。256は外面に自然釉の付着がみられた。

第70図263～266は灰釉陶器。263～265は高台付皿。すべて東濃産。263は口縁部片。無釉である。264・265は高台部のみである。264は高台部の断面が三日月形をしている。施釉しているか不明である。底部調整は中心に回転糸切り痕を残す。折戸53号窯式併行と思われる。265は高台部の断面形が角張っており「ハ」の字状に開く。内面には刷毛塗りによる施釉がみられる。底部調整はヘラ削りである。黒笹90号窯式併行と思われる。266は長頸瓶。第1区一括遺物であるが平成4年度調査区出土であることから、A～D－30～32グリッドのいずれかから検出された。口縁部直下から胴上部にかけてのみ検出された。外面には刷毛塗りによる施釉がなされているが、頸部に釉の付着がない所がある。産地は不明であるが黒笹90号窯式併行と思われる。口縁部は意図的に打ち欠かれ、廃棄されたと思われる。

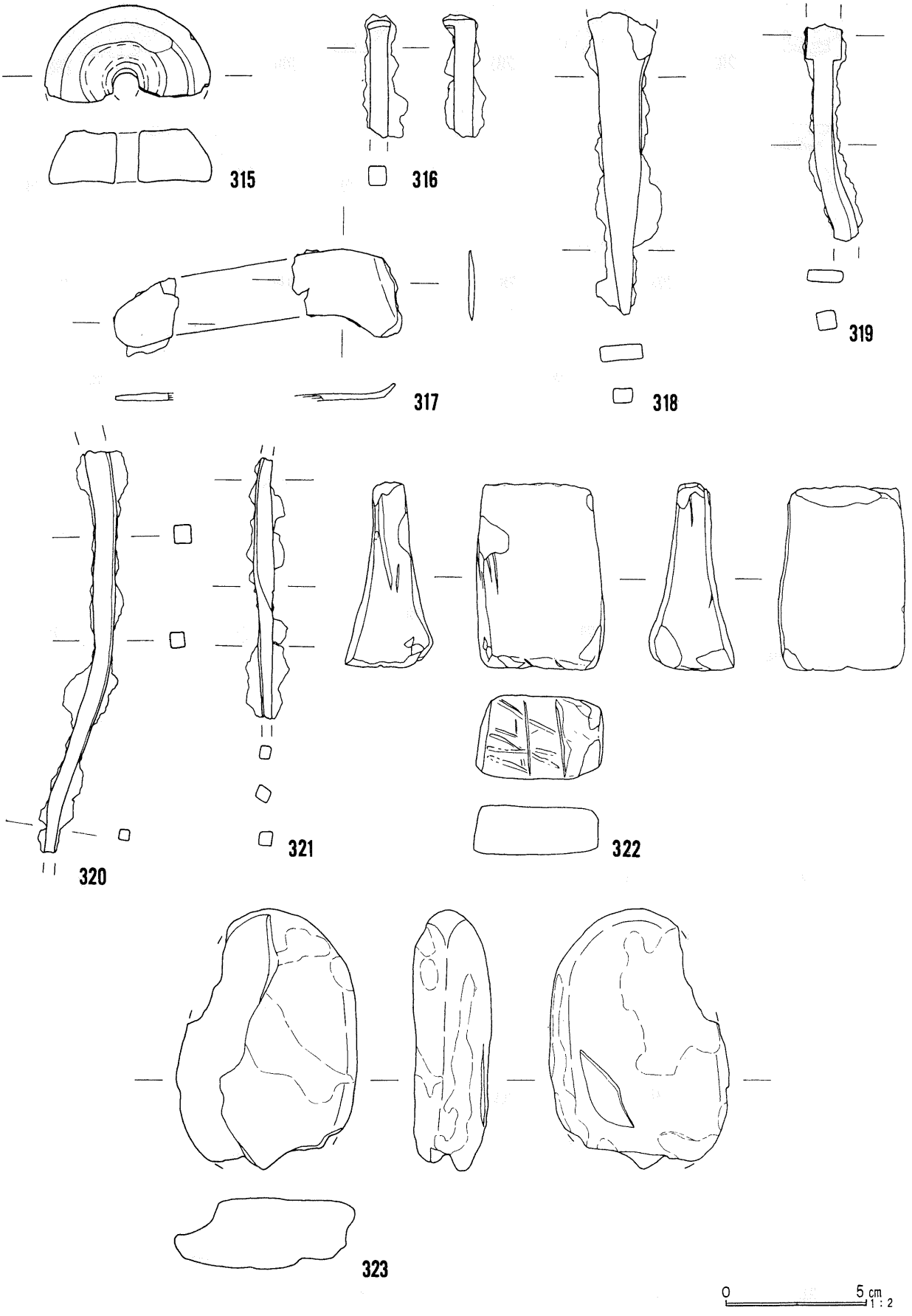
第70図267は緑釉陶器・短頸壺。唯一検出された緑釉陶器である。口縁部から胴部中段までの検出である。胎土は白色で黒色粒を多量含んでいる。肩部以下は刷毛塗りによる施釉がなされ、釉は頸部と肩部できれいに分かれており、境には釉が帯状に溜まっている。猿投産。黒笹90号窯式期のものか。

第70・71図268～293は土師器。268～276は坏。このうち268・269は古墳時代末の坏であり、いわゆる北武蔵型坏である。口縁部はほぼ直立し、丸底である。268は体部から底部の調整が横位のヘラ削りであるが、269は体部に指オサエ、底部にのみヘラ削りを施している。270～277は9世紀後半～10世紀初頭の土器。270～274は口縁部に横ナデ、体部に指オサエ、平底底面にヘラ削りを施している。271・272・274は内面にも指オサエがみられた。275は底部のみである。体部外面は回転ナデ、内面は横・斜位の細かいミガキと黒色処理が施されている。底部調整は回転糸切り痕を残す。270～274より新しい。276は平底の底部片。内外面に墨書がみられたが、破片であるため詳細は不明である。文字というよりは記号に近い。277～288は甕。282は古墳時代後期のものである。底部のみ検出された。器壁が厚手で底部は円柱状を呈する。282以外は平安時代の甕。277～281は口縁部が「コ」の字状を呈する。外面には指頭圧痕、ヘラによる刻み等がみられる。283～285は底部片。283のみ器壁が薄い。286～288は小型の甕。台付になる可能性が高い。いずれも口縁部の「コ」の字が崩れ、器壁も厚手であり退化的な様相を示す。289～291は台付甕。接合部のみ検出された。292・293は甑。ともに口縁部のみ検出された。292は内外面、293は外面に指頭圧痕がみられた。

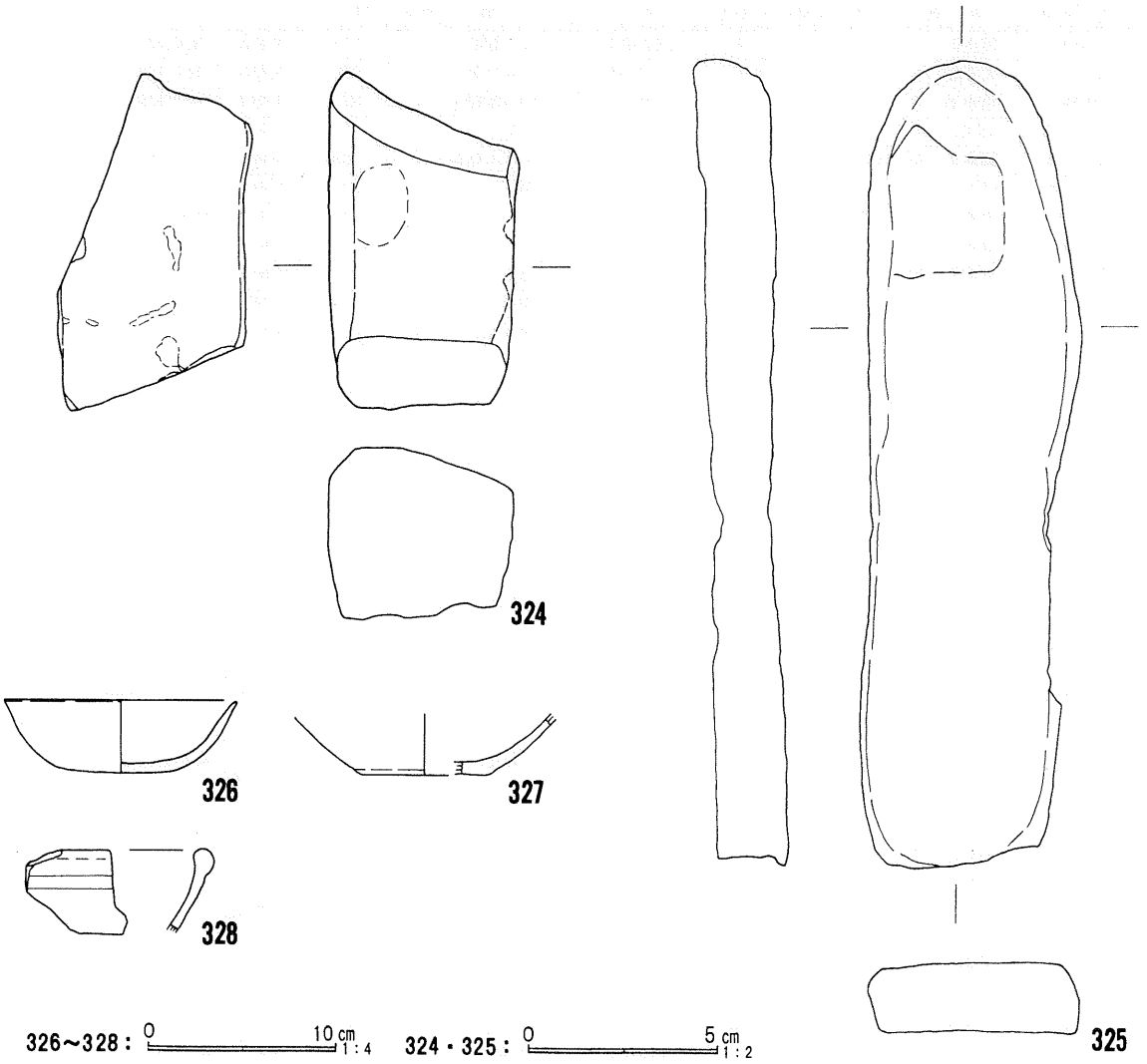
第71・72図294～315は平安時代の土製品。土製品も土器同様、遺構外出土遺物が集中してみられた3つの地点から検出された。294～314は土錘。完形品は少ないが3つのタイプに分けられる。1つは大



第71図　遺構外出土遺物（11）



第72図　遺構外出土遺物（12）



第73図　遺構外出土遺物（13）

第24表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	C-35G	縄文土器深鉢	－	－	－	ABGMN	にぶい褐色	B	胴上部片	縄文中期中葉。
2	C-35G	縄文土器深鉢	－	－	－	ABMN	にぶい褐色	B	胴下部片	縄文中期中葉。
3	H-18G	縄文土器深鉢	－	－	－	ABGM	明褐色	B	口縁部片	縄文前期後葉。４～６と同一個体。
4	H-18G	縄文土器深鉢	－	－	－	ABGHKM	橙色	B	胴下部片	縄文前期後葉。３・５・６と同一個体。
5	H-18G	縄文土器深鉢	－	－	－	ABGJKMN	にぶい橙色	B	胴下部片	縄文前期後葉。３・４・６と同一個体。
6	H-18G	縄文土器深鉢	－	－	－	ABHM	にぶい橙色	C	胴下部片	縄文前期後葉。３～５と同一個体。
7	1区一括	石　鏃	最大長2.15cm、最大幅1.7cm、最大厚0.25cm。重量0.5ｇ。黒耀石。完形。							
8	1区一括	石　鏃	最大長3.1cm、最大幅1.95cm、最大厚0.5cm。重量2.8ｇ。チャート。完形。							
9	M-27G	打製石斧	最大長14.95cm、最大幅6.6cm、最大厚1.8cm。重量190ｇ。中粒砂岩。完形。							
10	B-32G	打製石斧	最大長6.8cm、最大幅6.4cm、最大厚1.5cm。重量62.1ｇ。粘板岩。完形？二次使用？							
11	J-27G	打製石斧	最大長8.6cm、最大幅5.8cm、最大厚1.35cm。重量71.9ｇ。粘板岩。完形。							
12	P-25G	打製石斧	最大長10.55cm、最大幅5.2cm、最大厚1.35cm。重量105ｇ。細粒砂岩。完形。							
13	1区一括	打製石斧	最大長9.2cm、最大幅5.5cm、最大厚1.45cm。重量72.1ｇ。粘板岩。完形。							
14	D-34G	打製石斧	最大長（8.1）cm、最大幅（5.1）cm、最大厚2.7cm。重量93.1ｇ。中粒砂岩。半分欠。							
15	Q-36G	須恵器　蓋	(15.0)	(2.1)	－	ABLN	青灰色	A	10%	末野産。
16	D-31G	須恵器　坏	(12.0)	3.6	(7.6)	ABF	灰白色	A	15%	南比企産。
17	B-33G	須恵器　坏	(11.2)	4.0	6.0	ABGKM	淡黄色	C	50%	酸化焔焼成。ロクロ土師器？
18	O-26G	須恵器　坏	(13.0)	4.7	6.4	ABFM	暗灰黄色	A	45%	南比企産。
19	C-34G	須恵器　坏	(13.2)	3.6	(6.3)	BDEGHLMN	にぶい黄橙色	C	25%	末野産。内外面タール付着。
20	D-33G	須恵器　坏	(13.4)	3.4	(6.2)	BGLN	灰色	B	30%	末野産。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
21	E-33G	須恵器　坏	(13.0)	3.3	6.4	ABDEGM	にぶい黄橙色	C	75%	末野産？酸化焔焼成。
22	Q-24G	須恵器　坏	(14.1)	3.9	(6.6)	ABCGHJN	にぶい褐色	C	30%	末野産？酸化焔焼成。
23	P-25G	須恵器　坏	13.9	4.2	6.1	ABCN	にぶい黄橙色	C	85%	末野産？酸化焔焼成。
24	1区一括	須恵器　坏	(13.2)	3.7	(6.0)	ABHLN	灰色	B	40%	末野産。
25	1区一括	須恵器　坏	(13.1)	3.8	(5.8)	ABDGLN	にぶい赤褐色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
26	1区一括	須恵器　坏	(13.2)	3.8	(6.6)	ADGL	褐灰色	C	20%	末野産。
27	B-31・32G	須恵器　坏	(13.4)	3.7	(5.8)	BDLM	オリーブ黒色	C	30%	末野産。酸化焔焼成。
28	C-33G	須恵器　坏	(13.5)	(2.7)	(6.6)	ABLN	灰色	B	25%	末野産。
29	D-33G	須恵器　坏	(13.5)	3.1	6.0	AGLN	黄灰色	B	35%	末野産。
30	1区一括	須恵器　坏	(13.0)	3.25	(5.0)	ABGL	褐灰色	B	30%	末野産。
31	1区一括	須恵器　坏	(12.8)	3.4	(6.0)	ABGM	褐灰色	C	40%	末野産？
32	1区一括	須恵器　坏	(12.6)	3.3	(5.0)	ABGLN	灰色	B	30%	末野産。
33	3区一括	須恵器　坏	12.7	4.0	5.5	ABGLMN	灰色	A	60%	末野産。
34	C-34G	須恵器　坏	(13.0)	4.0	(5.8)	ABHL	黄灰色	A	30%	末野産。
35	E-33G	須恵器　坏	(12.6)	3.9	5.5	ADMN	灰白色	C	35%	末野産？
36	Q-36G	須恵器　坏	(12.2)	3.1	(5.0)	ABGLN	褐灰色	A	20%	末野産。
37	B・C-33・34G	須恵器　坏	(14.0)	(2.7)	—	ALN	灰色	A	25%	末野産。
38	B-34G	須恵器　坏	(12.9)	(3.3)	—	ABFGHKMN	灰黄色	C	35%	南比企産。
39	C-33G	須恵器　坏	(12.7)	(2.3)	—	ADGLN	灰色	A	40%	末野産。
40	P-37G	須恵器　坏	(13.0)	(2.7)	—	ABG	灰色	B	15%	末野産？
41	Q-41G	須恵器　坏	(13.2)	(2.15)	—	ADEHMN	にぶい黄橙色	C	30%	末野産？酸化焔焼成。
42	3区一括	須恵器　坏	(13.0)	(3.4)	—	ABGHN	褐灰色	C	20%	末野産？
43	3区一括	須恵器　坏	(12.4)	(2.6)	—	BGLN	灰色	C	25%	末野産。
44	3区一括	須恵器　坏	(13.2)	(2.9)	—	ABDL	灰色	A	20%	末野産。
45	C-34G	須恵器　坏	—	(1.4)	6.8	AFN	灰色	A	65%	南比企産。
46	B-32G	須恵器　坏	—	(1.7)	(5.0)	ABDEHLN	橙色	B	40%	末野産。酸化焔焼成。
47	B-32G	須恵器　坏	—	(1.7)	(7.4)	BCHKMN	にぶい黄褐色	C	25%	末野産？酸化焔焼成。
48	B-33G	須恵器　坏	—	(1.7)	(5.9)	ABCHL	灰白色	C	45%	末野産。
49	B-33G	須恵器　坏	—	(1.6)	(5.4)	ABHLN	灰色	B	25%	末野産。
50	B-33G	須恵器　坏	—	(1.2)	(5.0)	AB	灰色	B	30%	末野産？
51	B-33G	須恵器　坏	—	(1.2)	(7.4)	ABGL	灰色	A	25%	末野産。
52	B-33G	須恵器　坏	—	(0.8)	(6.0)	ABH	灰色	A	25%	末野産？
53	B-34G	須恵器　坏	—	(1.45)	(6.0)	ABL	黄灰色	A	45%	末野産。
54	B-34G	須恵器　坏	—	(2.6)	5.6	ADGHLMN	にぶい黄色	C	80%	末野産。酸化焔焼成。
55	B-34G	須恵器　坏	—	(1.7)	(6.5)	ABLMN	灰白色	A	30%	末野産。
56	B-34G	須恵器　坏	—	(2.0)	(7.2)	ABGLMN	浅黄色	C	25%	末野産。酸化焔焼成。
57	B-34G	須恵器　坏	—	(1.8)	(6.2)	ABLN	灰色	A	40%	末野産。
58	B-34G	須恵器　坏	—	(1.9)	(6.0)	AGLN	褐灰色	A	25%	末野産。
59	B-34G	須恵器　坏	—	(1.1)	(5.6)	ABGHL	灰色	A	25%	末野産。
60	B-34G	須恵器　坏	—	(2.1)	(5.8)	AEGJLMN	にぶい黄褐色	C	30%	末野産。酸化焔焼成。
61	B-34G	須恵器　坏	—	(1.0)	6.5	BGLN	灰色	B	90%	末野産。
62	C-31G	須恵器　坏	—	(2.0)	(6.0)	ABGHL	灰色	A	40%	末野産。
63	C-31G	須恵器　坏	—	(1.75)	(6.8)	ABDEM	灰黄褐色	C	25%	末野産？
64	C-31G	須恵器　坏	—	(0.9)	(6.7)	ABDN	灰白色	C	30%	末野産？
65	C-33G	須恵器　坏	—	(1.8)	(6.4)	ABEHLMN	にぶい黄橙色	C	25%	末野産。酸化焔焼成。
66	C-33G	須恵器　坏	—	(0.9)	(5.6)	ABDHMN	灰黄色	A	50%	末野産？
67	C-33G	須恵器　坏	—	(1.3)	(7.0)	ABDJN	黄灰色	B	25%	末野産？
68	C-34G	須恵器　坏	—	(1.5)	(5.6)	ADEHLMN	にぶい黄色	C	25%	末野産。
69	C-34G	須恵器　坏	—	(1.1)	(5.2)	BGN	褐灰色	B	40%	末野産？
70	C-34G	須恵器　坏	—	(1.0)	(6.45)	ABGHM	黄灰色	A	40%	末野産？
71	C-34G	須恵器　坏	—	(1.1)	(6.9)	ABGHLN	灰色	B	20%	末野産。
72	C-34G	須恵器　坏	—	(0.7)	(5.6)	ABHL	褐灰色	A	35%	末野産。
73	C-35G	須恵器　坏	—	(1.05)	(5.6)	ABGHMN	灰黄褐色	B	40%	酸化焔焼成。ロクロ土師器？
74	C-35G	須恵器　坏	—	(0.6)	(5.8)	ABL	灰色	A	40%	末野産。
75	D-33G	須恵器　坏	—	(1.8)	6.4	ABEHM	灰黄色	C	85%	末野産？
76	E-33G	須恵器　坏	—	(1.9)	(5.0)	BDGLM	灰白色	C	30%	末野産。
77	E-33G	須恵器　坏	—	(1.4)	(7.2)	ADEGHL	灰色	B	30%	末野産。
78	L-34G	須恵器　坏	—	(2.0)	(5.8)	ABJ	灰白色	C	25%	末野産？
79	L-35G	須恵器　坏	—	(2.0)	(7.0)	ABHL	灰白色	B	25%	末野産。
80	M-38G	須恵器　坏	—	(1.2)	(7.0)	ABHL	灰色	A	30%	末野産。
81	O-26G	須恵器　坏	—	(1.8)	(6.8)	AGHL	にぶい赤褐色	B	70%	末野産。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
82	O-26G	須恵器　坏	—	(1.0)	5.4	ABGL	灰白色	B	75%	末野産。
83	O-26G	須恵器　坏	—	(0.9)	(6.2)	ABDGHLN	黄灰色	A	30%	末野産。
84	P-25G	須恵器　坏	—	(1.6)	(5.7)	ABDHLN	灰色	B	45%	末野産。
85	P-25G	須恵器　坏	—	(1.4)	5.8	AGHLN	灰色	B	50%	末野産。
86	P-25G	須恵器　坏	—	(1.2)	5.2	BCGLN	灰白色	C	90%	末野産。酸化焔焼成。
87	P-36G	須恵器　坏	—	(0.8)	(5.6)	AHL	灰色	A	30%	末野産。
88	P-37G	須恵器　坏	—	(1.3)	(6.0)	ABEGLM	明黄褐色	C	30%	末野産。酸化焔焼成。
89	Q-23G	須恵器　坏	—	(0.8)	(6.6)	ABGKLMN	灰色	A	25%	末野産。
90	Q-24G	須恵器　坏	—	(0.9)	(6.0)	AGHKLN	褐灰色	C	45%	末野産。
91	Q-36G	須恵器　坏	—	(1.2)	(6.5)	ABGL	灰色	A	25%	末野産。
92	Q-36G	須恵器　坏	—	(1.4)	(6.6)	ABHN	灰色	B	20%	末野産？
93	R-24G	須恵器　坏	—	(2.8)	6.0	AHKLMN	褐灰色	C	40%	末野産。酸化焔焼成。
94	R-36G	須恵器　坏	—	(0.9)	6.0	ABCGKM	にぶい黄色	C	30%	末野産？
95	1区一括	須恵器　坏	—	(1.8)	6.0	ABGLN	灰白色	B	90%	末野産。
96	1区一括	須恵器　坏	—	(1.7)	6.0	ABGKMN	灰白色	C	30%	末野産？
97	1区一括	須恵器　坏	—	(1.9)	(6.0)	ABGHLMN	浅黄色	C	25%	末野産。酸化焔焼成。
98	1区一括	須恵器　坏	—	(2.2)	(6.0)	AG	褐灰色	B	25%	産地不明。
99	1区一括	須恵器　坏	—	(1.1)	(5.8)	ABGLN	灰白色	A	30%	末野産。
100	1区一括	須恵器　坏	—	(1.05)	(6.6)	ABDN	黄灰色	B	35%	末野産？
101	1区一括	須恵器　坏	—	(0.8)	(6.1)	ABGN	灰色	B	25%	末野産？
102	1区一括	須恵器　坏	—	(2.2)	(6.2)	ABDH	灰黄褐色	C	25%	末野産？酸化焔焼成。
103	1区一括	須恵器　坏	—	(0.9)	(6.0)	ABHKGM	灰黄褐色	C	25%	末野産？
104	1区一括	須恵器　坏	—	(1.4)	(6.0)	ABDKM	灰黄褐色	C	25%	末野産？
105	1区一括	須恵器　坏	—	(3.3)	6.2	ABGL	灰白色	B	20%	末野産。
106	1区一括	須恵器　坏	—	(1.9)	(6.1)	ABDH	灰白色	B	30%	末野産？
107	1区一括	須恵器　坏	—	(2.2)	(6.0)	ABEHLM	にぶい褐色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
108	1区一括	須恵器　坏	—	(1.8)	(6.1)	AGLN	灰色	B	35%	末野産。
109	1区一括	須恵器　坏	—	(1.0)	5.4	ABGHL	灰色	A	60%	末野産。
110	E-33G	須恵器高台椀	14.6	(4.5)	—	ABGL	灰色	B	40%	末野産。
111	E-33G	須恵器高台椀	17.0	8.5	8.45	ABGHLN	灰色	A	85%	末野産。
112	P-25G	須恵器高台椀	(17.35)	(7.0)	—	ABDGLN	灰色	A	40%	末野産。
113	B-32G	須恵器高台椀	(14.5)	6.9	6.7	ABHLN	灰色	A	35%	末野産。
114	C-35G	須恵器高台椀	(14.55)	6.45	7.4	ABGHLN	黄灰色	B	60%	末野産。
115	K-34G	須恵器高台椀	(15.0)	6.55	7.1	ABEML	灰黄色	B	40%	末野産。
116	L-35G	須恵器高台椀	14.6	5.9	7.0	AGHLN	灰色	B	50%	末野産。
117	1区一括	須恵器高台椀	(15.0)	6.2	(8.4)	ABDGLN	灰白色	B	30%	末野産。
118	1区一括	須恵器高台椀	(15.0)	6.4	(7.0)	ALGHM	黒色	C	45%	末野産。酸化焔焼成。
119	1区一括	須恵器高台椀	(15.0)	6.4	7.2	ABGLM	浅黄色	C	50%	末野産。
120	1区一括	須恵器高台椀	14.2	5.5	7.0	ABGLN	暗灰黄色	B	70%	末野産。底面×印有。
121	B-32G	須恵器高台椀	(15.0)	(4.7)	—	AGLN	灰色	A	35%	末野産。
122	B-33G	須恵器高台椀	(15.8)	(3.8)	—	ABGLN	灰色	B	20%	末野産。
123	B-33G	須恵器高台椀	(14.0)	(3.7)	—	ABDHM	にぶい橙色	C	30%	末野産？酸化焔焼成。
124	D-31G	須恵器高台椀	(14.2)	(5.3)	—	AEHLN	明赤褐色	C	30%	末野産。酸化焔焼成。
125	P-25G	須恵器高台椀	(14.6)	(2.7)	—	AGLN	灰色	B	30%	末野産。
126	Q-24G	須恵器高台椀	(15.0)	(4.8)	—	BCEHL	にぶい黄橙色	C	30%	末野産。酸化焔焼成。
127	1区一括	須恵器高台椀	(14.8)	(2.6)	—	ABGJM	褐色	B	15%	末野産？酸化焔焼成。
128	1区一括	須恵器高台椀	(15.4)	(4.1)	—	ABGHKLM	灰白色	C	25%	末野産。
129	B-32G	須恵器高台椀	—	(2.3)	(6.7)	ABDLM	灰黄色	C	25%	末野産。
130	B-32・33G	須恵器高台椀	—	(2.35)	(7.0)	AGLN	青灰色	B	40%	末野産。
131	B-33G	須恵器高台椀	—	(3.5)	8.0	BEHLJKMN	にぶい黄褐色	C	65%	末野産。酸化焔焼成。外面墨書有。
132	B-34G	須恵器高台椀	—	(4.8)	(7.6)	ABHLMN	灰オリーブ色	C	20%	末野産。
133	B-34G	須恵器高台椀	—	(3.1)	(8.2)	ADELN	にぶい黄褐色	C	70%	末野産。酸化焔焼成。
134	B-34G	須恵器高台椀	—	(3.35)	(7.8)	ABGHL	灰色	A	30%	末野産。
135	B-34G	須恵器高台椀	—	(3.0)	(8.0)	ABGHN	褐灰色	B	15%	末野産。
136	B-34G	須恵器高台椀	—	(2.3)	(7.2)	AGHLMN	明赤褐色	C	25%	末野産。酸化焔焼成。
137	B-34G	須恵器高台椀	—	(2.1)	(7.6)	ADGLMN	灰黄褐色	C	30%	末野産。酸化焔焼成。
138	C-34G	須恵器高台椀	—	(4.2)	(7.6)	ABHLMN	黄灰色	C	75%	末野産。
139	C-34G	須恵器高台椀	—	(2.8)	6.8	AEGLMN	灰白色	C	60%	末野産。
140	C-34G	須恵器高台椀	—	(2.0)	(7.8)	ABHL	黄灰色	A	30%	末野産。
141	C-34G	須恵器高台椀	—	(1.55)	—	BDHM	にぶい褐色	C	35%	末野産？酸化焔焼成。
142	D-31G	須恵器高台椀	—	(1.9)	6.3	BCDGLM	にぶい赤褐色	C	90%	末野産。酸化焔焼成。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
143	D-33G	須恵器高台椀	—	(3.7)	(7.6)	ABGL	灰色	A	60%	末野産。
144	D-33G	須恵器高台椀	—	(3.0)	8.0	ADEGHLMN	灰オリーブ色	C	95%	末野産。酸化焔焼成。
145	D-33G	須恵器高台椀	—	(2.0)	(7.8)	ACHL	黄灰色	A	30%	末野産。
146	D-33G	須恵器高台椀	—	(2.1)	(7.8)	ABGHMN	にぶい黄褐色	C	45%	酸化焔焼成。
147	E-33G	須恵器高台椀	—	(3.5)	(8.3)	ABHLN	灰色	A	40%	末野産。
148	E-33G	須恵器高台椀	—	(2.6)	(7.0)	ABGHLM	灰黄色	C	25%	末野産。
149	E-33G	須恵器高台椀	—	(1.9)	6.9	ABDGLMN	黄灰色	C	90%	末野産。
150	L-34G	須恵器高台椀	—	(3.85)	(8.8)	ABGLN	灰白色	B	30%	末野産。
151	L-35G	須恵器高台椀	—	(4.1)	(8.0)	ADHL	黄灰色	B	20%	末野産。
152	L-36G	須恵器高台椀	—	(2.9)	(9.0)	ABGHL	黄灰色	B	25%	末野産。
153	O-26G	須恵器高台椀	—	(3.6)	(9.0)	ABGLN	灰色	B	30%	末野産。
154	O-26G	須恵器高台椀	—	(2.3)	(8.0)	ABCGHL	灰黄色	C	40%	末野産。
155	O-26G	須恵器高台椀	—	(2.4)	7.9	ABDGHJLMN	黄灰色	B	85%	末野産。
156	O-26G	須恵器高台椀	—	(3.0)	6.6	AGHLN	褐灰色	B	55%	末野産。
157	O-26G	須恵器高台椀	—	(2.8)	(6.9)	AGHLN	暗灰色	B	40%	末野産。
158	O-26G	須恵器高台椀	—	(1.5)	(8.4)	ABGHMN	灰白色	A	35%	末野産？
159	O-26G	須恵器高台椀	—	(1.5)	(8.0)	ABGHL	灰色	A	30%	末野産。
160	O-26G	須恵器高台椀	—	(1.8)	7.1	ABDEGHJLN	黄褐色	A	80%	末野産。
161	O-26G	須恵器高台椀	—	(2.0)	(8.0)	ABLN	灰色	A	30%	末野産。
162	O-26G	須恵器高台椀	—	(1.9)	7.0	ABCGHN	にぶい黄橙色	C	70%	産地不明。摩滅顕著。
163	P-25G	須恵器高台椀	—	(1.9)	(8.2)	ABHGML	灰黄色	C	30%	末野産。
164	P-25G	須恵器高台椀	—	(2.25)	(7.5)	ABDGMN	灰色	A	35%	末野産？酸化焔焼成。
165	Q-24G	須恵器高台椀	—	(2.7)	(8.2)	ABN	灰白色	C	30%	末野産？
166	Q-24G	須恵器高台椀	—	(1.0)	—	ABDJLMN	灰白色	C	30%	末野産。
167	Q-36G	須恵器高台椀	—	(2.0)	(8.4)	ABGH	灰色	A	20%	末野産？
168	1区一括	須恵器高台椀	—	(4.0)	(8.0)	ABGHL	灰色	A	40%	末野産。
169	1区一括	須恵器高台椀	—	(2.5)	(8.0)	ABEHKMN	にぶい橙色	C	50%	末野産？酸化焔焼成。
170	1区一括	須恵器高台椀	—	(1.6)	7.2	BDGHN	褐色	B	95%	末野産？酸化焔焼成。
171	6区一括	須恵器高台椀	—	(2.2)	6.7	AEGMN	にぶい黄橙色	C	80%	末野産？酸化焔焼成。
172	B-32G	須恵器　皿	(15.0)	2.3	(6.6)	ABDLM	にぶい黄橙色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
173	B-32G	須恵器　皿	(14.6)	2.0	6.8	ABLN	黄灰色	A	30%	末野産。
174	B-32G	須恵器　皿	(14.2)	2.1	(6.2)	ABG	灰色	A	35%	末野産？
175	B-34G	須恵器　皿	(14.2)	1.85	(7.0)	AGHLN	灰色	A	35%	末野産。
176	C-34G	須恵器　皿	(14.4)	2.7	(6.0)	ABDGL	灰色	B	25%	末野産。
177	E-33G	須恵器　皿	(14.0)	2.1	(6.0)	ABHL	灰色	B	15%	末野産。
178	K-34G	須恵器　皿	(14.6)	2.1	(6.8)	ACGN	暗灰黄色	C	20%	末野産？
179	L-35G	須恵器　皿	(14.0)	2.4	(5.6)	ABDLM	にぶい橙色	C	25%	末野産。酸化焔焼成。
180	L-36G	須恵器　皿	(16.4)	2.6	(6.4)	AEGHKLM	黒褐色	C	15%	末野産。酸化焔焼成。
181	Q-24G	須恵器　皿	(14.8)	2.1	(7.2)	ABLN	灰色	A	15%	末野産。
182	1区一括	須恵器　皿	13.2	2.3	6.2	ABDGHKMN	褐色	C	60%	末野産？酸化焔焼成。
183	1区一括	須恵器　皿	(14.4)	2.5	6.4	ABHLN	灰黄色	B	50%	末野産。
184	C-34G	須恵器　皿	(15.0)	(1.4)	—	ADGLM	橙色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
185	D-31G	須恵器　皿	—	(2.3)	(7.6)	ABGL	灰オリーブ色	B	40%	末野産。
186	D-33G	須恵器　皿	—	(1.1)	(6.6)	ABGLN	灰白色	B	30%	末野産。
187	E-33G	須恵器　皿	—	(1.4)	(6.3)	ABDGLM	灰白色	C	25%	末野産。
188	L-34G	須恵器　皿	—	(1.7)	(6.6)	ABLN	灰色	B	20%	末野産。
189	L-35G	須恵器　皿	—	(1.5)	7.2	ABHKL	灰色	B	60%	末野産。
190	Q-24G	須恵器　皿	—	(1.3)	(9.0)	AEGLM	明褐色	C	20%	末野産。酸化焔焼成。
191	C-33G	須恵器高台皿	(14.8)	3.1	7.6	ADEGLM	にぶい黄色	C	45%	末野産。酸化焔焼成。
192	C-34G	須恵器高台皿	(13.6)	2.9	(6.8)	ADHM	橙色	C	30%	末野産？酸化焔焼成。
193	O-26G	須恵器高台皿	(16.8)	(4.6)	(8.6)	ABLN	灰色	A	30%	末野産。
194	B-34G	須恵器高台皿	—	(1.6)	—	ABEHLMN	明赤褐色	C	70%	末野産。酸化焔焼成。
195	C-34G	須恵器高台皿	—	(1.8)	(7.0)	ABEGM	にぶい黄橙色	C	45%	末野産？酸化焔焼成。
196	P-25G	須恵器　壺	(15.1)	(4.5)	—	ABGHLN	黒色	B	25%	末野産。外面自然釉有。
197	1区一括	須恵器　壺	(13.4)	(5.6)	—	ABHL	灰色	B	20%	末野産。
198	O-26G	須恵器　鉢	(25.0)	(4.2)	—	ABGHKLM	にぶい黄色	C	10%	末野産。
199	E-33G	須恵器　瓶	—	(17.5)	10.0	ABGHLN	灰色	A	70%	末野産。
200	1区一括	須恵器　瓶	—	(4.9)	(12.4)	ABN	黄灰色	A	15%	産地不明。
201	P-25G	須恵器　甕	—	(2.0)	(18.0)	ABDGHLMN	にぶい黄橙色	C	40%	末野産。底部ヘラ削り。
202	Q-23G	須恵器　甕	—	(4.7)	(14.0)	ABGHLN	灰色	B	10%	末野産。
203	1区一括	須恵器　甕	—	(4.6)	(16.0)	ABDGN	灰色	B	10%	末野産？底部ヘラ削り。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
204	O-26G	須恵器　甕	—	(4.6)	(15.3)	ABGHLN	灰黄色	B	40%	末野産。古墳時代末。
205	B-32G	須恵器　甕	—	—	—	ABGHL	灰色	A	口縁部片	末野産。古墳時代末。
206	B-33G	須恵器　甕	—	—	—	ABEKHLN	灰色	B	口縁部片	末野産。古墳時代末。
207	C-34G	須恵器　甕	—	—	—	ABHLN	灰色	A	口縁部片	末野産。古墳時代末。
208	P-37G	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	A	口縁部片	南比企産。
209	Q-23G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	A	口縁部片	末野産。
210	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	紫灰色	B	口縁部片	末野産。
211	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	AGL	暗赤灰色	B	口縁部片	末野産。
212	C-35G	須恵器　甕	—	—	—	ABGLN	灰色	A	頸部片	末野産。古墳時代末。
213	Q-23G	須恵器　甕	—	—	—	ABGHL	灰色	A	頸部片	末野産。
214	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	AGLN	暗灰色	B	頸部片	末野産。
215	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	青灰色	A	頸部片	末野産。
216	R-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABGLN	黄灰色	A	頸部片	末野産。外面自然釉有。
217	B-33G	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	B	肩部片	末野産。
218	B-34G	須恵器　甕	—	—	—	ABEFGN	灰色	A	肩部片	南比企産。
219	C-33G	須恵器　甕	—	—	—	ADHLN	灰色	B	肩部片	末野産。
220	D-31G	須恵器　甕	—	—	—	ABGLN	灰色	B	肩部片	末野産。古墳時代末。外面自然釉有。
221	D-31G	須恵器　甕	—	—	—	ABDHLM	灰白色	C	肩部片	末野産。
222	E-32G	須恵器　甕	—	—	—	ABEHLN	黄灰色	A	肩部片	末野産。
223	E-33G	須恵器　甕	—	—	—	ABDEHL	灰色	A	肩部片	末野産。
224	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	青灰色	A	肩部片	末野産。
225	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABDGLN	褐灰色	B	肩部片	末野産。
226	O-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABGHLN	灰色	A	肩部片	末野産。
227	O-26G	須恵器　甕	—	—	—	ABGLN	灰色	A	肩部片	末野産。
228	1区一括	須恵器　甕	—	—	—	ABFGHN	灰色	B	肩部片	南比企産。
229	1区一括	須恵器　甕	—	—	—	AHL	灰色	A	肩部片	末野産。
230	1区一括	須恵器　甕	—	—	—	ABGHLN	青灰色	A	肩部片	末野産。
231	E-32G	須恵器　甕	—	—	—	ABEFHK	黄灰色	A	胴上部片	南比企産。
232	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABDGLN	黄灰色	A	胴上部片	末野産。
233	B-32G	須恵器　甕	—	—	—	ADHLMN	黄褐色	C	胴下部片	末野産。
234	B-33G	須恵器　甕	—	—	—	ABDGHL	灰色	A	胴下部片	末野産。
235	B-33G	須恵器　甕	—	—	—	ABELN	灰黄色	B	胴下部片	末野産。
236	B-34G	須恵器　甕	—	—	—	ABCLMN	灰白色	C	胴下部片	末野産。
237	C-31G	須恵器　甕	—	—	—	ALN	暗青灰色	A	胴下部片	末野産。
238	C-31G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	A	胴下部片	末野産。
239	C-31・32G	須恵器　甕	—	—	—	ABEN	灰色	B	胴下部片	末野産？
240	C-32G	須恵器　甕	—	—	—	ABEL	灰色	A	胴下部片	末野産。
241	C-34G	須恵器　甕	—	—	—	ABDEM	にぶい黄色	B	胴下部片	末野産？
242	O-26G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰黄色	B	胴下部片	末野産。
243	D-30G	須恵器　甕	—	—	—	ABDKMN	灰黄色	C	胴下部片	末野産？
244	D-30G	須恵器　甕	—	—	—	ABDGHLMN	にぶい黄色	C	胴下部片	末野産。
245	D-31G	須恵器　甕	—	—	—	ABELN	黄灰色	B	胴下部片	末野産。
246	E-33G	須恵器　甕	—	—	—	ABEGLN	灰色	A	胴下部片	末野産。
247	E-33G	須恵器　甕	—	—	—	ABDGL	灰色	C	胴下部片	末野産。
248	O-26G	須恵器　甕	—	—	—	ABDEGHL	灰色	A	胴下部片	末野産。
249	O-26G	須恵器　甕	—	—	—	ABFH	灰色	B	胴下部片	南比企産。
250	O-26G	須恵器　甕	—	—	—	ABDGHN	黄灰色	A	胴下部片	末野産？
251	O-26G	須恵器　甕	—	—	—	AFGN	暗灰色	A	胴下部片	南比企産。
252	O-26G	須恵器　甕	—	—	—	ABGLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
253	Q-23G	須恵器　甕	—	—	—	BHL	灰黄色	C	胴下部片	末野産。
254	Q-23G	須恵器　甕	—	—	—	ABGJL	灰黄色	A	胴下部片	末野産。
255	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	ABGHKM	灰白色	C	胴下部片	末野産？
256	Q-24G	須恵器　甕	—	—	—	BGLN	紫灰色	B	胴下部片	末野産。外面自然釉有。
257	Q-36G	須恵器　甕	—	—	—	ABGLN	灰黄色	C	胴下部片	末野産。
258	1区一括	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	A	胴下部片	末野産。
259	1区一括	須恵器　甕	—	—	—	ABF	青灰色	B	胴下部片	南比企産。
260	1区一括	須恵器　甕	—	—	—	ABDGLN	灰色	A	胴下部片	末野産。
261	1区一括	須恵器　甕	—	—	—	AFN	黄灰色	B	胴下部片	南比企産。
262	3区一括	須恵器　甕	—	—	—	ABEGL	褐灰	B	胴下部片	末野産。
263	6区一括	灰釉高台皿	(13.5)	(2.3)	—	AB	灰色	A	10%	東濃産。無釉。
264	O-26G	灰釉高台皿	—	(1.9)	8.0	AB	灰白色	A	85%	東濃産。施釉不明。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
265	P-25G	灰釉高台皿	－	(1.7)	(10.2)	ABN	灰色	A	20%	東濃産。内面釉刷毛塗り。
266	1区一括	灰釉長頸瓶	－	(11.9)	－	ABN	灰オリーブ色	A	40%	産地不明。外面釉刷毛塗り。
267	E-33G	緑釉短頸壺	10.6	(7.7)	－	ABN	灰白色	A	50%	猿投産。肩部以下外面釉刷毛塗り。
268	Q-24G	土師器　坏	(14.2)	(3.3)	－	BGHM	にぶい褐色	B	20%	古墳時代末。
269	Q-24G	土師器　坏	(11.5)	(2.9)	－	BHJKMN	にぶい黄褐色	A	25%	古墳時代末。
270	B-34G	土師器　坏	(11.8)	(2.7)	(8.9)	ABEK	橙色	A	15%	
271	C-35G	土師器　坏	(12.4)	(3.5)	(9.4)	BM	にぶい褐色	B	10%	
272	K-35G	土師器　坏	(12.9)	3.2	－	BCHM	橙色	B	30%	
273	1区一括	土師器　坏	(12.4)	3.15	(8.0)	BM	にぶい橙色	B	30%	
274	3区一括	土師器　坏	(13.4)	3.4	－	ABKHJ	橙色	C	10%	
275	K-34G	土師器　坏	－	(1.4)	(6.0)	ABKN	明赤褐色	A	30%	内面ミガキ、黒色処理。
276	L-36G	土師器　坏	－	－	－	ADGHJKM	明赤褐色	A	底部片	内外面墨書有。
277	B-32G	土師器　甕	(23.2)	(4.1)	－	ABKGM	橙色	A	15%	
278	B-32G	土師器　甕	(21.0)	(6.4)	－	ABDGHK	にぶい赤褐色	A	15%	
279	B-32・33G	土師器　甕	(21.2)	(5.7)	－	ABEGKM	明赤褐色	A	20%	
280	1区一括	土師器　甕	(19.0)	(8.8)	－	ABHKMN	赤褐色	A	25%	
281	1区一括	土師器　甕	(20.0)	(5.6)	－	ABHKM	にぶい褐色	A	20%	
282	O-26G	土師器　甕	－	(2.2)	(6.6)	ABDGJKM	橙色	B	40%	古墳時代後期。
283	C-34G	土師器　甕	－	(3.8)	(4.4)	ABJKM	にぶい黄褐色	A	30%	
284	E-33G	土師器　甕	－	(2.0)	4.2	ABGHM	赤褐色	B	60%	
285	Q-24G	土師器　甕	－	(3.0)	(3.4)	BEGJKM	灰褐色	A	30%	
286	E-33G	土師器　甕	(12.2)	(10.7)	－	ABCHKM	にぶい橙色	A	45%	
287	M-37G	土師器　甕	(14.2)	(4.1)	－	ABGHJM	橙色	A	20%	
288	O-26G	土師器　甕	(13.7)	(5.6)	－	ABEHKMN	褐色	A	20%	
289	B-32G	土師器台付甕	－	(4.1)	－	ABKM	赤褐色	B	90%	
290	B-33G	土師器台付甕	－	(3.0)	－	ABGHKM	暗褐色	B	50%	
291	B-34G	土師器台付甕	－	(3.4)	－	ABHJKM	明赤褐色	B	70%	
292	C-34G	土師器　甑	(18.0)	(3.1)	－	ABGHJKM	にぶい赤褐色	B	10%	
293	P-25G	土師器　甑	(18.0)	(2.6)	－	ABGHN	にぶい赤褐色	B	20%	
294	B-33G	土　錘	最大長5.0cm、最大径2.5cm、孔径0.55cm。重量25.3g。完形。							
295	D-31G	土　錘	最大長（3.9）cm、最大径2.15cm、孔径0.6cm。重量（14.1）g。両端欠。							
296	D-33G	土　錘	最大長（2.9）cm、最大径1.5cm、孔径0.6cm。重量（3.78）g。半分欠。							
297	1区一括	土　錘	最大長（2.7）cm、最大径1.75cm、孔径0.4cm。重量（6.3）g。片端欠。							
298	1区一括	土　錘	最大長（3.4）cm、最大径（2.45）cm、孔径0.4cm。重量（13.0）g。半分欠。							
299	B-32G	土　錘	最大長3.9cm、最大径1.4cm、孔径0.35cm。重量6.5g。完形。							
300	M-36G	土　錘	最大長4.0cm、最大径1.25cm、孔径0.35cm。重量（5.9）g。片端欠。							
301	N-37G	土　錘	最大長3.85cm、最大径1.3cm、孔径0.3cm。重量5.5g。完形。							
302	1区一括	土　錘	最大長4.6cm、最大径1.3cm、孔径0.4cm。重量（6.7）g。片端一部欠。							
303	1区一括	土　錘	最大長（4.75）cm、最大径1.25cm、孔径0.4cm。重量（7.1）g。片端欠。							
304	B-33G	土　錘	最大長3.6cm、最大径1.1cm、孔径0.3cm。重量3.5g。完形。							
305	B-34G	土　錘	最大長3.55cm、最大径0.9cm、孔径0.25cm。重量2.7g。完形。							
306	B-34G	土　錘	最大長4.25cm、最大径1.0cm、孔径0.35cm。重量4.1g。完形。							
307	C-33G	土　錘	最大長3.6cm、最大径0.8cm、孔径0.25cm。重量2.8g。完形。							
308	D-33G	土　錘	最大長3.6cm、最大径1.0cm、孔径0.3cm。重量（3.3）g。片端一部欠。							
309	M-37G	土　錘	最大長3.4cm、最大径0.9cm、孔径0.3cm。重量（2.1）g。片端欠。							
310	M-37G	土　錘	最大長（2.6）cm、最大径1.1cm、孔径0.25cm。重量（2.9）g。両端欠。							
311	M-38G	土　錘	最大長3.9cm、最大径0.8cm、孔径0.25cm。重量2.6g。完形。							
312	N-37G	土　錘	最大長（3.4）cm、最大径0.9cm、孔径0.2cm。重量（2.6）g。両端欠。							
313	Q-24G	土　錘	最大長（4.3）cm、最大径0.95cm、孔径0.4cm。重量（3.3）g。片端欠。							
314	Q-36G	土　錘	最大長（1.7）cm、最大径0.8cm、孔径0.25cm。重量（0.8）g。半分欠。							
315	B-34G	土製紡錘車	最大径5.8cm、最大厚1.8cm、孔径0.8cm。重量（33.0）g。半分欠。							
316	1区一括	鉄　釘	最大長（4.2）cm、最大幅0.85cm、最大厚0.7cm。重量（7.7）g。先端部欠。							
317	B-32G	鉄　鎌	最大長　－　、最大幅2.3cm、最大厚0.25cm。重量（8.8）g。刃部大半欠。							
318	1区一括	刀　子	最大長（10.8）cm、最大幅（2.25）cm、最大厚（0.55）cm。重量（40.4）g。刃部欠。							
319	1区一括	鑿？	最大長（7.7）cm、最大幅1.2cm、最大厚0.6cm。重量（15.0）g。刃部大半欠。柄部屈曲。							
320	1区一括	不明鉄製品	最大長（14.3）cm、最大幅（0.8）cm、最大厚（0.65）cm。重量（26.9）g。両端欠。棒状。屈曲している。							
321	1区一括	不明鉄製品	最大長（9.3）cm、最大幅0.6cm、最大厚0.5cm。重量（14.3）g。両端欠。棒状。捻れている。							
322	1区一括	砥　石	最大長6.6cm、最大幅4.5cm、最大厚3.0cm。重量101.8g。凝灰岩。完形。五面使用。							
323	B-34G	磨　石？	最大長（9.25）cm、最大幅6.35cm、最大厚2.5cm。重量（215）g。中粒砂岩。半分欠。表面平滑。							
324	B-34G	不明石製品	最大長8.9cm、最大幅4.8cm、最大厚4.5cm。重量300g。中粒砂岩。完形？三面平滑。							
325	1区一括	不明石製品	最大長42.4cm、最大幅11.2cm、最大厚3.7cm。重量2850g。片岩。一部欠。板状。先端部加工。							

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
326	1区一括	かわらけ	(12.3)	3.8	7.0	－	橙色	C	40%	摩滅顕著。
327	6区一括	かわらけ	－	(3.2)	(6.6)	－	橙色	C	25%	摩滅顕著。
328	1区一括	陶器　椀	－	－	－	－	灰白色	A	口縁部片	瀬戸美濃産。内外面灰釉。

型で中段の膨らみが大きいもの（294～298）、２つ目は中型で中段の膨らみがやや大きいもの（299～303）、３つ目は小型で中段の膨らみが小さいもの（304～314）である。いずれも遺構出土のものと形態的に変わりはない。315は土製紡錘車。半分を欠く。

第72図316～321は平安時代の鉄製品。すべて第１区からの検出であるが、317以外は出土位置が不明確である。316・318・321は昭和61年度調査Ａ区、319・320は平成元年度調査Ｂ区での検出である。316は鉄釘。先端部を欠く。317は鉄鎌。刃部先端と基部のみ検出された。刃部の大半を欠く。318は刀子。刃部を欠いている。やや大型の部類に入る。319は刃部の大半を欠き、側面に刃部がみられないことから鑿であろうか。柄部は屈曲している。320・321は不明鉄製品。ともに棒状を呈し、両端を欠いている。320は屈曲しており、321は時計回りに捻れている。

第72・73図322～325は石製品。322は平安時代のものと断定できるが、その他のものは不確定である。よって、323～325は時期不明とし第60図中には含まない。すべて第１区からの検出である。322は砥石。第１区一括遺物であるが、昭和61年度調査Ａ区検出である。凝灰岩製で五面使用している。完形品。323は欠損箇所が多いが全面平滑である。磨石か。中粒砂岩製。324・325は不明石製品。324は側面三面が平滑であるが、用途は不明である。中粒砂岩製。325は第１区一括遺物であるが、平成４年度調査区検出である。板状を呈し、先端は丸く加工されている。用途は不明である。片岩製。

第73図326～328は近世の土器。いずれも出土位置が不明確である。326・328は第１区一括遺物であるが、326は平成元年度調査Ｂ区、328は昭和61年度調査Ａ区からの検出である。327は第６区一括遺物であり、平成元年度調査Ａ区検出である。326・327はかわらけ。ともに摩滅が顕著であった。328は陶器椀。瀬戸美濃産と思われる。内外面には灰釉が施されている。

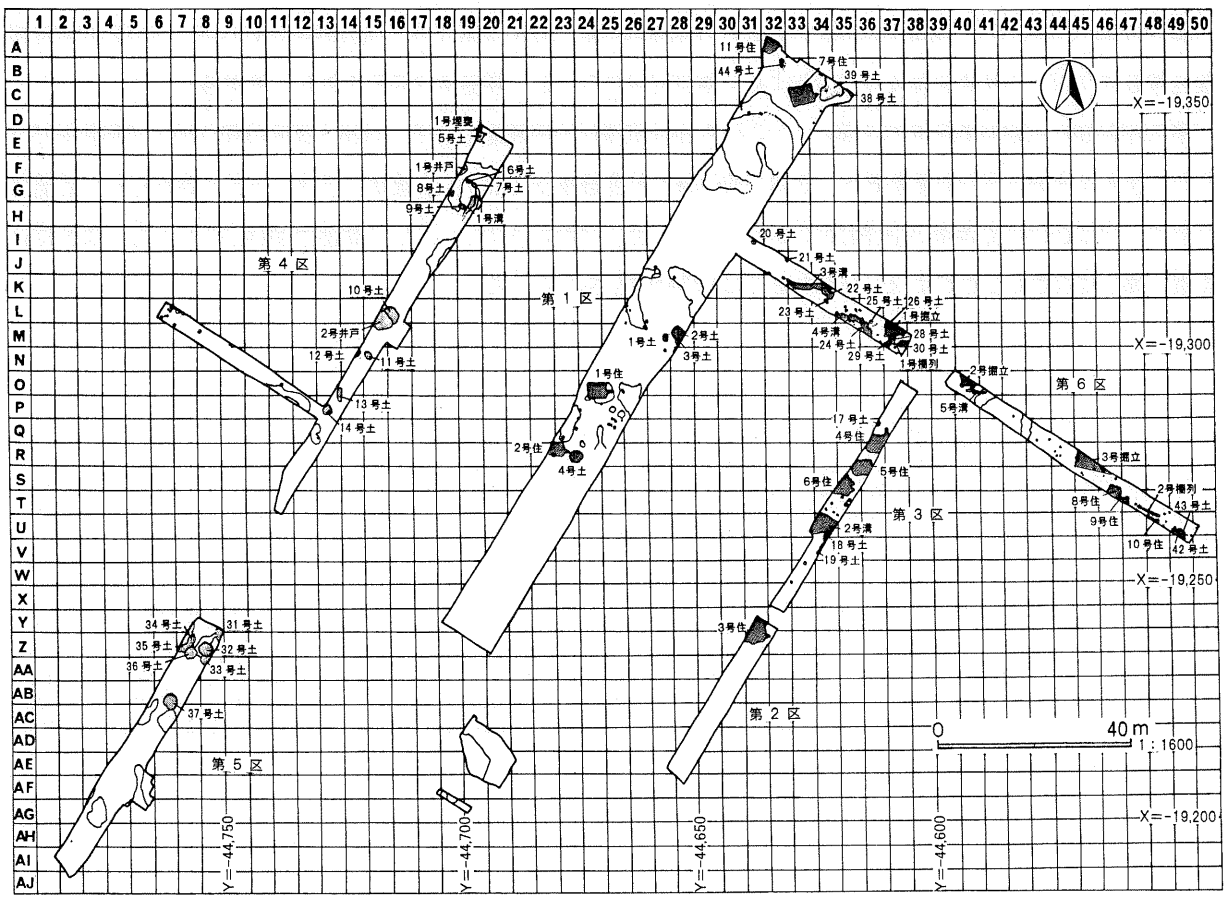
V　調査のまとめ

発掘調査によって検出された遺構・遺物は、旧石器時代から縄文時代、古墳時代、平安時代、中・近世と実に幅広い。遺跡の主体となるのは平安時代であるが、報告をまとめていくと実に興味深い成果を得ることができた。調査は区画整理に伴う街路築造部分のみであるため未知な部分が多いが、ここでは本報告の範囲に限り、明らかになった点について簡単に述べてみたい。

検出された遺構の分布をみると、第１区を境に平安時代と中・近世段階の遺構に分けることができる（第74図）。つまり、遺跡範囲の東側には平安時代の集落跡、西側には中・近世の土坑や井戸跡等が広がっており、東西で遺構の分布や時期が異なることが確認された。

平安時代の集落跡は第１～３・６区に広がっており、住居跡、掘立柱建物跡、柵列跡、溝跡、土坑が検出されている。住居跡は第３区付近を中心に分布していると思われ、遺跡範囲北東部には掘立柱建物跡や柵列跡、溝跡、土坑群が分布している。これらの遺構のうち、第１号住居跡や第５号溝跡は籠原裏古墳群の周溝を切っているが、その他はほとんど古墳群とは重複しておらず、むしろ古墳群を避けている。このことは発掘調査に至るまで古墳群が墳丘も含めて残存していたことからもわかるとおり、集落の営まれていた当時も古墳群は墳丘のあった状態で集落内に鎮座していたと思われる。

住居跡をはじめとする平安時代の遺構からは、土器や土製品、鉄製品、石製品といった日常用具が多



＝ 平安時代　　＝ 中･近世

第74図　平安時代及び中・近世遺構配置図

数検出されている。遺物の主体となる土器は、土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器があるが、このうち須恵器が圧倒的に多く検出されており、そのほとんどが供膳具である。産地は若干南比企産が含まれるが、末野産が主体となる。また煮沸具には依然として土師器の甑が存在しており、確実に羽釜といえるものがない点は、集落跡の下限を考える上でポイントになりうる。出土土器はその器形や調整、産地等から主に9世紀後半～10世紀初頭の幅に収まり、多数検出された遺構外出土遺物も同時期のものがほとんどである。よって、集落跡の主体となる時期は9世紀後半～10世紀初頭という一時期にほぼ限定される。

本遺跡周辺における北武蔵の古代集落跡というと、古墳時代後期から奈良・平安時代まで長期間にわたって大規模に営まれるのが通常のパターンである。しかし、本遺跡の集落跡はそれらとは異なり、非常に短期間で終息している。規模については、街路築造部分のみの調査であるため定かではないが、遺跡の範囲や遺構の分布状況等から判断すると大規模とは言い難い。

以上のことを踏まえると、本遺跡における平安時代の集落跡は、羽釜出現直前段階の9世紀後半～10世紀初頭という短期間に営まれた集落跡といえる。本遺跡は北西約2kmに所在する幡羅郡衙推定地である深谷市幡羅遺跡や熊谷市西別府廃寺、西別府祭祀遺跡とも時期的にリンクしており、これらの遺跡と密接な関係にあったことは明らかである。律令体制の衰退が徐々に進む最中に短期間だけ営まれたという点で、本遺跡の集落跡は当時の幡羅郡の状況を何かしら暗示しているのでないだろうか。

一方、主に遺跡範囲西側に分布する中・近世段階の遺構は、第1区北東端、第4・5区に所在する。該当する遺構には溝跡、土坑、井戸跡、埋甕がある。出土遺物が少なく、また第6号土坑のように中世と近世の遺物が混じっているものもあるため、どちらに帰属するものなのか不明なものが多い。また、土坑には時期だけでなく、その性格や用途も不明なものが多い。ただ、中・近世の遺構すべてに共通する特徴として、平安時代の遺構とは対照的に古墳を切って構築している点が挙げられる。これは本遺跡周辺一帯が河川の氾濫等によって古墳群をはじめ中世以前の遺構が埋もれてしまったために生じたことと思われ、地形的な変化の影響により平安時代の遺構と分布が異なることになったと思われる。

中・近世段階については、本遺跡のみならず周辺においてもその内容や広がりについて把握できていない。第Ⅱ章でも述べたとおり、同段階については不明な点が多いと言わざるを得ない。

平安時代及び中・近世以外にも、遺構は検出されなかったが遺物のみ出土しているものがある。まず特筆すべきこととして、旧石器時代の尖頭器（第16図63）が挙げられる。尖頭器の詳細については報文中に譲るが、「樋状剥離」を有する尖頭器は、埼玉県北部地域においては本例以外では滑川町中丸遺跡や本庄市地神遺跡で検出されているだけである。これらも本例同様、単独で採集されており、石材も黒耀石製である。本遺跡では現地表面からローム層まで相当深いことから、旧石器時代の調査は事実上不可能であったが、尖頭器の検出により本遺跡を含めた周辺一帯が旧石器時代まで遡ることが明白になった点で大変貴重な資料といえる。この他にも、縄文時代前期後葉及び中期中葉の土器（第38号土坑第53図76～78・遺構外出土遺物第61図1～6）や石器（遺構外出土遺物第61図7～14）、古墳時代前期の土器（第3号住居跡第15図59）も検出されている。今回の調査では遺構は検出されなかったが、周辺に存在する可能性は高く、これらの遺物に伴う集落跡が広がっているのかもしれない。

以上、確認できたことを簡潔に述べてみた。籠原裏遺跡は、同所に所在する籠原裏古墳群とともに調査が終了してから大分経ってしまったが、今回ようやく報告できることとなった。その結果、東西で遺

構の分布及び時期が異なる点が確認できたが、遺跡の実態についてはまだまだ不明な点が多い。現時点では、断続的ではあるが旧石器時代から近世に至るまでの複合遺跡であるという他なく、詳細については今後、調査事例が増えた段階で再考してみたい。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　2001　『諏訪木遺跡』
熊谷市籠原裏遺跡調査会　2000　『籠原裏古墳群10号墳』
熊谷市教育委員会　1979　『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
1980　『中条遺跡群・中島遺跡』
1982　『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』
1982　『中条遺跡群』
1985　『三ヶ尻遺跡群　黒沢館跡・樋ノ上遺跡』
1986　『三ヶ尻遺跡群　若松遺跡・黒沢遺跡・東遺跡』
1988　『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』
1988　『三ヶ尻遺跡群　社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡』
1990　『西方遺跡』
1992　『西別府廃寺』
1994　『西別府廃寺（第二次）』
1999　『横間栗遺跡』
2000　『一本木前遺跡』
2000　『寺東遺跡・別府氏館跡』
2001　『一本木前遺跡Ⅱ』
2002　『一本木前遺跡Ⅲ』
2002　『前中西遺跡Ⅱ』
2003　『一本木前遺跡Ⅳ』
2003　『前中西遺跡Ⅲ』
江南町教育委員会　1983　『姥ヶ沢遺跡Ⅰ』
1988　『本田・東台・上前原』
江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会　1996　『千代遺跡群　―縄文時代編―』
1998　『千代遺跡群　―弥生・古墳時代編』
埼玉県遺跡調査会　1971　『横塚山古墳』
埼玉県教育委員会　1984　『池守・池上』
1988　『埼玉の中世城館跡』
埼玉考古学会　1997　『埼玉考古　別冊第５号　－特集号　埼玉の旧石器時代－』
㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989　『北島遺跡』
1989　『北島遺跡Ⅱ』
1989　『新田裏・明戸東・原遺跡』
1990　『東川端遺跡』
1991　『北島遺跡Ⅲ』
1991　『小敷田遺跡』
1993　『上敷免遺跡』
1995　『根絡・横間栗・関下』
2002　『北島遺跡Ⅴ』
2003　『北島遺跡Ⅵ』
深谷市教育委員会　1998　『常磐町東遺跡』
1999　『小台遺跡（第７次）』
2000　『皿沼西／堀南』
2000　『根岸遺跡（第３次・第４次）』

写　真　図　版

籠原中央第一土地区画整理地内全景（真上から）

籠原中央第一土地区画整理地内全景（東から）

図版2

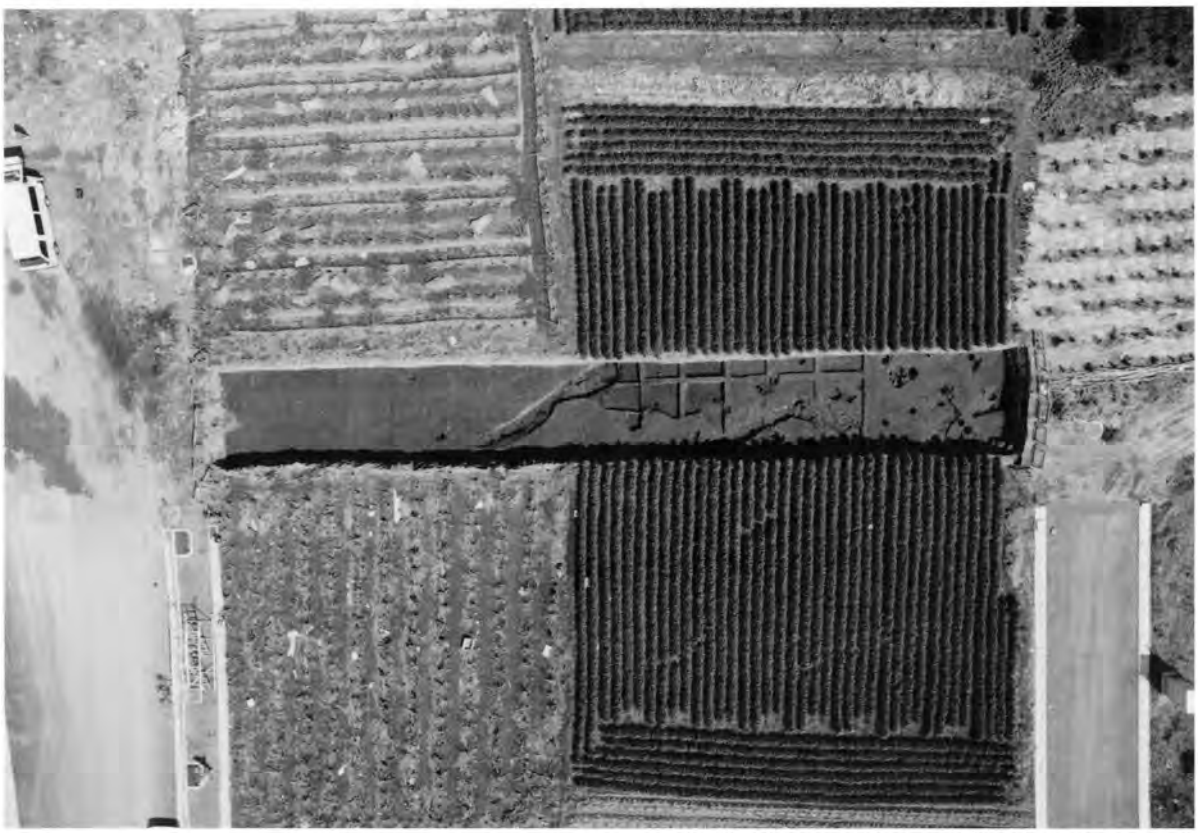
第1区（昭和61年度調査A区）全景（南東から）

第3区（昭和62年度調査A区）全景（北東から）

第3区（昭和62年度調査Ａ区）全景（真上から）

第4区（昭和62年度調査Ｂ区）全景（真上から）

図版4



第1区（昭和63年度調査Ｂ区）全景（真上から）

第1区（昭和63年度調査Ｂ区）全景（北西から）

第5区（昭和63年度調査Ａ区）全景（真上から）

第5区（昭和63年度調査Ａ区）全景（南西から）

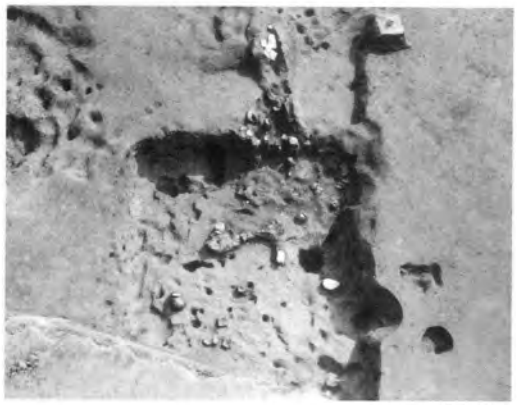
図版6

第1区（平成元年度調査Ｂ区）全景（南西から）

第6区（平成元年度調査Ａ区）全景（西から）

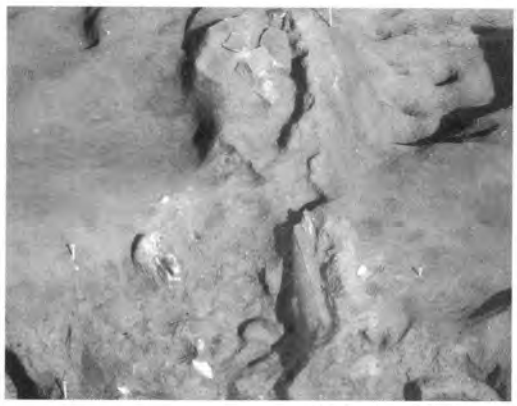
第1号住居跡

第3号住居跡　遺物出土状況



第2号住居跡

第4号住居跡



第2号住居跡カマド

第4号住居跡カマド脇　土器出土状況

第3号住居跡

第4号住居跡　土器出土状況

図版8

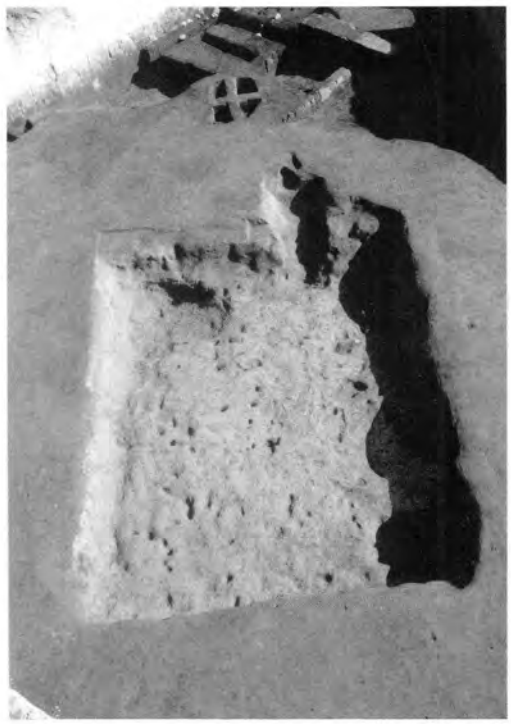
第5号住居跡

第6号住居跡

第5号住居跡　遺物出土状況

第6号住居跡カマド2　土器出土状況

第5号住居跡　土器出土状況(1)

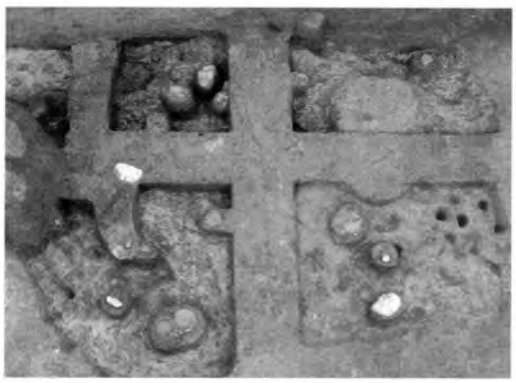


第7号住居跡

第5号住居跡　土器出土状況(2)

第7号住居跡貯蔵穴2　土器出土状況

第7号住居跡　土器出土状況



第8号住居跡　遺物出土状況

第8号住居跡　土器出土状況(1)

第8号住居跡　土器出土状況(2)

第8号住居跡　土器出土状況(3)

第9号住居跡　遺物出土状況

第10号住居跡カマド　土器出土状況

図版10

第11号住居跡

第11号住居跡　遺物出土状況

第11号住居跡　土器出土状況

第11号住居跡　鉄鏃先出土状況

第1号溝跡

第2号溝跡

第3号溝跡

第4号溝跡

第2・3号土坑

第6号土坑　礫検出状況

第5号土坑　礫検出状況

第6号土坑

第5号土坑

第7号土坑　礫検出状況

第5号土坑　土器出土状況

第7号土坑

図版12

第8号土坑　礫検出状況

第10号土坑・第2号井戸跡（北東から）

第8号土坑

第10号土坑・第2号井戸跡（東から）

第9号土坑　礫検出状況

第11号土坑

第9号土坑

第12号土坑

第13号土坑

第30号土坑

第22・23号土坑

第31号土坑

第25号土坑

第32号土坑

第26号土坑

第33号土坑

図版14

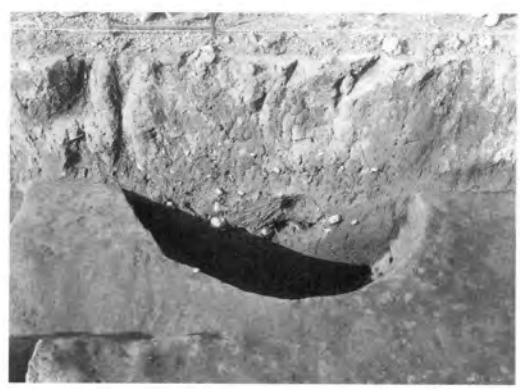
第34・35・36号土坑

第38号土坑　礫検出状況

第37号土坑　礫検出状況

第44号土坑　遺物出土状況

第37号土坑　覆土断面



第1号井戸跡

第37号土坑

第1号埋甕

第1号住居跡　第6図4

第2号住居跡　第9図13

第2号住居跡　第9図9

第2号住居跡　第9図15

第2号住居跡　第9図11

第2号住居跡　第9図17

第2号住居跡　第9図11墨書

第2号住居跡　第9図18

第2号住居跡　第9図12

第2号住居跡　第9図21墨書

図版16

第2号住居跡　第10図32墨書

第3号住居跡　第14図6

第2号住居跡　第11図50

第3号住居跡　第14図8

第2号住居跡　第11図51

第3号住居跡　第14図9

第3号住居跡　第14図4

第3号住居跡　第14図10

第3号住居跡　第14図5

第3号住居跡　第14図12

第3号住居跡　第14図19

第4号住居跡　第18図4

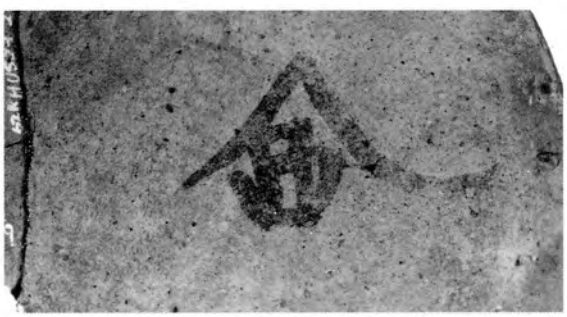
第3号住居跡　第14図21

第4号住居跡　第18図7

第3号住居跡　第14図31

第4号住居跡　第18図8

第3号住居跡　第14図32



第4号住居跡　第18図10墨書

第4号住居跡　第18図3

第4号住居跡　第18図20

図版18

第4号住居跡　第18図27

第6号住居跡　第23図2

第5号住居跡　第21図1

第6号住居跡　第23図3

第5号住居跡　第21図7

第6号住居跡　第23図4

第5号住居跡　第21図16

第6号住居跡　第23図6

第5号住居跡　第21図23

第6号住居跡　第23図12

第6号住居跡　第23図13

第7号住居跡　第26図3

第6号住居跡　第23図16

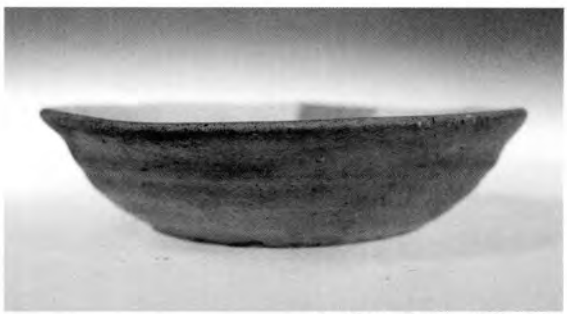
第7号住居跡　第23図8

第6号住居跡　第23図19

第7号住居跡　第23図10

第6号住居跡　第23図32

第7号住居跡　第23図11



第7号住居跡　第26図2

第7号住居跡　第23図12

図版20

第7号住居跡　第26図24

第7号住居跡　第26図26

第7号住居跡　第26図27

第8号住居跡　第29図1

第8号住居跡　第29図2

第8号住居跡　第29図9

第8号住居跡　第29図10

第8号住居跡　第29図11

第8号住居跡　第29図17

第8号住居跡　第29図18

第10号住居跡　第31図1

第2号溝跡　第39図11

第11号住居跡　第33図1

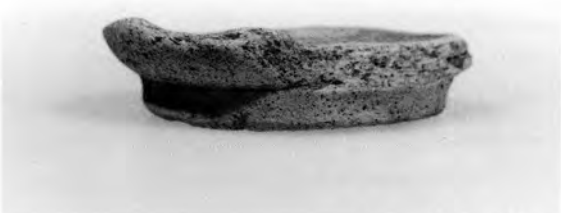
第3号土坑　第51図9

第11号住居跡　第33図7

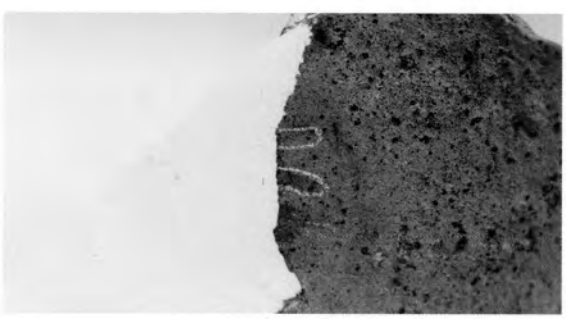
第3号土坑　第51図10

第1号掘立柱建物跡　第34図2

第30号土坑　第53図57



第1号溝跡　第39図1



第38号土坑　第53図72墨書

図版22

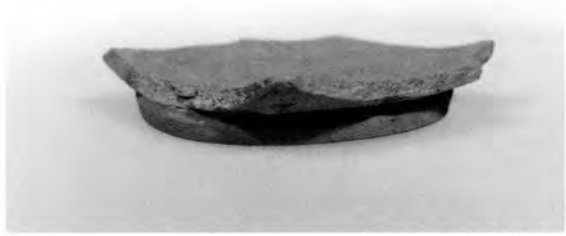
P29　第58図12暗文

遺構外　第64図119

遺構外　第62図21

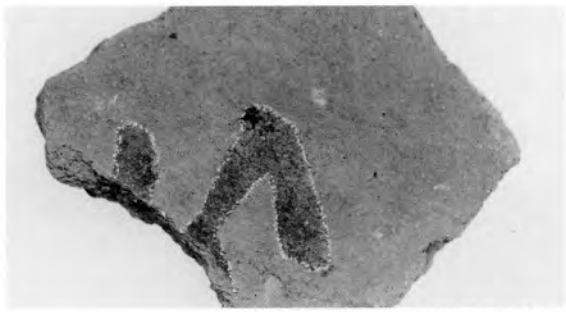
遺構外　第65図182

遺構外　第62図23



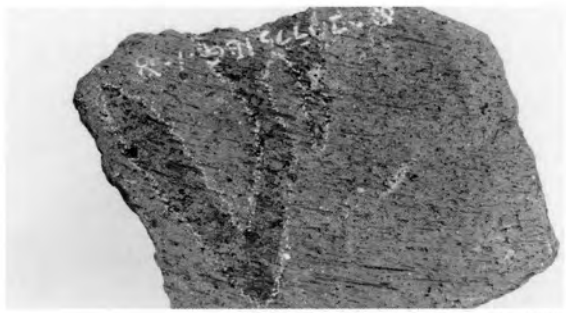
遺構外　第70図264

遺構外　第63図111



遺構外　第70図276墨書（内）

遺構外　第64図118



遺構外　第70図276墨書（外）

第2号住居跡　第10図33

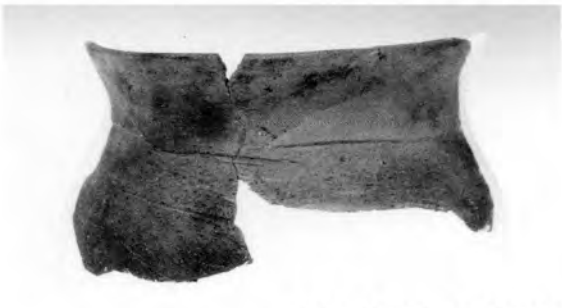
第2号住居跡　第10図41

第2号住居跡　第11図55

第2号住居跡　第12図58

第2号住居跡　第12図59

第2号住居跡　第12図63



第2号住居跡　第12図64

第2号住居跡　第12図67

第3号住居跡　第15図45

図版24

第3号住居跡　第15図49

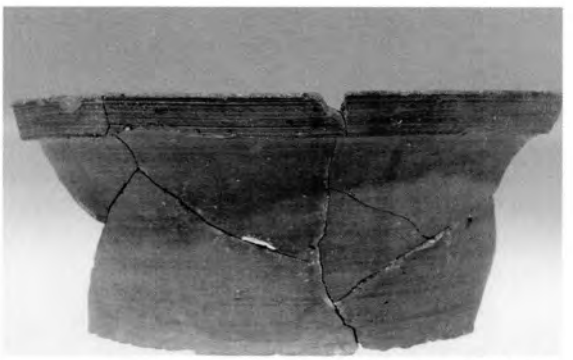
第3号住居跡　第15図53

第3号住居跡　第15図56

第3号住居跡　第15図57

第4号住居跡　第18図32

第5号住居跡　第21図24



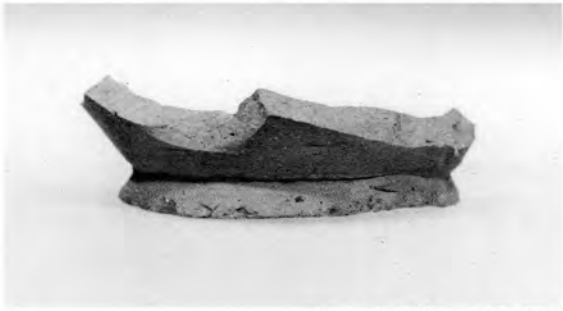
第6号住居跡　第23図21

第7号住居跡　第26図35

第7号住居跡　第27図36

第11号住居跡　第33図11

第11号住居跡　第33図12



第1号柵列跡　第34図5

第2号溝跡　第39図15

第16号土坑　第52図31

第26号土坑　第52図48

第26号土坑　第52図48底部

図版26

P16　第58図1

P 29　第59図15

遺構外　第66図199

遺構外　第66図201

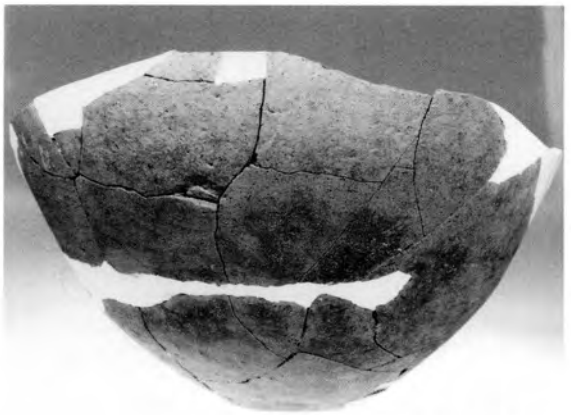
遺構外　第70図266

遺構外　第70図267

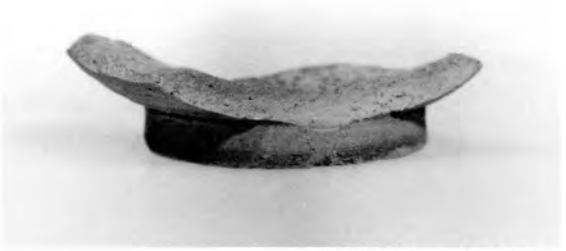
遺構外　第70図282

遺構外　第70図286

第3号土坑　第51図8



第1号埋甕　第57図1



第6号土坑　第51図14

第11号住居跡　第33図15

第6号土坑　第51図15

第6号土坑　第51図16

遺構外　第72図315

第6号土坑　第51図25

第37号土坑　第53図70

第2号住居跡　第10図35・36・37（上段左から）
38・39・40（下段左から）

第2号住居跡　第11図42・44（上段左から）
46・47・48（下段左から）

第6号住居跡　第23図24・25・第24図27（上段左から）
第24図28・29・31（下段左から）

P 25　第58図4・P 29　第58図7・8（上段左から）
P 29　第58図9・10・11（下段左から）

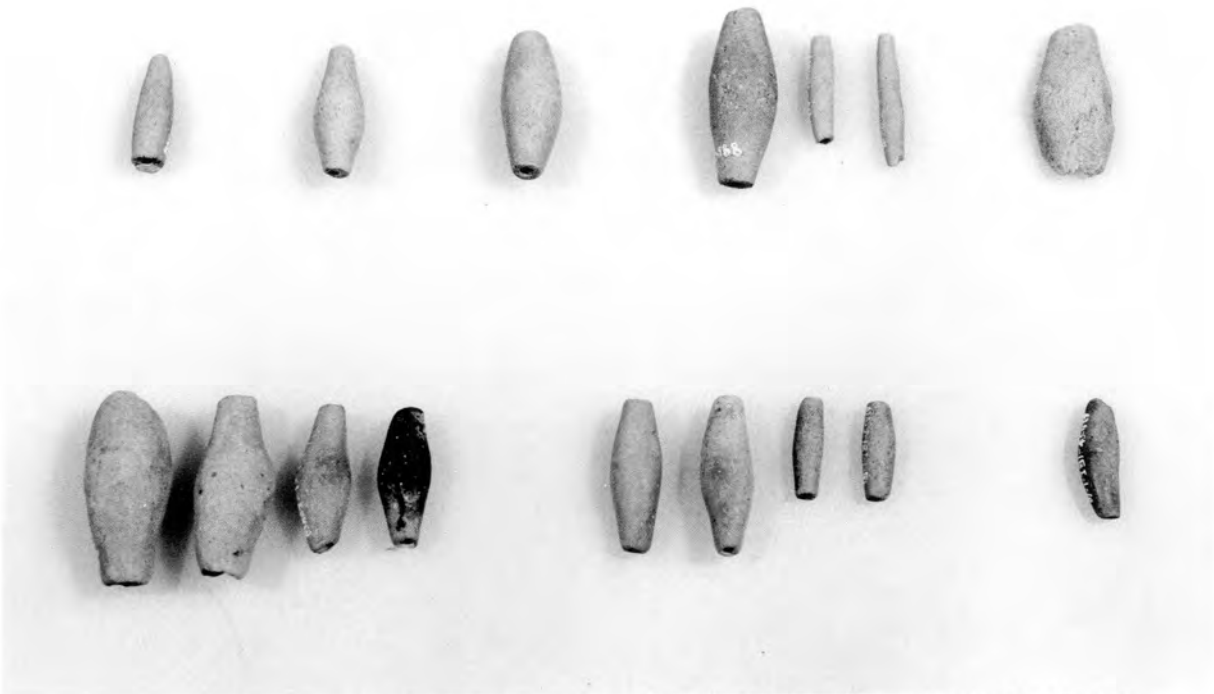
図版30

第6号土坑　第51図17・18・19・20（上段左から）
21・22・23・24（下段左から）

第9号土坑　第52図27・第10号土坑　第52図30・第32号土坑　第53図66（上段左から）
第36号土坑　第53図68・第37号土坑　第53図69（下段左から）

第38号土坑　第53図76・77・78（上段左から）
遺構外　第61図1・2・3・4・5・6（下段左から）

第1号住居跡　第6図13・第3号住居跡　第15図60
第4号住居跡　第19図36・37・38・39・40・41・第5号住居跡　第21図30（上段左から）
第6号住居跡　第24図37・第7号住居跡　第27図42・43
第1号掘立柱建物跡　第34図3・4・第2号堀立柱建物跡　第35図2・3（下段左から）



第2号溝跡　第39図16・第3号溝跡　第39図22・第4号溝跡　第39図34
第3号土坑　第51図4・5・6・第4号土坑　第51図7（上段左から）
第29号土坑　第52図52・53・54・55・第30号土坑　第53図62・63・64・65
P 104　第59図17（下段左から）

遺構外　第71図294・295・296・297・298・299・300・301・302（上段左から）
303・304・305・306・307・308・309・310・311・312・313・314（下段左から）

第1号住居跡　第６図14・第3号住居跡　第15図61
第4号住居跡　第19図42・第7号住居跡　第27図44（上段左から）
第11号住居跡　第33図16・17・18・19（下段左から）

第22号土坑　第52図44・遺構外　第72図316（上）・317（下）・318・319・320・321（左から）

第3号住居跡　第16図63

第3号住居跡　第15図62
第4号住居跡　第19図43
第8号住居跡　第29図19
（左から）

第11号住居跡　第33図20

第8号土坑　第51図26
第9号土坑　第52図29
第32号土坑　第53図67
（左から）

第2号井戸跡　第56図7・8
（左から）

遺構外　第61図7・8
（左から）

図版36

遺構外　第61図9・10・11
（左から）

遺構外　第61図12・13・14
（左から）

遺構外　第72図322・323・324
（左から）

報告書抄録

ふりがな	かごはらうらいせき
書名	籠原裏遺跡
副書名	平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	松田　哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360-8601　埼玉県熊谷市宮町2-47-1　TEL048-524-1111
発行年月日	西暦2004（平成16）年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯（°′″）	東経（°′″）	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
籠原裏遺跡（かごはらうらいせき）	埼玉県熊谷市大字新堀801他（さいたまけんくまがやしおおあざにいぼりほか）	11202	96	36° 10′ 40″	139° 20′ 11″	19860801～19861015	2,694	区画整理街路築造工事
	埼玉県熊谷市大字新堀355-2他（さいたまけんくまがやしおおあざにいぼりほか）					19871112～19880307	1,100	
	埼玉県熊谷市大字新堀787-2他（さいたまけんくまがやしおおあざにいぼりほか）					19890208～19890331	540	
	埼玉県熊谷市大字新堀353-1他（さいたまけんくまがやしおおあざにいぼりほか）					19891009～19900129	900	
	埼玉県熊谷市大字新堀803-5他（さいたまけんくまがやしおおあざにいぼりほか）					19931110～19940107	100	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
籠原裏遺跡	集落跡	旧石器時代	—	石器（尖頭器）	
		縄文時代	—	土器・石器	
		古墳時代	土坑　1基	土師器・須恵器	
		平安時代	住居跡　11軒 掘立柱建物跡　3棟 柵列跡　2列 溝跡　4条 土坑　20基	土師器・須恵器 灰釉・緑釉陶器 土製品・鉄製品 銅製品・石製品	
		中・近世	溝跡　1条 土坑　19基 井戸跡　2基 埋甕　1基	かわらけ・陶器 在地系土器 古銭・石製品	
		時期不明	溝跡　2条 土坑　4基 ピット群		

平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
—熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書—
籠　原　裏　遺　跡
平成16年3月31日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／関印刷株式会社

さくらのまち“熊谷”